ISSN 1882-9775

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 20（2008）年度

奈良市教育委員会

2011

ISSN 1882-9775

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 20（2008）年度

奈良市教育委員会

2011

1：平城京跡（左京五条四坊十坪）の調査
第 608 次　A発掘区
S X 804 出土奈良三彩火舎【本文９頁】

2：平城京跡（左京五条四坊十坪）の調査
第 608 次　D発掘区
S X 810 出土奈良三彩火舎【本文９頁】

3：平城京跡（左京五条四坊十坪）の調査
第 608 次　D発掘区
S B 249 出土遺物【本文８頁】

4：平城京跡（左京五条四坊十坪）の調査
第 608 次　D 発掘区
S X 810 出土土器【本文９頁】

5：平城京跡（左京五条四坊十坪）の調査
第 608 次　D発掘区
ＳＥ 504 出土埋納土器【本文８頁】

6：平城京跡（左京五条四坊十坪）の調査
第 579 次
ＳＸ 802 出土埋納土器【本文９頁】

7：帯解黄金塚古墳第２次調査　Ｂ発掘区全景（北西から）【本文 114 頁】

8：帯解黄金塚古墳第２次調査　Ｂ発掘区石敷（北西から）【本文 114 頁】

例　言

1．本書は、平成 20 年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財に関する各事業の概要と埋蔵文化財調査センター紀要を収録したものである。ただし、平成 20 年度に実施した調査のうち、平城京跡第 608-2 次調査については平成 22 年度以降の報告の予定であるため、本書には収録しない。平成 19 年度に実施した平城京跡第 579 次調査については、平城京左京五条四坊十坪に係わる部分を本書に収録した。東紀寺第 11 次調査については平成 21 年度に実施したが、東紀寺第 10 次調査と同敷地内の調査であることから、併せて本書で報告する。

2．平成 20 年度の埋蔵文化財調査に関する各事業は下記の体制で実施した。

奈良市教育委員会事務局　教育総務部

文化財課

課　　長　　西岡康夫

課長補佐　　西崎卓哉

埋蔵文化財調査センター

所　　長　　森下惠介

所長補佐　　岡田恭明

主　　任　　森下浩行　鐘方正樹

技術職員　　安井宣也　秋山成人　松浦五輪美　武田和哉　原田憲二郎　池田裕英
久保清子　宮崎正裕　中島和彦　山前智敬　原田香織　大窪淳司
池田富貴子

嘱託職員　　大原　瞳　大木　要

庶　　務　　主任　藤井雄二　　事務職員　酒井真弓

3．発掘調査、出土遺物整理、保存活用等の各事業に関しては、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良市文化財保護審議委員会などの関係諸機関よりご指導とご協力を賜った。ここに記して謝意を表する。

4．各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数となっている。遺跡の略記号は下記のとおりである。

ＨＪ　平城京跡　　ＤＡ　大安寺旧境内　　ＨＫ　東紀寺遺跡　　ＩＤ　池田遺跡
ＳＤ　西大寺旧境内　　ＫＧＺ　帯解黄金塚古墳　　ＮＡＲＡ 52　奈良山第 52 号窯
ＮＲ　奈良町遺跡

5．古墳時代以前の遺跡については、仮に大字名を付して遺跡名としたものがある。

6．本書で使用した遺構番号は、一部を除いて調査ごとに付した仮番号である。遺構等の番号の前には、その種類に応じて以下の番号を付した。

ＳＡ（柱列・塀）、ＳＢ（掘立柱建物）、ＳＤ（溝・濠・溝状遺構・暗渠）、ＳＥ（井戸）、ＳＦ（道路）、ＳＫ（土坑）、ＳＸ（その他）

また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構検出面での計測値である。

7．本文中で示した過去の調査の実施機関は、調査次数の前に下記の略記号を使用し表記した。

国　―　独立行政法人奈良文化財研究所（旧奈良国立文化財研究所含む）

県　―　奈良県教育委員会　および　奈良県立橿原考古学研究所

市　―　奈良市教育委員会

8．本書で使用した遺物名称・形式・型式は、一部を除き下記の刊行物に準拠した。

奈良時代　軒　瓦：『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』 奈良市教育委員会　1996

土　器：『平城宮発掘調査報告書ＸＩ』 奈良国立文化財研究所　1982

古墳時代　須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981

埴　輪：川西宏幸「円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』塙書房　1988

小浜　茂「円筒埴輪の観察視点と編年方法－畿内円筒埴輪編年の提示に向けて－」『埴輪論叢』第４号　埴輪検討会　2003

弥生時代　土　器：奈良県立橿原考古学研究所『奈良県の弥生土器集成』2003

9．発掘区位置図については、奈良市発行の「大和都市計画図」（1/2,500）を、また調査地位置図については、国土地理院発行の地形図（1/25,000）を利用した。

10．本文中において示した位置の表示値は、平面直角座標系第Ⅳ系（世界測地系）の数値である。なお、座標値の表・図中の標記については単位（m）を省略した。

11．この報告に関する調査記録・出土遺物は、埋蔵文化財調査センターで保管している。

12．第１・３章の執筆は、当該調査と遺物整理を担当した埋蔵文化財調査センター・文化財課職員が分担し、文責は各調査報告の文末に記した。第２章は分析機関の報告を再編集して構成した。第４章は埋蔵文化財調査センター職員が執筆した紀要を掲載した。

13．本書の編集は平成 22 年度に行い、埋蔵文化財調査センター所長 森下惠介、同主任 三好美穂・鐘方正樹の助言を得て、久保邦江が担当した。

目　次

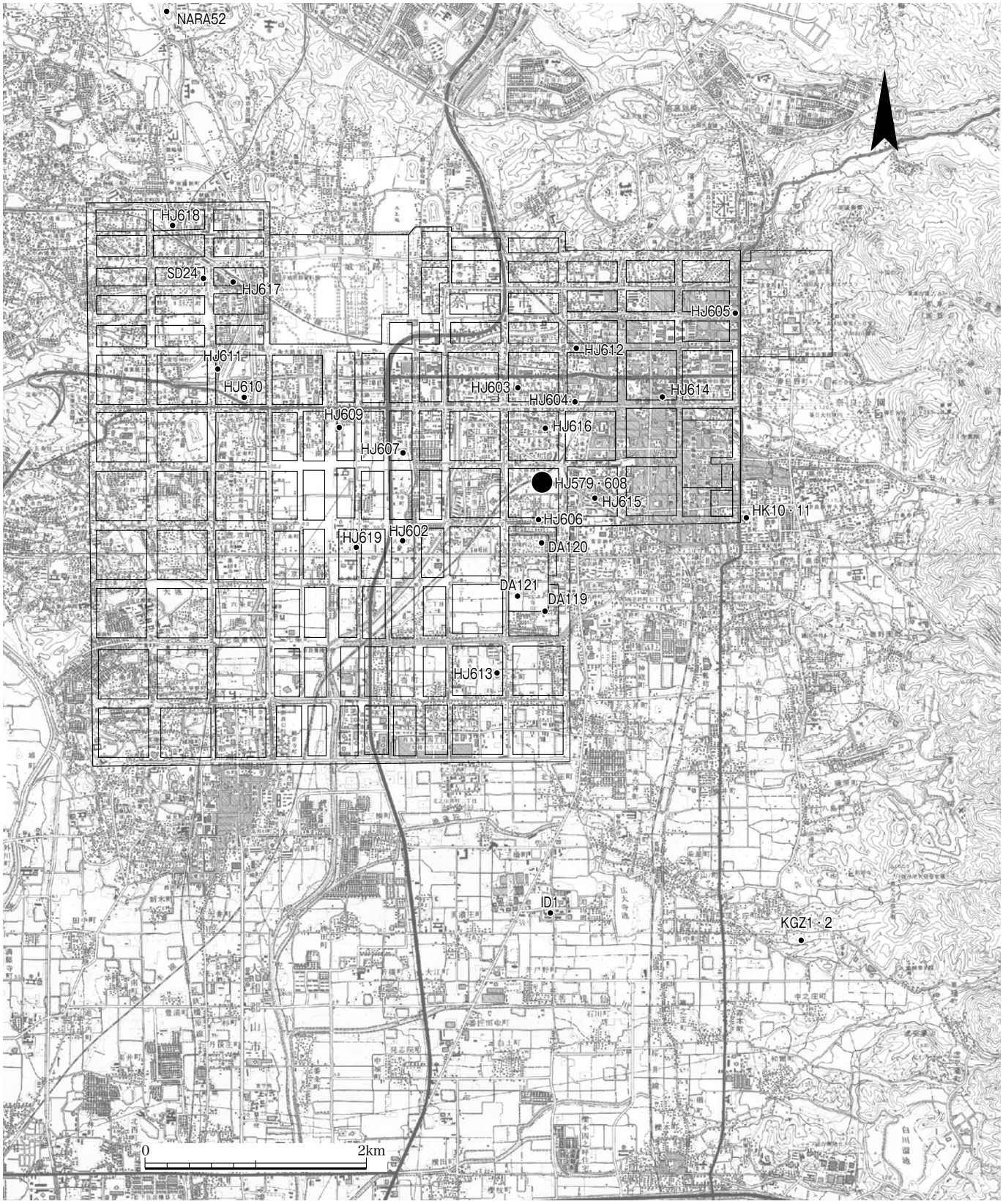
巻首図版 …… Ⅰ～Ⅲ
例言・目次 …… i ～ v

第１章　平成 20 年度埋蔵文化財調査概要報告 …… 1
1．ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査 …… 2
平城京跡（左京五条四坊十坪・坊間東小路）の調査　第 579・608 次Ａ～Ｅ …… 3
2．近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に係る発掘調査 …… 30
西大寺旧境内の調査　第 24 次 …… 31
3．平城京跡（左京六条二坊一・二坪）の調査　第 602 次 …… 34
4．平城京跡（左京三条四坊三坪）の調査　第 603 次 …… 36
5．平城京跡（左京三条五坊四坪）の調査　第 604 次 …… 38
6．平城京跡（左京二条七坊十五坪）・奈良町遺跡の調査　第 605 次 …… 40
7．平城京跡（左京五条四坊十二坪・東四坊坊間路）の調査　第 606 次 …… 54
8．平城京跡（左京四条二坊五坪・四条条間南小路）の調査　第 607 次 …… 57
9．平城京跡（左京四条一坊二坪）の調査　第 609 次 …… 61
10．平城京跡（右京三条二坊五坪）の調査　第 610 次 …… 66
11．平城京跡（右京三条二坊十五坪）・菅原東遺跡の調査　第 611 次 …… 69
12．芝辻遺跡・平城京跡（左京二条大路）の調査　第 612 次調査 …… 71
13．平城京跡（左京八条三坊十四坪）の調査　第 613 次調査 …… 74
14．平城京跡（左京三条六坊十二坪）・奈良町遺跡の調査　第 614 次 …… 77
15．平城京跡（左京五条五坊十一坪・東五坊坊間路）の調査　第 615 次 …… 78
16．平城京跡（左京四条四坊十坪）の調査　第 616 次 …… 80
17．平城京跡（右京一条二坊十二坪）の調査　第 617 次 …… 82
18．平城京跡（右京北辺三坊六坪）の調査　第 618 次 …… 84
19．平城京跡（左京六条一坊七坪・東一坊坊間路）の調査　第 619 次 …… 85
20．史跡大安寺旧境内の調査 …… 87
(1) 花園院地区の調査　第 119 次 …… 88
(2) 賤院地区の調査　第 120 次 …… 89
(3) 塔院地区の調査　第 121 次 …… 91
21．東紀寺遺跡の調査　第 10・11 次 …… 94
22．池田遺跡・中ツ道推定地の調査　第 1 次 …… 97
23．奈良山第 52 号窯の調査　第 1 次 …… 99
24．帯解黄金塚古墳の調査　第 1・2 次 …… 103
25．平成 20 年度実施試掘調査一覧 …… 117
26．平成 20 年度実施工事立会一覧 …… 117

第２章　自然科学分析報告 …… 127
1．平城京跡第 579 次調査における自然科学分析 …… 129
2．平城京跡第 608 次調査における自然科学分析 …… 136
3．帯解黄金塚古墳の石材の石種 …… 137

第３章　平成 20 年度保存活用事業報告 …… 143

第４章　紀要 …… 153
「大安寺式」軒瓦の成立 …… 154



平成 20 年度　発掘調査位置図（過年度調査で本書報告分を含む　1/50,000）

平成 20（2008）年度　奈良市教育委員会実施　埋蔵文化財発掘調査一覧

№.	調査次数	遺　跡　名	調　査　地	調査期間	調査面積	担当者	事業者	事　業　名	事業区分	届出(申請)番号
1	HJ602 次	平城京跡（左京六条二坊一・二坪）	八条町 363 番 1 他	H20.4.3 ～ H20.4.18	160.5 ㎡	原田憲	豊田通商株式会社	店舗新築	原因者	H19.3391
2	HJ603 次	平城京跡（左京三条四坊三坪）	大宮町三丁目 205-13	H20.4.7 ～ H20.4.30	119㎡	大原	個人	共同住宅新築	原因者	H19.3337
3	HJ604 次	平城京跡（左京三条五坊四坪）	大宮町一丁目 52-15 他	H20.4.7 ～ H20.5.19	470㎡	池田裕	グローバンス・アールイー株式会社	ホテル新築	原因者	H19.3258
4	HJ605 次	平城京跡（左京二条七条十五坪）・奈良町遺跡	今小路町 1-1　他	H20.5.8 ～ H20.6.26	144㎡	中島・大原	株式会社日本エスコン	共同住宅新築	原因者	H19.3441
5	HJ606 次	平城京跡（左京五条四坊十二坪・東四坊坊間路）	大安寺六丁目 841 番 1	H20.5.21 ～ H20.6.17	216㎡	久保清	個人	共同住宅新築	原因者	H19.3469
6	HJ607 次	平城京跡（左京四条二坊五坪・四条条間南小路）	尼辻町乙 454-2　他	H20.6.2 ～ H20.6.26	264㎡	池田裕	株式会社共栄商会	社宅付配送センター新築	原因者	H19.3468
7	HJ608 次	平城京跡（左京五条四坊九・十・十五坪）	大森町 94・95 番地他	H20.6.16 ～ H21.2.13	6,000 ㎡	宮﨑・原田憲・池田裕・久保清・山前・大原・大木	奈良市長	ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理連続立体交差関連公共施設整備事業	公共	H12.3145
8	HJ608-2 次	平城京跡（左京五条四坊二坪）	大森西町 652-1　他	H20.9.29 ～ H20.11.21	340㎡	久保清	奈良市長	ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理連続立体交差関連公共施設整備事業	公共	H12.3145
9	HJ609 次	平城京跡（左京四条一坊二坪）	四条大路三丁目 966-1　他	H20.7.7 ～ H20.8.4	200㎡	原田香	個人	賃貸住宅新築	原因者	H20.3058
10	HJ610 次	平城京跡（右京三条二坊五坪）	尼辻北町 327-1	H20.7.31 ～ H20.8.21	238㎡	大窪	個人	共同住宅新築	原因者	H20.3080
11	HJ611 次	平城京跡（右京三条二坊十五坪）・菅原東遺跡	西大寺国見町二丁目 10-13	H20.8.6 ～ H20.8.20	62㎡	中島	個人	個人住宅新築	緊急	H20.3128
12	HJ612 次	芝辻遺跡・平城京跡（左京二条大路）	芝辻町一丁目地内	H20.8.20 ～ H20.9.8	68㎡	武田・松浦	奈良市長	市道二条線拡幅事業	公共	H19.3067
13	HJ613 次	平城京跡（左京八条三坊十四坪）	東九条町 491　他	H20.8.20 ～ H20.9.18	310㎡	原田香	株式会社　福岡屋住宅流通	道路工事・宅地造成	原因者	H20.3106
14	HJ614 次	平城京跡（左京三条六坊十二坪）・奈良町遺跡	小西町 29-1・2・3	H20.9.8 ～ H20.9.12	30㎡	池田裕	株式会社藤本忠商店	店舗新築	原因者	H20.3119
15	HJ615 次	平城京跡（左京五条五坊十一坪・東五坊坊間路）	西木辻町 76-5	H20.10.6 ～ H20.10.31	173㎡	秋山	小山株式会社	倉庫新築	原因者	H20.3204
16	HJ616 次	平城京跡（左京四条四坊十坪）	三条宮前町 6-12	H21.1.7 ～ H21.2.4	143㎡	中島	個人	個人住宅新築	緊急	H20.3350
17	HJ617 次	平城京跡（右京一条二坊十二坪）	西大寺国見町 2137-86、-88	H21.2.9 ～ H21.3.12	135㎡	秋山	近鉄不動産株式会社	共同住宅新築	原因者	H20.3282
18	HJ618 次	平城京跡（右京北辺三坊六坪）	西大寺北町一丁目 358 番 4　他	H21.2.2 ～ H21.2.5	40㎡	武田	株式会社吉川商事	宅地造成	原因者	H20.3385
19	HJ619 次	平城京跡（左京六条一坊七坪・東一坊坊間路）	柏木町 157-1　他	H21.3.9 ～ H21.3.19	185㎡	武田	個人	宅地造成	原因者	H20.3400
20	DA119 次	史跡大安寺旧境内	東九条町 1376-2 他	H20.6.2 ～ H20.6.6	4㎡	安井	個人	農業用倉庫新築	緊急	H19.1121
21	DA120 次	史跡大安寺旧境内	大安寺四丁目 1103-2　他	H20.12.10 ～ H20.12.19	24㎡	原田香	個人	住宅の除却及び新築	緊急	H20.1048
22	DA121 次	史跡大安寺旧境内	東九条町 1348-1 他	H21.2.23 ～ H21.3.19	103㎡	松浦	奈良市教育委員会　教育長	史跡大安寺旧境内保存整備事業	公共	H20.1086
23	SD024 次	西大寺旧境内	西大寺南町 2438-1 他	H20.9.8 ～ H20.11.11	400㎡	松浦・武田	奈良市長	西大寺駅南地区土地区画整理事業	公共	S63.3056
24	HK010 次	東紀寺遺跡	東紀寺町一丁目 50-1	H20.7.1 ～ H20.8.26	360㎡	池田裕	奈良市長	奈良市立病院建替事業	原因者	H20.3046
25	ID001 次	池田遺跡	池田町 201-1	H20.6.30 ～ H20.7.15	168㎡	鐘方・武田	株式会社ペーパル	倉庫新築	原因者	H20.3036
26	NARA52 次	奈良山第 52 号窯	秋篠町 1546-1 の一部　他	H20.5.26 ～ H20.6.20	150㎡	山前	三和住宅株式会社	宅地造成	原因者	H19.3467
27	KGZ002 次	帯解黄金塚古墳	田中町 574-1・-3	H21.1.14 ～ H21.3.18	120㎡	安井・大窪	奈良市教育委員会　教育長	重要遺跡範囲確認調査	緊急	H20.1086

第　1　章　　平成 20 年度埋蔵文化財調査概要報告

１．ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査

奈良市教育委員会では、平成 13 年度からＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業地内（総面積 14.6 万㎡）の発掘調査を実施しており、平成 19 年度までの調査面積は、20,695㎡である。平成 20 年度事業では、連続立体交差関連公共施設整備事業で 6,340㎡の調査を行った。

平成 20 年度の発掘調査は、平城京の条坊復原では左京五条四坊九・十・十五坪、左京五条四坊二坪および東四坊坊間東小路、五条条間路、五条条間北小路で実施した。

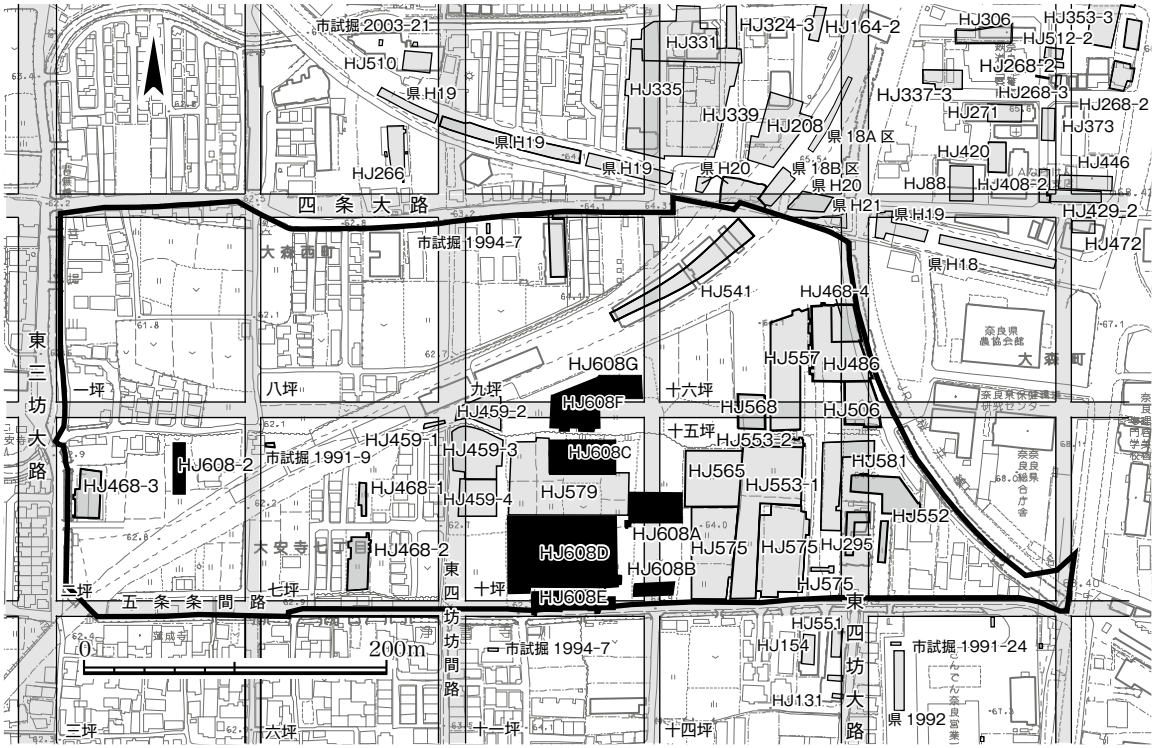
事業と調査の概要は下記の通りである。

このうち、今回は左京五条四坊十坪を中心としたＨＪ第 608 次調査と、同坪内で平成 19 年度に実施したＨＪ第 579 次調査（調査面積：2,700㎡）の成果を合せて報告する。なお、ＨＪ第 608 次のうちＡ～Ｅ発掘区については今回報告し、Ｆ・Ｇ発掘区とＨＪ第 608–2 次調査については次年度以降に報告する予定である。

報告に用いる遺構番号は、当事業に係る調査で設定しているもので、古墳時代以前の遺構には２桁を、奈良時代以降の遺構には３桁以上の番号を用いた。いずれの遺構番号も奈良時代の条坊遺構範囲を通しで、それ以外の範囲については坪ごとの通しで設定した。したがって同一調査地内でも、坪の違いで同じ遺構番号がつく場合もある。

平成 20 年度　ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業　発掘調査一覧表

事業区分	調査次数	発掘区	遺　跡　名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
連続立体交差関連公共施設整備事業	HJ608	A	平城京左京五条四坊十・十五坪、東四坊坊間東小路	大森町 94・95 番地　他	H20.6.16～H21.2.13	658㎡	宮﨑・原田憲・久保清・池田裕・山前・大原・大木
	HJ608	B	平城京左京五条四坊十・十五坪、東四坊坊間東小路			200㎡	
	HJ608	C	平城京左京五条四坊十坪			892㎡	
	HJ608	D	平城京左京五条四坊十坪			2,642㎡	
	HJ608	E	平城京左京五条四坊十坪、五条条間路			300㎡	
	HJ608	F	平城京左京五条四坊九・十坪、五条条間北小路			808㎡	
	HJ608	G	平城京左京五条四坊九坪			500㎡	
	HJ608–2		平城京左京五条四坊二坪	大森西町 652–1 他	H20.9.29～11.21	340㎡	久保清



ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業地内　発掘調査位置図（1/5,000）　■部分は平成 20 年度調査

平城京跡（左京五条四坊十坪・坊間東小路）の調査　第579・608次Ａ～Ｅ

Ⅰ　はじめに

ＨＪ第579次調査地は、平城京条坊復原によると、左京五条四坊十坪の中央部北寄りに位置する。ＨＪ第608次調査は、左京五条四坊十・十五坪間の東四坊坊間東小路想定位置にＡ発掘区、その南側の五条条間路との交差点部分にＢ発掘区、ＨＪ第579次調査発掘区の北側にＣ発掘区、南側にＤ発掘区、十坪の南辺部の五条条間路が想定される位置にＥ発掘区を設定した。

ＨＪ第579次調査発掘区の西側で平成13年度に実施したＨＪ第459次－２～４次調査では、五条条間北小路とその南北側溝、および東四坊坊間路とその東側溝の条坊遺構と、十坪内では奈良時代の溝、掘立柱建物、土坑などを検出している。また、五条条間北小路の北側溝から播磨産の瓦が出土したことから、九坪には播磨国に関わる施設の存在を想定した。

平成19年度に調査地北東の左京五条四坊十五･十六坪･五条条間北小路推定地で実施したＨＪ第557・568次調査では、奈良時代の遺構面下に縄文時代晩期の石器や土器を包含する河川を確認。さらに、平成19年度に調査地東側の十五坪で実施したＨＪ第565・575次調査で、弥生時代の溝や竪穴建物などを検出した。

今回、奈良時代の条坊遺構、宅地内の様相および下層遺構の確認を主な目的として調査を実施した。

また、調査地付近では、中ツ道が東四坊大路から西に２つ目の坪の東寄りを南北に縦断するとの指摘もあるため[1)]、関連する遺構の確認も調査目的のひとつとした。

Ⅱ　基本層序

現地表面は東から西へ緩やかに傾斜するが、調査地が広大で、基本層序は発掘区ごとに若干異なるため、代表的な層序を記す。十坪の北半に設けたＨＪ第579次調査発掘区の層序は黒灰色砂質土（耕土）以下、灰褐色砂質土・淡灰色砂質土と続き、発掘区南端では現地表下約0.2ｍで黄色礫土の地山に至る。地山面は南から北に傾斜し、発掘区北端では黄褐色粘土の地山上に厚さ0.2～0.3ｍの縄文時代晩期～弥生時代前期の遺物を包含する黄灰色粘土が堆積する。弥生時代中期以降の遺構は黄色礫土（地山）および黄灰色粘土上面（標高約62.4ｍ）で検出した。発掘区北西部では黄灰色粘土直下の黄褐色粘土(地山)上面（標高約62.2ｍ）で弥生時代前期以前の遺構を検出した。

ＨＪ第608次調査Ｃ発掘区は、ＨＪ第579次調査地と同様な堆積状態であるが、弥生時代中期以降の遺構面（黄灰色粘土）直下の地山は、暗茶褐色粘土あるいは黄褐灰色粘質土である。

ＨＪ第608次調査Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅ発掘区では、縄文時代晩期～弥生時代前期の遺物包含層は堆積せず、現地表下0.4～0.5ｍで黄灰色砂質土あるいは黄色礫土などの地山に至る。Ａ発掘区の地山直上の一部に整地層が堆積しており、奈良時代の遺構を検出した。地山面は南東から北西に緩やかに下り、その標高は62.4～63.4ｍである。

Ⅲ　検出遺構

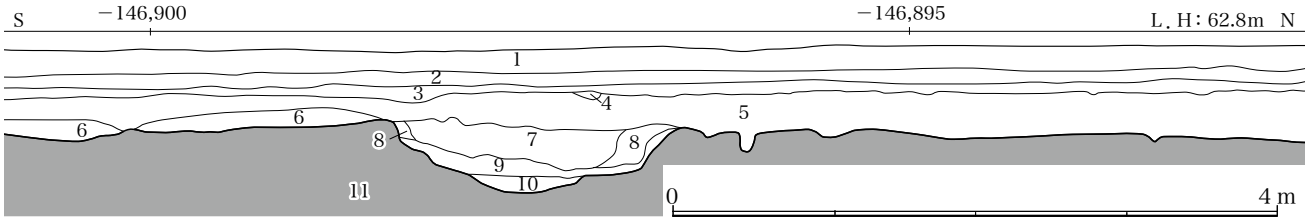
主な遺構には縄文時代晩期の土坑、弥生時代の土器棺墓、方形周溝墓、掘立柱列、柱穴、溝、土坑、古墳時代の土坑、奈良時代の条坊遺構、掘立柱建物・塀・門、井戸、土坑、溝がある。以下、時代ごとに遺構の概要を述べ、各遺構の詳細は一覧表にまとめた。

縄文時代

ＨＪ第579次調査発掘区とＨＪ第608次調査Ｃ発掘区の下層遺構面で、河川１条（河川25）、土坑11基（ＳＫ02～09・20～22）を検出した。

ＨＪ第608次調査Ｃ発掘区で検出した河川25は、南から北へ蛇行する。縄文時代晩期の土器片が出土した。

ＨＪ第579次調査発掘区の北西部で検出したＳＫ02～09は、断面形状から底部が平坦で逆台形と半円形のも



1　黒灰色砂質土（耕土）
2　灰褐色砂質土
3　淡灰色砂質土
4　淡灰色砂質土
5　黄灰色粘土（縄文晩期～弥生時代前期遺物包含層）
6　黄灰色砂質土（縄文晩期～弥生時代前期遺物包含層）
7　灰褐色粘土
8　灰色土（11を多く含む）
9　灰褐色砂質土
10　灰色細砂
11　黄褐色粘土
7～10：ＳＫ03埋土
11：地山

ＨＪ第579次調査　ＳＫ03（下層遺構）　付近西壁土層図（1/50）

のに大別でき、坑内埋土はレンズ状に堆積する。ＳＫ06～08から縄文時代晩期の土器が、ＳＫ04・07の坑内底に堆積した砂層から堅果類が少量出土した。ＳＫ02～09は湧水あるいは河川の水を利用して堅果類を貯蔵する低湿地型の貯蔵穴と考えられる。ＳＫ20・21はＨＪ第608次調査Ｃ発掘区で検出した。前者は断面形が半円形、後者は断面形が逆台形を呈する。ＳＫ20・21から堅果類は出土しなかったが、土坑の断面形状や埋土の堆積状態がＳＫ02～09に似ることや河川25にも近接することから、低湿地型の貯蔵穴と考えた。なお、当時の植生や環境を明らかにするため、ＳＫ07埋土の花粉分析とＳＫ04・07出土種実の同定を行ったところ、花粉分析ではコナラ属・アカガシ亜属が多く、出土固堅果片はコナラ属のものであるという結果を得た（130・133頁参照）。

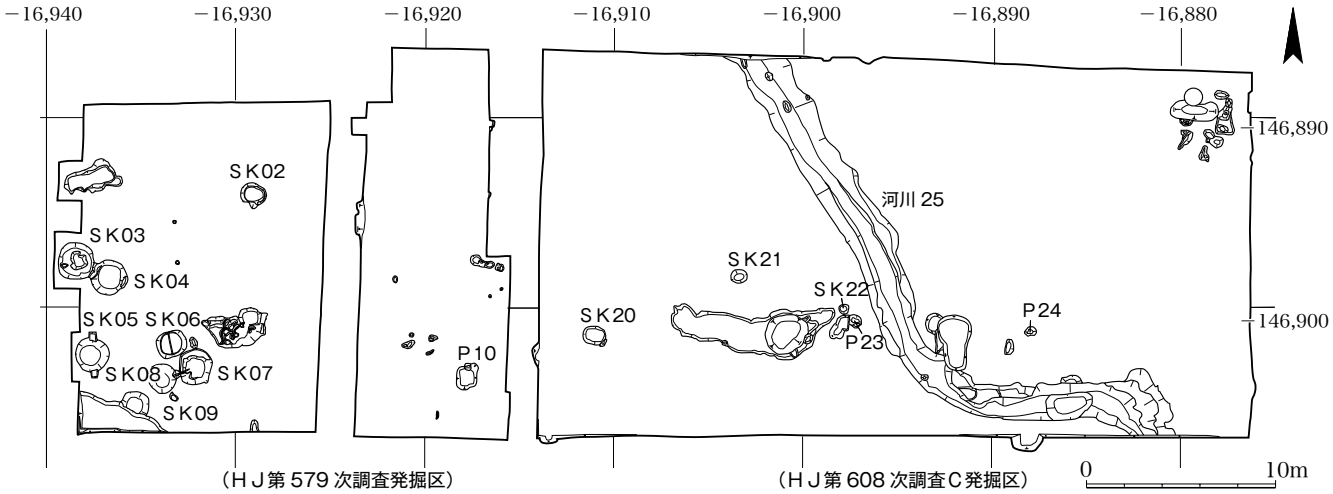
弥生時代

土器棺墓１基（ＳＴ42）、方形周溝墓１基（ＳＸ19）、土坑37基（ＳＫ01～08・13～18・26・30～33・35～41・43～50）、溝７条（ＳＤ01～03・06・11・12・34）、掘立柱列２条（ＳＡ01・51）、柱穴３個（Ｐ10・23・24）を検出した。

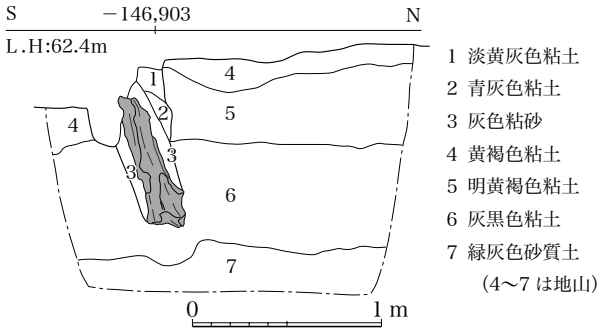
ＨＪ第608次調査Ｄ発掘区で検出したＳＴ42は土器棺墓である。墓坑西側に寄せて口縁部を東に向けた壷を横位に置き、高杯で蓋をする。壷内に内容物は確認できなかった。壷・高杯ともに大和第Ⅳ様式のものである。

ＨＪ第579次調査発掘区南東部検出のＳＸ19は方形周溝墓と考えられ、平面「コ」字状に周溝の一部が残る。北東－南西方向の周溝は長さ約14ｍ（深さ約0.2ｍ）である。周溝は北端で北西に曲がり（長さ約７ｍ・深さ約0.6ｍ）、南端で北西に曲がって（長さ約５ｍ・深さ約0.4ｍ）途切れる。周溝内から弥生時代中期以降の弥生土器が出土した。削平のため埋葬施設は検出できなかった。重複関係からＳＸ19→ＳＫ14、ＳＸ19→ＳＤ12→ＳＫ16の新旧関係が認められる。

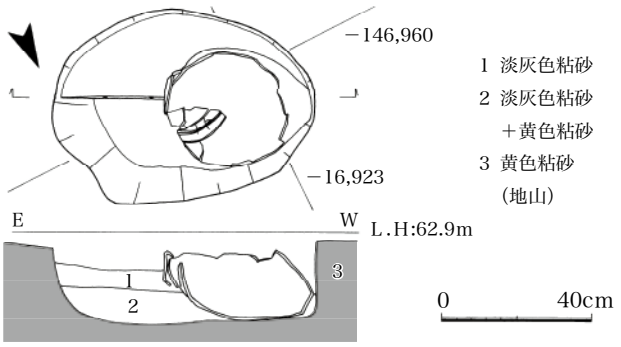
縄文時代晩期の遺構と同じ面で検出したＰ10は、径・深さともに約0.4ｍの掘形内に、径約0.2ｍの柱根が遺存していた。やや斜めに傾く柱が掘形の底面よりも約0.5ｍ深く打ち込まれ、柱穴の下に堆積する軟質の緑灰色砂質土上面には深さ約0.1ｍの沈下が認められる。柱掘形からの出土遺物はない。柱根の樹種同定を行った結果、アカガシ・イチイガシなどのコナラ属アカガシ亜属と判明した。また、柱根の放射性炭素年代測定結果によれば、補正^{14}Ｃ年代が2160±40ＢＰ（２σの暦年代でＢＣ



ＨＪ第579次・608次調査　Ｃ発掘区下層（縄文時代晩期～弥生時代前期）遺構平面図　(1/400)



柱穴Ｐ10　断面図（1/40）



ＳＴ42　平面・断面図（1/20）

360～90年）という測定値（129頁参照）を得ており、弥生時代前期頃の遺構と推測できる。

古墳時代

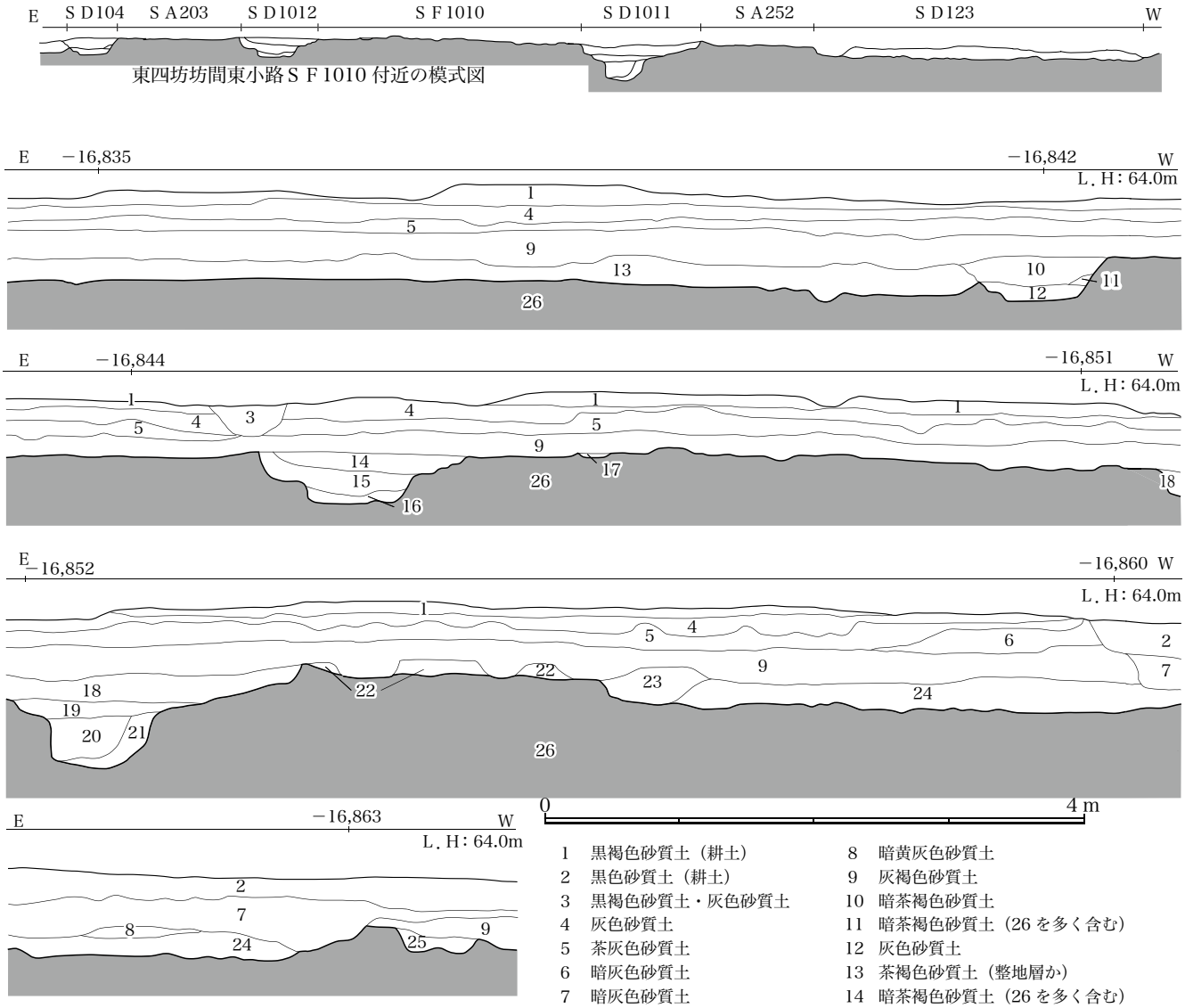
ＨＪ第608次調査Ｃ発掘区内に土坑３基（ＳＫ27～29）があり、古墳時代前期後半の土器が出土した。

奈良時代

十坪・十五坪の条坊遺構（道路とその側溝）、掘立柱建物、柱列、門、井戸、埋納遺構、土坑、溝がある。以下、条坊遺構、十坪、十五坪ごとにまとめて記す。

条坊遺構　ＨＪ第608次調査Ａ・Ｂ発掘区の東四坊坊間東小路が想定される位置で、発掘区を縦断する南北溝２条（ＳＤ1011・1012）を検出した。ＳＤ1011は幅1.5～4.6 m、深さ0.2～0.7 mで、ＳＤ1012は幅1.0～3.5 m、深さ約0.4 mである。両者は左京五条四坊九坪・十六坪間で検出した同小路の東西側溝（ＨＪ第541次調査）と検出位置に矛盾が無いことから、ＳＤ1011は東四坊坊間東小路の西側溝、ＳＤ1012は東側溝と判断できる。東四坊坊間東小路（ＳＦ1010）の路面幅は2.1～6.1 m、東西側溝心々間距離は約7.0 mである。溝底は、ＳＤ1011・1012ともに南から北へ低くなる。ＳＦ1010路面心の国土座標値はＸ＝−146,940.00、Ｙ＝−16,849.05である。ＳＤ1011溝心の国土座標値はＸ＝−146,940.00、Ｙ＝−16,852.55で、ＳＤ1012溝心の国土座標値はＸ＝−146,940.00、Ｙ＝−16,845.55である。

ＨＪ第608次調査Ｅ発掘区南端で、幅約2.4 m、深さ0.35 mの東西溝ＳＤ2008を検出した。溝底の標高は東



1　黒褐色砂質土（耕土）
2　黒色砂質土（耕土）
3　黒褐色砂質土・灰色砂質土
4　灰色砂質土
5　茶灰色砂質土
6　暗灰色砂質土
7　暗灰色砂質土
8　暗黄灰色砂質土
9　灰褐色砂質土
10　暗茶褐色砂質土
11　暗茶褐色砂質土（26を多く含む）
12　灰色砂質土
13　茶褐色砂質土（整地層か）
14　暗茶褐色砂質土（26を多く含む）
15　暗茶褐色砂質土
16　暗茶褐色砂質土（26を多く含む）
17　灰色砂質土
18　灰褐色砂質土
19　暗茶褐色砂質土
20　灰色砂質土
21　灰色砂質土（26を多く含む）
22　灰色砂質土
23　暗黄灰色砂質土
24　暗茶褐色砂質土
25　暗黄褐色砂質土
26　黄灰色砂質土

10～20：ＳＤ104埋土
14～16：ＳＤ1012埋土
18～21：ＳＤ1011埋土
24：ＳＤ123埋土
26：地山

ＨＪ第608次調査　Ａ発掘区東四坊坊間東小路ＳＦ1010南壁土層図（1/50）

端が約62.9ｍ、西端が62.55ｍで、東から西への下り勾配である。検出位置からみて、ＳＤ2008は五条条間路の北側溝で、ＳＤ2008南側の平坦面が五条条間路ＳＦ2007の路面に相当する。部分的ながら、路面の北端約1.4ｍ分を検出した。ＳＤ2008溝心の国土座標値はＸ＝−146,993.35、Ｙ＝−16,904.00である。また、ＳＤ2008の北肩で、十坪内を東西に二分する位置の約11.0ｍ東側で、橋脚（ＳＸ808）と思われる柱穴を２個検出した。

十坪　溝27条（ＳＤ111～117・119～138)、掘立柱建物40棟（ＳＢ207～219・221・222・225～229・231～235・238・239・241～249・251・254・260・263)、掘立柱列16条（ＳＡ220・223・224・230・236・237・240・250・252・253・255～259・261)、井戸５基（ＳＥ501～505)、土坑14基（ＳＫ603～609、ＳＸ805・806・809・811・812・816・817)、埋納遺構８基（ＳＸ802・804・807・808・810・813～815)、埋甕遺構１基（ＳＸ803）を検出した。

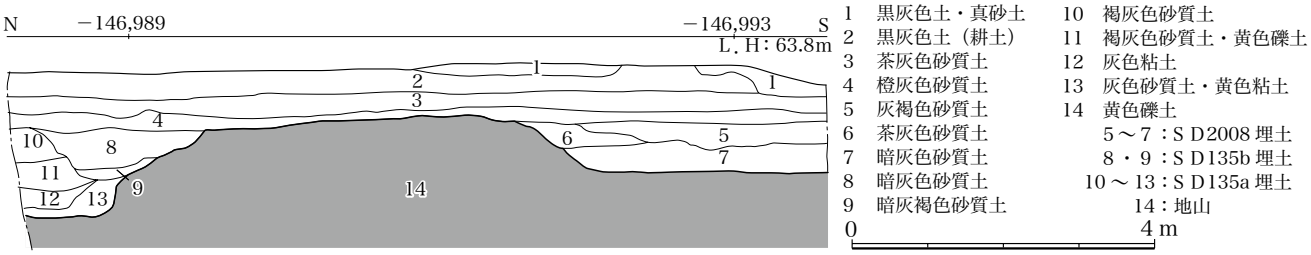
（東面・南面築地関連）ＨＪ第608次調査Ａ・Ｂ発掘区で南北溝ＳＤ123を検出した。ＳＤ123は、東四坊坊間東小路西側溝ＳＤ1011と平行する十坪東端の溝で、幅は2.8～7.0ｍ。ＳＤ123とＳＤ1011の間には幅1.3～3.0ｍの空閑地があり、南北に並ぶ小穴の柱列を２条検出した。これらは築地の堰板止めである可能性が高く、ＳＤ123とＳＤ1011の間に東面築地（ＳＡ252）を想定し、南北溝ＳＤ123は築地雨落ち溝になると判断した。

ＨＪ第608次調査Ｅ発掘区で検出した東西溝ＳＤ135は、五条条間路北側溝ＳＤ2008と平行する十坪南端の溝である。ＳＤ135には改修の痕跡が確認でき、改修前の溝をＳＤ135ａ、改修後の溝をＳＤ135ｂとする。ＳＤ135ａは国土座標値Ｙ＝−16,898付近で途切れて、以西には続かない。ＳＤ2008とＳＤ135間の空閑地（幅2.3～2.5ｍ）においても、東西方向に並ぶ小穴の柱列２条とＳＤ135ｂとＳＤ2008を繋ぐ南北溝２条（ＳＤ134・136）を検出した。これらは築地堰板止めの小穴や暗渠の溝となる可能性が高く、ＳＤ2008とＳＤ135の間に南面築地塀（ＳＡ262）を想定し、ＳＤ135は築地雨落ち溝になると考える。

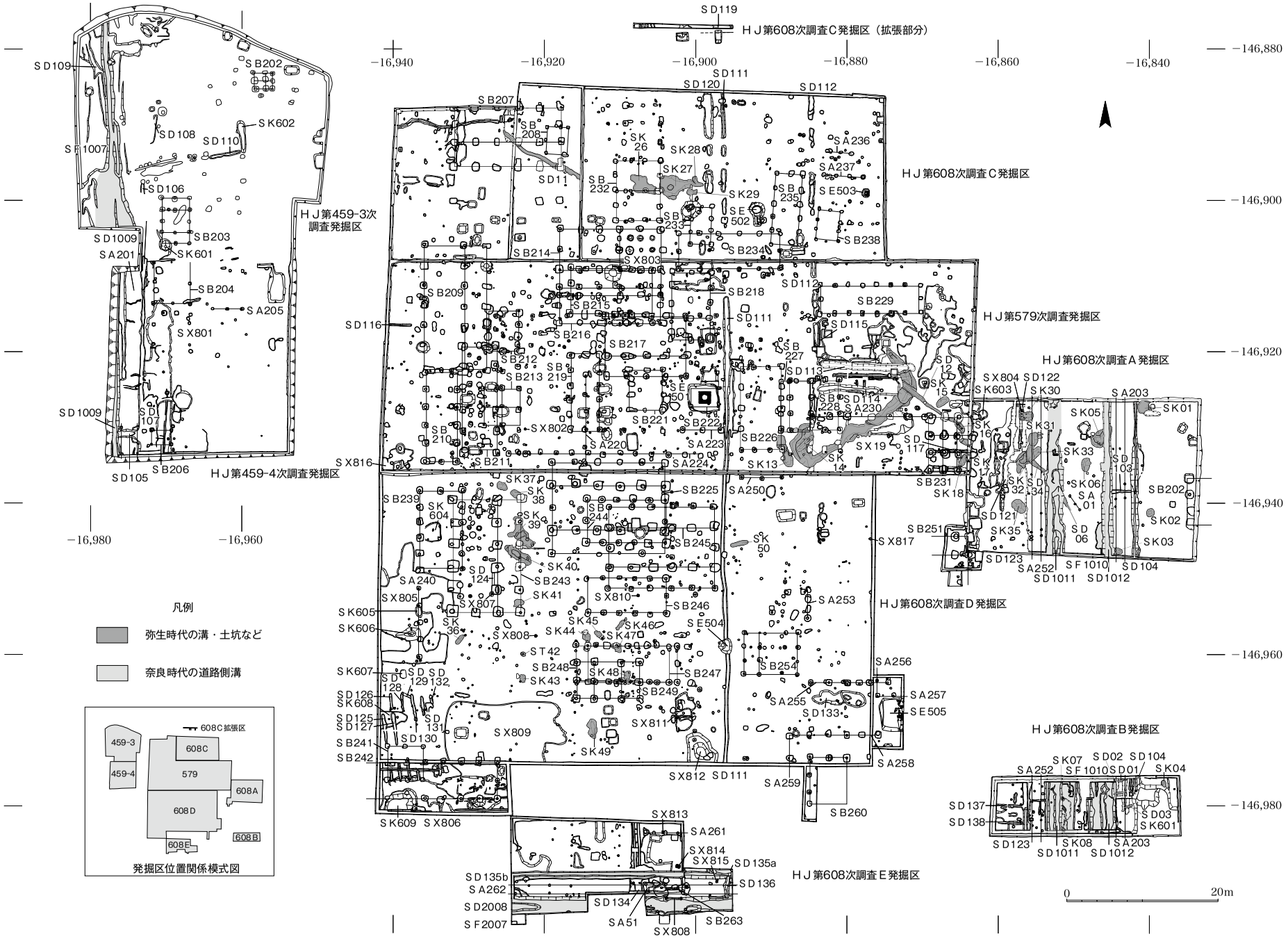
（溝）ＳＤ121はＳＤ123の底で検出した南北溝である。ＳＤ123掘削以前の様相と遺構の性格を明らかにする目的から、ＳＤ121溝内埋土の花粉分析を行った。結果、ＳＤ121は花粉密度が低くかつ常時滞水しない溝で、付近にはやや乾燥した集落や畑地が広がっていたことが判明した[2)]。ＳＤ119はＨＪ第608次調査Ｃ発掘区の拡張部分で南岸を検出。長さ13.0ｍ以上、幅1.0ｍ以上の東西溝で、深さ約0.3ｍまで確認した。検出位置からみて十坪北端の溝と考えられる。

ＳＤ111はＨＪ第608次調査Ｃ発掘区から同Ｄ発掘区までを縦断する南北溝で、坪内（東四坊坊間東小路西側溝ＳＤ1011の西端）から1/3ライン付近に掘られる。南北溝ＳＤ112はＳＤ111の約12ｍ東に掘られ、坪内の東からほぼ1/4ライン付近に位置する。重複関係からＳＤ111は井戸ＳＥ504より古い。南北溝ＳＤ120はＳＤ111と平行する。両者間に幅約1.5ｍの空閑地があり、通路の可能性が考えられる。東西溝ＳＤ113とＬ字溝ＳＤ115の東西溝部分は重複する。ＳＤ113の南約１ｍにはＳＤ113と平行に東西溝ＳＤ114が掘られる。両者心々の位置は、坪内南北1/2ラインのやや北寄りにあたる。両者間を坪内通路とみることもできる。重複関係からＳＤ112・113はＳＤ115よりも新しい。東西溝ＳＤ133は坪内（五条条間北小路南側溝ＳＤ2006の南端～五条条間路北側溝ＳＤ2008の北端）の南から1/4ライン付近に掘られる。

ＨＪ第579次調査発掘区の西端で、重複関係から南北棟建物ＳＢ209・210よりも古い東西小溝15条を、南東隅で南北棟総柱建物ＳＢ231よりも古い東西溝２条を検出した。これらの溝内埋土は、基本的に下層が灰色砂質土で上層が地山ブロックを多く含む褐色土である。溝の間隔は発掘区西端のものが0.5～3.0ｍ、南東隅のものが約1.5ｍである。これらは、畑の排水用の溝とも考えられたため、発掘区西端のＳＤ116と南東隅のＳＤ117の溝内埋土を花粉分析したが、溝の用途を特定するには至らなかった（130頁参照)。



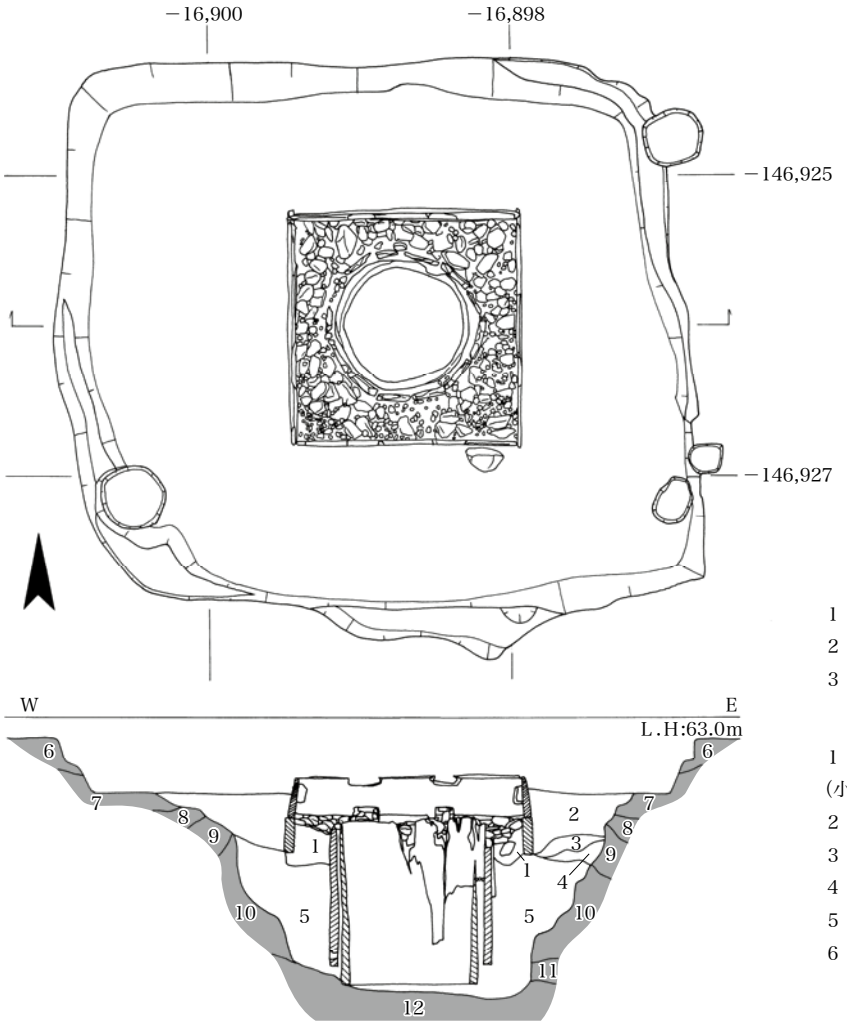
ＳＤ135ａ・ｂ、ＳＤ2008土層図（1/100）

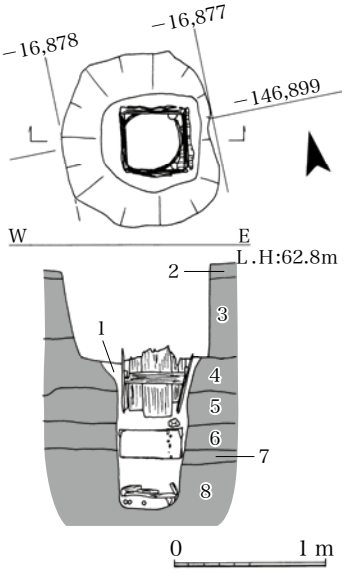


検出遺構平面図（1/500）

（この図はＰＤＦ化にあたり全体を72%に縮小しています。）

（建物・塀）坪中央のやや南寄りに南北廂付東西棟建物ＳＢ 245 が建つ。その北西には、ＳＢ 245 よりも新しい南北廂付東西棟建物ＳＢ 225 が、ＳＢ 225 の西には東廂付南北棟建物ＳＢ 243 が建つ。ＳＢ 225 の東妻柱と柱筋を揃えて、東西棟建物３棟（ＳＢ 244・246・247）が南北に並立する。この３棟の間隔は約 4.4 mである。また、ＳＢ 244・246 の西側に建つＳＢ 243 は、南北妻柱列とＳＢ 244 の北側柱筋とＳＢ 246 の南側柱筋が揃う。ＳＢ 225 の北側には、近接した位置に東西塀ＳＡ 224 が築かれる。坪北半には、ＳＢ 225 と東妻柱筋を揃えて東西棟建物ＳＢ 221・216・214、南北棟建物ＳＢ 232 が並立する。ＳＢ 214 は南廂付き建物で、身舎内にはＳＸ 803 がある。ＳＸ 803 は径 0.3 ～ 1.0 m、深さ 0.1 ～ 0.25 mの土坑群で、東西３個、南北２個の計６個が並ぶ。各土坑の深さはＳＢ 214 の柱穴（深さ 0.4 ～ 0.7 m）よりも浅く、断面形が皿状あるいは椀状を呈する。坑内に据えられていた容器は検出できなかったが、土坑の形状や配置などからＳＸ 803 は貯蔵用埋甕遺構と考えた。ＳＢ 243 の北側では、ＳＢ 243 の東廂とＳＢ 213・212 の東側柱筋が揃う。ＳＢ 213・212 の西側には、ＳＢ 213・212 よりも新しい南北棟建物ＳＢ 211 が建つ。ＳＢ 211 の東側柱とＳＢ 243 の身舎東側柱筋が揃う。ＳＢ 211・243 の西側には、ＳＢ 211 よりも新しい南北棟建物ＳＢ 210 が南北棟建物ＳＢ 239 と妻柱を揃えて建つ。坪東端には南北棟総柱建物ＳＢ 231 が建つ。ＳＢ 231 の西側にはＳＢ 231 北妻柱筋と柱筋を揃えて東西塀ＳＡ 230 が建つ。ＳＡ 230 の西端付近には、南北棟建物３棟（ＳＢ 226 ～ 228）が建ち、ＳＢ 226 の東側柱とＳＢ 227 の西側柱が重なる。またＳＢ 227・228 の北・南妻柱筋も重なる。ＳＢ 226・228 はＳＢ 227 よりも新しいことがわかる。ＳＢ 231 の南側にはＳＢ 231 と東側柱筋を揃えて北廂付東西棟建物ＳＢ 251 が建つ。坪南東部で検出した南北柱列ＳＡ 253 は、坪内の東から約 1/4 ラインに、東西柱列ＳＡ 255 は坪内の南から約 1/4 ラインに建つ。坪南端で検出したＳＢ 263 は五条条間路ＳＦ 2007 に開く門。柱間約 3.0 m の二柱門。坪中央南半に建つＳＢ 249 は梁行が 2.4 m等間、桁行が 2.4 - 3.5 - 2.4 mで中央柱間が広い。八脚門が想定できるが、ＳＢ 249 の東西に並ぶ柱列や閉塞施設の痕跡





1 暗灰色粘質土　4 紫灰褐色粘土　7 暗灰色粘土
2 黄灰色粘質土　5 黄灰色粘土　8 灰色砂礫
3 橙灰色粘質土　6 灰色粘土　2～8：地山

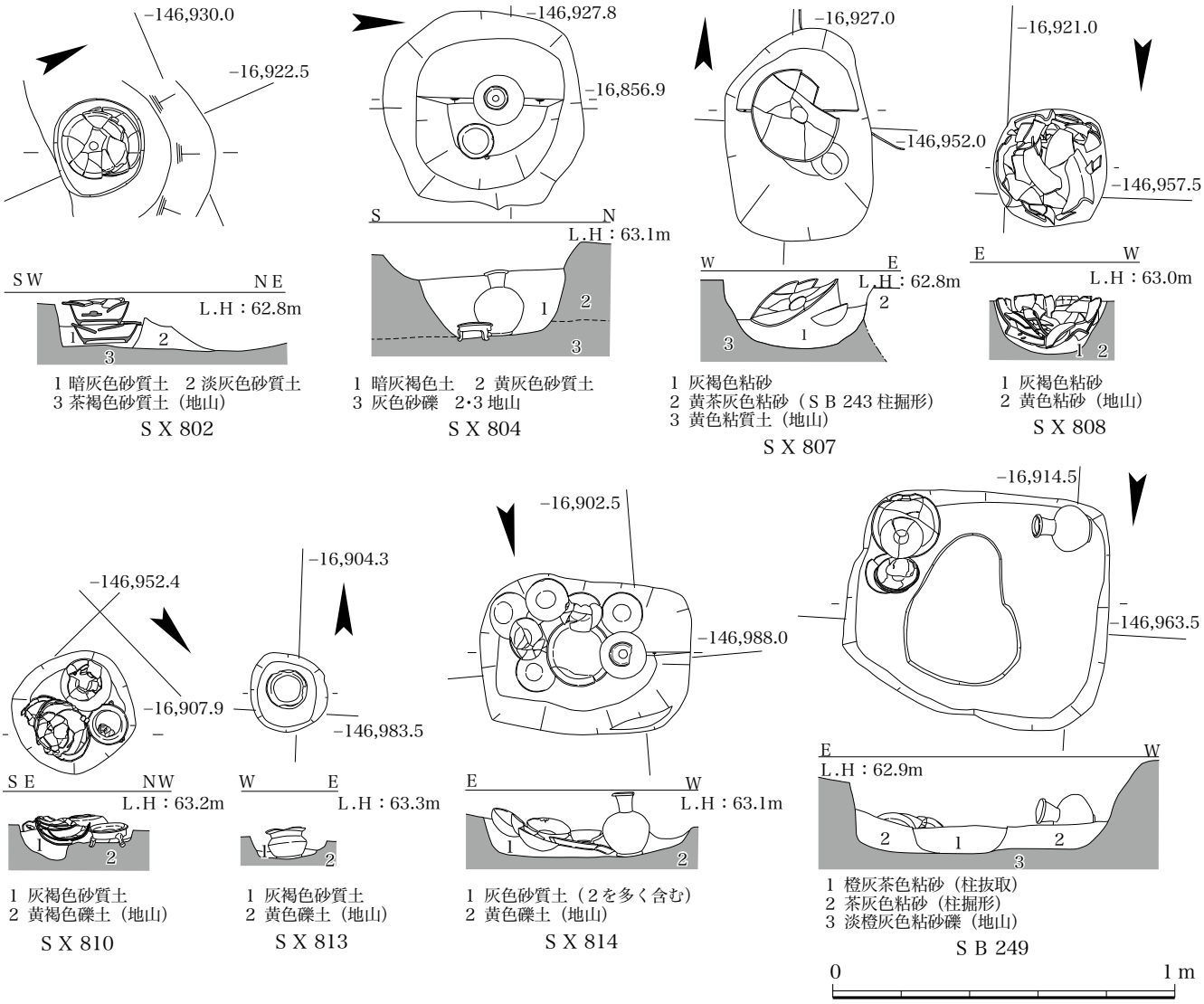
1 灰色細砂（小石～礫を充填）　7 黄褐色粘土
2 暗灰色土　8 黄白色粘土
3 灰色砂　9 橙灰色細砂土
4 砂灰色土　10 青灰色細砂土
5 黒灰色土　11 黒灰色細砂土
6 黄灰色粘土　12 黄灰色礫
6～12：地山

0　2 m

ＳＥ 501 平面・断面図（1/50）左　　ＳＥ 503 平面・断面図（1/50）右

は検出できなかった。ＳＢ 249 の扉口西側の柱掘形内東端に土師器椀Ａ７点、同皿Ａ１点、南西隅に須恵器壷Ｌ１点を横位に置く。ＳＢ 249 の建築時の地鎮と考えられる。ＳＫ 48、ＳＢ 247・248 よりも新しい。ＳＢ 249 は坪中央のＳＢ 225 と建物の中軸をほぼ揃える。

（井戸） ＳＥ 501 は坪中央の東寄りで検出した井戸で、掘形は南北約 3.6 m、東西約 4.2 m、深さ約 1.7 m。井戸枠は上段が方形横板組、下段外側が円形縦板組で、下段内側に一木刳り抜き材を用いる。掘形および枠内から８世紀末～９世紀前半の土器・瓦等が出土。井戸屋形ＳＢ 222 を伴う。ＳＥ 502 は坪北東部で検出した井戸で、南北約 3.2 m、東西 1.0 ～ 2.0 m、深さ約 2.1 m。井戸枠は抜き取られており残存しない。埋土から８世紀後半の土器が少量出土。ＳＥ 503 はＳＥ 502 の東側で検出した井戸で、掘形は南北約 1.2 m、東西約 1.0 m、深さ約 1.6 m。井戸枠は、方形縦板組横桟留で内法一辺 0.45 mである。井戸底から約 0.3 m上の壁面には曲物が引っ掛かっていた。曲物内の灰色粘土中には、草本植物の種子が多量に含まれておりエノコログサ属、スゲ属等の人里植物や農耕雑草が生育していたことがわかる（136 頁参照）。掘形から８世紀代の土器片が、枠内から８世紀後半の土器等が出土。ＳＥ 504 は坪南半の東寄りで検出した井戸で、南北約 2.1 m、東西約 1.8 m、深さ約 1.3 m。井戸枠は抜き取られており残存しない。最上層埋土中には、８世紀末～９世紀初頭の蓋をした須恵器壷Ａが正位に置かれていた。壷内には和同開珎４枚を含む銭貨５枚が納められていた。ＳＥ 505 は坪南東部で検出した井戸で、発掘区外東に続く。掘形は南北約 4.4 m、東西 3.2 m以上、深さ 3.0 mまで確認した。井戸枠は上段が方形縦板組隅柱横桟留、下段が円形縦板組であるが、枠の大半が抜き取られていた。掘形および抜取穴から８世紀後半の土器、瓦、土製品が少量出土した。



検出埋納遺構平面・立面・断面図（1/20）

（埋納遺構） ＳＸ 802 は坪中央の西寄りで検出した。坑内には蓋をした須恵器杯Ｂを正位に上下重ねて置く。上の杯Ｂは内容物を確認できなかったが、下の杯には和同開珎４枚と鉄滓が納められていた。ＳＸ 804 は坪東端の南北溝ＳＤ 123 の東側で検出した。坑内には須恵器壷Ｌと奈良三彩火舎を正位に置く。ＳＸ 807・808 は坪南半の西寄りで検出した。ＳＸ 807 は坑内に土師器椀Ａを正位に置き、その上に脚部を欠く土師器高杯を下に向けて被せる。ＳＸ 808 は坑内に底部を欠いた土師器甕Ｂとその下に土師器皿Ｃ４点を正位に置く。土師器甕Ｂは口縁から体部が破砕した状態で埋められていた。ＳＸ 810 は坪中央の建物ＳＢ 245 の南側で検出した。坑内には須恵器壷Ｌと奈良三彩火舎とその横に土師器椀Ａ６点を正位に重ねて置く。ＳＸ 813 ～ 815 は坪中央南端で検出。ＳＸ 813 は門ＳＢ 263 の北側約７ｍにあり、坑内には須恵器壷Ｈを正位に置く。ＳＸ 814 はＳＢ 263 の北側約３ｍにあり、坑内には須恵器壷Ｌと土師器皿Ａと皿の周りに土師器椀Ａ７点を置く。ＳＸ 815 は坪南端の東西溝ＳＤ 135ｂの南岸で南面築地塀ＳＡ 262 が想定される空閑地の北端に位置する。坑内には銭貨が５枚遺存していたが、腐食が激しく銭文を確認できたのは神功開寶１枚のみである。

十五坪　溝２条（ＳＤ 103・104）、掘立柱建物１棟（ＳＢ 202）、土坑１基（ＳＫ 601）、柱列を検出した。

ＨＪ第 608 次調査Ａ発掘区の南東隅には、厚さ 0.2 ｍ前後の茶褐色砂質土（整地層）が堆積し、その上面から十五坪西端の南北溝ＳＤ 104 が掘られる。ＳＤ 104 と東四坊坊間東小路東側溝と考えられるＳＤ 1012 の間には空閑地（幅 2.0 ～ 2.5 ｍ）があり、この部分で南北に並ぶ柱列を２条検出した。これらは築地の堰板止めである可能性が高い。また、ＳＤ 104 とＳＤ 1012 に接続する東西溝ＳＤ 103 を検出。ＳＤ 103 は幅約 0.3 ｍ、深さ 0.05 ～ 0.15 ｍで、溝底は東から西へ低くなる。ＳＤ 103 は築地暗渠になると考えられることから、十五坪の西面築地塀ＳＡ 203 を想定し、ＳＤ 104 は築地雨落ち溝になると判断した。ＳＢ 202 は棟方向が不明な掘立柱建物で、発掘区外東に続く。ＳＫ 601 は坪の南西隅で検出した南北 6.8 ｍ以上、東西 6.0 ｍ以上、深さ約 0.5 ｍの土坑。ＳＫ 04、ＳＤ 104 よりも新しい。

江戸時代以降の遺構

ＳＸ 817 はＨＪ第 608 次調査Ｄ発掘区の東端で検出した径約 0.2 ｍ、深さ 0.05 ｍの土坑。耕作に伴う素掘溝よりも新しい。坑内から近世以降の木製塔婆片が出土。

なお、調査目的のひとつであった中ツ道[10] に関わる遺構は検出できなかった。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱で 232 箱分の遺物が出土した。

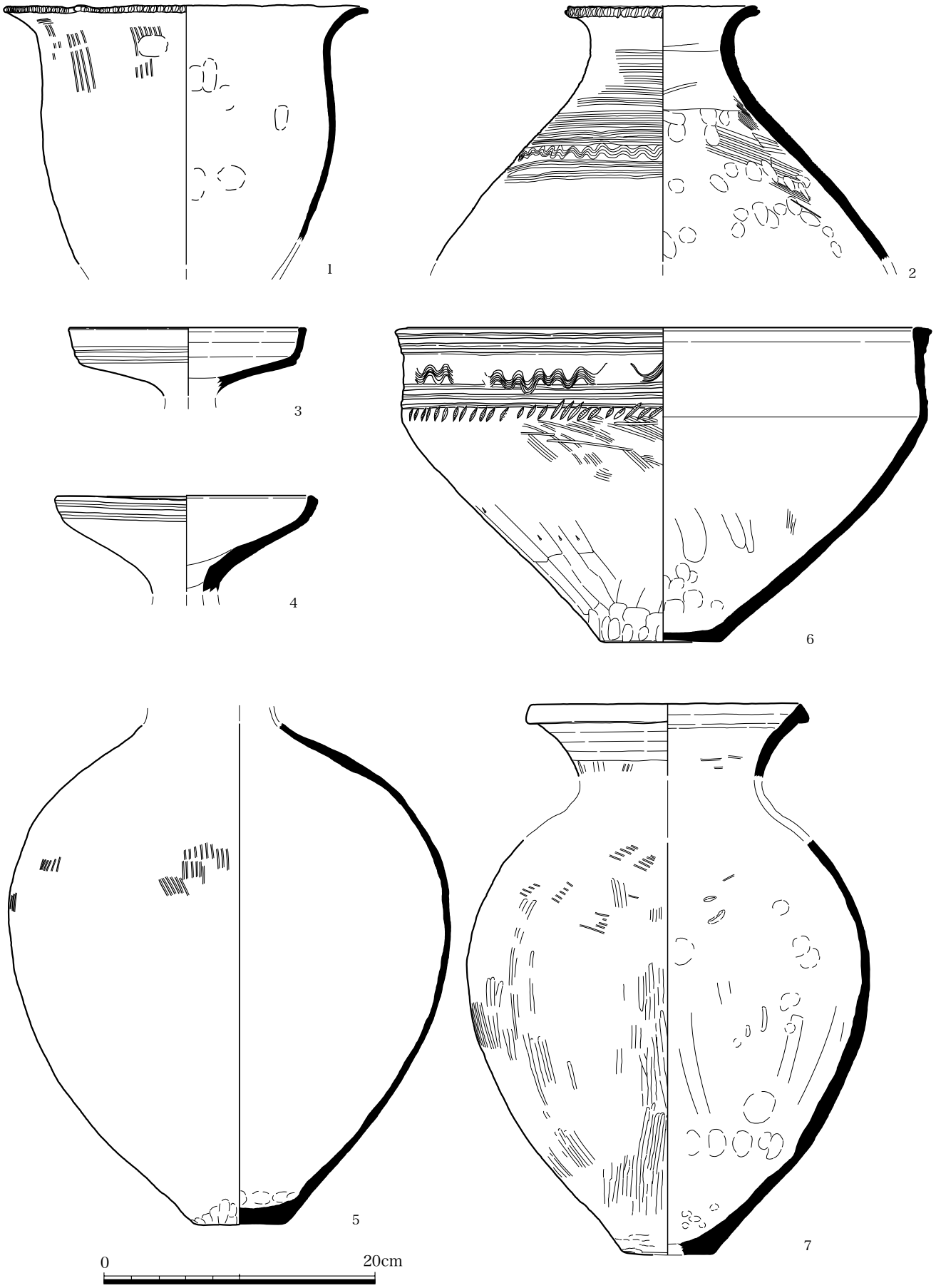
縄文時代晩期の土器、弥生時代中期・後期の土器、古墳時代前期の土師器、８世紀後半～９世紀前半の土師器・須恵器・黒色土器Ａ類・奈良三彩・緑釉陶器・灰釉陶器・墨書土器・製塩土器・線刻土器、陶硯、土馬、円盤型土製品、瓦塼、石器（石鏃・楔形石器・剥片）、砥石、銭貨（和同開珎・神功開寶）、金属製品（刀装具、鉄釘）、鞴羽口、鉱滓、炉壁片、焼土塊、木製品（曲物・塔婆）などがある。以下、主な遺物について記す。

縄文時代の土器　ＳＫ 07 から縄文時代晩期前半の深鉢の口縁部から体部にかけての破片が出土した。外面は二枚貝による条痕があり、頸部をナデ調整する。内面にはナデ調整が施される。その他にＳＫ 06・08・21、河川 25 から出土した縄文時代晩期の土器片がある。

弥生時代の土器　弥生土器には、甕・壷・高杯・鉢がある。弥生時代中期のものが大半で、後期初頭のものが若干含まれる。以下、主なものを記す。

１はＳＫ 01 から出土した甕である。口縁端部に刻目が施され、ヘラによる押捺が１箇所ある。内外面とも磨滅しているため、頸部から体部外面にかけて縦位のハケ調整の痕跡がわずかに残るだけである。２はＳＫ 30 から出土した広口壷。口縁端部に刻目、頸部から体部上半外面にかけて櫛描き直線文 11 帯（４条 / １帯）、波状文１帯（４条 / １帯）が施されている。３と４は高杯の杯部である。３はＳＴ 42 から、４はＳＡ 51 の柱穴から出土した。いずれも口縁部外面に凹線文２条が施されている。内外面とも磨滅しているため、調整は不明である。５は口縁部が欠損している広口壷で、ＳＴ 42 から３の高杯と共に出土した。内外面とも磨滅しているため、体部外面にハケ調整の痕跡がわずかに残るだけである。６はＳＫ 16 から出土した鉢。口縁端部外面に凹線文２条が施され、その下には櫛描き波状文１帯（６条 / １帯）、凹線文２条、刺突文が施されている。体部上半外面は斜め方向にハケ調整した後、横位のヘラミガキ調整が施されている。体部下半外面は縦位のヘラケズリが施されている。内面は磨滅しているため、縦位のハケ調整とナデ調整の痕跡がわずかに残るだけである。７はＳＫ 13 から出土した広口壷。体部上半外面は横位～斜め方向のタタキの痕跡がみられ、体部外面全体に縦位のヘラミガキ調整が施されている。内面は磨滅しているため、ナデの痕跡が部分的に残る。

１は大和第Ⅱ-２様式、２は大和第Ⅱ-３様式、３～６は大和第Ⅳ-１～２様式、７は大和第Ⅴ-１様式に位置づけられる。



出土弥生土器　(1/4)

奈良・平安時代の土器・土製品　遺物整理箱で62箱分出土した。大半は８世紀後半～９世紀初頭のもので、８世紀前半のものは少ない。道路側溝や築地雨落ち溝からの出土量が多い。以下、埋納遺構などからの出土土器を中心に記す。

ＳＢ249出土土器（１～８）　土師器皿Ａ（７）は口縁端部が内側に小さく肥厚し、口縁部は開き気味である。口径19.7㎝、器高2.6㎝である。底部外面はヘラケズリを施す。土師器椀Ａ（１～６）は口径12.2～12.8㎝、器高3.55～4.05㎝である。１～３は外面全体にヘラミガキを施す。４は口縁部外面にヘラケズリとヘラミガキがわずかに残る。５は外面全体にヘラケズリの後、口縁部上半外面にヘラミガキを施す。ヘラケズリは指頭圧痕で凹んだ部分までは及ばない。６は外面全体にヘラケズリを施す。須恵器壷Ｌ（８）は口径7.5㎝、器高17.1㎝、底径8.2㎝、胴部最大径15.2㎝である。体部下半はロクロケズリ、体部上半はロクロナデ、底部外面はヘラ切り後にナデ調整を施す。頸部と体部の接合は３段構成である。

ＳＸ814出土土器（９～17）　土師器皿Ａ（16）は口径19.2㎝、器高2.6㎝である。口縁部は開き気味である。底部外面はヘラケズリを施す。土師器椀Ａ（９～15）は９～13が口径11.9～12.3㎝、器高3.35～3.75㎝で、14・15が口径13.0㎝、器高3.65～3.9㎝で、大きさにより２つに分けることができる。いずれも器面の磨滅が著しいが、ヘラケズリと指頭圧痕が僅かに確認できる。須恵器壷Ｌ（17）は口径6.9㎝、器高18.35㎝、底径6.2㎝、胴部最大径13.8㎝であり、成形、調整技法は８と同じである。胴部最大径は８・25・27に比べると小さい。口頸部が長細くなり、器高がやや高くなる。

ＳＸ810出土土器（18～25）　土師器椀Ａ（18～23）は口径12.2～12.8㎝、器高3.4～4.0㎝である。いずれも器面の磨滅が著しいが、19・20はヘラケズリの後ヘラミガキ、21・22はヘラケズリが確認できる。22は口径が12.8cmで、器高3.4cmと低く、形態的に新しい要素を呈している。23は小片のため大きさは不明。奈良三彩火舎（24）は口径11.6㎝、器高5.3㎝である。平らな底部から外反する体部と、斜め下方へ折り曲げた口縁部と丸くつまみ出した端部を持つ。体部内面から外面はロクロナデを施し、底部内面にはロクロ目が残る。脚は３本の獣脚で、体部との接合部には接合痕が明瞭に残る。胎土は軟質で淡黄色である。釉薬は、ほとんど剥落しているが、淡緑釉を全面施釉後、濃緑釉を体部外面から体部内面と脚部外面に、褐釉を体部外面から体部内面上端に施す。須恵器壷Ｌ（25）は残存高12.5㎝、底径8.3㎝、胴部最大径14.8㎝である。口頸部を欠く。成形、調整技法は８と同じである。

ＳＸ804出土土器（26・27）　奈良三彩火舎（26）は口径10.8㎝、器高5.0㎝である。成形、調整技法は24と同じで、脚は３本である。底部内面にロクロ目が残り、底部外面には右回転ロクロのヘラ切り痕跡が残る。胎土は軟質で浅黄橙色である。釉薬は淡緑釉を全面施釉後、濃緑釉を体部外面から内面上半と脚外面に施す。体部外面の濃緑釉は、脚部の間に施す。須恵器壷Ｌ（27）は口径7.2㎝、器高17.9㎝、底径7.8㎝、胴部最大径14.6㎝である。成形、調整技法は８と同じである。

ＳＸ807出土土器（28・29）　土師器椀Ａ（28）は口径12.6㎝、器高3.8㎝である。器面の磨滅が著しく、調整は不明。高杯（29）は口径28.2㎝。器面の磨滅が著しく僅かにヘラミガキが残るだけであるが、ヘラミガキは５単位に分けて施している。

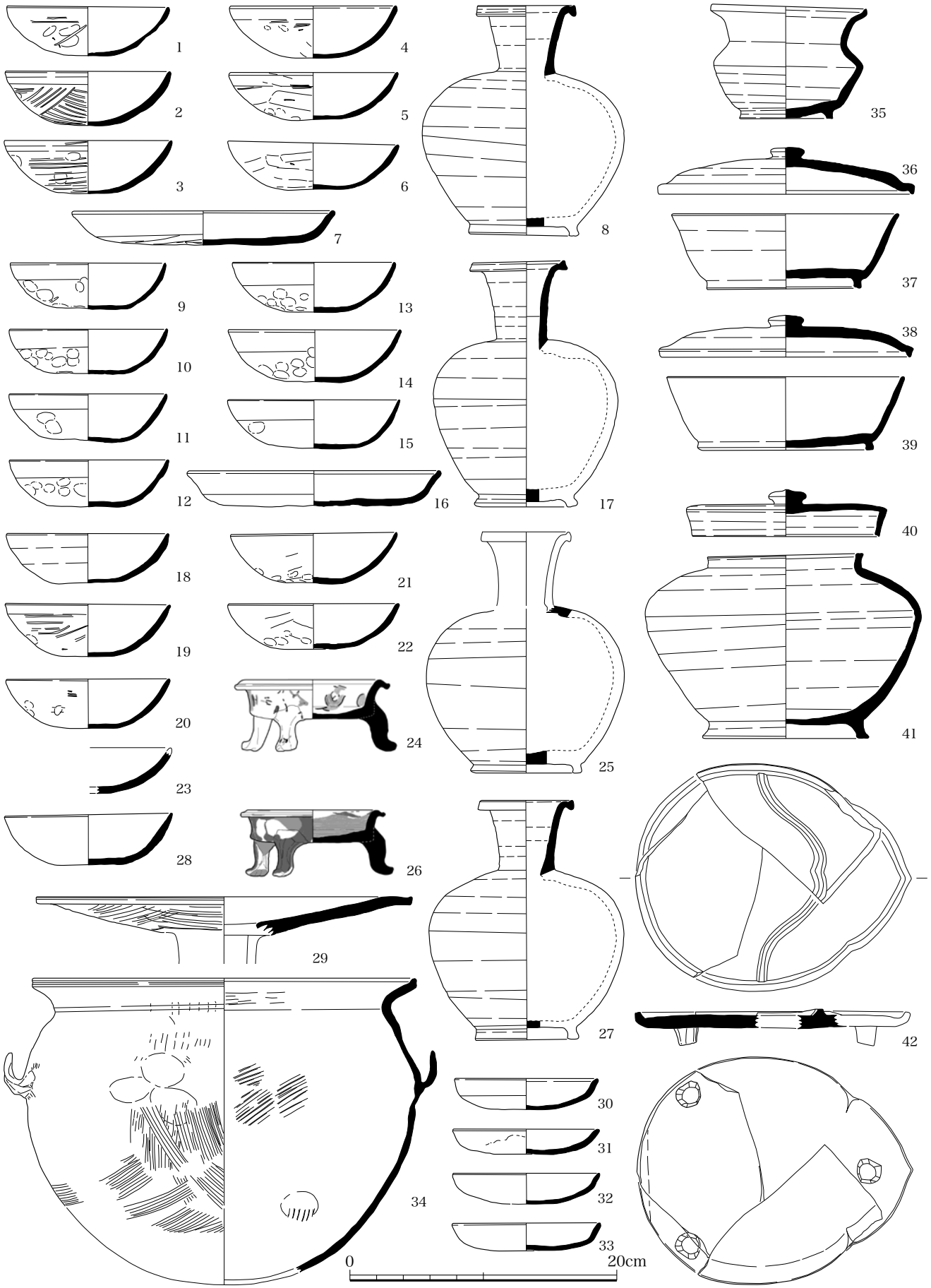
ＳＸ808出土土器（30～34）　土師器皿Ｃ（30～33）は口径10.8～11.1㎝、器高1.9～2.3㎝である。口縁部はヨコナデを施す。土師器甕Ｂ（34）は口径28.8㎝、残存高22.0㎝である。口縁端部は上方に直立する。頸部付近には粗いタテハケが残る。体部外面中央から下半には、タタキ目と粗いハケ目痕跡が残り、内面には当て具痕跡が残る。体部外面には黒斑がみられる。

ＳＸ813出土土器（35）　須恵器壷Ｈ（35）は口径11.6㎝、器高8.4㎝である。体部外面上半から内面はロクロナデ、体部外面下半はロクロケズリ、底部外面は磨滅しており分かりにくいがヘラ切り後ナデと考えられる。

ＳＸ802出土土器（36～39）　ＳＸ802は蓋をした須恵器杯Ｂを上下２段に重ねた埋納遺構で、上段が（36・37）、下段が（38・39）である。須恵器杯Ｂ（37・39）は37が口径17.0㎝、器高5.6㎝、39が口径17.8㎝、器高5.5㎝である。共に底部外面はヘラ切り後ナデ、口縁部外面から内面はロクロナデを施す。須恵器杯Ｂ蓋（36・38）は36が口径19.2㎝、器高3.5㎝、38が口径18.7㎝、器高3.15㎝である。器面が磨滅しており分かりにくいが、頂部内外面ともにロクロナデと考えられる。

ＳＥ504出土土器（40・41）　須恵器壷Ａ（41）は口径11.7㎝、器高13.7㎝、底径12.5㎝である。蓋を被せた状態で焼成しており、肩部以下には自然釉がかかる。体部外面上半はロクロナデ、体部外面下半はロクロケズリを施す。底部外面はヘラ切り後ナデ、底部内面にはヘラ状の工具によるナデ痕跡が残る。壷Ａ蓋（40）は、口径14.0㎝、器高3.5㎝である。

土製品　宝珠硯（42）は十坪東端の南北溝ＳＤ123と十坪中央西寄りのＳＸ816から破片で出土した。復原



出土奈良・平安時代の土器・土製品（1/4）

長径 20.5㎝、復原短径 17.1㎝、器高 2.55 ～ 2.65㎝である。

硯面前部に堤を設けて海と陸を区分する。堤は貼り付け後ナデを施す。硯背外縁はヘラケズリで滑らかな段を設ける。脚数は、剥離痕跡から硯背後部が２脚、硯背前部は位置関係から１脚とし、３脚に復原した。脚は 10 角形に面取りをする。外面には緑灰色の自然釉がかかる。硯面には伏せ焼きによる焼成台とみられる円形の痕跡が残る。陸部には使用痕がある。

（出土土器・土製品の時期）　ＳＢ 249、ＳＸ 814・810・807 から出土した土師器椀Ａは形態、調整手法、径高指数から、８世紀末～９世紀初頭のものと考えられる。土師器椀Ａは、９世紀前半になると口縁部の開きが大きく、器高が低下する傾向がみられるが、報告資料は９世紀前半の口縁部ほどは開かないことから、８世紀末～９世紀初頭の範疇に収まるものと考えられる。

宝珠硯は猿投窯で限定的に生産され、その窯式編年から８世紀末～９世紀初頭に位置づけられている。

瓦塼類　瓦塼類は遺物整理箱で 47 箱分出土した。大半は丸瓦・平瓦であるが、軒丸瓦 17 点、軒平瓦 20 点、面戸瓦２点、塼 17 点を含む。ここでは、軒瓦について記す。

今回報告する調査で出土した軒瓦と、既に報告を行っている十坪の調査（ＨＪ第 459-3 次調査）で出土した瓦類をまとめると、別表のようになる。まず出土量が目立つ軒瓦は、6308 型式Ｒ種と 6671 型式Ｉａ種で、それぞれ５点出土している。ただし、出土場所をみると、6308 型式Ｒ種は十五坪内部と坊間東小路、6671 型式Ｉａ種はすべて十五坪内部からの出土である。十五坪に関しては、6308 型式Ｒ種と 6671 型式Ｉａ・Ｉｂ種が主体的な組み合わせと考えられていた[4]。今回出土したものを合わせて、出土割合を算出してみると、6308 型式Ｒ種が十五坪内出土軒丸瓦の 33％を、6671 Ｉａ・Ｉｂ種は十五坪内出土軒平瓦の 46％を占めることがわかった。さらには、十五坪の西に隣接する十坪からは、6308 型式Ｒ種と 6671 型式Ｉａ種は全く出土しておらず、これらのことは、十五坪の組み合わせであったことを追認するものである。

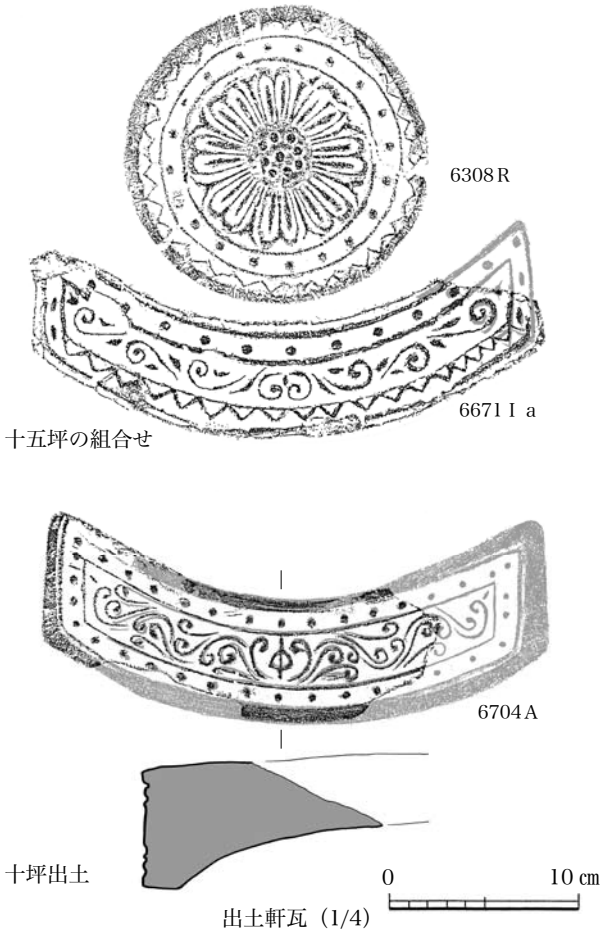
なお 6308 型式Ｒ種については、左京二条五坊北郊[5]や、左京二条二坊十一坪[6] で出土した 6308 型式Ｊ種とともに、平城京に製品が供給された後、瓦工人の移動は伴わず、笵型のみが安芸国にもたらされ、中房圏線彫り加えの後、安芸国分寺の創建瓦として生産されたことが、実物照合による同笵認定作業や笵傷進行・製作技法の比較の結果、明らかになった[7]。

十坪内に関しては、その大半を調査したことになるが、軒丸瓦は９点、軒平瓦は 16 点と少ない。軒平瓦の中では、6704 型式Ａ種が４点とやや目立つ。6704 型式Ａ種は「中」字形の左右に上向きの唐草を配した中心飾りをもつ４回反転均整唐草紋で、幅２cm 程度の平坦面をもつ曲線顎Ⅱである。凸面にタテ縄タタキを施し、のち瓦当面から約 15cm はタテナデを施す。凹面はヨコナデを施し、端部には幅約１cm の面取りをおこなう。6704 型式Ａ種は平城宮での出土が顕著で、東院庭園地区での出土品[8] と、十坪出土品はその製作技法も同じである。

平城京左京五条四坊十坪出土軒瓦内訳表

軒丸瓦	十坪内部				十五坪内部	坊間東小路		条間路
	459-3	579	608-D	608-E	608-A	608-A	608-B	608-E
6012 A a		1						
6301 B			1					
6301 種別不明			1					
6308 R					4	1		
6313 A a					1			
6313 A				1			1	
6320 A a			1					
型式不明	1	1	2		1			1

軒平瓦	十坪内部				十五坪内部		坊間東小路
	459-3	579	608-C	608-D	608-A	608-B	608-A
6663 A		1					
6666 A		1					
6668 A							1
6671 Ｉａ					4	1	
6671 Ｉｂ				1			
6691 A				1			
6704 A			1	3			
6721 E		1					
型式不明	2	1		3			
平安以降		1					



出土軒瓦（1/4）

Ⅴ　調査所見

縄文時代

今回、大森町内で初めて縄文時代の遺構を確認した。大森町の北東に位置する三条本町内でも縄文時代晩期の土坑が確認されている[9]。低湿地型の貯蔵穴は河川に近接する場所で、河川に沿って列状に分布する特徴が指摘されている[10]。今回の調査地北東（ＨＪ第557・568次調査）で検出した縄文時代晩期の河川両岸に沿っても低湿地型の貯蔵穴が所在していた可能性が考えられる。

弥生時代

ＨＪ第579次調査発掘区の南東部で方形周溝墓と考えられるＳＸ19を、ＨＪ第608次調査Ｄ発掘区の西半で土器棺墓ＳＴ42を検出した。また、ＳＸ19南東側の近接した位置には、土坑ＳＫ15～18がある。各々は規模や埋土が似る上、近接する位置関係からも似た性格の遺構である可能性が高く、ＳＫ15～18は土坑墓とも考えられる。調査地の東側で実施したＨＪ第565・575次調査では、弥生時代中期～末頃の弧状溝１条と竪穴建物３棟を検出しており、溝の東側を居住域、西側を墓域とする時期があったと推察できる。

奈良時代の遺構

条坊遺構　想定していた位置で東四坊坊間東小路ＳＦ1010とその両側溝ＳＤ1011・1012を検出した。ＨＪ第541次調査においても九・十六坪間で同小路を検出している。この調査で得られた路面心の国土座標値は、Ｘ＝−146,788.60、Ｙ＝−16,849.50（世界測地系座標値に換算）で、今回検出した道路心と比較すると国土方眼方位北に対してＮ0°10′13″Ｗの振れをもつことがわかった。道路側溝の排水については、ＳＤ1011・1012の溝底の標高からみて、南から北へ排水していることを確認した。また、五条条間路北側溝ＳＤ2008は、基幹排水路として西側へ排水していたものと考えられる。

十坪内の様相　既報告のＨＪ第459次調査での検出遺構を含めて、遺構の重複関係や配置、出土遺物などから大きく５時期（Ａ～Ｅ期）の変遷が認められる。

（Ａ期）　坪周囲の築地の状況は不明であるが、坪端の溝は掘られていない。坪の西半には土坑が掘られ、Ｂ期の掘立柱建物に先行するＳＤ116・117などの溝が掘られる。建物は坪中央の北東に南北棟建物ＳＢ227が建つ程度である。この１棟以外にも建物や土坑や溝が所在した可能性はあるが、特定し難い。

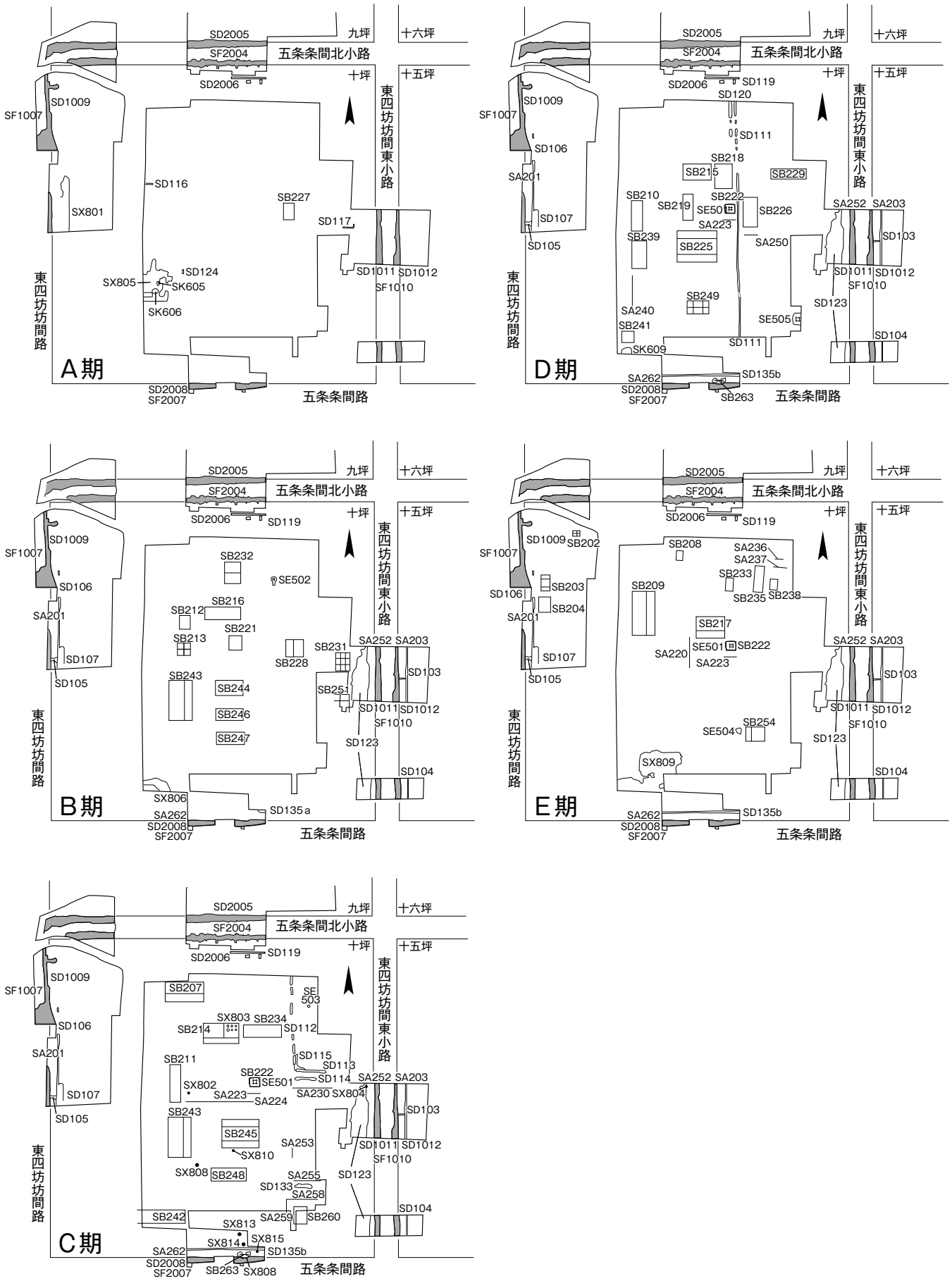
（Ｂ期）　坪の周囲には築地塀が築かれる。坪の東端に南北溝ＳＤ123、南端に東西溝ＳＤ135ａ、西端に南北溝ＳＤ106・107、北端に東西溝ＳＤ119が掘られる。坪の中央南半には、東西棟建物ＳＢ244・246・247の３棟が並立する。中央北半には、それらと東妻柱筋を揃えた東西棟建物ＳＢ221・216・232が南北に並ぶ。ＳＢ244・246・247の西側には東廂付南北棟建物ＳＢ243が建つ。ＳＢ243の北側にはＳＢ243と東側柱を揃える建物ＳＢ213・212が置かれる。東半中央には建物ＳＢ227・228・231・251が建つ。ＳＢ227はほぼ同位置でＳＢ228に建て替えられる。北東部には井戸ＳＥ502が築かれる。坪の東半に比べると、西半には建物が整然と並ぶ傾向がある。坪中央ライン上に建物が南北に並立する配置からみて、一町利用と考えられる。

（Ｃ期）　北半には坪内東端から1/4ライン付近に南北溝ＳＤ112が掘られ、坪内の南北中央ラインのやや北側に東西溝ＳＤ113・114が掘られる。また、坪内の南から1/4ライン付近には東西溝ＳＤ133が掘られる。坪中央の東西棟建物ＳＢ244・246が無くなり、大型の南北廂付東西棟建物ＳＢ245が建つ。南面には門ＳＢ263が開く。ＳＢ245とＳＢ263の建物中軸線がほぼ揃う。ＳＢ245の西側には、Ｂ期に引き続きＳＢ243が、ＳＢ245の南側には東西棟建物ＳＢ247をほぼ同位置で建て替えたＳＢ248が建つ。坪中央の東西塀ＳＡ224によって、坪の南北が画される。坪の南半はＳＢ245を中心建物とする主殿域に、ＳＡ224の北側には井戸ＳＥ501とそれに伴う建物ＳＢ222と東西塀ＳＡ223、埋甕遺構ＳＸ803を設けた南廂付東西棟建物ＳＢ214などで占められる雑舎域に相当するものと考えられる。また、溝ＳＤ112・113で画された坪の北東隅には井戸ＳＥ503が築かれる。

当期に、埋納遺構ＳＸ802・804・808・810・813～815が配される。ＳＸ802は坪中央の西寄りに置かれる。ＳＸ808は建物ＳＢ243の南東側に、ＳＸ810は建物ＳＢ245の南側に近接する。ＳＸ802・808・810は建物に関わる地鎮と考えられる。ＳＸ804は坪の東端中央で、東面築地ＳＡ252の西側に置かれ、坪全体あるいは東面築地に関わる地鎮と考えられる。ＳＸ813～815は坪の南端中央に置かれ、ＳＸ813・814は坪南面の門ＳＢ263の北に、ＳＸ815はＳＢ263の北東で南面築地塀ＳＡ262の北に置かれる。ＳＸ813～815は坪全体、あるいはＳＢ263ないしは南面築地塀に関わる地鎮と考えられる。

坪の北東部に掘られる溝ＳＤ112～115の性格は不明であるが、南半中央には大型建物ＳＢ245が建てられることから、当期も一町利用と考えられる。

（Ｄ期）　坪内の東から1/3ライン付近に南北溝ＳＤ111・120が掘られる。ＳＤ111が掘られたことで、Ｃ期に建てられた中心建物ＳＢ245をやや北西側に寄せ、



十坪主要遺構変遷模式図

ＳＢ225に建て替える。ＳＢ225の南側には、ＳＢ225と建物中軸を揃えた門ＳＢ249が建つ。ＳＢ249は構築時に柱掘形内に土器が埋納される。ＳＢ225の北東側にはＣ期に築かれた井戸ＳＥ501が存続する。ＳＥ501の北側から西側には、建物外側の柱筋を各々揃えたＳＢ218・215・219が配される。坪の西半には、Ｃ期の南北棟建物ＳＢ211・243をほぼ同位置で建て替えＳＢ210・239が建つ。東半中央にはＳＢ229・226、ＳＡ250が建ち、南東隅には井戸ＳＥ505を築く。坪中央に中心建物ＳＢ245や門ＳＢ249が南北に並び、坪内を縦断する南北溝ＳＤ111の東西においても建物配置が大きく変わる様子が窺えないことから、当期も一町利用と考える。

（Ｅ期）　Ｂ～Ｄ期にみられた整然とした建物配置や中心建物が無くなり、建物・井戸・土坑が点在する。坪の北半にはＳＢ208・233・235・238が、北西隅にはＳＢ202～204が建つ。Ｂ～Ｄ期と比較すると小規模な建物や国土座標北で東に振れる建物が多くなる。中央部には、Ｃ期に築いた井戸ＳＥ501が存続する。ＳＥ501の北西側には南廂付東西棟建物ＳＢ217が近接して建つ。南半には井戸ＳＥ504や建物ＳＢ254が建つが、ＳＥ504は短期間の間に井戸枠を抜き取り、壷Ａに和同開珎を入れて埋納したと考えられる。

各時期の年代　各期の遺構から出土した土器のうち、年代の手掛かりになるものについて記す。

Ａ期：時期を特定できる出土土器はない。

Ｂ期：ＳＥ502の抜取り痕跡、ＳＢ212・213・231・243・247の柱穴から８世紀後半の土師器・須恵器片が出土。

Ｃ期：ＳＤ112～115、ＳＥ501掘形、ＳＢ214・222の柱穴、ＳＸ810・814から８世紀後半～末頃の土師器・須恵器片が出土した。

Ｄ期：ＳＤ111・120、ＳＢ210・218・219・249の柱穴から８世紀末～９世紀初頭頃の土師器・須恵器が出土。

Ｅ期：ＳＥ504の枠内から８世紀末～９世紀初頭頃の須恵器壷Ａが出土。ＳＥ501の枠内から９世紀前半の土師器・須恵器・黒色土器Ａ類の破片が出土。

以上のように、出土遺物と遺構の重複関係から、Ｂ期は８世紀後半、Ｃ期は８世紀後半～末頃、Ｄ期は８世紀末～９世紀初頭頃、Ｅ期は９世紀初頭～前半頃と考えられる。十坪内の調査においては、８世紀中頃を逆上る土器がほとんどないことから、Ａ期はＢ期と同じく８世紀後半頃と考えておく。

まとめ

十坪の宅地利用は、８世紀後半からはじまり、９世紀前半頃まで続いていることがわかった。短期間のうちに建物が頻繁に建て替えられているが、分割されることなく１町利用され続けていることが十坪の特徴といえる。

Ｃ・Ｄ期には、五条条間路に門が開かれ、宅地内は主殿域と雑舎群域に分けて建物群を配置するようになる。隣接する十五坪も８世紀後半～９世紀初頭頃は１町利用されていたことが判明しており、建物群の配置や墨書土器（「政所」）、蹄脚円面硯の出土点数の多さなどから、一般の宅地というより、公的な施設の可能性が高いと考えている。十坪と十五坪は同じ１町利用ではあるが、建物配置は大きく異なっており、同じ性格の建物群であるとは考えにくい。

さらに、十坪内では井戸ＳＥ504の枠抜き取り痕跡最上層埋土および門ＳＢ249の柱掘形からの出土分を含めて、10基の埋納遺構を検出したことも注目すべきである。平城京内での埋納遺構の検出は約140例[11]を数え、このうち須恵器壷Ｌの埋納は３例[12]、須恵器杯・蓋を上下２段に重ねた埋納は１例[13]のみである。奈良三彩火舎は出土例が少ない上、埋納遺構からの出土は今回が初例である。さらに同じ坪内で奈良三彩火舎を埋納する遺構を２基検出したことも特異といえる。これらの様相は奈良時代後半～末における当坪の特徴と考えられる。

（宮﨑正裕、原田憲二郎、久保清子、池田裕英、山前智敬、池田富貴子、大原　瞳）

1）井上和人「平城京下層中ツ道の検証」『飛鳥文化財論攷－納谷守幸氏追悼論文集－』納谷守幸氏追悼論文集刊行会　2005
2）次年度以降、ＨＪ第608次調査Ｆ発掘区の花粉分析結果と併せて報告予定。
3）1）および「平城京跡（左京二条四坊十坪・東四坊坊間路）の調査 第549・598次」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成19(2007)年度』 2010
4）「平城京跡（左京五条四坊十五坪・東四坊大路）の調査」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成19年度』奈良市教育委員会 2010
5）『公立学校共済組合奈良宿泊所建設予定地発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所編　1970および「平城京左京二条五坊北郊の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』奈良市教育委員会　1984
6）「左京二条二坊十一坪の調査」『奈良国立文化財研究所年報 1997－Ⅲ』奈良国立文化財研究所　1997
7）『平城の甍－平城京出土瓦展－』奈良市教育委員会　2010および清野孝之・原田憲二郎「平城京と同笵の軒瓦の調査－6308Ｊ・Ｒと安芸国分寺軒丸瓦01Ａ・Ｂ」『奈良文化財研究所紀要2011』奈良文化財研究所 2011
8）『平城宮発掘調査報告　ＸＶ』 奈良国立文化財研究所　2003
9）「三条遺跡・平城京跡（左京四条五坊五坪）の調査　第446次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成12年度』 2002および奈良県教育委員会　平成19年度調査（平城京左京五条五坊一坪）
10）水ノ江和同「低湿地型貯蔵穴」『縄文時代の考古学５　なりわい－食料生産の技術－』同成社 2007
11）上村和直「宅地と鎮祭」『古代都市の構造と展開』古代都城制研究集会第３回報告集1998の集成を元に、現在までに確認できた概数である。
12）奈良県立橿原考古学研究所「右京一条北辺二坊三・四坪」『奈良県遺跡調査概報1992年度（第一分冊）』1993に２例、奈良市教育員会「平城京跡（左京五条三坊八坪・東三坊坊間路）の調査　第593次」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成19（2007）年度』2010に１例掲載。
13）奈良市教育委員会　平成21年度調査ＨＪ第623次調査（平城京左京五条四坊十五坪）で１例確認している。

縄文時代晩期の遺構一覧表

遺構番号	掘　形　等			主な出土遺物	備　考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）		
ＳＫ 02	円形	径 1.4	0.42	無し	断面が逆台形。縄文時代晩期の貯蔵穴。
ＳＫ 03	円形	径 1.8	0.44	無し	断面が半円形。縄文時代晩期の貯蔵穴。
ＳＫ 04	円形	径 1.8	0.56	堅果	断面が逆台形。縄文時代晩期の貯蔵穴。
ＳＫ 05	円形	径 1.8	0.7	無し	断面が逆台形。縄文時代晩期の貯蔵穴。
ＳＫ 06	円形	径 1.6	0.54	縄文時代晩期：縄文土器片	断面が逆台形。縄文時代晩期の貯蔵穴。
ＳＫ 07	円形	径 1.8	0.52	縄文時代晩期前半：縄文土器深鉢、堅果	断面が半円形。縄文時代晩期の貯蔵穴。
ＳＫ 08	円形	径 1.6	0.56	縄文時代晩期：縄文土器片、サヌカイト剥片	断面が逆台形。縄文時代晩期の貯蔵穴。
ＳＫ 09	円形	径 1.5	0.36	無し	断面が半円形。縄文時代晩期の貯蔵穴。南半部は弥生時代中期以降の河川により削平される。
ＳＫ 20	楕円形	南北 1.0× 東西 1.2	0.3	無し	断面が逆台形。縄文時代晩期の貯蔵穴。
ＳＫ 21	楕円形	南北 0.7× 東西 0.9	0.5	縄文時代晩期：縄文土器片	断面が半円形。縄文時代晩期の貯蔵穴。
ＳＫ 22	楕円形	南北 0.42× 東西 0.54	0.38	無し	
河川 25	蛇行	幅 1.6 ～ 2.6× 長さ 2.8 以上	0.3	縄文時代晩期：縄文土器片	

弥生時代の遺構一覧表

遺構番号	掘　形　等			主な出土遺物	備　考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）		
ＳＫ 01	不整形	南北 1.5 以上 × 東西 1.5	0.1	弥生時代中期：弥生土器壷か鉢・甕	
ＳＫ 02	不整楕円形	南北 0.7× 東西 0.9	0.3	弥生時代中期：弥生土器甕	
ＳＫ 03	不整円形	径 0.9	0.2	弥生土器壷か甕	重複関係からＳＤ 1012 よりも古い。
ＳＫ 04	不整楕円形	南北 0.9× 東西 0.6	0.3	無し	重複関係からＳＫ 601 よりも古い。
ＳＫ 05	不整楕円形	長さ 3.6× 幅 2.0	0.4	弥生時代中期以降：弥生土器壷・甕	重複関係からＳＤ 1012 よりも古い。
ＳＫ 06	楕円形	南北 1.5× 東西 1.0	0.3	弥生土器片	
ＳＫ 07	不整形	南北 0.5× 東西 0.4 以上	0.2	無し	重複関係からＳＤ 1011 よりも古い。
ＳＫ 08	不整円形か	南北 0.2 以上 × 東西 0.5	0.4	無し	重複関係からＳＤ 1011 よりも古い。
ＳＫ 13	不整形	長さ 4.2× 幅 0.8 ～ 1.5	0.3	弥生時代後期：弥生土器広口壷	重複関係からＳＢ 226 よりも古い。
ＳＫ 14	楕円形	長さ 2.9× 幅 0.9	0.3	無し	重複関係からＳＸ 19 よりも新しい。
ＳＫ 15	楕円形	長さ 2.0× 幅 0.7	0.4	弥生時代中期：弥生土器甕	
ＳＫ 16	楕円形	長さ 1.5 以上 × 幅 0.7	0.5	弥生時代中期：弥生土器広口壷・無頸壷・鉢、サヌカイト石鏃	重複関係からＳＤ 12 よりも新しく、ＳＢ 231 よりも古い。
ＳＫ 17	楕円形	長さ 1.0 以上 × 幅 0.7	0.4	弥生時代中期：弥生土器広口壷・甕、サヌカイト石鏃未製品	重複関係からＳＢ 231 よりも古い。
ＳＫ 18	楕円形	長さ 2.0 以上 × 幅 0.7	0.4	弥生土器片か土師器片	重複関係からＳＢ 231 よりも古い。
ＳＫ 26	不整形	南北 2.2× 東西 3.5	0.05	弥生土器片か土師器片	重複関係からＳＢ 232 よりも古い。
ＳＫ 30	楕円形	南北 1.2× 東西 1.8	0.3	弥生時代中期：弥生土器壷か甕	重複関係からＳＤ 122、ＳＸ 804 よりも古い。
ＳＫ 31	楕円形	南北 1.8× 東西 1.0	0.3	弥生時代前期末～中期：弥生土器壷か甕か鉢	重複関係からＳＫ 32 よりも新しい。
ＳＫ 32	不整形	南北 1.8 以上 × 東西 1.0	0.35	弥生時代中期：弥生土器壷・甕	重複関係からＳＫ 33、ＳＤ 34 よりも新しく、ＳＫ 31 よりも古い。
ＳＫ 33	楕円形	長さ 4.5× 幅 1.5	0.4	弥生土器片	重複関係からＳＫ 32、ＳＤ 121・123 よりも古い。
ＳＫ 35	楕円形	長さ 2.0× 幅 1.4	0.2	弥生土器壷か甕か鉢、サヌカイト楔形石器	重複関係からＳＤ 121・123 よりも古い。
ＳＫ 36	不整形	長さ 1.6× 幅 0.6	0.15	無し	
ＳＫ 37	楕円形	南北 1.0× 東西 1.5	0.12	無し	
ＳＫ 38	楕円形	南北 0.95× 東西 1.4	0.22	無し	重複関係からＳＢ 243 よりも古い。
ＳＫ 39	不整形	長さ 5.0× 幅 1.7	0.1 ～ 0.2	無し	重複関係からＳＢ 243 よりも古い。
ＳＫ 40	不整形	長さ 4.0× 幅 0.9	0.25 ～ 0.4	サヌカイト剥片	重複関係からＳＢ 243 よりも古い。
ＳＫ 41	不整形	南北 0.9× 東西 1.8	0.1	無し	重複関係からＳＢ 243 よりも古い。
ＳＫ 43	不整形	南北 1.0× 東西 0.7	0.1 ～ 0.14	無し	
ＳＫ 44	不整形	南北 2.8× 東西 1.0	0.1	無し	重複関係からＳＢ 247 よりも古い。

遺構番号	掘　形　等			主な出土遺物	備　考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）		
ＳＫ 45	不整形	長さ 1.6× 幅 0.6	0.1	無し	
ＳＫ 46	不整形	長さ 2.0× 幅 0.5	0.1 ～ 0.2	無し	
ＳＫ 47	不整形	長さ 1.3× 幅 0.9 以上	0.17	無し	重複関係からＳＢ 248 よりも古い。
ＳＫ 48	不整形	南北 1.6 以上 × 東西 0.8	0.8	無し	重複関係からＳＢ 247・249 よりも古い。
ＳＫ 49	不整形	南北 2.6× 東西 1.2	0.15	無し	
ＳＫ 50	隅丸長方形	南北 0.5× 東西 2.5	0.2	弥生時代中期：弥生土器短頸壷・甕・高杯	
ＳＤ 01	斜行溝か	長さ 1.2× 幅 0.3	0.1	無し	
ＳＤ 02	斜行溝か	長さ 2.1× 幅 0.2 ～ 0.3	0.05	無し	重複関係からＳＤ 1012 よりも古い。
ＳＤ 03	斜行溝か	長さ 1.2× 幅 0.2 ～ 0.3	0.05	弥生土器片か土師器片	重複関係からＳＫ 601 よりも古い。
ＳＤ 06	斜行溝	長さ 2.2× 幅 0.5	0.2	弥生土器壷か甕か鉢	重複関係からＳＤ 1011 よりも古い。
ＳＤ 11	斜行溝	長さ 12× 幅 0.4 ～ 0.7	0.2	弥生時代後期～末：弥生土器壷か甕	
ＳＤ 12	斜行溝	長さ 8.7× 幅 0.2 ～ 0.4	0.2	弥生土器片か土師器片、サヌカイト石鏃	重複関係からＳＸ 19 よりも新しく、ＳＫ 16、ＳＢ 231 よりも古い。
ＳＤ 34	斜行溝	長さ 2.7× 幅 0.5 ～ 0.7	0.1	弥生時代中期以降：弥生土器壷か甕	重複関係からＳＫ 32、ＳＤ 1011 よりも古い。
ＳＴ 42	楕円形	南北 0.6× 東西 0.75	0.2	弥生時代中期：弥生土器壷・高杯	口縁を東に向けた壷を横位に置き、壷の口縁部に高杯で蓋をする。弥生時代中期の土器棺墓と考える。
ＳＸ 19	「コ」字状	北東－南西長 14.0× 幅 1.0 ～ 2.0	0.2 ～ 0.6	弥生時代中期以降：弥生土器壷・甕・鉢、サヌカイト石核	溝の南北端は北西に曲がる。重複関係からＳＫ 14、ＳＤ 12・113、ＳＢ 227・228、ＳＡ 230 より古い。方形周溝墓の周溝の可能性がある。
Ｐ 10	円形	径 0.4	0.4	無し	半打ち込み式の柱穴。柱が遺存する。
Ｐ 23	不整形	南北 0.7× 東西 0.6 以上	0.2	無し	断面形状から柱抜取痕跡と考える。
Ｐ 24	不整形	南北 0.5× 東西 0.6	0.1	無し	断面形状から柱抜取痕跡と考える。

遺構番号	方向	規模	全長（m）	柱間寸法（m）	備　考
ＳＡ 01	北西－南東	2	2.2	南から 0.9–1.3	柱穴の深さは約 0.3 m。弥生時代の柱列。柱穴から弥生土器片が出土した。
ＳＡ 51	南北	1 以上	1.2	1.2 等間	柱穴の深さは 0.14 ～ 0.2 m。弥生時代中期の弥生土器高杯が出土。

古墳時代の遺構一覧表

遺構番号	掘　形　等			主な出土遺物	備　考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）		
ＳＫ 27	不整形	南北 6.0× 東西 4.0	0.1 ～ 0.3	弥生時代中期以降：弥生土器甕、サヌカイト剥片	重複関係からＳＫ 28 より新しい。
ＳＫ 28	楕円形	南北 0.5× 東西 2.0 以上	0.05 ～ 0.4	弥生土器片、古墳時代前期後半：土師器高杯・壷	重複関係からＳＫ 27、ＳＤ 120 より古い。
ＳＫ 29	楕円形	南北 0.5× 東西 1.2	0.1	弥生土器片、古墳時代前期後半：土師器壷か甕	

奈良時代（条坊）

遺構番号	掘　形　等			主な遺物	備　考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）		
ＳＦ 1010	南北道路	長さ 57.4 以上 × 幅 2.1 ～ 6.1			東四坊坊間東小路。路面心の国土座標値はＸ＝–146,940.00、Ｙ＝–16,849.05。東西側溝心々間距離は約 7.0 m。
ＳＤ 1011	南北溝	長さ 57.4 以上 × 幅 1.5 ～ 4.6	0.2 ～ 0.7	サヌカイト石鏃・楔形石器、８世紀:土師器・須恵器、銅滓、桃核	東四坊坊間東小路の西側溝。溝底の標高はＨＪ第 608 次調査Ａ発掘区で 62.6 m、Ｂ発掘区で 63.1 m。溝心の国土座標値はＸ＝–146,940.00、Ｙ＝–16,852.55。重複関係からＳＫ 07・08、ＳＤ 06・34 よりも新しい。
ＳＤ 1012	南北溝	長さ 57.4 以上 × 幅 1.0 ～ 3.5	0.4	８世紀前半:軒丸瓦（6308 Ｒ・6313 Ａ）、８世紀後半～末：土師器・須恵器、土馬、鉄釘	東四坊坊間東小路の東側溝。溝底の標高はＨＪ第 608 次調査Ａ発掘区で 63.0 m、Ｂ発掘区で 63.2 m。溝心の国土座標値はＸ＝–146,940.00、Ｙ＝–16,845.55。重複関係からＳＫ 03・05、ＳＤ 02 よりも新しい。
ＳＦ 2007	東西道路	長さ 29.0 以上 × 幅 1.4 以上			五条条間路。
ＳＤ 2008	東西溝	長さ 29.0 以上 × 幅 2.4	0.35	８世紀：土師器・須恵器、土馬、須恵器壷の内面に漆付着・白色物質付着、漆膜片	五条条間路北側溝。溝底の標高はＨＪ第 608 次調査Ｅ発掘区の東端で 62.9 m、西端で 62.55 m。溝心の国土座標値はＸ＝–146,993.35、Ｙ＝–16,904.00。

遺構番号	方向	規模（間）	全長（m）	柱間寸法（m）	備　　考
ＳＸ 808	東西	1	1.8	1.8	橋。五条条間路北側溝ＳＤ 2008 の北岸で、深さ 0.35 ～ 0.4 mの柱穴を検出した。

奈良時代（十坪内）

遺構番号	棟方向	規模（間）	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		備　　考
		桁行 × 梁行	(m)	(m)	桁行	梁行	
ＳＢ 207	東西	5×2	13.5	4.8	2.7 等間	2.4 等間	南廂（廂の出約 3.3 m）。柱穴の深さは身舎・廂ともに 0.3 ～ 0.5 m。重複関係からＳＢ 208 よりも古い。柱抜取穴から８世紀末頃の須恵器壷Ｌが出土。
ＳＢ 208	南北	1 以上 ×2	2.7 以上	3.6	2.7	1.8 等間	柱穴の深さは約 0.1 m。重複関係からＳＢ 207 よりも新しい。
ＳＢ 209	南北	6×1	16.2	5.4	2.7 等間	5.4	東廂 (廂の出約 3.0 m)。柱穴の深さは身舎 0.3 ～ 0.6 m、廂約 0.2 m。廂の柱はすべて身舎側へ抜き取る。重複関係からＳＢ 210 よりも新しい。８世紀末～９世紀初頭の土師器皿Ａ・須恵器杯Ｂ片が出土。
ＳＢ 210	南北	5×2	12	4.2	2.4 等間	2.1 等間	柱穴の深さは 0.3 ～ 0.5 m（妻柱約 0.2 m）。柱掘形から墨書土器（須恵器杯か皿の底部外面に「□」）が出土。重複関係からＳＢ 211 よりも新しく、ＳＢ 209 よりも古い。柱抜取穴から８世紀末～９世紀初頭の須恵器杯蓋片が出土。
ＳＢ 211	南北	5×2	13.5	4.8	2.7 等間	2.4 等間	柱穴の深さは 0.4 ～ 0.6 m（妻柱約 0.2 m）。重複関係からＳＢ 212 よりも新しく、ＳＢ 210 よりも古い。８世紀末頃の土師器杯Ａ、須恵器杯Ｂ・杯蓋片が出土。
ＳＢ 212	南北	3×2	5.4	3.6	1.8 等間	1.8 等間	柱穴の深さは 0.4 ～ 1.0 m（妻柱約 0.6 m）。重複関係からＳＢ 211 よりも古い。柱抜取穴から８世紀末頃の土師器杯Ｃ片が出土。
ＳＢ 213		2×2	東西 4.8	南北 4.8	南北・東西ともに 2.4 等間		総柱建物。柱穴の深さは 0.3 ～ 0.5 m。
ＳＢ 214	東西	5×2	13.5	5.4	2.7 等間	2.7 等間	南廂（廂の出約 3.3 m）。柱穴の深さは 0.4 ～ 0.7 m（妻柱約 0.4 m、廂 0.2 ～ 0.3 m）。身舎を東から２間目で間仕切る。間仕切った東側に埋甕遺構ＳＸ 803 がある。重複関係からＳＢ 215 よりも古い。柱掘形から８世紀後半～末の土師器杯・皿片、須恵器杯Ｂ片が出土。
ＳＢ 215	東西	5×2	10.5	4	2.1 等間	2.0 等間	南廂（廂の出約 2.0 m）。柱穴の深さは 0.5 ～ 0.6 m（妻柱約 0.3 m）。重複関係からＳＢ 214 よりも新しく、ＳＢ 217 よりも古い。
ＳＢ 216	東西	5×2	13.5	4.8	2.7 等間	2.4 等間	柱穴の深さは 0.1 ～ 0.3 m。
ＳＢ 217	東西	4×2	10.8	4.8	2.7 等間	2.4 等間	南廂 (廂の出約 2.7 m)。柱穴の深さは 0.6 ～ 0.9 m（妻柱約 0.3 m、廂 0.4 ～ 0.5 m）。重複関係からＳＢ 215・218・219 よりも新しい。柱抜取穴から８世紀末～９世紀初頭の土師器皿Ａ片が出土。
ＳＢ 218	南北	3×2	6.3	4.8	2.1 等間	2.4 等間	南廂 (廂の出約 2.7 m)。柱穴の深さは 0.4 ～ 0.7 m（妻柱約 0.2 m、廂約 0.3 m）。重複関係からＳＢ 217 より古い。８世紀後半～９世紀初頭の土師器皿片が出土。
ＳＢ 219	南北	5×2	10.5	3.6	2.1 等間	1.8 等間	柱穴の深さは 0.4 ～ 0.7 m。重複関係からＳＢ 217 よりも古い。柱掘形から８世紀末～９世紀初頭の須恵器杯Ｂ片出土。
ＳＡ 220	南北	5	12		2.4 等間		柱穴の深さは 0.4 ～ 0.5 m。柱掘形から８世紀末～９世紀初頭の土師器杯Ｂ片、須恵器杯蓋・壷Ｇ片が出土。
ＳＢ 221	東西	3×2	5.4	4.2	1.8 等間	2.1 等間	柱穴の深さは 0.2 ～ 0.4 m。
ＳＢ 222		1×1	3.6	2.7			柱穴の深さは 0.4 ～ 0.5 m。井戸ＳＥ 501 の井戸屋形。８世紀末頃の土師器皿片が出土。
ＳＡ 223	東西	2	5.4		2.7 等間		柱穴の深さは約 0.3 m。井戸ＳＥ 501 の南側目隠し塀。
ＳＡ 224	東西	12	25.2		2.1 等間		柱穴の深さは約 0.4 m。
ＳＢ 225	東西	5×2	15.0	6.0	3.0 等間	3.0 等間	南北両廂 (廂の出約 3.0 m)。柱穴の深さは 0.2 ～ 0.5 m。東妻柱を持たない。重複関係からＳＢ 245 よりも新しい。８世紀末～９世紀初頭の土師器皿Ａ片が出土。
ＳＢ 226	南北	4×3	10.8	5.4	2.7 等間	1.8 等間	柱穴の深さは 0.3 ～ 0.6 m（妻柱約 0.3 m）。重複関係からＳＫ 13、ＳＢ 227 よりも新しい。８世紀後半以降の土師器椀片が出土。
ＳＢ 227	南北	3×2	6.3	3.6	2.1 等間	1.8 等間	柱穴の深さは 0.2 ～ 0.3 m。重複関係からＳＸ 19 よりも新しく、ＳＢ 226・228、ＳＡ 230 よりも古い。
ＳＢ 228	南北	3×2	6.3	3.6	2.1 等間	1.8 等間	南廂（廂の出約 3.0 m）。柱穴の深さは身舎・廂ともに 0.3 ～ 0.5 m。重複関係からＳＸ 19、ＳＢ 227 よりも新しく、ＳＡ 230 よりも古い。
ＳＢ 229	東西	7×2	12.6	3.6	1.8 等間	1.8 等間	柱穴の深さは 0.2 ～ 0.5 m。
ＳＡ 230	東西	6	15.0		東から 2.4–2.4–2.4–3.0–2.4–2.4		柱穴の深さは 0.4 ～ 0.5 m。重複関係からＳＸ 19、ＳＢ 227・228・231 よりも新しい。
ＳＢ 231	南北	3 以上 ×3 以上	南北 7.2 以上	東西 5.4 以上	南北 2.4 等間	東西 1.8 等間	総柱建物。柱穴の深さは 0.4 ～ 0.5 m。重複関係からＳＫ 16 ～ 18、ＳＤ 12・117 よりも新しく、ＳＡ 230 よりも古い。抜取穴から８世紀後半の土師器皿・椀片が出土。
ＳＢ 232	南北	4×3	8.1	6.0	北から 1.8–2.1–2.1–2.1	西から 2.1–1.8–2.1	柱穴の深さは約 0.2 m。北から２間目で間仕切る。柱抜取穴から奈良三彩片、柱穴内から８世紀後半～末の土師器椀Ａ片が出土。重複関係からＳＫ 26・27 よりも新しい。
ＳＢ 233	南北	3×2	5.1	3.0	北から 1.8–1.5–1.8	1.5 等間	柱穴の深さは 0.1 ～ 0.4 m。

遺構番号	棟方向	規模（間）	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		備　　考
		桁行×梁行	(m)	(m)	桁行	梁行	
ＳＢ234	東西	5×2	13.5	4.8	2.7等間	2.4等間	柱穴の深さは0.1～0.3 m。
ＳＢ235	南北	5×2	9.6	3.6	北から３・４間目が1.65、他は2.1	1.8等間	柱穴の深さは0.1～0.3 m。
ＳＡ236	東西	2	3.3		1.65等間		柱穴から８世紀の土師器杯か皿片出土。
ＳＡ237	東西	3	5.1		西から1.65–1.65–1.8		柱穴の深さは0.1～0.3 m。
ＳＢ238	南北	3×2	4.0	3.0	北から1.25–1.25–1.5	1.5等間	柱穴の深さは0.1～0.3 m。
ＳＢ239	南北	5×2	10.3	5.4	北から2.1–2.0–2.0–2.1–2.1	2.7等間	柱穴の深さは0.2～0.45 m。南妻柱を持たない。西側柱はＳＡ240と柱筋を揃える。重複関係からＳＢ243、ＳＫ604、ＳＸ805よりも新しい。柱抜取穴から８世紀末～９世紀初頭の土師器椀Ａ片が出土。
ＳＡ240	南北	4	9.0		北から2.2–2.3–2.2–2.3		柱穴の深さは0.2～0.25 m。ＳＢ239の西側柱と柱筋を揃える。重複関係からＳＫ605、ＳＸ805よりも新しい。８世紀後半以降の須恵器杯Ｂ片が出土。
ＳＢ241	東西	2×2	4.8	4.8	西から2.7–2.1	2.4等間	柱穴の深さは0.25～0.38 m。東側柱はＳＢ239の西側柱・ＳＡ240と柱筋を揃える。重複関係からＳＢ242よりも新しく、ＳＸ809よりも古い。
ＳＢ242	東西	6以上×2	14.4以上	4.8	2.4等間	2.4等間	柱穴の深さは0.2～0.45 m。重複関係からＳＸ806よりも新しく、ＳＢ241、ＳＫ609、ＳＸ809よりも古い。
ＳＢ243	南北	5×2	15.0	6.0	3.0等間	3.0等間	東廂（廂の出約3.0 m）。柱穴の深さは0.2～0.9 m。北妻柱列はＳＢ244の北側柱と、南妻柱はＳＢ246の南側柱と柱筋を揃える。重複関係からＳＫ38～41、ＳＤ124よりも新しく、ＳＢ239、ＳＸ807よりも古い。８世紀後半～末の土師器皿Ａ片、須恵器杯蓋片が出土。
ＳＢ244	東西	5×2	10.5	5.6	2.1等間	2.8等間	柱穴の深さは0.15～0.5 m。ＳＢ246の北に並立することから同時併存と考える。ＳＢ244・246～248の東西棟建物４棟は建物の中軸が揃う。
ＳＢ245	東西	5×2	13.5	5.4	2.7等間	2.7等間	南北両廂（廂の出約2.7 m）。柱穴の深さは0.2～1.0 m。床束を持ち、束柱には石を据える。柱穴の深さは約0.1 m。重複関係からＳＢ225よりも古い。
ＳＢ246	東西	5×2	10.5	4.6	2.1等間	2.3等間	柱穴の深さは0.2～0.5 m。西妻柱を持たない。ＳＢ244の南に並立することから同時併存と考える。
ＳＢ247	東西	4×1	10.4	4.8	2.6等間	4.8	柱穴の深さは0.15～0.35 m。妻柱を持たない。ＳＢ246の南に並立することから同時併存と考える。重複関係からＳＫ44・48よりも新しく、ＳＢ249よりも古い。８世紀後半～末の土師器杯、須恵器杯蓋、黒色土器Ａ類片が出土。
ＳＢ248	東西	5×2	13.0	4.8	2.6等間	2.4等間	柱穴の深さは0.15～0.45 m。重複関係からＳＫ47よりも新しく、ＳＢ249よりも古い。
ＳＢ249	東西	3×2	8.3	4.8	西から2.4–3.5–2.4	2.4等間	柱穴の深さは0.15～0.5 m。桁中央柱間が広い八脚門と考える。扉口の西側柱の掘形内に８世紀末の土師器椀Ａ６点・皿Ａ１点・須恵器壷Ｌ１点を置く。このうち、椀Ａ４点と皿Ａと壷Ｌは完存する。ＳＢ249建築に伴う地鎮と考えられる。建物の中軸がＳＢ225と揃う。重複関係からＳＫ48、ＳＢ247・248よりも新しい。
ＳＡ250	東西	2	5.3		西から2.7–2.6		柱穴の深さは0.2～0.25 m。両端の柱位置がＳＢ226の側柱筋と揃う。ＳＢ226南妻柱との距離は約3.0 m。ＳＢ226の南側を画する目隠し塀と考える。
ＳＢ251	東西	１以上×１以上	2.1以上	2.1以上	2.1	2.1	北廂（廂の出約2.1 m）。柱穴の深さは約0.3 m。
ＳＡ252	南北	基底幅1.5 m					十坪東面の築地塀。基底幅は築地堰板止めから判断。
ＳＡ253	南北	3	5.4		1.8等間		柱穴の深さは0.32～0.46 m。北端の柱穴はＳＢ245の南廂と柱筋を揃える。十坪内を東からほぼ1/4に分割する位置にある。８世紀後半の土師器椀Ａ片が出土。
ＳＢ254	南北	3×2	5.6	5.0	北から1.9–1.9–1.8	西から3.0–2.0	西廂（廂の出約1.9 m）。柱穴の深さは0.1～0.27 m。妻柱のみ身舎の内側に入る。
ＳＡ255	東西	５以上	10.0以上		西から2.4–2.4–1.5–1.6–2.1		柱穴の深さは0.25～0.6 m。西端の柱位置がＳＤ133の西端と揃う。８世紀後半頃の須恵器杯Ｂ片が出土。
ＳＡ256	南北	１以上	2.0以上		2.0		柱穴の深さは0.25 m。南端でＳＡ257に繋がる。
ＳＡ257	東西	１以上	2.1以上		2.1		柱穴の深さは0.25 m。西端でＳＡ256に繋がる。
ＳＡ258	東西	5	11.8		西から2.7–2.4–2.6–2.0–2.1		柱穴の深さは0.37～0.63 m。西端でＳＡ259に繋がる。ＳＢ260の北側を画する目隠し塀と考える。
ＳＡ259	南北	１以上	2.7以上		2.7		柱穴の深さは約0.4 m。北端でＳＡ258に繋がる。ＳＢ260の西側を画する目隠し塀と考える。
ＳＢ260	南北	3×2	6.5	4.8	北から2.4–2.3–1.8	2.4等間	柱穴の深さは0.18～0.5 m。北妻柱とＳＡ258との距離は約2.7 m、西側柱とＳＡ259との距離は約2.7 m。８世紀末頃と考えられる土師器杯Ａ片が出土。
ＳＡ261	東西	３以上	4.5以上		1.5		柱穴の深さは0.06～0.14 m。
ＳＡ262	東西	基底幅1.5 m					十坪南面の築地塀。基底幅は築地堰板止めから判断。
ＳＢ263	東西	1	3.0		3.0		柱穴の深さは0.3・0.46 m。十坪南面の築地塀ＳＡ262から五条条間路ＳＦ2007に開く門。

遺構番号	掘　形　等			主な出土遺物	備　　考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）		
ＳＤ 111	南北溝	長さ 88.0 以上 × 幅 0.4 ～ 0.8	0.15 ～ 0.4	８世紀後半以降:土師器・須恵器・平瓦、須恵器甕の内面に白色物質付着	断面形状はＵ字形を呈し、途切れながら南北に続く。溝底の標高は北端で 62.4 m、南端で 62.9 m。十坪内を東からほぼ 1/3 に分割する位置に掘られる。重複関係からＳＥ 504 よりも古い。
ＳＤ 112	南北溝	長さ 24.0 以上 × 幅 0.4 ～ 1.0	0.05 ～ 0.4	８世紀後半～末：土師器・須恵器	十坪内を東からほぼ 1/4 に分割する位置に掘られる。重複関係からＳＤ 115 よりも新しく、ＳＢ 229 よりも古い。
ＳＤ 113	東西溝	長さ 12.3 以上 × 幅 1.0	0.2	８世紀後半～末：土師器・須恵器、須恵器杯Ａの底部外面に墨書「□」	重複関係からＳＸ 19、ＳＤ 115 よりも新しい。
ＳＤ 114	東西溝	長さ 8.1× 幅 1.0	0.2	サヌカイト楔形石器、８世紀後半～末：土師器・須恵器	ＳＤ 113 と平行して掘られる。
ＳＤ 115	Ｌ字形溝	南北 6.5× 東西 3.1× 幅 1.3	0.3	８世紀後半～末：土師器・須恵器、須恵器杯蓋の頂部外面に墨書「上」	南北溝部分は、十坪内を東から 1/4 に分割する位置に掘られる。重複関係からＳＤ 112・113 よりも古い。
ＳＤ 116	東西溝	長さ 3.0 以上 × 幅 0.3	0.2	土師器片・須恵器片	
ＳＤ 117	東西溝	長さ 4.0× 幅 0.4	0.2	無し	重複関係からＳＢ 231 よりも古い。
ＳＤ 119	東西溝	長さ 13.0 以上 × 幅 1.0 以上	0.3 以上	８世紀：土師器・須恵器、須恵器杯か皿の底部外面に墨書「所」、土馬、須恵器壷の内面に白色物質付着・須恵器壷か鉢の内面に茶色物質付着、刀装具	溝は国土座標値Ｙ＝ -16,921 辺りで途切れ、以西には続かない。位置的に十坪北端の東西溝と考える。発掘区外に続く。（詳細は次年度報告の予定）
ＳＤ 120	南北溝	長さ 14.0 以上 × 幅 0.5 ～ 2.0	0.1 ～ 0.3	８世紀：土師器・須恵器	ＳＤ 111 と平行する溝。途切れながら南北に続く。重複関係からＳＫ 27・28 よりも新しい。
ＳＤ 121	南北溝	長さ 14.5 以上 × 幅 0.8	0.2	８世紀：土師器・須恵器	重複関係からＳＫ 33・35 よりも新しく、ＳＤ 123 よりも古い。
ＳＤ 122	南北溝	長さ 5.5 以上 × 幅 0.5	0.2	８世紀：土師器甕・杯か皿・須恵器杯・壷、丸瓦・平瓦	重複関係からＳＫ 30 よりも新しく、ＳＤ 123 よりも古い。
ＳＤ 123	南北溝	長さ 57.4 以上 × 幅 2.8 ～ 7.0	0.3	８世紀後半以降：土師器・須恵器、須恵器杯Ａの内面に漆付着、宝珠硯、土馬、鉄釘	十坪東端の南北溝。溝底の標高はＨＪ第 608 次調査Ａ発掘区で 63.05 m、Ｂ発掘区で 63.15 m。重複関係からＳＫ 33・35 よりも新しい。
ＳＤ 124	南北溝	長さ 1.5 以上 × 幅 0.25	0.1	無し	重複関係からＳＢ 243 よりも古い。
ＳＤ 125	南北溝	長さ 3.8 以上 × 幅 0.3	0.1 ～ 0.3	８世紀：須恵器甕	ＳＤ 127 と溝の北端位置を揃える。重複関係からＳＫ 608 よりも新しく、ＳＢ 241 よりも古い。溝は国土座標北で西に振れる。
ＳＤ 126	南北溝	長さ 2.1× 幅 0.3	0.07	８世紀：土師器甕・須恵器壷、平瓦	ＳＤ 126・128 ～ 132 は溝の北端位置を概ね揃え、溝は国土座標北で西に振れる。
ＳＤ 127	南北溝	長さ 4.3× 幅 0.6	0.17	縄文土器片、８世紀：土師器皿・須恵器壷	ＳＤ 125 と溝の北端位置を揃える。溝は国土座標北で西に振れる。重複関係からＳＫ 608 よりも新しい。
ＳＤ 128	南北溝	長さ 2.6× 幅 0.3	0.1	８世紀：土師器杯か皿・甕・須恵器壷・甕	ＳＤ 126・128 ～ 132 は溝の北端位置を概ね揃え、溝は国土座標北で西に振れる。重複関係からＳＤ 129 よりも新しい。
ＳＤ 129	斜行溝	長さ 1.1× 幅 0.3	0.05	無し	重複関係からＳＤ 128・130 よりも古い。
ＳＤ 130	南北溝	長さ 3.6× 幅 0.4	0.1	８世紀：須恵器杯か皿、丸瓦	ＳＤ 126・128 ～ 132 は溝の北端位置を概ね揃え、溝は国土座標北で西に振れる。重複関係からＳＤ 129 よりも新しい。
ＳＤ 131	南北溝	長さ 2.6× 幅 0.5	0.2	８世紀：土師器杯か皿・須恵器甕	ＳＤ 126・128 ～ 132 は溝の北端位置を概ね揃え、溝は国土座標北で若干西に振れる。
ＳＤ 132	南北溝	長さ 2.2× 幅 0.3	0.1	無し	溝は国土座標北で西に振れる。
ＳＤ 133	東西溝	長さ 7.1× 幅 1.5 ～ 2.0	0.1 ～ 0.3	８世紀：土師器・須恵器、丸瓦・平瓦	溝の深さは西半部が 0.1 m、東半部が 0.25 m。埋土の暗褐色粘質土には地山の黄褐色粘質土ブロックが混じることから、一気に埋め戻したと考える。十坪内を南からほぼ 1/4 に分割する位置に掘られる。
ＳＤ 134	南北溝	長さ 1.5 以上 × 幅 1.3 ～ 2.0	0.1	無し	十坪南端の東西溝ＳＤ 135 ｂと五条条間路北側溝ＳＤ 2008 を繋ぐ。
ＳＤ 135 a	東西溝	長さ 3.0 以上 × 幅 1.0 以上	0.6	サヌカイト剥片、８世紀：土師器甕・須恵器杯Ｂ蓋	十坪南端の東西溝（古）。国土座標値Ｙ＝- 16,898 辺りで途切れ、以西には続かない。
ＳＤ 135 b	東西溝	長さ 23.0 以上 × 幅 1.0 ～ 1.4	0.2 ～ 0.4	８世紀：土師器・須恵器、丸瓦、平瓦、鉄鋲	十坪南端の東西溝（新）。
ＳＤ 136	南北溝	長さ 2.3× 幅 0.6 ～ 0.8	0.25	８世紀：土師器高杯	十坪南端の東西溝ＳＤ 135 ａと五条条間路北側溝ＳＤ 2008 を繋ぐ。
ＳＤ 137	東西溝	長さ 3.3 以上 × 幅 0.3 ～ 0.4	0.06	８世紀：丸瓦、製塩土器	重複関係からＳＤ 123 よりも古い。

遺構番号	掘　形　等			主な出土遺物	備　考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）		
ＳＤ138	東西溝	長さ3.6以上×幅0.3～0.5	0.05	８世紀後半：土師器碗Ａ	重複関係からＳＤ123よりも古い。
ＳＫ603	楕円形	東西1.4×南北1.0	0.2	８世紀：土師器・須恵器壷Ｌ	
ＳＫ604	不整形	東西2.8×南北2.5	0.25	８世紀：土師器・須恵器、軒平瓦（6671Ｉｂ）・丸瓦・平瓦	重複関係からＳＢ239よりも古い。
ＳＫ605	楕円形	東西0.9×南北1.5	0.22	不明	重複関係からＳＡ240、ＳＸ805よりも古い。
ＳＫ606	楕円形	東西2.4×南北1.7	0.55	８世紀：土師器・須恵器、丸瓦・平瓦	重複関係からＳＸ805よりも古い。
ＳＫ607	不整形	東西1.1×南北1.0	0.15	８世紀後半：土師器杯・皿Ａ・須恵器杯Ａ・杯Ｂ・皿・甕・杯Ｂ蓋、軒平瓦（6671Ｉｂ）・丸瓦・平瓦	
ＳＫ608	不整形	南北2.2×東西3.0以上	0.1	８世紀：土師器杯か皿・須恵器杯Ａ	重複関係からＳＤ125・127よりも古い。
ＳＫ609	不整形	南北2.3以上×東西3.8	0.4	８世紀：土師器・須恵器、丸瓦・平瓦	重複関係からＳＢ242よりも新しく、ＳＸ809よりも古い。
ＳＸ802	円形	径0.3	0.15	８世紀末：須恵器杯Ｂ・同蓋、銭貨（和同開珎）、鉄滓、小石、土の塊	坪中央のやや西寄りで検出した埋納遺構。蓋をした須恵器杯Ｂを上下２段に重ねて置く。下段の杯には和同開珎４枚と鉄滓が納められていた。銭貨は杯の底から浮いた状態にあり、銭貨は何らかの有機物上に置かれていた可能性がある。密閉した容器を上下２段に重ねて納めた埋納遺構の初例である。
ＳＸ803	隅丸方形または円形	径0.3～1.0	0.1～0.25	８世紀末頃：土師器杯か皿・皿Ａ・甕・須恵器杯Ｂ・杯か皿・杯Ｂ蓋・壷・甕・製塩土器、丸瓦・平瓦	東西３個、南北２個ずつ計６個の穴。ＳＢ214の間仕切った身舎東側に納まる意図的な配置と、個々の深さが0.1～0.25ｍと比較的浅く、断面形状が皿もしくは椀状を呈する。埋甕遺構と考えた。
ＳＸ804	円形	径0.6	0.3	８世紀末：須恵器壷Ｌ・奈良三彩火舎	坪中央東端で検出した埋納遺構。須恵器壷Ｌ１点、奈良三彩火舎１点を正位に置く。重複関係からＳＫ30よりも新しい。
ＳＸ805	不整形	南北16.0×東西10.0以上	0.15	８世紀：土師器・須恵器、丸瓦・平瓦、鉱滓、取瓶か	重複関係からＳＫ605・606よりも新しく、ＳＢ239・243、ＳＡ240よりも古い。
ＳＸ806	不整形	南北0.8×東西5.0	0.15	８世紀：土師器・須恵器、丸瓦・平瓦	重複関係からＳＢ242、ＳＸ809よりも古い。
ＳＸ807	楕円形	南北0.6×東西0.45	0.25	８世紀末：土師器椀Ａ・高杯	坪南半のやや西寄りで検出した埋納遺構。杯部を下に向けた土師器高杯（脚部欠損）１点の下に、土師器椀Ａ１点を正位に置く。土師器椀Ａは８世紀末のものである。重複関係からＳＢ243よりも新しい。
ＳＸ808	円形	径0.35	0.2	８世紀末：土師器皿Ｃ・甕Ｂ	坪南半のやや西寄りで検出した埋納遺構。底部を打ち欠いた土師器甕Ｂ１点の下に土師器皿Ｃ４点を正位に置く。
ＳＸ809	不整形	南北15以上×東西25以上	0.2	８世紀：土師器・須恵器、丸瓦・平瓦、８世紀後半：軒平瓦（6704Ａ）、羽口	重複関係からＳＢ241・242、ＳＫ609、ＳＸ806よりも新しい。
ＳＸ810	円形	径0.35	0.15	８世紀末：土師器椀Ａ・須恵器壷Ｌ・奈良三彩火舎	ＳＢ245の南側で検出した埋納遺構。須恵器壷Ｌ、奈良三彩火舎が１点ずつ正位に、その横に土師器椀Ａ６点を正位に重ねて置く。土師器椀Ａは８世紀末のものである。
ＳＸ811	不整形	南北4.0～4.6×東西7.0	0.2	８世紀：土師器・須恵器、軒丸瓦（6301Ｂ）・丸瓦・平瓦	
ＳＸ812	不整形	南北4.0以上×東西3.4	0.2	８世紀：土師器・須恵器、丸瓦・平瓦	
ＳＸ813	円形	径0.22	0.1	８世紀末：須恵器壷Ｈ	坪中央南端の門ＳＢ263の北側で検出した埋納遺構。須恵器壷Ｈ１点を正位に置く。
ＳＸ814	隅丸長方形	南北0.6×東西0.4	0.2	８世紀末：土師器椀Ａ・皿Ａ・須恵器壷Ｌ	坪中央南端の門ＳＢ263のすぐ北側で検出した埋納遺構。須恵器壷Ｌ１点を置き、その横に土師器皿Ａ１点、皿の周囲に椀Ａ７点を置く。
ＳＸ815	楕円形	南北0.2×東西0.3	0.1	銭貨（神功開寶）	南面築地塀ＳＡ262のすぐ北側で、坪内の東からほぼ1/3ライン上にある埋納遺構。銅銭５枚（うち１枚は神功開寶）を確認した。
ＳＸ816	不整形	南北0.6以上×東西1.6以上	0.15	８世紀末～９世紀初頭：宝珠硯	ＨＪ第579次調査発掘区南西隅で検出。埋土は暗灰褐色砂で土坑あるいは整地土と考えられる。ＳＤ123から同一個体の宝珠硯が出土した。
ＳＸ817	円形	径0.2	0.05	塔婆片	ＨＪ第608次調査Ｄ発掘区東端で検出。坑内には分断された（長さ33.5cm以上、幅7.7cm以上、厚さ5mm程度に復原できる）塔婆が納められていた。釈文は「□曜現□禅定門一周忌□」で、施餓鬼供養に関わるものと考えられる。重複関係から耕作に伴う素掘溝よりも新しい。

遺構番号	掘形等			井戸枠		主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	構造	：内法（m）		
ＳＥ 501	隅丸方形	南北 3.6×東西 4.2	1.7	（上段）横板組：南北 1.5× 東西 1.5 （下段内側）一木刳り抜き：径 0.8 （下段外側）円形縦板組：径 0.9		**（掘形）** ８世紀末～９世紀前半：土師器・須恵器、墨書土器か、土師器杯か皿に線刻「×」、須恵器杯か皿に線刻「×」、ミニチュア竈か、須恵器甕の内面に白色物質付着、軒平瓦（6666Ａ・6721Ｅ）、曲物、角板状木製品 **（枠内）** サヌカイト石核、８世紀末～９世紀前半：土師器・須恵器・墨書土器か、須恵器甕の内面に白色物質付着、円盤型土製品、軒平瓦（6663Ａ）・丸瓦・平瓦、９世紀前半：土師器・須恵器・黒色土器Ａ類、砥石、石製部材、鉄釘か、曲物、樺皮紐	一木刳り抜きの枠材は丸太材を内刳りしたもので、厚さは約６cm である。円形縦板組は厚さ約５cm の縦板 13 枚を底面から約１cm の位置で各々を太枘留めする。縦板の外側に厚さ約３cm の添板 13 枚を配し、縦板と縦板の合わせ目の目地を塞ぐ。この上に横板を据えて、縦板と横板の間には石を充填する。横板組は、厚さ約５cm の横板の四隅を目違い枘組して積み上げた井籠組で、上下は各面２箇所を太枘で固定する。横板は２段分が遺存する。ＳＢ 222 はＳＥ 501 の井戸屋形と考える。
ＳＥ 502	不整形	南北 3.2× 東西 1.0 ～ 2.0	2.1	（抜き取られている）		８世紀後半：土師器・須恵器、須恵器皿Ａの底部外面に墨書「壬」	坑内の断面観察から北側にあった井戸枠をスロープを設けて南側へ抜き取っている。
ＳＥ 503	隅丸方形	南北 1.2× 東西 1.0	1.6	方形縦板組横桟留：0.45		**（掘形）** ８世紀：土師器・須恵器 **（枠内）** ８世紀後半：土師器・須恵器、須恵器壷の内面に漆付着、瓢箪の皮、胡桃、桃核、梅核	曲物の一部は掘形底に崩落していたが、大部分は掘形底から約 0.3 m上の壁面に引っかかっていた。崩落した曲物下には、先端を加工した棒状の枝が遺存していた。
ＳＥ 504	不整形	南北 2.1× 東西 1.8	1.3	（抜き取られている）		８世紀後半以降：土師器・須恵器壷Ａ・壷Ａ蓋、丸瓦・平瓦	井戸枠抜き取り最上層中に蓋をした須恵器壷Ａが正位に置かれる。壷Ａ内には銅銭５枚（そのうち４枚が和同開珎）が納められていた。重複関係からＳＤ 111 よりも新しい。
ＳＥ 505	隅丸方形	南北 4.4× 東西 3.2 以上	3.0 以上	（下段）円形縦板組：0.7 （上段）方形縦板組隅柱横桟留：1.0		**（掘形）** ８世紀後半：土師器・須恵器 **（抜取）** ８世紀後半：土師器・須恵器、丸瓦・平瓦、土馬、土錘	掘形・井戸枠は西半分のみ検出。東半分は発掘区外東に続く。掘形は二段に掘り込まれ、掘形内には 0.4 ～ 0.7 mの自然石を多く含む。井戸枠は二段で、上段が方形縦板組隅柱横桟留め、下段が円形縦板組である。上段の枠材は大半が抜き取られていたが、南西と北西の隅柱、西側２枚・南側１枚・北側２枚の縦板、西・南・北面の横桟が遺存していた。下段の枠材は北・西側の数枚が抜き取られていた。縦板は底から概ね 1.0 m間隔で、計３箇所を太枘で固定する。

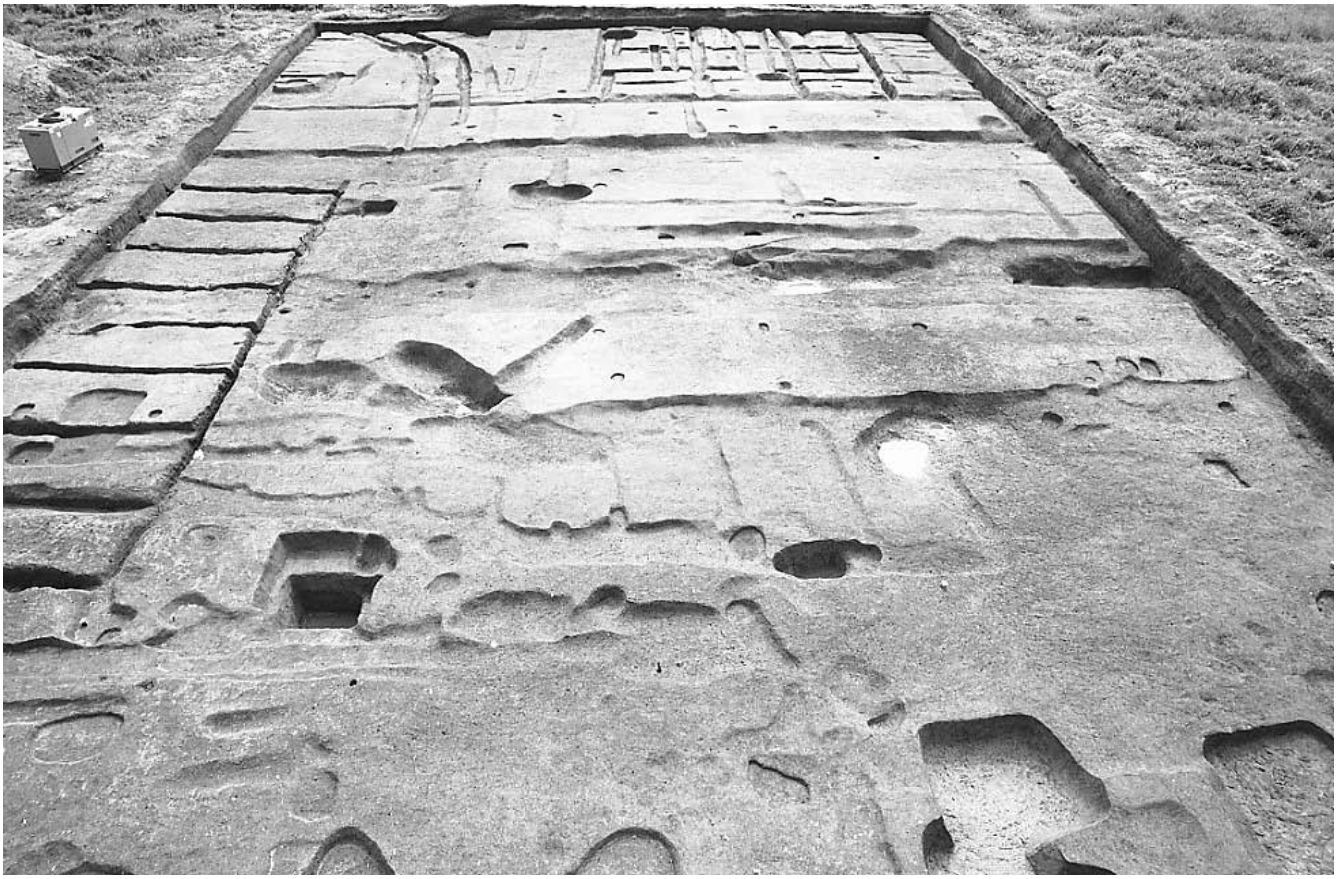
奈良時代（十五坪内）

遺構番号	掘形等			主な出土遺物	備考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）		
ＳＤ 103	東西溝	長さ 2.5× 幅 0.3	0.05 ～ 0.15	８世紀：土師器皿Ｂ	西面築地塀ＳＡ 203 の暗渠。十五坪西端の南北溝ＳＤ 104 と東四坊坊間東小路東側溝ＳＤ 1012 を繋ぐ。
ＳＤ 104	南北溝	長さ 57.4 以上 × 幅 0.3 ～ 1.8	0.1 ～ 0.3	サヌカイト剥片、８世紀前半：軒丸瓦（6308Ｒ・6313Ａａ）・軒平瓦（6671Ｉａ）、８世紀後半：土師器杯か皿・甕、須恵器杯Ｂ・皿Ｃ・甕、８世紀：丸瓦・平瓦、炉壁	十五坪西端の南北溝。溝底の標高はＨＪ第 608 次調査Ａ発掘区で 63.05 m、Ｂ発掘区で 63.35 m。重複関係からＳＫ 601 よりも古い。
ＳＫ 601	不整形	南北 6.8 以上 × 東西 6.0 以上	0.5	弥生時代後期：弥生土器広口壷、８世紀後半：土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器杯か皿・甕・製塩土器、８世紀：軒平瓦（6671Ｉ）・丸瓦・平瓦	重複関係からＳＤ 03・104、ＳＫ 04 よりも新しい。

遺構番号	棟方向	規模（間）	全長（m）	柱間寸法（m）		備考
		桁行 × 梁行		桁行	梁行	
ＳＢ 202	不明	3	6.3	2.1 等間		柱穴の深さ 0.5 ～ 0.6 m。発掘区外東へ続く建物の西側柱列と考える。
ＳＡ 203	南北	基底幅 1.5 m				十五坪西面の築地塀。基底幅は築地堰板止め痕跡から判断。

ＨＪ第 579 次調査　発掘区全景（東から）

ＨＪ第 579 次調査　下層遺構全景（南から）

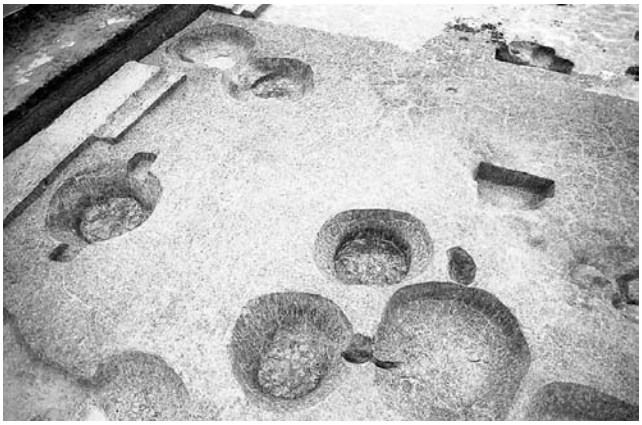


ＨＪ第 608 次調査　Ａ発掘区全景（西から）

ＨＪ第 608 次調査　Ｃ発掘区全景（東から）

ＨＪ第608次調査　Ｄ発掘区全景（北西から）

ＨＪ第608次調査　Ｅ発掘区全景（東から）



ＨＪ第579次調査　土坑ＳＫ05～09（南東から）

ＨＪ第579次調査　柱穴Ｐ10（東から）

ＨＪ第608次調査　Ｃ発掘区　下層遺構全景（西から）

ＨＪ第608次調査　Ｄ発掘区　土器棺墓ＳＴ２（北から）

ＨＪ第579次調査　北西部分（南から）

ＨＪ第608次調査　Ｂ発掘区全景（西から）

ＨＪ第608次調査Ａ発掘区　東四坊坊間東小路ＳＦ1010(北から)

ＨＪ第608次調査Ｂ発掘区　東四坊坊間東小路ＳＦ1010(北から)

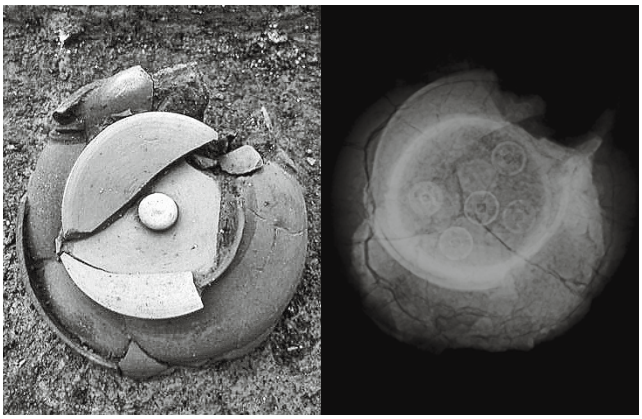
ＨＪ第579次調査　発掘区中央部分（北から）

ＨＪ第579次調査　総柱建物ＳＢ231（西から）

ＨＪ第579次調査　井戸ＳＥ501（北西から）

ＨＪ第608次調査　Ｄ発掘区中央部分（南から）

ＨＪ第608次調査　Ｃ発掘区　埋甕遺構ＳＸ803（北東から）



ＳＥ504須恵器壷Ａ出土状態(左)とＸ線写真(右)（上が北）

ＨＪ第608次調査　Ｄ発掘区　門ＳＢ249柱掘形内土器（北から）

ＨＪ第608次調査　Ｄ発掘区　埋納遺構ＳＸ808（北から）

ＨＪ第579次調査　Ｄ発掘区　埋納遺構ＳＸ802（東から）

ＨＪ第608次調査　Ｄ発掘区　埋納遺構ＳＸ810（北から）

ＨＪ第608次調査　Ａ発掘区　埋納遺構ＳＸ804（東から）

ＨＪ第608次調査　Ｅ発掘区　埋納遺構ＳＸ813（東から）

ＨＪ第608次調査　Ｄ発掘区　埋納遺構ＳＸ807（東から）

ＨＪ第608次調査　Ｅ発掘区　埋納遺構ＳＸ814（北から）

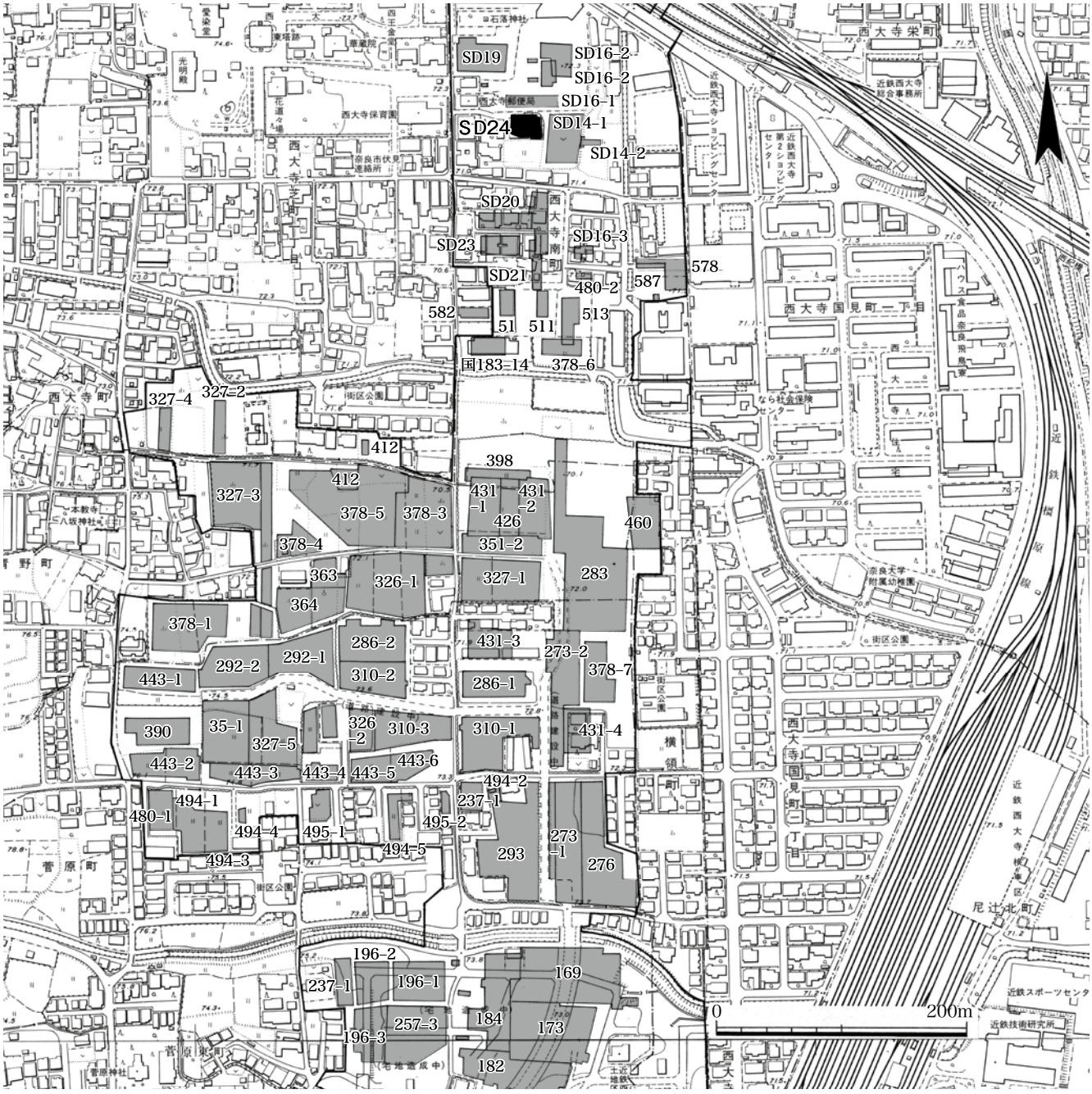
２．近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に係る発掘調査

本調査は、奈良市が進めている近鉄西大寺南土地区画整理事業（総面積約 300,000㎡）について実施した埋蔵文化財発掘調査である。奈良市教育委員会では昭和 63 年から事業地内の発掘調査を実施している。

平成 20 年度は下表の通り 1 箇所で発掘調査を実施した。今回の発掘面積は 400㎡であり、初年度からの総調査面積は 109,674㎡になる。今回の調査は平城京の条坊復元では、西大寺旧境内に該当している。

平成 20 年度　西大寺駅南土地区画整理事業　発掘調査一覧表

調査次数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
ＳＤ第 24 次	臨時交付金事業	西大寺南町 2438-1　他	H20.9.8 ～ 11.11	400㎡	松浦・武田



近鉄西大寺駅南土地区画整理事業地内　発掘調査位置図（1/5,000）

西大寺旧境内の調査　第24次

Ⅰ　はじめに

調査地は、西大寺旧境内の伽藍復原によると、主要伽藍地区東方の寺地部分にあたる。奈良時代後半期に西大寺が創建されるまでは平城京の一般宅地で、平城京条坊復原では右京一条三坊四坪の北東隅部分に該当する。近隣地では数件の調査例があり[1)]、奈良時代の条坊側溝や掘立柱建物等が検出されている。

Ⅱ　基本層序

基本層序は、造成土の下に黒灰色土（旧耕作土）、明茶灰色土（旧床土）と続き、現地表下0.6～0.7ｍで、灰褐色粘質細砂、もしくは黄灰色シルトまたは暗茶褐色砂の地山となる。遺構面は地山上面で、その標高は71.5～71.6ｍである。

Ⅲ　検出遺構

検出した主要な遺構には、奈良時代後半以降の掘立柱列７条、掘立柱建物４棟、溝４条などがある。以下、遺構の概要を記す。各遺構の詳細は次頁の一覧表を参照。

ＳＤ01は、発掘区の北辺で検出した東西方向の溝。周辺の調査成果とも併せて考慮すると、一条条間南小路の南側溝とみられる。溝心の位置は、Ｘ＝−145,006.1 Ｙ＝−19,988.0。ＳＤ02は、発掘区北東部分で検出した南北方向の溝。北端はＳＤ01に合流する。南端は発掘区中央付近で途切れている。途切れる直前で深くなる箇所があり、その南側では急に浅くなり、幅も狭まる。ＳＤ03は、発掘区の南辺中央付近で検出した溝。遺構の様相から見て、東西方向の溝とみられ、発掘区南辺の中央付近で途切れ、西側は発掘区外へと続く。後述のＳＤ04より古い。ＳＤ04は、発掘区中央から南側にかけて検出した南北方向の溝。北端部分は比較的深く、その南側で一度浅くなっている箇所があり、その底で小柱穴を確認した。橋などの施設が存在していた可能性がある。その南側では氾濫の痕跡があり、部分的に幅が倍程度に拡がっているが、発掘区の南端では幅・深さともに北端とほぼ同じ規模となり、発掘区外南へと続く。

ＳＡ05は発掘区北東隅部分で検出したＬ字状に屈曲する柱列。柱穴の重複関係から、後述のＳＡ11より古い。ＳＡ06は、発掘区の南側で検出した柱列で、Ｌ字状に屈曲し、一部は発掘区外南へ続く。ＳＢ15よりも古い。ＳＡ07は、発掘区の中央やや北寄りで検出した掘立柱列。遺構の重複関係から後述のＳＢ14よりも古い。ＳＡ08は、前述のＳＤ02の東側で検出した南北方向の掘立柱列。前述のＳＤ01の南から、概ね1.8ｍ等間の柱間で、発掘区外南へと続く。ＳＡ09は、前述のＳＤ04の東側で検出した掘立柱列。その位置と規模からみて、門の可能性がある。ＳＡ10は発掘区の南西隅で検出した柱列で、Ｌ字状に屈曲し一部は発掘区外南・西へと続く。ＳＡ11は、発掘区北東部分で検出した掘立柱列。Ｌ字状に屈曲し、発掘区外北と東へ続く。なお、上記の掘立柱列のうち、Ｌ字を呈するものは建物の一部か、東西・南北部分が別の柱列となる可能性がある。

ＳＢ12は、発掘区南東隅で検出した南北棟の掘立柱建物。柱間寸法は、梁行・桁行ともに、一尺単位で割り切れない。ＳＢ13は発掘区西辺の北寄りの部分で検出した東西棟の建物の一部と思われる。西側は発掘区外へと続く。ＳＢ14は、発掘区中央で検出した総柱の掘立柱建物。東西・南北ともに２間であるが、柱間の全長は南北方向の方が長い。ＳＢ15は、発掘区の南東隅で検出した東西棟の総柱の掘立柱建物である。

Ⅳ　出土遺物

出土遺物は、８世紀後半から９世紀前半にかけての須恵器・土師器および丸・平瓦が主体を占め、製塩土器・線刻土器・竈、軒丸瓦（6304G）・軒平瓦（6663B）・塼、円面硯、土馬、線刻土器「×」・「廿」も出土した。９～10世紀の緑釉陶器、時期不明の輸入陶磁器（華南産）、円盤型土製品などが、遺物整理箱38箱分出土した。

Ⅴ　調査所見

今回検出したＳＡ08は、当坪の東西のほぼ中心付近に位置しており、坪内の区画施設として見なしうる。また、隣接するＳＤ02･04も同様の役割を果たしていた可能性がある。双方の間には約2.5mの間隔があるので、移動空間である坪内道路の存在が想定できる。さらに、ＳＤ04が一時的に浅くなり橋などの存在が想定される箇所の東側には、２間分の掘立柱列ＳＡ09が位置しており、門の遺構であった可能性もあろう。

ＳＤ02･04は、出土した遺物の年代からみて、奈良時代後半～末頃を中心に機能していたと考えられる。位置的にＳＤ04とは併存し得ない総柱建物ＳＢ14は、坪内道路施工以前の時期の遺構とみられる。このほかの遺構の重複関係や配置状況等も勘案すると、発掘区内では少なくとも３時期の遺構変遷が確認できる。

（武田和哉・松浦五輪美）

1）奈良市教育委員会「西大寺旧境内の調査　第14-1・2次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成14年度』2006、同「西大寺旧境内の調査　第16-1・-2・-3次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成15年度』2007　など。

ＳＤ第 24 次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	掘　形			主な出土遺物	備　考
	平面形	平面規模（m）	深さ（m）		
ＳＤ 01	東西溝	長さ 20.0 以上 × 幅 0.6 ～ 1.6	0.1 ～ 0.15	8 世紀後半～ 9 世紀前半：土師器・須恵器、軒平瓦（6663B）・丸瓦・平瓦、土馬	一条条間南小路南側溝か。
ＳＤ 02	南北溝	長さ 10.5× 幅 0.5 ～ 1.0	0.1 ～ 0.4	8 世紀後半～ 9 世紀初頃：土師器・須恵器・製塩土器・竈、丸瓦・平瓦・塼、円盤型土製品	
ＳＤ 03	東西溝	長さ 4 以上 × 幅 0.1 ～ 0.25	0.2 前後	製塩土器	
ＳＤ 04	南北溝	長さ 9 以上 × 幅 1.0 ～ 3.0	0.1 ～ 0.4	8 世紀後半～ 9 世紀前半：土師器・須恵器・製塩土器・竈、軒丸瓦（6304G）・丸瓦・平瓦、円面硯・土馬・円盤型土製品	急激に浅くなる陸橋状の箇所あり。幅員は一定でない。

遺構番号	柱列方向	規模（間）	柱間全長（m）		柱間寸法（m）		備　考
ＳＡ 05	東西・南北	2 以上 ×3	東西 3.0 ～	南北 5.4	1.5 等間	1.8 等間	柱穴深さ 0.3 m前後。8 世紀の土器が出土。
ＳＡ 06	東西・南北	4×1 以上	東西 7.8	南北 1.65 ～	1.8 ～ 2.4	1.7	柱穴深さ 0.1 ～ 0.3 m。
ＳＡ 07	東西	5 以上	10.3 ～		1.8 ～ 2.4		
ＳＡ 08	南北	8 以上	15.0 ～		1.5 ～ 2.1		柱穴深さ 0.2 ～ 0.4 m。
ＳＡ 09	南北	2	3.0		1.5 等間		柱穴深さ 0.05 ～ 0.2 m。
ＳＡ 10	東西・南北	1 以上 ×2 以上	東西 1.5 ～	南北 3.3 ～	1.5	1.65 等間	柱穴深さ 0.15 ～ 0.4 m。
ＳＡ 11	東西・南北	2 以上 ×3	東西 3.9 ～	南北 4.5	1.95 等間	1.5 等間	柱穴深さ 0.2 ～ 0.4 m。8 世紀末～ 9 世紀初の土器が出土。

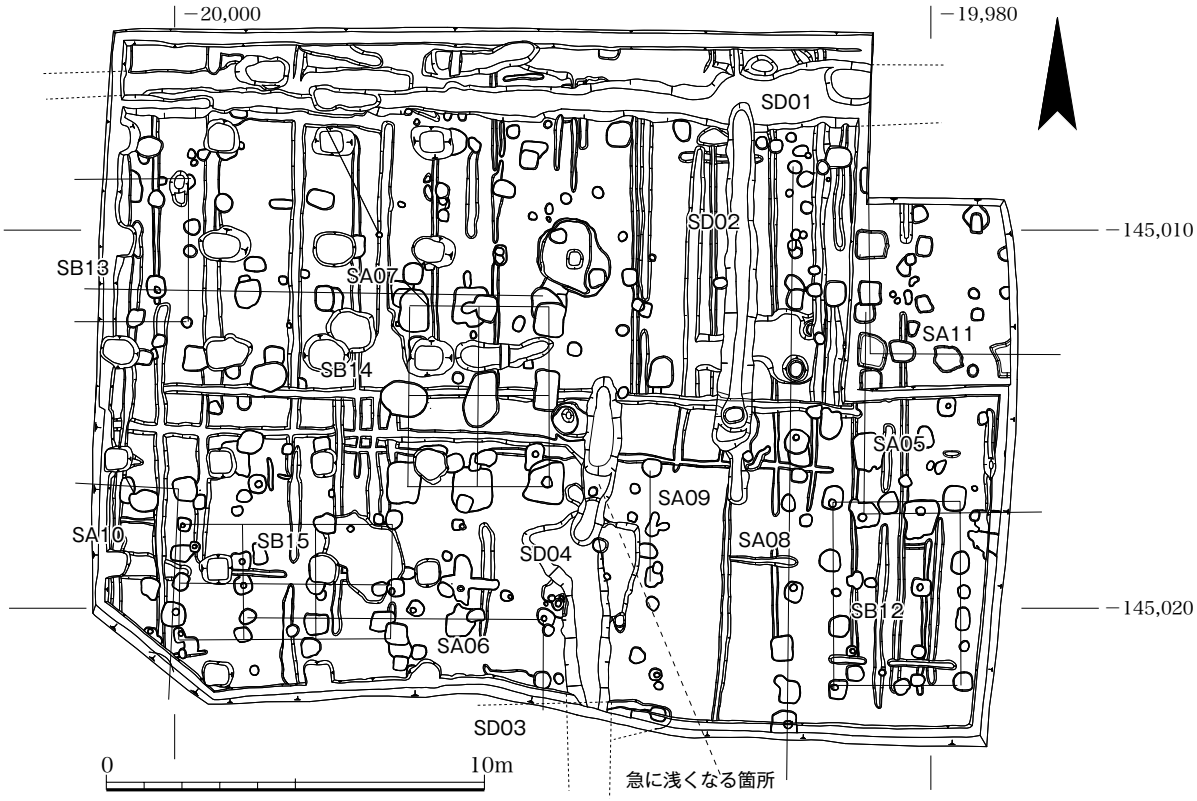
遺構番号	棟方向	規模(桁行 × 梁行)	桁行全長（m）	梁行全長（m）	柱間寸法（m・桁行 × 梁行）		備　考
ＳＢ 12	南北	3×2	4.9 ～ 5.0	3.3	1.65 等間	1.65 等間	柱穴深さ 0.15 ～ 0.4 m前後
ＳＢ 13	東西	1 以上 ×2	1.5 ～	3.9	1.5	1.95 等間	柱穴深さ 0.2 ～ 0.3 m
ＳＢ 14	南北	2×2	4.8	3.6	2.4 等間	1.8 等間	総柱建物。柱穴深さ 0.3 ～ 0.4 m。8 世紀中～後半の土器が出土。
ＳＢ 15	東西	3×2	5.6	3.0	1.65 ～ 1.95	1.5 等間	総柱建物か。柱穴深さ 0.05 ～ 0.2 m。8 世紀末の土器が出土。

発掘区北東部（拡張部分・北から）

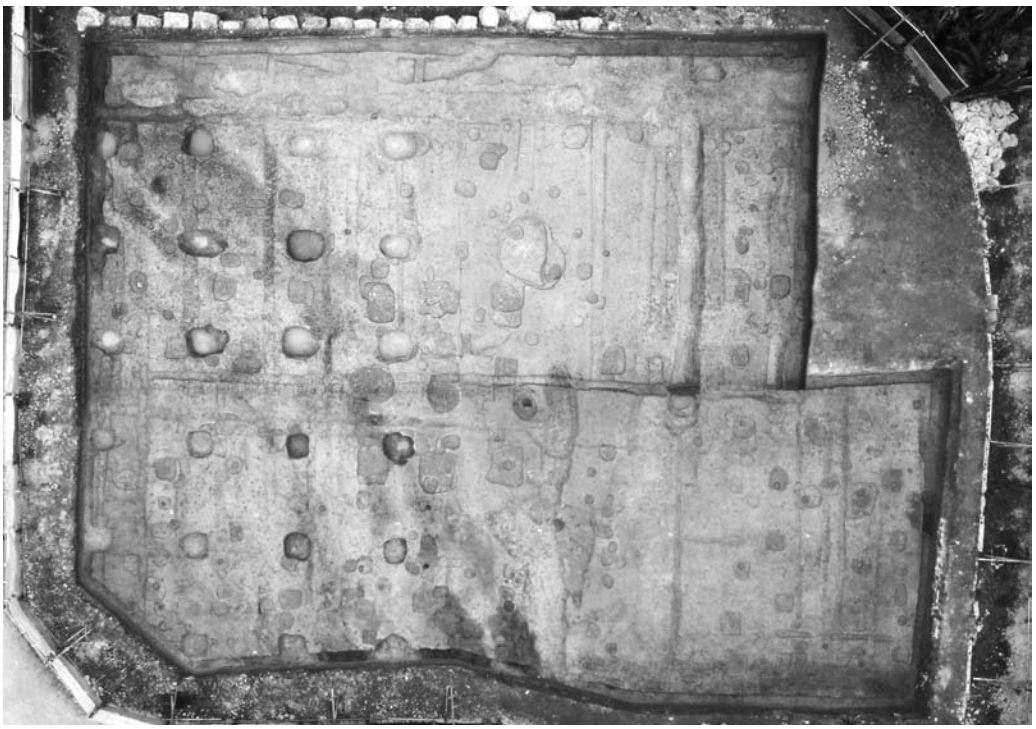
発掘区南半部中央（北から）

ＳＤ 01（東から）

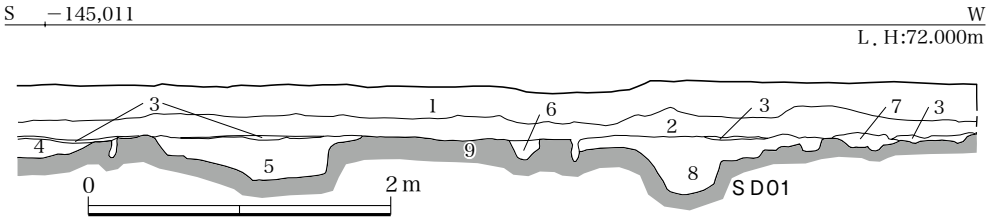
発掘区南東部　ＳＢ 12 ほか（南から）



ＳＤ第 24 次調査発掘区 遺構平面図（1/200）



ＳＤ第 24 次調査発掘区 垂直モザイク写真（北東部拡張部分を除く・上から）



1　造成土
2　黒灰色土（旧耕作土）
3　灰色土（旧床土）
4　灰褐色土（遺物包含層）
5　灰褐色土（土坑埋土）
6　灰褐色土（素掘溝埋土）
7　橙色＋濁黄灰色シルト
8　暗褐色粘質土（ＳＤ 01 埋土）
9　灰褐色粘質細砂または黄灰色シルトまたは暗茶褐色砂（地山）

ＳＤ第 24 次調査発掘区 西壁（北半部分）土層断面図（1/50）

3．平城京跡（左京六条二坊一・二坪）の調査　第602次

事 業 名	店舗新築	調 査 期 間	平成20年4月3日～4月18日
届出者名	豊田通商株式会社	調 査 面 積	160.5㎡
調 査 地	奈良市八条町363番1他	調査担当者	原田憲二郎

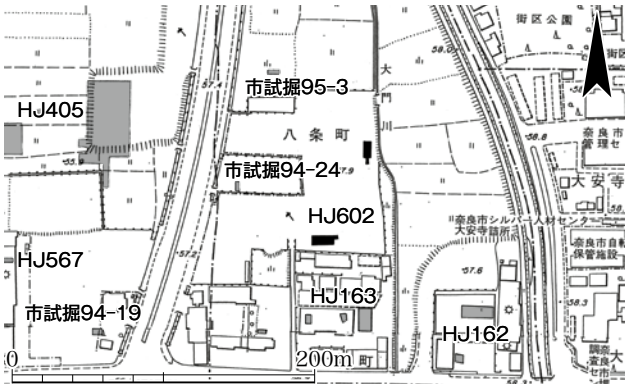
Ⅰ　はじめに

本調査は店舗新築に伴い設けられる防火水槽と消防用水槽の設置箇所に、合計160.5㎡の発掘区を設定して行った。北側の防火水槽設置箇所を北発掘区、南側の消防用水槽設置箇所を南発掘区と呼称する。平城京の条坊復原によると、北発掘区が左京六条二坊一坪の南東隅に、南発掘区が左京六条二坊二坪の中央部に相当する。

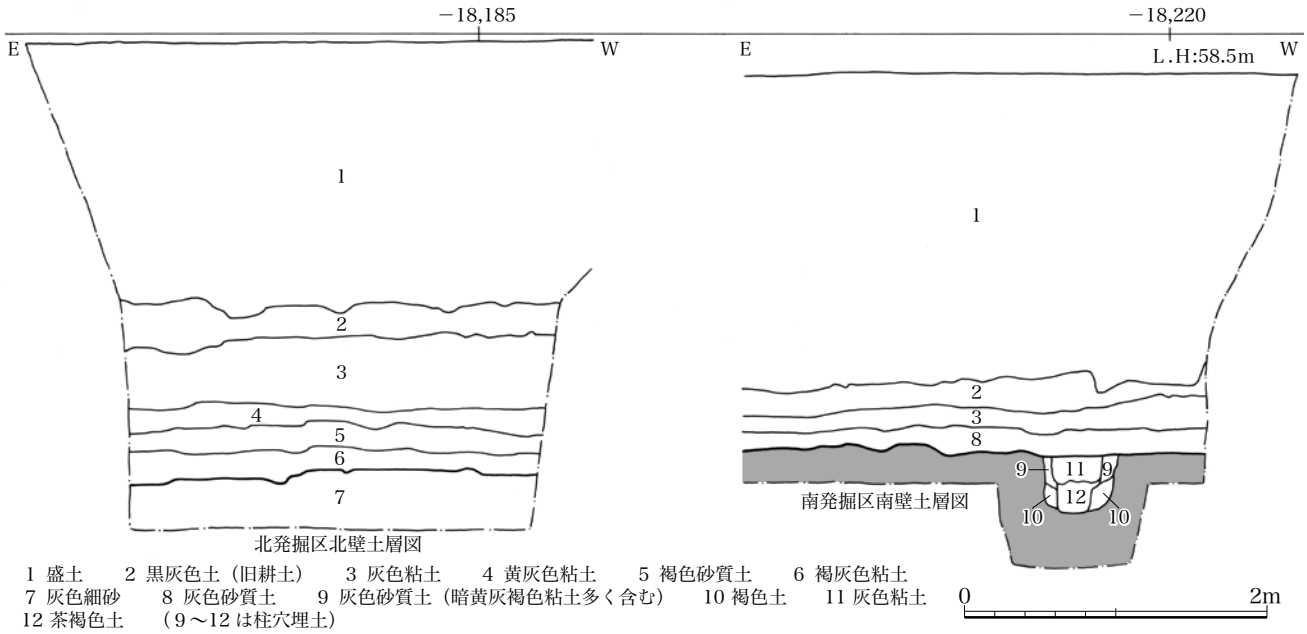
左京六条二坊一坪内では平成７年度に坪中央部で試掘調査が行われており、奈良時代の土坑が１基確認されている（市試掘95-3）。左京六条二坊二坪内では昭和63年度に坪南西部で発掘調査が行われ、奈良時代の掘立柱建物２棟、掘立柱列１条、溝１条の他、古墳時代前期の河川１条が検出されている（市ＨＪ第163次調査）。平成６年度にも坪北西隅で試掘調査が実施され、奈良時代の溝が１条確認されている（市試掘94-24）。本調査は左京六条二坊一・二坪宅地内の利用状況の解明を主たる目的として実施した。

Ⅱ　基本層序

北発掘区内の基本層序は厚さ約1.8ｍの盛土の下に、黒灰色土（旧耕土）、灰色粘土、黄灰色粘土、褐色砂質土、褐灰色粘土と続き、現地表面から約2.9ｍの深さで河川埋土と考えられる灰色細砂層に達する。北発掘区全体がこの河川内であることが判明した。灰色細砂層上面の標高は概ね55.6ｍである。灰色細砂層上面(標高約55.6ｍ)で遺構検出作業を行ったが、遺構は無かった。河川の深さや、時期を特定できる遺物の確認を目的として、灰色細砂層の掘り下げを行った。河川埋土は部分的に灰色粗砂、明灰色粘砂、植物遺体を多く含む暗茶褐色粘砂を挟むことを確認したが、約２ｍ掘り下げたところで湧水が激しくなり、危険であると判断し、それ以上の掘り下げは断念した。よって、河川の深さは確認できず、遺物も出土しなかったため河川の時期も不明である。ただし灰色細砂層の上に堆積する褐灰色粘土層からは、８世紀末頃から９世紀初めにかけての黒色土器Ａ類が出土してお

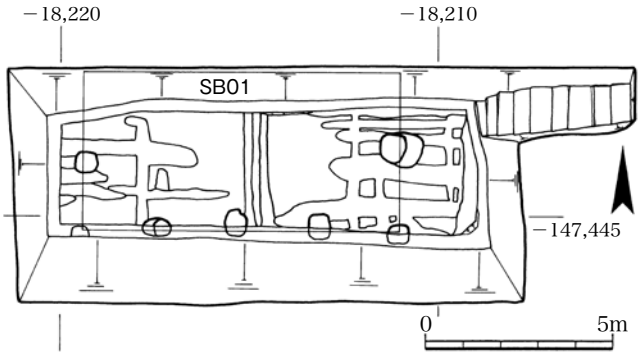


ＨＪ第602次調査　発掘区位置図（1/5,000）



1 盛土　2 黒灰色土（旧耕土）　3 灰色粘土　4 黄灰色粘土　5 褐色砂質土　6 褐灰色粘土
7 灰色細砂　8 灰色砂質土　9 灰色砂質土（暗黄灰褐色粘土多く含む）　10 褐色土　11 灰色粘土
12 茶褐色土　（9～12は柱穴埋土）

ＨＪ第602次調査　発掘区土層図（1/50）



ＨＪ第 602 次調査　南発掘区遺構平面図（1/200）

り、この頃までには埋没していたものと理解できる。

南発掘区内の基本層序は厚さ約 2.1 mの盛土の下、黒灰色土（旧耕土)、灰色粘土、灰色砂質土と続き、現地表下約 2.5 mで、暗茶褐色砂質土の地山となる。奈良時代の遺構は暗茶褐色砂質土の上面で検出した。その標高は概ね 55.7 mである。

Ⅲ　検出遺構

検出した遺構には、南発掘区で確認した奈良時代の掘立柱建物１棟がある。建物 SB01 は桁行４間（8.4 m)、梁行２間（4.2 m）の東西棟掘立柱建物と推定できる。柱間は桁行・梁行ともに 2.1 m等間である。柱穴の深さは南側柱列が深さ約 0.5 m、妻柱が東西共に深さ約 0.3 m で南側柱列に比べて妻柱が浅い。南側柱列の柱抜き取り穴から、８世紀末頃の土器が出土した。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱２箱分の遺物が出土した。出土遺物には奈良時代から平安時代初めにかけての土師器 308 点・須恵器 132 点･黒色土器Ａ類１点･丸瓦２点･平瓦 62 点がある。出土遺物の大半は、南発掘区の地山直上にある灰色砂質土層から出土した。

Ⅴ　調査所見

北発掘区で確認した河川について述べる。周辺の現況では、北発掘区東側５m程のところに、大門川が南北方向に流れ、その東約 100 mには菰川が北西から南東方向に流れている。この現況から北発掘区で検出した河川は、大門川旧流路とみることもできる。

しかし、明治 18 年に帝国陸軍参謀本部陸地測量部が作成した地図を見ると、菰川は南東方向に流れておらず、南方向に流れ、まさに大門川の位置にあったことがわかる。昭和 21 年に米軍により撮影された空撮写真による河川の位置関係は現況と同じであることから、明治 18 年から昭和 21 年までの間に菰川が現在のように東側へ付け替えられたものと理解できる。以上のことから北発掘区で確認できた河川は菰川旧流路の可能性が指摘できる。

奈良時代の菰川については、平城京造営時に条坊道路に沿って付け替えられた人工河川と考え、本調査地の位置する六条では、一坪東にある東二坊坊間路西側溝西側附近に想定する説[1]と、四条以南については条坊道路に沿うような付け替えが行われておらず、現在の菰川の位置とほとんど変わっていないとみる説[2]がある。今回の調査では菰川旧流路とみられる河川を確認したものの、河川から遺物が出土せず、奈良時代の河川か、それ以前のものかは特定できなかった。今後周辺の調査によって、今回確認した河川が機能した時期を明らかにするとともに、奈良時代の河川であったなら、上記の問題も検討していく必要があろう。　（原田　憲二郎）

1）岸俊男「遺存地割・地名による平城京の復原調査」『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974
奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995
奈良市教育委員会『平城京条坊復元図』
2）奈良県立橿原考古学研究所「平城京左京五条二坊五坪（菰川旧流路)」『奈良県遺跡調査概報』第一分冊　2006
近江俊秀「第７章総括第２節東一坊坊間路と三条大路の交差点の形状について」『平城京左京三条一坊五・十二・十三坪発掘調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所 2008

北発掘区全景（南から）

南発掘区全景（西から）

４．平城京跡（左京三条四坊三坪）の調査　第 603 次

事 業 名	共同住宅新築	調 査 期 間	平成 20 年４月７日～４月 30 日
届出者名	個人	調 査 面 積	119㎡
調 査 地	奈良市大宮町三丁目 205-13	調査担当者	大原　瞳

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京三条四坊三坪の東辺部南寄りに相当する。三坪内の調査例には、西側に隣接する国第 138 次、市試掘 2001-2、県 2005 の各調査があり、奈良時代の掘立柱建物・柱列・土坑および中世以降の旧河川が確認されている[1)]。国第 138 次調査では北と南に廂を持つ両面廂付東西棟建物が発掘区外東へ続く形で検出されており、今回はこの続きの検出が予測できた。これらの調査成果を踏まえ、三坪内の土地利用の様相把握を主目的として当初、88㎡の発掘区を設定した。その後、遺構の平面的な広がりを確認する目的で、発掘区の北側（20㎡）と北西側（11㎡）に拡張区を設け、合計 119㎡の調査を実施した。

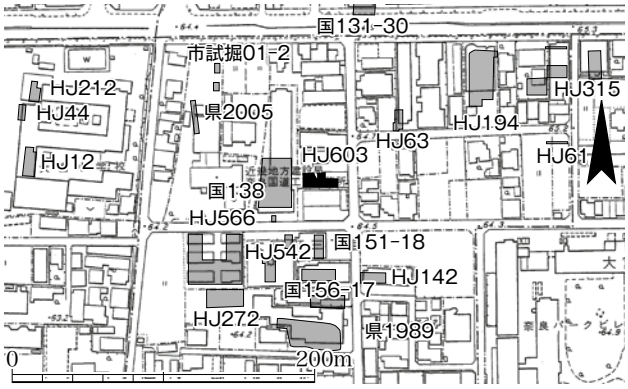
Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本的な層序は、上から造成土、耕作土である黒灰色土・灰色土・淡灰色土、黄褐色粘質土、緑灰色粘質土と続いて、現地表面下 1.1 ～ 1.3 mで黄灰色粘質土の地山となる。地山面は西から東へ緩やかに下がっており、その標高は 63.1 ～ 63.3 mである。遺構検出は地山上面で行った。

Ⅲ　検出遺構

奈良～平安時代の掘立柱建物３棟（ＳＢ 01 ～ 03）、掘立柱列２条（ＳＡ 04 ～ 05）、溝２条（ＳＤ 06・07）、14 ～ 15 世紀の素掘溝がある。各遺構の概要は一覧表にまとめた通りで、以下、主要な遺構について述べる。

ＳＢ 03 は発掘区西端で検出した。検出したのは南北２間の掘立柱列であるが、発掘区外西側に隣接する国第 138 次調査で検出した両面廂付東西棟建物（ＳＢ 03）の



ＨＪ第 603 次調査　発掘区位置図（1/5,000）

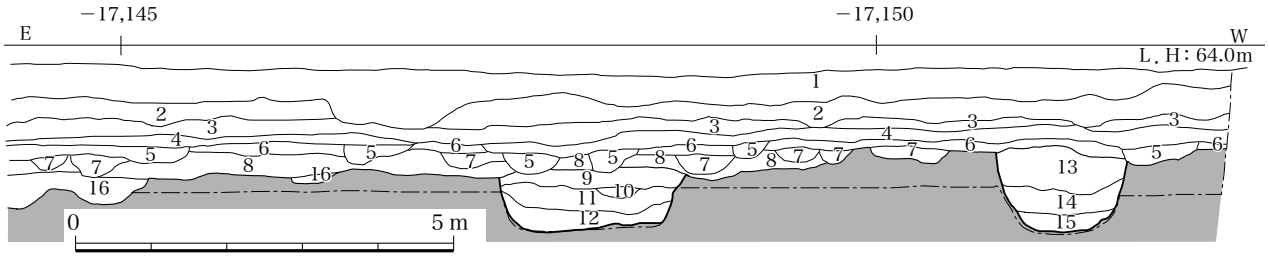
柱筋及び柱間が一致していることから、この東妻柱列にあたるものと考える。ＳＢ 03 の復元できる建物の規模は、桁行７間（21.0 m）、梁行２間（6.0 m）となり、建物の東西中軸ラインは坪内の概ね東西 1/3 にあたる。

ＳＤ 06・07 は発掘区西側で検出した２条の南北溝である。溝底は全体的に北から南へ排水するよう勾配を下げている。両溝間の空閑地が坪内の東西 1/4 ラインにあたることから、ＳＤ 06 を西側溝、ＳＤ 07 を東側溝とする坪内道路の存在が想定できる。両側溝の心々間距離は 3.0 ～ 3.3 mである。出土遺物から、埋没時期はいづれも８世紀末頃である。

遺構の構築順序については、重複関係からＳＢ 01 →ＳＤ 07 と分かり、ＳＤ 06 とＳＢ 03 は近接していることから、同時併存とは考えにくい。したがって少なくとも２時期以上の変遷がうかがえる。

Ⅳ　出土遺物

今回の調査では遺物整理箱２箱分の遺物が出土した。８～９世紀の土師器・須恵器・黒色土器Ａ類・製塩土器・



1 造成土
2 黒灰色土（耕作土）
3 灰色土（耕作土）
4 淡灰色土（耕作土）
5 灰色砂質土（中世素掘溝埋土）
6 黄褐色粘質土
7 灰色砂質土（中世素掘溝埋土）
8 緑灰色粘質土（遺物包含層）
9 緑灰色粘質土（ＳＤ07 埋土）
10 橙色砂質シルト（ＳＤ07 埋土）
11 褐色砂質シルト（ＳＤ07 埋土）
12 灰色シルト（ＳＤ07 埋土）
13 褐色砂質シルト（ＳＤ06 埋土）
14 橙色砂質シルト（ＳＤ06 埋土）
15 灰色シルト（ＳＤ06 埋土）
16 淡灰色粘質土

ＨＪ第 603 次調査　発掘区南壁土層図（1/100）

緑釉軒丸瓦（6151 型式）・丸瓦・平瓦、14 ～ 15 世紀の土師器皿、17 ～ 18 世紀の国産陶器（唐津）、時期不明のサヌカイト剥片がある。遺物の大半はＳＤ 06・07 から出土し、その内容は一覧表にまとめた。

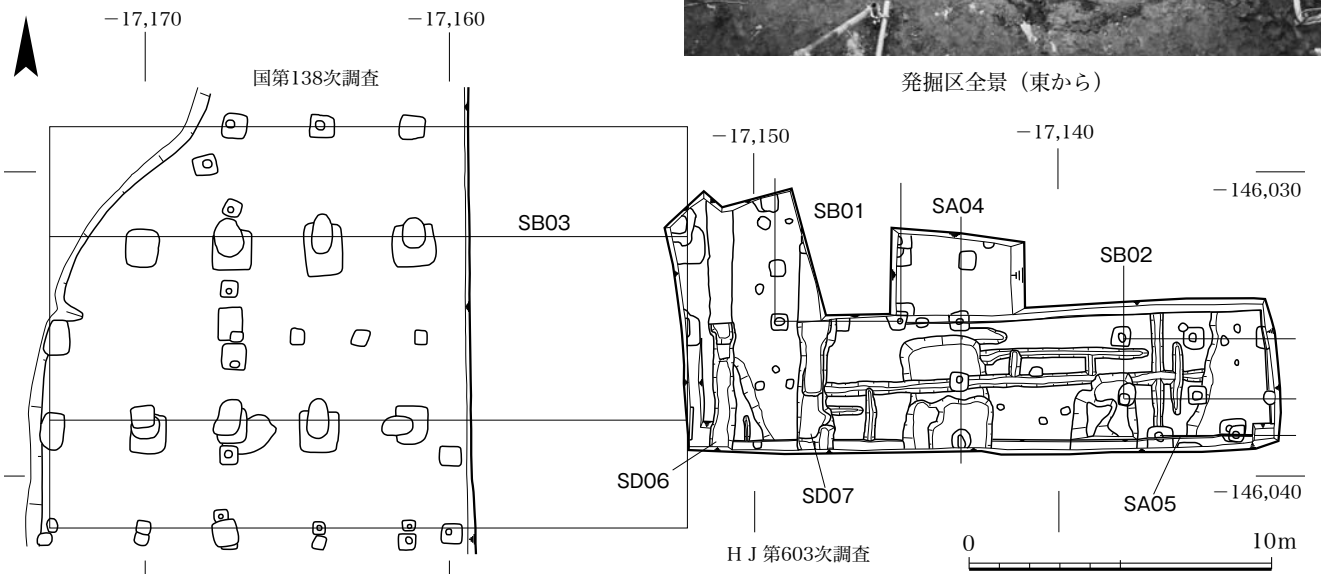
Ⅴ　調査所見

今回の調査では、三坪内を坪内道路によって分割して宅地利用していることが判明し、国第 138 次調査で検出した両面廂付東西棟建物（ＳＢ 03）の規模が確定した。

（大原　瞳）

1）奈良国立文化財研究所「左京三条四坊三坪の調査　第 138 次」『昭和 56 年度平城宮跡発掘調査部概報』1982
奈良県立橿原考古学研究所「平城京左京三条四坪十四坪」『奈良県遺跡調査概報 2005 年』(第 1 分冊) 2006 (※正しくは三坪)
奈良市教育委員会「４. 試掘調査・確認調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 13 年度』2004

発掘区全景（東から）



ＨＪ第 603 次・国第 138 次調査　遺構平面図（1/250）

ＨＪ第 603 次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）			備　　考
		桁行 × 梁行	(m)	(m)	桁行	梁行	廂の出	
ＳＢ 01	南北	２以上 ×2	4.4 以上	4.0	南から2.1 −2.3	2.0等間	−	柱穴の深さ 0.15 ～ 0.4 m。発掘区外北へ続く南北棟建物。重複関係からＳＤ 07 より古い。
ＳＢ 02	東西	２以上 ×1 以上	4.8 以上	不明	2.4等間	不明	2.0	柱穴の深さ 0.15 ～ 0.5 m。発掘区外北東へ続く南廂付東西棟建物の可能性。
ＳＢ 03	東西	7×2	21.0	6.0	3.0等間	3.0等間	3.0	柱穴の深さ 0.8 ～ 1.0 m。検出したのは南北２間の掘立柱列。発掘区外西へ続く両面廂付東西棟建物（国 138 次調査ＳＢ 03）の東妻柱列にあたる。掲載した建物の規模は復原長である。
ＳＡ 04	南北	３以上	5.8 以上		1.95等間		−	柱穴の深さ 0.15 ～ 0.3 m。発掘区外北・南へ続く南北掘立柱列。
ＳＡ 05	不明	１以上	2.35		2.35		−	柱穴深さ 0.25 ～ 0.45 m。柱列としたが、発掘区外南東に続く掘立柱建物になる可能性もあり。

遺構番号	掘　　形			主な出土遺物	備　　考
	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）		
ＳＤ 06	南北溝	長さ 8.3 以上 × 幅 0.65 ～ 0.9	0.5	８世紀末：土師器杯Ａ・皿・椀Ａ・甕、須恵器杯・甕・壷、丸瓦・平瓦	坪内道路西側溝。溝心の国土座標値は、Ｘ＝−146,037.000、Ｙ＝−17,151.005。
ＳＤ 07	南北溝	長さ 7.0 以上 × 幅 0.9 ～ 1.3	0.4	８世紀末：土師器杯Ａ・椀Ａ・皿Ａ・高杯・甕、須恵器杯Ａ・Ｂ・杯蓋・甕・壷、緑釉軒丸瓦（6151 型式）・丸瓦・平瓦	坪内道路東側溝。溝心の国土座標値は、Ｘ＝−146,037.000、Ｙ＝−17,148.010。重複関係からＳＢ 01 より新しい。

5．平城京跡（左京三条五坊四坪）の調査　第604次

事 業 名	ホテル新築	調 査 期 間	平成20年4月7日～5月19日
届出者名	グローバンス・アールイー株式会社	調 査 面 積	470㎡
調 査 地	奈良市大宮町一丁目52-15他	調査担当者	池田裕英

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によると左京三条五坊四坪の南東隅部にあたり、敷地の南端部に三条大路とその北側溝がかかることが想定される場所である。この四坪内ではこれまでに市ＨＪ第54次調査[1)]、第84次調査[2)]、国第141-7次調査[3)]が行われており、三条条間南小路や奈良時代の掘立柱建物、柱列が検出されている。それらの調査の結果をみると、この四坪は概して遺構密度は低い。本調査は発掘区南端部に想定される三条大路とその北側溝の検出、坪内の様相の把握を目的として実施した。調査は敷地の関係から北発掘区と南発掘区の２回に分けて行うこととなった。

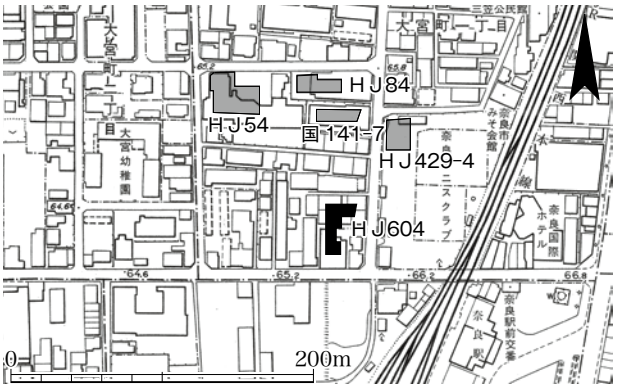
Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、北半では造成土の下に旧耕作土（土層図２～4）、茶褐色土（6）と続き、現地表下約1.1mで茶橙色粘土（14）もしくは茶黄色礫土の地山にいたる。発掘区北端では、茶褐色土の下に灰茶色粘質土（10）、暗黄灰色砂質土（12）が堆積している。南半は造成土が厚く盛られており、現地表下約1.3ｍで地山上面にいたる。遺構はすべて地山上面で検出したが、南半は以前に建てられていた建物の基礎等で遺構面が壊されている部分が多い。地山上面の標高は64.2～64.3mである。この地山上面の標高は周辺の調査例と比べて大差はない。

Ⅲ　検出遺構

検出した遺構には奈良時代以前の溝・土坑、奈良時代の土坑、鎌倉時代の粘土採掘坑、時期不明の掘立柱建物がある。

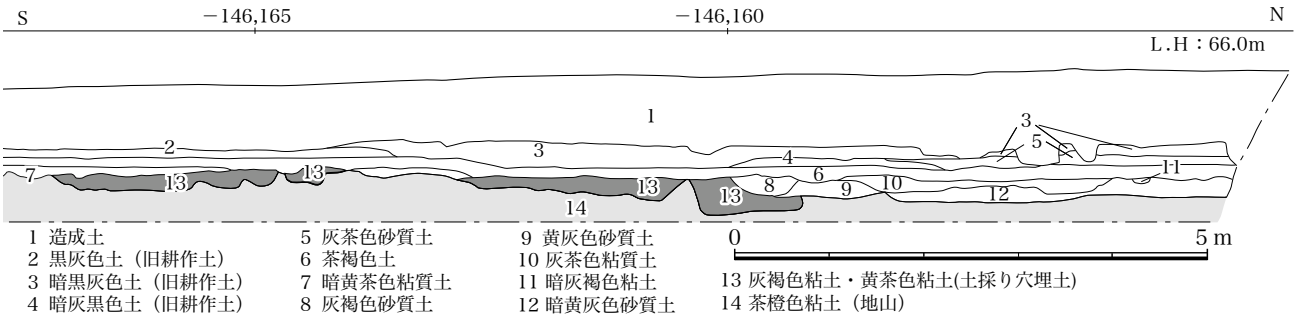
奈良時代以前の遺構　溝と土坑を検出した。ＳＤ01は幅0.2～0.3m、深さ0.2mの北東−西南方向の溝で、長さ1.2m分を検出した。溝底はほぼ平坦で、流れの方向は不明である。出土遺物がなく詳しい時期は不明であるが、重複関係から後述する奈良時代の土坑ＳＫ03よりも古く、奈良時代以前の遺構である可能性が考えられる。ＳＫ02は粘土採掘坑を完掘した後に検出した土坑である。遺物が出土しなかったので時期は不明であるが、埋土が暗灰紫色土で、周辺の調査例から、古墳時代以前の遺構である可能性が考えられる。



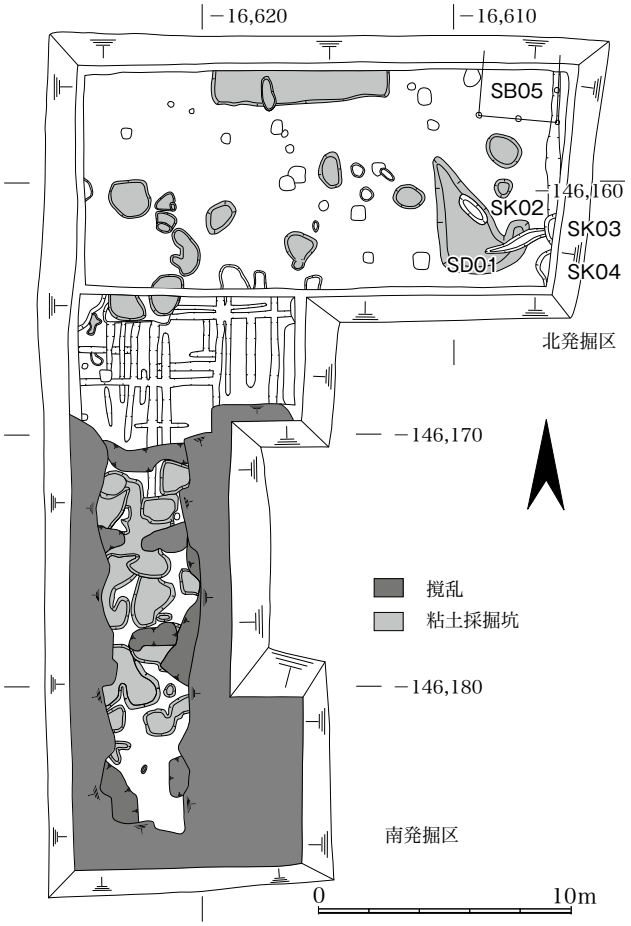
ＨＪ第604次調査　発掘区位置図（1/5,000）

奈良時代の遺構　土坑２基を検出した。ＳＫ03は東西0.6m以上、南北1.6m、深さ0.3m、ＳＫ04は東西0.5m以上、南北1.5m以上、深さ0.1mの土坑である。いずれの土坑からも奈良時代の土器が出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。

鎌倉時代の遺構　発掘区全面にわたって粘土採掘坑がある。地山の黄灰色粘土の部分を掘削しており、礫土や砂層に至ると掘削をやめている。発掘区北半部では単独で存在するものが多いが、南半部では重複し連なった形



ＨＪ第604次調査　北発掘区西壁土層図（1/80）



ＨＪ第 604 次調査　発掘区遺構平面図（1/300）

状をしている。平面は不整形で、深さは 0.1 ～ 0.4m である。埋土から 13 世紀前半の土師器、瓦器が出土したものがあり、これらの遺構はその頃のものと考えられる。南半部のものに重複関係があることから、ある程度の期間にわたって粘土が採掘されていたと思われるが、出土遺物からそれがどれくらいの時間幅であったのかわからない。

時期不明の遺構　北発掘区北東隅で掘立柱建物ＳＢ 05 を検出した。南北棟の建物と考えられ、柱間は桁行 1.4m、梁間 1.5m 等間である。柱掘形は径約 0.3m の円形で、径 0.2m の断面円形の柱が残っていた。遺物が出土しなかったので時期は不明であるが、中世以降の掘立柱建物ではないかと思われる。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱に 5 箱分が出土した。出土した遺物には 8 ～ 9 世紀の土師器・須恵器、13 世紀の土師器・瓦器、18 ～ 19 世紀の土師器・陶器・磁器がある。 8 ～ 9 世紀の土器の多くは包含層から、18 ～ 19 世紀の土器は水田耕作に伴うとみられる素掘溝から出土した。13 世紀の土師器・瓦器は粘土採掘坑からの出土である。

Ⅴ　調査所見

発掘区南端部が以前の建物の基礎で壊されており、本調査の主目的であった三条大路とその北側溝は検出することができなかった。また、奈良時代の遺構は、粘土採掘坑で壊されている可能性はあるものの非常に希薄である。周辺の調査での遺構検出面の標高を比べても大きな差はないが、ＳＢ 05 の柱穴を断ち割ったところ、深さ 0.1m 程度しか残っておらず、遺構面が削平されていることは確実であろう。しかし、奈良時代の全ての遺構が削平されたとは考えがたいので、奈良時代には建物等の密度が低い場所であったと考えられる。その後、鎌倉時代になると、良好な粘土が採れる場所であったためか、粘土採掘地として利用されたが、それ以降は水田化していったものと思われる。　（池田裕英）

1）奈良市教育委員会「14. 平城京左京三条五坊四坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和 58 年度』 昭和 59 年
2）奈良市教育委員会「21. 平城京左京（外京）三条五坊四坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和 59 年度』昭和 60 年
3）奈良国立文化財研究所「8　左京（外京）三条五坊四坪の調査 第 141-7 次」『昭和 57 年度　平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1983

北発掘区全景（東から）

南発掘区全景（北から）

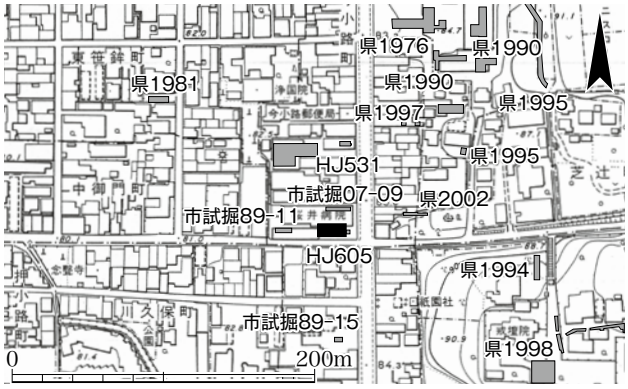
6．平城京跡（左京二条七坊十五坪）・奈良町遺跡の調査　第605次

事 業 名	共同住宅新築	調 査 期 間	平成20年5月8日～6月26日
届出者名	株式会社　日本エスコン	調 査 面 積	144㎡
調 査 地	奈良市今小路町1-1他14筆	調査担当者	中島和彦　大原　瞳

Ⅰ　はじめに

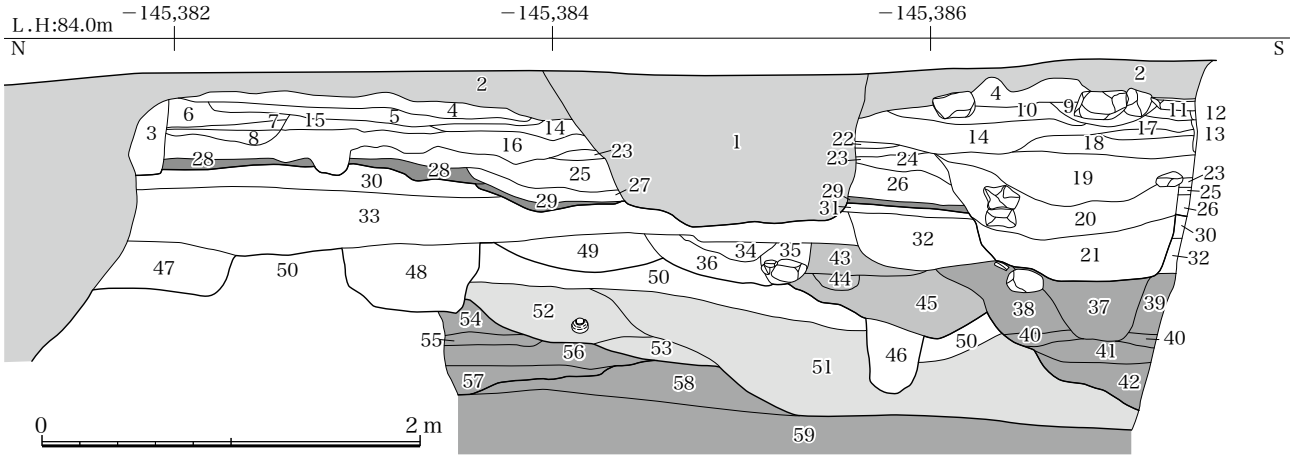
調査地は、平城京の条坊復原では左京二条七坊十五坪の東南隅にあたり、東七坊大路と二条条間路の交差点の北西側にある。また所在地の町名の「今小路」の名は平安時代後半から「今小路郷」として史料に現れ、現在に至っている。調査地の北約50ｍの市ＨＪ第531次調査では８世紀後半から19世紀中頃までの各時期の遺構が多数見つかっており、特に13世紀以降に遺構・遺物が増加していることが判明している。また調査地内の西約20ｍの位置で行った市試掘89-11次調査では、10世紀前半の井戸が見つかっている。

調査地内には、以前に鉄筋コンクリート造りの病院建物が建ち、この建物基礎により遺構面が破壊されていると考えられたことから、事前に試掘調査（市試掘07-09次調査）を行い遺構面の残存状況を確認した。敷地東側に試掘トレンチを南北に２本設定し調査した結果、旧建物部分はすべて基礎掘削・除去工事によって遺構面が破壊されており、敷地東南隅の旧駐車場部分のみに遺構面が残っていることが確認された。したがってこの旧駐車場部分に発掘区を設定し調査を行った。



ＨＪ第605次調査　発掘区位置図（1/5,000）

周辺の発掘調査例から、今回の調査地も各時代の遺構が高密度に重層的に遺存すると考えられ、平城京の条坊遺構の有無の確認、中世以降の宅地内の利用状況の解明を目的として調査を行った。



1　試掘調査埋め戻し土
2　解体時盛土
3　建物基礎掘形
4　暗茶褐色土（漆喰多く含む）
5　灰褐色土（堅く締まる、土間か）
6　漆喰層
7　灰褐色土
8　漆喰層
9　明黄橙色土（灰褐色土含む）
10 淡灰褐色土
11 暗灰色砂質土
12 淡灰褐色土（砂礫多く含む）
13 暗灰褐色土
14 淡灰褐色土（焼土・炭多く含む）
15 灰褐色土
16 赤褐色焼土（炭・瓦多く含む）
17 明灰白色粘土
18 暗茶褐色土（砂礫多く含む）
19 黄白色粘土（下に瓦礫多く含む）
20 灰褐色土
21 淡茶褐色土
22 黄白色粘土
23 暗灰褐色土（細砂多く含む）
24 明茶褐色土
25 淡灰褐色土
（黄橙色砂質土多く含む）
26 淡茶褐色土
27 明灰褐色粘質土
28 黒色炭層（焼土多く含む）
29 黒色炭層
30 明茶褐色砂質土
31 淡灰褐色土
32 暗茶褐色土
33 茶褐色土
34 明茶褐色土
35 暗灰褐色土
36 淡茶褐色砂質土
37 暗灰色粘土
（礫多く含む・ＳＤ08新）
38 明黄褐色土（ＳＤ08古）
39 明灰褐色土
（黄褐色粘土多く含む・ＳＤ08古）
40 灰色粘土（ＳＤ08古）
41 暗橙色砂礫（ＳＤ08古）
42 暗灰色粘質土（ＳＤ08古）
43 明茶褐色土（ＳＤ07）
44 暗茶褐色土（ＳＤ07）
45 暗灰褐色土（ＳＤ07）
46 暗灰褐色土
47 暗灰色粘質土
48 明茶褐色土（黄褐色土多く含む）
49 暗灰色粘質土
50 淡茶褐色土（平安時代整地土）
51 暗灰色砂礫（ＳＤ01）
52 明青灰色砂質土（ＳＤ01）
53 明茶褐色砂質土（ＳＤ01）
54 明オリーブ灰色粘質土（自然流路）
55 明青灰色砂（自然流路）
56 明青灰色シルト（自然流路）
57 暗茶褐色土
（植物遺存体多く含む・自然流路）
58 明青灰色砂礫（地山）
59 青灰色砂礫（地山）

ＨＪ第605次調査　発掘区東壁土層図（1/40）

Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、多くの層が重複し複雑であるが、発掘区東端では上から大きく、病院解体後の造成土（2）、近代以降の造成土（4）、江戸時代前半～後半の各時期の整地層（5、6、10、11、14～18、22～29)、江戸時代初頭の整地層（30・31・33)、平安時代前半～中頃の遺物包含層（50）で、現地表下約1.7 mで奈良時代の遺構面の明オリーブ灰色粘質土の自然流路の上面（54）となる。なお平安時代前半～中頃の遺物包含層は発掘区西北部には存在せず、江戸時代初頭の整地層の下で地山となる。さらに発掘区西側では、後述する18世紀前半の大規模な塵芥処理土坑があり、土坑埋立後の整地土が存在する。

地山面の標高は東端で82.6 m、西端で82.3 mである。

遺構検出は、地山上面または平安時代前半～中頃の遺物包含層上面と、江戸時代初頭の整地層上面とで2回行い、前者では奈良～室町時代の、後者では江戸時代の遺構を検出した。

Ⅲ　検出遺構

奈良～江戸時代までの各時代の遺構が大小約250基ある。主要遺構については遺構一覧表に詳細を記し、各時代ごとに遺構を概観する。

奈良～平安時代前半の遺構

東西溝が1条（ＳＤ01)、土坑が1基（ＳＫ02）ある。

ＳＤ01は北岸のみ確認し、南岸は発掘区外の南側にあり全容は不明。深さは西端で約0.6 m、東端で約0.7 mであるが、地形が西側に下降しており、溝底の標高は西側が約0.2 m低い。溝の埋土は下層から中層にかけては橙色系の砂礫、上層は茶灰色系のシルト層である。出土

発掘区全景（奈良時代　東から）

発掘区全景（鎌倉～室町時代　西から）

発掘区全景（鎌倉～室町時代　東から）

遺物から10世紀前半頃には埋没することがわかる。

ＳＤ01の北岸の国土座標はＸ＝−145384.20で、東大寺西面中門心の国土座標Ｘ＝−145393.52と比べると、その北側約9.3ｍの位置にあることがわかる。中門正面の二条条間路は、過去の発掘調査で幅が溝心々間で約16ｍと確認されており、ＳＤ01はほぼ二条条間路の北側溝の位置にあることがわかる。しかしながら、溝の南岸が不明のため、ＳＤ01は北側溝そのもの、または溝状に切り下げられた二条条間路自体の北岸になることの２つの可能性が考えられる。いずれにしろ、条坊検出例が少ない外京域においては貴重な確認例となる。

土坑ＳＫ02は、ＳＤ01埋没後に掘られた10世紀前半の遺構で、溝の埋没時期の下限を示す。

平安時代後半～鎌倉時代の遺構

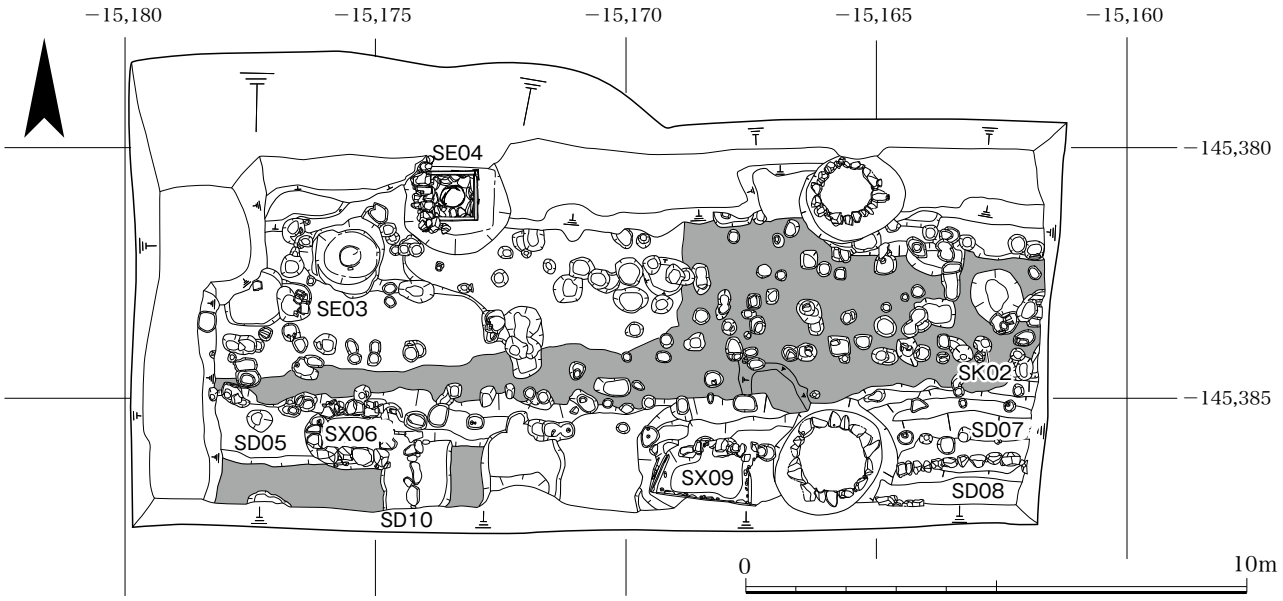
井戸２基（ＳＥ03・04)、土坑、小柱穴多数がある。ＳＥ03は井戸枠が抜き取られ、底の集水施設である曲物が１段分残存する。12世紀前半のもの。ＳＥ04は深さ約1.95ｍの井戸で、石組みと横板組とを組み合わせた井戸である。井戸の構造はまず井戸底に曲物を１段据え、その上面の周囲に人頭大の石を敷く。その上に内法一辺が約0.9ｍの方形石組みの井戸枠を高さ約0.65ｍ分築き、さらにその上に同規模の方形縦板組横桟留めの木製井戸枠を設ける。木製井戸枠は高さが0.9ｍで、上半部は腐朽し失われ、下半部だけが残る。この上に方形石組みの井戸枠を設置する。石組みは西辺と南辺の一部が残存するのみであり、規模等は不明で、高さは約0.3ｍ分が残

ＨＪ第605次調査　検出遺構一覧表（１）

遺構番号	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	時期	主要出土遺物	備　　考
ＳＤ01	東西方向	幅3.5以上×長さ17以上	1.5以上	8～10世紀前半	土師器杯・皿・高杯・甕・羽釜・竈、須恵器杯・杯蓋・壺・横瓶・甕、黒色土器Ａ類椀・Ｂ類皿・壺、軒平瓦（6732Ｈ)、丸瓦、平瓦、銅滓、箸	二条条間大路または北側溝
ＳＫ02	隅丸方形	一辺0.3	0.3	10世紀前半	土師器皿・羽釜、黒色土器Ａ類椀・Ｂ類椀、丸瓦、平瓦	重複関係からＳＤ01より新
ＳＤ05	東西方向	幅1.2～1.8×長さ9.0以上	0.2～0.5	16世紀後半	土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・捏鉢・浅鉢・深鉢・方形浅鉢・羽釜、国産陶器（常滑産甕、瀬戸美濃産椀・皿・大皿・擂鉢・水注、備前産擂鉢・甕、信楽産擂鉢・甕、肥前産椀・皿・壺)、輸入陶磁器（青磁碗、白磁皿、青白磁皿)、軒平瓦（右巻巴紋（中世))、軒平瓦（唐草紋(室町・江戸))、刻印丸瓦、丸瓦、平瓦、銅銭２（紹聖元寶１,判読不能１)、鉄釘１、鉄滓、砥石１	重複関係からＳＸ06、ＳＤ09と同時期。
ＳＤ07	東西方向	幅0.5×長さ3.2以上	0.5	16世紀後半	土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・捏鉢・浅鉢・深鉢・方形浅鉢・蓋、国産陶器（常滑産甕・瀬戸美濃産椀・皿・大皿、備前産甕・信楽産擂鉢)、輸入陶磁器（青磁皿)、軒丸瓦（「東大寺」文字紋、右巻巴紋（中世)、型式不明)、丸瓦、平瓦、鉄釘２	重複関係からＳＤ08、ＳＥ12よりも古。
ＳＤ08	東西方向	古 幅0.6×長さ3.2以上	0.3	16世紀後半	土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・深鉢・蓋、国産陶器(常滑産甕・瀬戸美濃産椀・信楽産擂鉢・甕)、輸入陶磁器（青磁碗、青花皿)、丸瓦、平瓦、鉄滓、用途不明石製品	重複関係からＳＥ12よりも古、ＳＤ07より新。新旧２時期あり。新は北岸を石組みで護岸する。石組みは一段分残る。
		新 幅1.0以上×長さ3.2以上	0.7以上			
ＳＤ09	南北方向	幅0.6×長さ1.3以上	0.2	16世紀後半	土師器皿、瓦質土器鉢類、国産陶器（信楽産擂鉢)、丸瓦、平瓦	西岸を石組みで護岸する。石組みは一段分残る。
ＳＤ13	南北方向	幅0.2×長さ4.6以上	0.4	17世紀前半？		重複関係からＳＤ14より古。東西両岸を石組みで護岸する。石組みは南端約1.5m分が一段分残る。
ＳＤ14	南北方向	幅0.15～0.2×長さ3.5以上	0.2	17世紀中頃？	土師器皿・羽釜、瓦質土器鉢類、国産陶器（肥前産椀皿・壺)、丸瓦、平瓦、砥石２、鉄釘１	重複関係からＳＤ13、ＳＥ12より新。ＳＫ17と同時期。東西両岸を石組みで護岸する。石組みは一段分残る。南側へ排水する。
ＳＤ15	不整円形	東西2.3×南北2.2	0.3～0.4	17世紀中頃？	土師器皿・羽釜・鍋、瓦質土器擂鉢・深鉢・小型羽釜・鉢類、国産陶器（肥前産椀、瀬戸美濃産椀、信楽産甕、丹波産擂鉢)、軒丸瓦（右巻巴紋（中世))、軒平瓦（型式不明）丸瓦、平瓦、鞴羽口、砥石３、用途不明石製品１	重複関係からＳＤ14、ＳＸ16と同時期。東南部に石組みが一部残るが、全周するかは不明。底は南半部が一段深い。
ＳＸ16	南北方向	東西0.2×南北0.8	0.2	17世紀中頃？	土師器皿・羽釜、瓦質土器深鉢、国産陶器（瀬戸美濃産椀)、丸瓦、平瓦	重複関係からＳＫ17と同時期。丸瓦を利用した暗渠遺構。丸瓦を２枚合わせ円筒状にし、玉縁部を南に向け南北に２本接続する。丸瓦周辺には石を充填する。
ＳＫ17	不整長方形	東西6.8以上×南北4.6以上	0.5～0.8	18世紀前半	土師器皿・焙烙・鉢、瓦質土器深鉢・浅鉢・壺・風炉、国産陶器（肥前産椀・皿・鉢、瀬戸美濃産椀、信楽産擂鉢・甕、備前産壺、産地不明壺、軟質施釉陶器皿)、国産磁器（肥前産椀・皿・仏飯器・瓶)、軒丸瓦（右巻巴紋（近世))、軒平瓦（唐草紋（近世))、軒両桟瓦(唐草紋)、留蓋瓦、丸瓦、平瓦、桟瓦、両桟瓦、銭貨１（寛永通寶)、鉄釘21、壁土、石硯、砥石２、貝殻	大量の瓦を廃棄した塵芥処理用の土坑。北半約1.8m分が約0.3m深い。
ＳＫ18	隅丸長方形	東西1.2×南北1.6	0.4	18世紀後半	土師器皿・焙烙、瓦質土器深鉢・壺・行灯・鉢類、国産陶器（肥前産椀・皿、備前産甕、信楽産擂鉢・甕、産地不明椀)、国産磁器（肥前産椀・皿・瓶)、輸入陶磁器（青花皿)、丸瓦、平瓦、桟瓦、銭貨１（判読不能)鉄釘３、砥石２、軽石１	重複関係からＳＸ20よりも新。

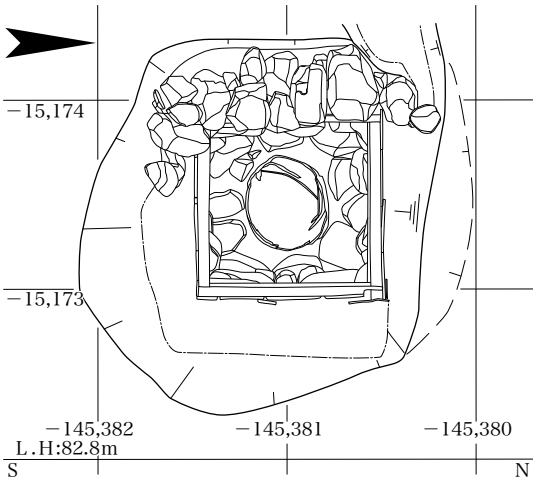
存する。13 世紀前半のもので、完形品を多く含む土器が遺物整理箱２箱、瓦類が４箱、木製品他が出土した。また径約 4.5㎝、長さ約 22.0㎝の竹筒が出土し、中には柿渋が入っていた。柿渋の容器と考えられる。

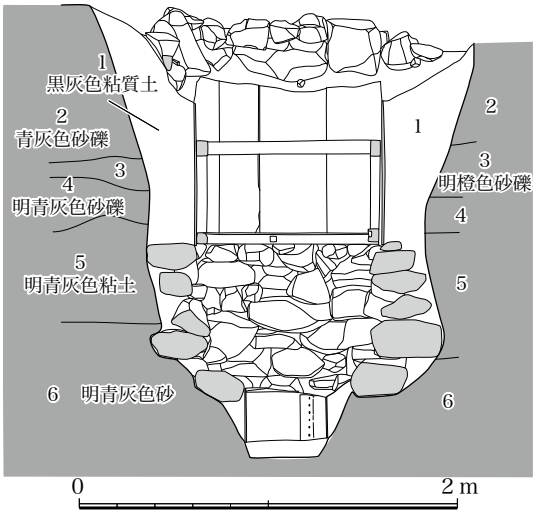
小柱穴は多数検出しているが、建物としてまとめられなかった。12 世紀以降の土器が出土するものが多い。後



ＨＪ第 605 次調査　鎌倉・室町時代　遺構平面図（1/150・網かけ部はＳＤ 01 と平安時代前半の遺物包含層）

ＳＥ 04　上部石組み全景（東から）





ＨＪ第 605 次調査　井戸ＳＥ 04　平面・立面図（1/40）

ＳＥ 04　下部井戸枠全景（東から）

述するＳＤ05以南は、遺構面上が堅くしまっており、小柱穴も分布しないことから、二条条間路埋没後も引き続き道路として利用されていたことが考えられる。

室町時代の遺構

東西溝３条（ＳＤ05・07・08)、南北溝１条、（ＳＤ10)、長方形石組遺構等（ＳＸ06･09)、小柱穴多数がある。

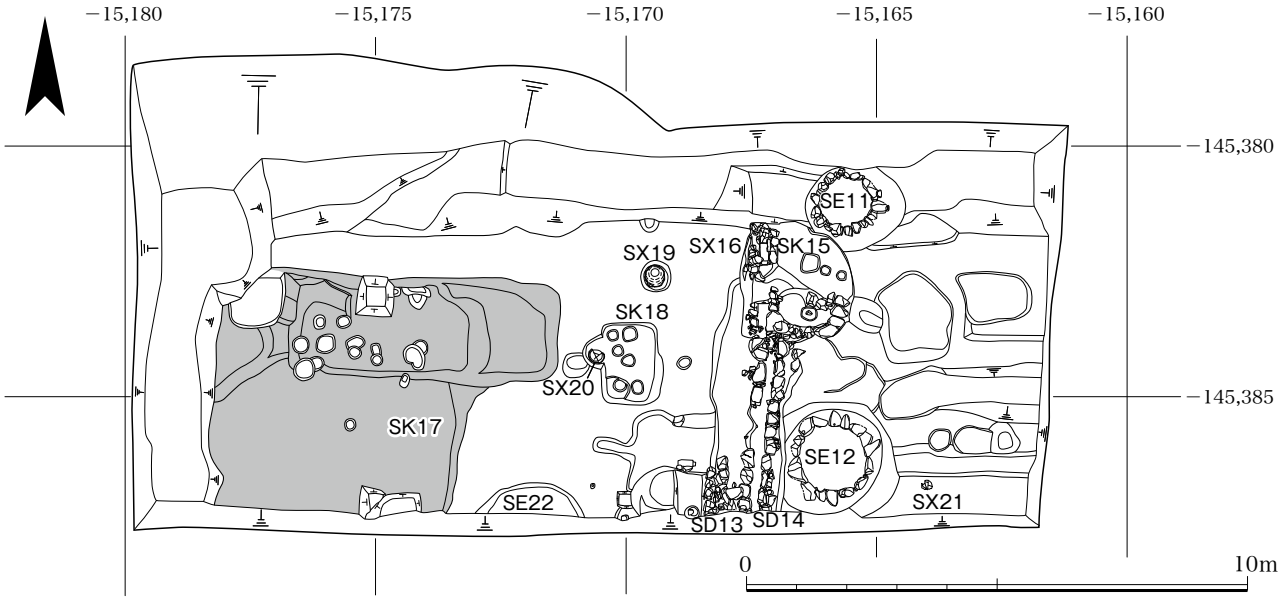
東西溝ＳＤ05と07は、後世の井戸ＳＥ12をはさみ東西一直線上にある溝で、規模と出土遺物等から本来は一連の東西溝だったと考えられる。溝底のレベルは東側の方が約0.3ｍ高い。またＳＤ05は、ＳＸ09近くでは道路側に溢れ幅をやや増しており、この部分を上層とし遺物を取り上げた。ＳＤ05の途中には、石組遺構ＳＸ06があり、重複関係から同時期のものである。石組は高さ３段分（約0.5ｍ）残り、ＳＤ05の溝底からは約0.3ｍ深い。溝の途中の集水枡のような性格であろうか。ＳＸ06の東側には、ＳＤ05に取り付く南北溝ＳＤ10がある。ＳＤ10は、西岸のみ石組が１段分ある。溝底はＳＤ05より0.1ｍほど浅い。

東側のＳＤ07は、北側の約1.5ｍ分を埋め立ててＳＤ08に作り替えられる。ＳＤ08は素掘りの時期と北岸を石組みで護岸する時期の新旧２時期ある。石組は高さ１段分（約0.1ｍ）が残り、発掘区南壁部分にも一部石組みが確認出来るが、ＳＤ08南岸の石組になるかは不明。ＳＥ12をはさんで西側にあるＳＸ09は、位置と北岸の石組の状況から見て、ＳＤ08に伴うものと考えられる。ＳＸ09以西には、新たな溝がないことから、引き続きＳＤ05が利用されていたと考えられる。

これら東西溝以南は、遺構分布からみて引き続き道路として利用されていたと見られる。この場合、ＳＸ09以東の宅地部分が、約1.5ｍ分道路側に拡張されたことがわかる。これらの遺構は出土土器から16世紀後半の時期である。

ＨＪ第605次調査　検出遺構一覧表（２）

遺構番号	掘形			枠			時期	主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模(m)	深さ(m)	構造	内法(m)	濾過装置等			
ＳＥ03	不整楕円形	短径1.4× 長径1.5	0.8			曲物 (径0.42m・ 高さ0.18m)	12世紀 前半	土師器皿・羽釜、瓦器椀・皿、須恵器(東播産)鉢・甕、東海産陶器壷・甕、輸入陶磁器（青磁碗（越州窯系))、軒丸瓦（6235Ma)、軒平瓦(興福寺Ⅶ平Ｂ13)、丸瓦、平瓦、鉄滓、箸	
ＳＥ04	不整方形	東西1.6× 南北1.6	1.95	上段　方形石組 中段　方形縦板組横桟留 下段　方形石組	南北7.5以上 東西不明 一辺0.75 一辺0.7	曲物 (径0.35m・ 高さ0.24m)	13世紀 前半	土師器皿・椀・羽釜、瓦器椀・皿、瓦質土器浅鉢、須恵器（東播産）鉢・甕、東海産陶器甕、輸入陶磁器(白磁碗)、軒丸瓦（6235Ｇ、型式不明)、軒平瓦（6732Ｆａ）刻印平瓦、丸瓦、平瓦、鉄滓、竹筒（柿渋入)、曲物、箸、用途不明木製品、梅種	
ＳＸ06	隅丸長方形	東西1.7× 南北1.4	0.55	長方形石組	東西1.2× 南北0.65		16世紀 後半	土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・捏鉢・浅鉢・深鉢・方形浅鉢・蓋・風炉、国産陶器（常滑産甕、瀬戸美濃産皿、備前産甕、信楽産擂鉢・甕)、輸入陶磁器（青磁碗、白磁皿、青花皿)、丸瓦、平瓦	重複関係からＳＤ05と同時期。
ＳＸ09	不整長方形	東西2.6× 南北2.2以上	0.9	長方形 横板組と石組	東西 1.6～1.8 × 南北 0.8～0.9		16世紀 後半	土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・捏鉢・浅鉢・深鉢・方形浅鉢・蓋・羽釜・鍋、国産陶器（常滑産甕、瀬戸美濃産皿・大皿、備前産瓶、信楽産擂鉢・甕)、輸入陶磁器（青磁碗・皿・盤、白磁皿、青花碗・皿)、軒丸瓦（「東大寺」文字紋)、軒平瓦(文字紋（鎌倉))、刻印平瓦、丸瓦、平瓦、鉄釘１、壁土、石臼１、砥石２、曲物底板１、桃種	重複関係からＳＥ12より古。
ＳＥ11	楕円形	東西2.0× 南北1.7	2.3 以上	円形石組	径 0.9～1.0		17世紀 前半	土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・捏鉢・鉢類、国産陶器（肥前産椀皿、常滑産甕)、丸瓦、平瓦	上から1.3m分の井戸枠が抜き取られる。重複関係からＳＫ15より古。
ＳＥ12	楕円形	短径1.9× 長径2.3	2.4 以上	円形石組	径1.3		17世紀 前半	土師器皿・羽釜・鍋、瓦質土器擂鉢・捏鉢・浅鉢・深鉢・蓋・風炉・羽釜・壷、国産陶器（瀬戸美濃産碗・皿、備前産瓶、信楽産擂鉢・甕、肥前産椀・皿・向付)、輸入陶磁器(青磁碗・皿、白磁皿、青花皿)、軒丸瓦(右巻巴紋（中世))、軒平瓦(6732Ｆａ、唐草紋・連珠紋(鎌倉))刻印平瓦、丸瓦、平瓦、銅製煙管１、砥石４	上から1.3m分の井戸枠が抜き取られる。井戸埋め戻し時に竹筒を中央に立てる。重複関係からＳＤ14より古。
ＳＸ19	楕円形？	東西0.45以上× 南北0.65	0.35	瓦質土器深鉢	最大径 0.3以上		18世紀 中頃？	土師器皿、瓦質土器深鉢、国産陶器(肥前産椀)、丸瓦、平瓦	埋甕遺構。
ＳＸ20	楕円形	東西0.6× 南北0.65	0.35	信楽産陶器甕	最大径 0.4		18世紀 以降	国産陶器（信楽産甕)、平瓦、桟瓦	埋甕遺構。重複関係からＳＫ18より古。
ＳＸ21	不明		0.05	瓦質土器深鉢	最大径 0.2以上		17世紀 中頃 以降	瓦質土器深鉢	埋甕遺構。深鉢底部が僅かに残存する。
ＳＥ22	円形？	東西2.2以上× 南北0.8以上	1.1 以上	円形石組	不明		20世紀	国産陶器（瀬戸美濃産椀)、丸瓦、平瓦	



ＨＪ第605次調査　江戸時代　遺構平面図（1/150）

東西溝の底では数基の小柱穴を検出し、その一部には柱が残存する。東西方向に列んでおり、塀または護岸施設の一部とも考えられるがいずれとも決しがたい。

江戸時代の遺構

井戸２基（ＳＥ 11・12)、石組溝２条（ＳＤ 13・14)、土坑（ＳＫ 15・17・18)、埋甕遺構３基（ＳＸ 19～21)、暗渠遺構１基（ＳＸ 16）がある。これらの遺構は重複関係と出土遺物から次の４時期にまとめられる。

１期　江戸時代で最も古い遺構で、17 世紀初頭の整地層（土層図 30・31・33) に覆われるもの（ＳＥ 11・12)。16 世紀末～ 17 世紀初頭の時期。

２期　17 世紀初頭の整地層の上で検出した遺構（ＳＤ 13・14、ＳＫ 15、ＳＸ 16)。17 世紀前半～中頃の時期。

３期　発掘区西半の塵芥処理土坑（ＳＫ 17)。18 世紀前半の時期。

４期　ＳＫ 17 埋没後の整地層より新しい遺構（ＳＫ 18、ＳＸ 19・20)。18 世紀中頃以降の時期。

１期の井戸２基は、いずれも上半部の石組が抜き取られている。いずれも２m以上と深く、掘削作業の安全上底まで掘削できなかった。ほぼ南北一直線上に位置しており、南北に列ぶ２軒の宅地が復元できる。後述するように 18 世紀後半の町絵図には、東の道路に面する東西に細長い宅地が描かれており、同様の宅地がこの時期に形成されていたことが判明する。

２期のＳＤ 14、ＳＫ 15、ＳＸ 16 は、一連の排水遺構と考えられる。ＳＸ 16 は暗渠遺構で、南北両端は失われているが、丸瓦を２つ合わせた土管を南北に２つ繋げる。掘形内には石を充填しているが、東側の石は西側側面を揃えて列んでおり、一時期古い石組溝を利用したことも想定できる。玉縁部は南側を向き、北から南へ排水する。南側の接続先は失われているが、延長線上に石組溝ＳＤ 14 の北端があり、ここに接続していたと考えられる。ＳＤ 14 はＳＫ 15 と重なる部分で鈎型に屈曲しており、溝底は北から南へ向かい低くなる。石組は高さ１段分(約0.2 m）が残る。ＳＫ 15 と接する部分では、東側の石組みの一部が低くなってＳＫ 15 と接続している。ＳＫ 15 の底はＳＤ 14 より約 0.3 m深いことから、ＳＫ 15 を満たした水がＳＤ 14 を通じて南側に排水されることがわかる。ＳＤ 13 はＳＤ 14 より古い石組溝で、ほぼ同位置で作り替えられたと考えられる。当時は東西方向に長い宅地と考えられることから、これらの溝は宅地内の排水溝と想定できる。

３期のＳＫ 17 は、大量の瓦、焼土、炭を含んだ土で埋まっており、火災後の塵芥処理土坑と考えられる。史料によると、今小路町は宝永元年（1704 年）と享保 11 年（1726 年）に大火に見舞われる。出土土器も 18 世紀前半頃のもので、両大火のどちらかに関わるものと考えられる。

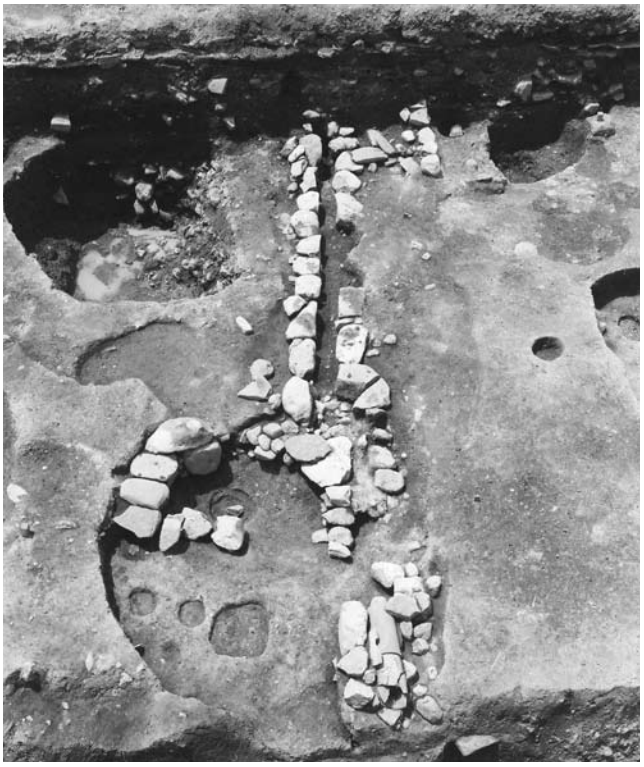
４期のＳＫ 18 からは 18 世紀後半の土器が出土しており、ＳＫ 17 の下限がわかる。

Ⅳ　出土遺物

奈良～江戸時代までの各時期のものがあり、土器類が遺物整理箱 28 箱、瓦塼類が 91 箱、木製品（曲物・箸・竹筒他）が２箱、石製品（砥石・硯・石臼・碁石等）が１箱、金属製品等（鉄釘・鋤先・刃物・銅製煙管・鞴羽口・鉄滓・ガラス瓶等）が１箱、銭貨が 13 点ある。各遺構出土品については、遺構一覧表に記した。以下、土器類・瓦塼類・その他に分けて主要なものを報告する。

発掘区全景（江戸時代　西から）

発掘区全景（江戸時代　東から）



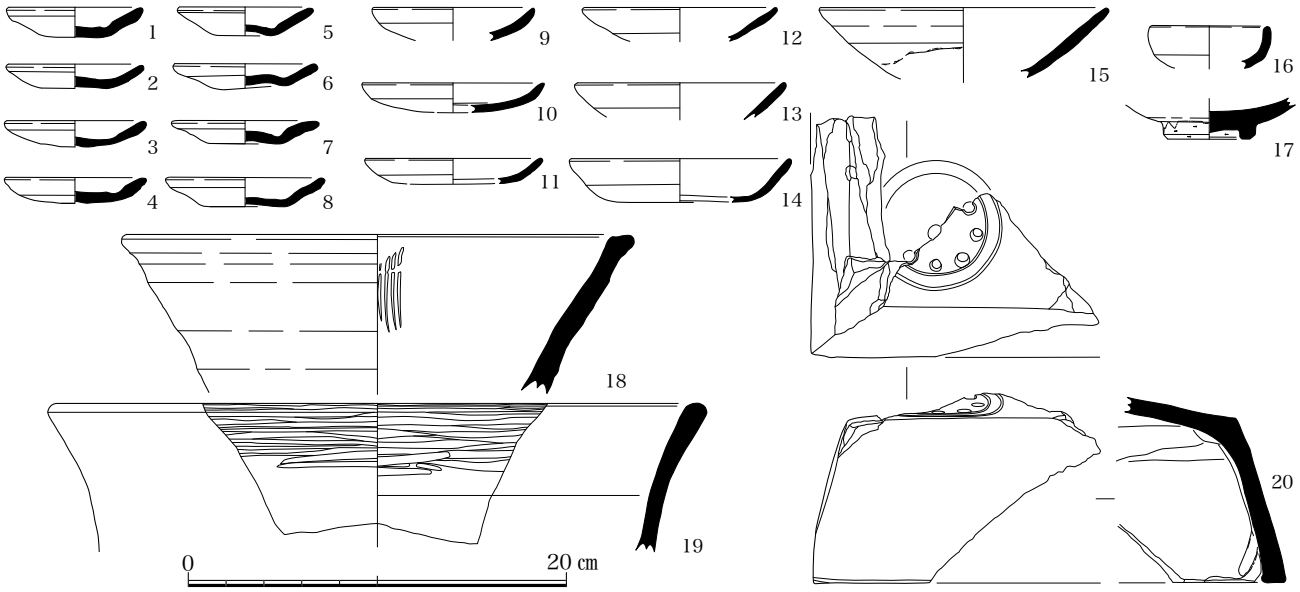
ＳＤ 14・ＳＫ 15・ＳＸ 16 全景（北から）

土器類　8 世紀から 19 世紀まで各時代のものが、遺物整理箱 28 箱分あるが、11・14・15・19 世紀のものは他の時期に比べ少ない。以下室町時代の道路側溝関連遺構出土の土器について記す。

ＳＤ 05・07・08、ＳＸ 06・09 出土土器　各遺構からは、合計約 1480 点の土器が出土しており、各遺構の出土点数については表に記す。遺構の重複関係からＳＤ 05・07・ＳＸ 06 が、ＳＤ 08・ＳＸ 09 より古いが、土器の形式では両者に差が認められない。ＳＤ 07、ＳＤ 05 とＳＸ 06、ＳＸ 09 の３遺構に分けて実測図を掲載し、重複関係からこれらの遺構群より新しいＳＥ 12 出土遺物の組成を比較のために記した。

土師器皿は胎土の色調等から、褐色系と灰色系の２つに分類される。褐色系のもの（1～8、21～36、68～87）は、やや上げ底気味の底部で、口縁部に強いヨコナデ調整を行うため、内面の底部と口縁部の境にはナデ調整による強い窪みがある。外面のナデ調整の範囲は５㎜前後と幅が狭い。口径は７㎝～８㎝の間のものがほとんどである。胎土は砂粒を多く含み、器形と胎土の特徴から、14 世紀の赤土器の系譜をひく。ＳＸ 09 出土の 101 は異質な器形で、口径 11.6㎝、器高 2.65㎝で、口縁外面には幅広のヨコナデ調整を行う。形態は 13 世紀頃の土師器皿に似るが、胎土の色調等は褐色系のものと似る。これ１点のみの出土である。また 104 は口径 19.4㎝の大型の皿で、内面をハケメ調整の後口縁端部をヨコナデ調整する。内外面には煤が多量に付着し、後述する油煙採取用の蓋の可能性も考えられる。胎土の色調等は、褐色系のものと似る。

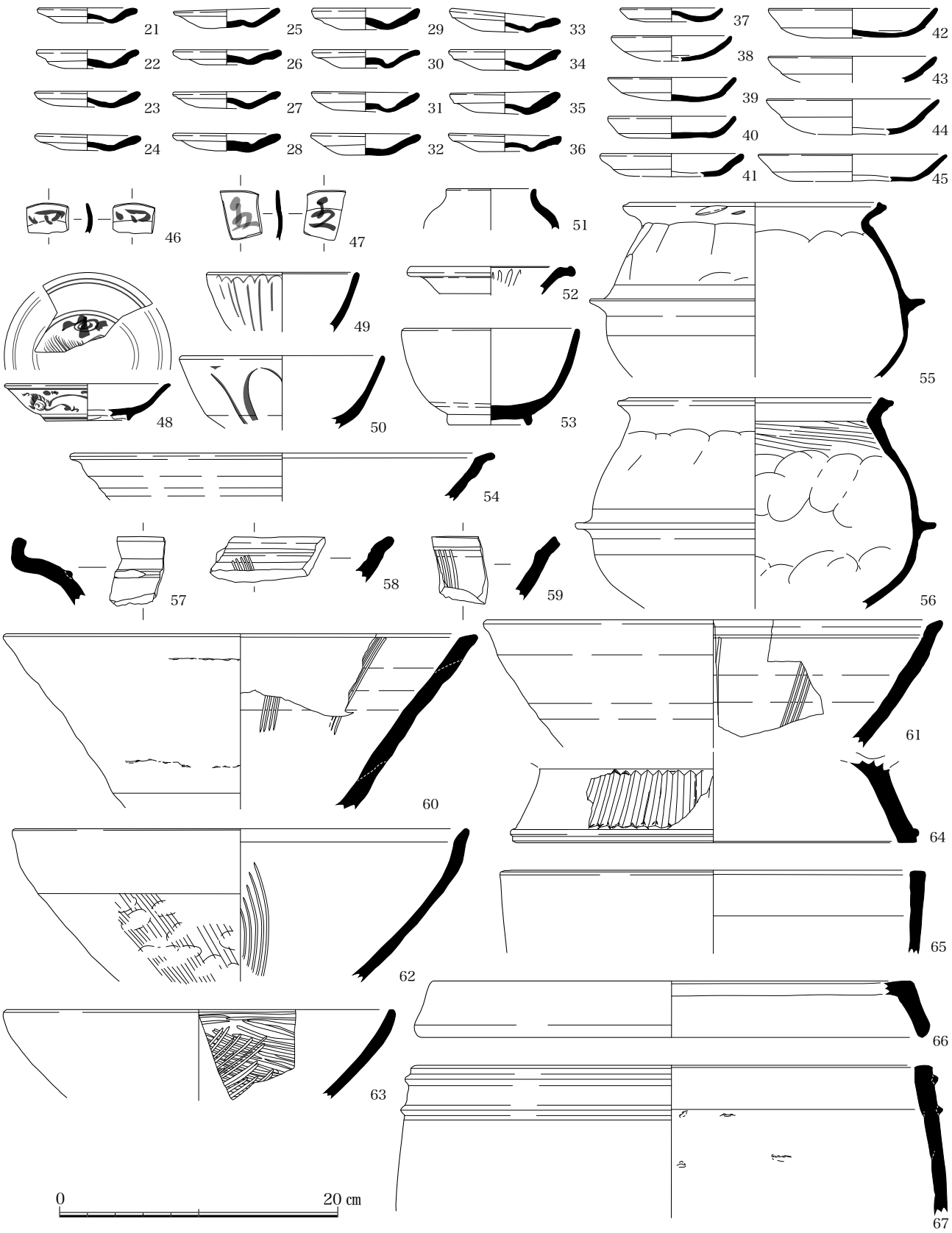
灰色系のもの（9～15、37～45、88～100）は、比較的平坦な底部から緩やかなカーブで短い口縁部へとつづく器形である。口縁部には丁寧なヨコナデ調整をし、凹凸が少なく端正な作りである。口径は６～16㎝まで各



ＨＪ第 605 次調査　ＳＤ 07　出土遺物（1/4）

ＨＪ第 605 次調査　遺構出土土器組成表

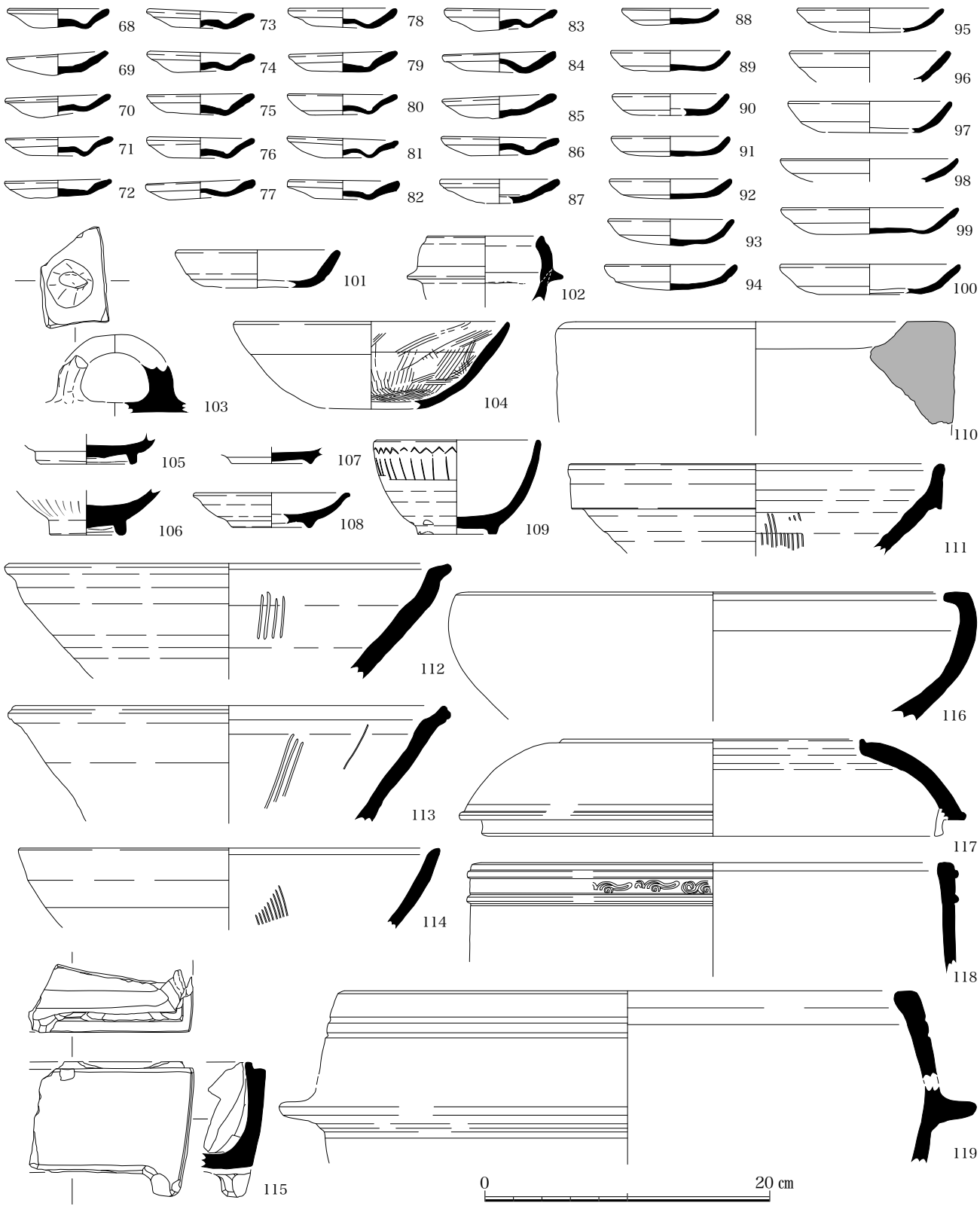
種類	産地等	器種	ＳＤ07		ＳＤ05		ＳＤ05上層		ＳＸ06		ＳＤ08		ＳＸ09		ＳＥ12	
			点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率
土師器		皿	76	57.14	50	23.04	53	27.60	67	31.02	98	43.75	153	30.97	67	18.82
		(褐色系)	32	24.06	21	9.68	33	17.19	26	12.04	15	6.70	69	13.97	17	4.78
		(灰色系)	44	33.08	29	13.36	20	10.42	41	18.98	83	37.05	84	17.00	50	14.04
		羽釜・鍋	8	6.02	63	29.03	47	24.48	59	27.31	17	7.59	16	3.24	25	7.02
		(羽釜)	3	2.26	31	14.29	30	15.63	35	16.20	6	2.68	6	1.21	8	2.25
		(鍋)													5	1.40
		他	1	0.75									3	0.61	3	0.84
	小　計		85	63.91	113	52.07	100	52.08	126	58.33	115	51.34	172	34.82	95	26.69
瓦質土器		擂鉢	8	6.02	4	1.84	10	5.21	7	3.24	14	6.25	22	5.21	9	2.53
		捏鉢	2	1.50	2	0.92	3	1.56	4	1.85	1	0.45	5	1.56	2	0.56
		浅鉢	1	0.75	9	4.15	2	1.04	4	1.85			6	1.04	6	1.69
		深鉢	4	3.01	2	0.92	3	1.56	5	2.31	49	21.88	13	1.56	21	5.90
		方形浅鉢	5	3.76			3	1.56	2	0.93			10	1.56		
		鉢類	8	6.02	46	21.20	30	15.63	35	16.20	31	13.84	152	15.63	101	28.37
		蓋	1	0.75					1	0.46	1	0.45	6	1.21	1	0.28
		風炉							2	0.93					2	0.56
		羽釜			2	0.92	1	0.52					6	1.21	1	0.28
		鍋											1	0.20		
		壷													2	0.56
		他	1	0.75			1	0.52								
		不明					1	0.52			1	0.45	2	0.40	2	0.56
	小　計		30	22.56	65	29.95	54	28.13	60	27.78	97	43.30	223	45.14	147	41.29
国産陶器	常滑	甕	3	2.26	4	1.84	7	3.65	7	3.24	5	2.23	13	2.63	4	1.12
	瀬戸美濃	椀	2	1.50	7	3.23							5	1.01	11	3.09
		皿	1	0.75	1	0.46	1	0.52	1	0.46			3	0.61	3	0.84
		大皿	5	3.76	1	0.46	3	1.56					4	0.81	5	1.40
		擂鉢			3	1.38										
		水注														
		他													1	0.28
		小 計	8	6.02	12	5.53	4	2.08	1	0.46	0	0.00	12	2.43	20	5.62
	備前	擂鉢			1	0.46							1	0.20		
		瓶													8	2.25
		壷・甕	3	2.26	4	1.84	7	3.65	7	3.24			28	5.67	11	3.09
		小 計	3	2.26	5	2.30	7	3.65	7	3.24	0	0.00	29	5.87	19	5.34
	信楽	擂鉢	3	2.26	9	4.15	9	4.69	8	3.70	2	0.89	18	3.64	20	5.62
		壷・甕			5	2.30	4	2.08	3	1.39	1	0.45	7	1.42	8	2.25
		小 計	3	2.26	14	6.45	13	6.77	11	5.09	3	1.39	25	5.06	28	7.87
	肥前	椀					2	1.04							26	7.30
		皿					2	1.04							3	0.84
		他					1	0.52							8	2.25
		小 計	0	0.00	0	0.00	5	2.60	0	0.00	0	0.00			37	10.39
	小　計		17	12.78	35	16.13	36	18.75	26	12.04	8	3.57	79	15.99	108	30.34
輸入陶磁	青磁	碗			2	0.92	2	1.04	2	0.93	3	1.34	11	2.23	1	0.28
		皿	1	0.75									1	0.20	3	0.84
		盤											1	0.20		
		小計			2	0.92	2	1.04	2	0.93	3	1.34	13	2.63	4	1.12
	白磁	皿			1	0.46			1	0.46			2	0.40	1	0.28
	青白磁	皿			1	0.46										
	青花	碗									1	0.45	4	0.81		
		皿							1	0.46			1	0.20	1	0.28
		小 計					0	0.00	1	0.46	1	0.45	5	1.56	1	0.28
	小　計		1	0.75	4	1.84	2	1.04	4	1.85	4	1.79	20	4.05	6	1.69
合　計			133	100.00	217	100.00	192	100.00	216	100.00	224	100.00	494	100.00	356	100.00



ＨＪ第 605 次調査　ＳＤ 05・ＳＸ 06　出土遺物（1/4）

種あり、８～９㎝代と 11 ～ 12㎝代が最も多い。両者を合わせると、口径が判明する破片の内約 42％を占める。胎土はきめ細かで砂粒を含まず、褐色系に比べ精良である。褐色系と灰色系の皿の出土比率は、おおよそ４：６である。また墨書のある灰色系の皿が２点出土している(46・47)。口縁部の破片に、「四」、「五」と記す。

ＳＤ 08 の土師器小型鉢 (16) は、黄橙色系の精良な胎土で、褐色系・灰色系の皿のいずれとも胎土が異なる。



ＨＪ第 605 次調査　ＳＸ 09　出土遺物（1/4）

土師器羽釜は、口縁部を外反させ端部を上方に摘み上げる大和Ｉ型（55、56）がほとんどで、他形式は僅か数点である。鍔は体部中位かやや下側に付き、やや下ぶくれ気味の体部である。胎土は灰白色系で、断面部分も同色を呈する。鍔下半には煤が付着する。羽釜は出土場所に偏りがあり、発掘区西側での出土が多い。ＳＸ 09 からは、小型の羽釜（102）が１点だけ出土する。

ＳＸ 09 出土の土師器蓋（103）は、頂部に環状の取っ手を貼付し、内面は密なヘラミガキ調整、外面は未調整である。内外面に煤が付着するが特に内面に多い。形態・特徴から墨作りのための油煙採取用の蓋と考えられるが、この形態のものは奈良市内で最古の出土となる。

瓦質土器（19、20、62～67、114～119）は多くが浅鉢または深鉢の底部と体部片で、器形の判明する分は少ない。ＳＤ08からは方形の蓋（20）が出土している。上面の隅にはコンパス状の工具で２重の円を描き、円の中央に１個、円の内側に沿って８個ほどの小孔を穿つ。外面は丁寧なヘラミガキ調整を行う。

国産陶器は、主だった産地のものが出土するが、常滑産と肥前産は出土状況や遺物の型式などから、新旧の時期の遺構からの混入品と考えられる。比較的まとまって出土するものとしては、信楽産（18、58～61、112、113）と瀬戸美濃産（51～54、107～109）の製品がある。信楽産陶器には擂鉢が多く、内面の擂目は３～５条あり、口縁端部の形態は様々ある。出土組成表からは、擂鉢は瓦質土器と信楽産がほとんどを占めるのがわかる。瀬戸美濃産陶器は椀皿類が主体で、丸椀が多く天目茶椀は出土していない。また灰釉製品のみで鉄釉等の製品もない。折縁ソギ皿（52）はＳＤ05上層からの出土で、上層の遺構からの混入品の可能性もある。これを除くと、瀬戸美濃産陶器はおおよそ藤澤編年[1]の大窯３期以前のものが主体と言える。備前産陶器(57、111)は少量の出土である。

輸入陶磁器の青磁（17、49、50、105、106）はいずれも龍泉窯系のもので、他に稜花皿の破片がある。白磁は小野分類のＢ群の皿の破片が、青花は口縁部を外反させる小野分類のＢ群の皿（48）が出土している。

これらの土器群は、森下・立石編年[2]の奈良Ⅳ期のものであり、同期中での編年的位置付けを検討する。奈良Ⅳ期終末で肥前陶器が出土する資料には、市ＧＧ第48次調査ＳＥ16出土資料がある。これと比較すると当資料は、褐色系の土師器皿は器高が高くやや深みのある器形で、口縁外面のヨコナデ調整の幅がやや狭い点、口径が若干小さい点などが指摘でき、型式的には差が認められる。土師器の大和Ⅰ型羽釜には、器形・鍔の貼付位置にやや古い様相が見られる。瀬戸美濃産陶器は大窯３期以前のものであることなどから、肥前産陶器出現以前の時期と言えよう。また肥前産陶器が出土していない市ＨＪ第482次調査ＳＸ14出土資料は、供伴する備前産陶器大甕が乗岡編年[3]の中世５～６期のもので、16世紀前半頃と考えられる。この資料と比較すると、土師器の大和Ⅰ型羽釜は器形・鍔の貼付位置から明らかに数形式の差が認められる。これらのことから当資料は16世紀後半と考えられ、資料数の少ない奈良Ⅳ期の編年を考える上で貴重な資料といえる。（中島和彦）

瓦塼類　瓦塼類は遺物整理箱で91箱分出土した。瓦類の大半は丸瓦・平瓦・桟瓦で、軒丸瓦25点、軒平瓦31点、面戸瓦１点、塼７点、留蓋１点を含む。

出土した軒瓦は別表に示した。これらのうち、遺構から出土した軒瓦に関しては検出遺構一覧表に掲げた。

型式番号が判明した奈良時代の軒瓦のうち、6235型式Ｇ・Ｍａ種と6732型式Ｆａ種は東大寺創建瓦である。6732型式Ｄ・Ｈ種は東大寺僧房所用と考えられている。鎌倉時代の軒瓦でも、東大寺805型式Ａ種[4]は建長元年（1249年）の東大寺僧房再建用で、東大寺509型式Ａ種は天福元年（1233年）の戒壇院再建瓦と考えられている。また東大寺502型式は内区に右から「東大寺礻大佛殿」と文字を飾り、東大寺所用品である。このように奈良時代と鎌倉時代の軒瓦の中には、東大寺所用品が多いことがわかる。

江戸時代の軒瓦には、特筆すべき軒桟瓦がある。左右両側面に桟部を設ける「両桟軒瓦[5]」である（１）。上向きの三葉紋の下に大きめの萼を飾った中心飾りである。唐草は３回反転均整唐草紋であるが、左右第３単位の唐草の先端は、巻き切れないまま、外縁に接続しており、左右両端を切り縮めた笵型を用いて製作されたと見られる。瓦当幅25.6㎝、全長25.6㎝、厚さ1.7㎝である。外縁はヨコナデを施し、平滑に仕上げる。接合面にカキメを施した顎貼り付け式段顎である。顎面と顎部瓦当裏面はヨコナデを施す。桟部は稜をもたない。平瓦部狭端側の両側面付近を長さ6.0㎝、幅3.5㎝ずつ切り欠き、凸字形にする。このため狭端幅は16㎝に減じている。平瓦部狭端側に、凹面側から穿孔した方形の釘穴がある。ＳＫ17から３点出土した。

「両桟瓦」は、塀の屋根に右桟瓦と左桟瓦を用い、その接点に使用する例が報告されている[6]。ただし、「両桟軒瓦」が複数出土していることから、この使用法は考えにくい。

他に「両桟軒瓦」が用いられた建物は、山口県岩国市所在の重要文化財目加田家住宅がある。ここでは、本瓦

ＨＪ第605次調査　出土軒瓦集計

軒丸瓦		軒平瓦		軒桟瓦	
型式	点数	型式	点数	型式	点数
6235Ｇ	2	6732Ｄ	1	唐草紋（図１・江戸）	3
6235Ｍａ	1	6732Ｆａ	3		
6235種別不明	1	6732Ｈ	3		
東大寺805Ａ（鎌倉）	1	6733Ａ	1		
「東大寺」文字瓦（鎌倉）	2	東大寺331Ｂ（奈良～平安）	1		
右巻巴紋（中世）	5	興福寺Ⅶ平Ｂ13（平安）	1		
左巻巴紋（中世）	2	東大寺502（鎌倉）	1		
右巻巴紋（江戸）	3	東大寺509Ａ（鎌倉）	2		
左巻巴紋（江戸）	2	文字紋（鎌倉）	2		
型式不明（奈良）	3	唐草紋（鎌倉）	1		
型式不明（中世）	3	連珠紋（鎌倉）	1		
		唐草紋（室町）	1		
		唐草紋（図２・江戸）	3		
		唐草紋（江戸）	4		
		型式不明（奈良）	2		
		型式不明（平安）	1		
		型式不明（江戸）	3		
軒丸瓦計	25	軒平瓦計	31	軒桟瓦計	3

葺きの２ないし３筋のなかに、両桟瓦を２または３筋交互に交えて葺かれてある。このような葺き方は「二平瓦葺き」と呼称されている。

「二平瓦葺き」の可能性を考え、「両桟軒瓦」が出土したＳＫ 17 出土瓦類について、丸瓦・平瓦・桟瓦の分類を試みた。分類は、桟部と一般的な桟瓦に見られる切欠きの有無、桟部、切欠きが左右いずれに位置するかなどを考慮して行った、その結果が右の表である。なお丸瓦・平瓦・両桟瓦のうち、完形に近い資料の法量についてはその下に掲げた。

端部が残っておらず、桟瓦か平瓦か区別できないものが多いが、屋根を復元するための傾向はうかがえる。ひとつ目の特徴として、丸瓦が平瓦・桟瓦に比べてかなり少ないということが挙げられる。いまひとつは両桟瓦の出土が多いとみられることである。左桟瓦といえる資料が無く、⑤の「左桟瓦か両桟瓦」とした資料はすべて両桟瓦の可能性が高いと見られる。④の「右桟瓦か両桟瓦」とした資料も、③のように切欠きを有し、右桟瓦と判断できる資料がかなり少ないことから、④に両桟瓦が占める割合も低くないと考えられる。丸瓦をさほど必要とせず、両桟瓦・平瓦を主として用いる屋根であれば、「二平葺き」であったと考えるのが妥当である。

「両桟軒瓦」と組むとみられる軒平瓦には、「両桟軒瓦」と同じくＳＫ 17 から３点出土しており、中心飾りの形状が似ることから、図示した軒平瓦（２）を挙げることができる。唐草は下方から上方へのびて、内側に巻き込む２回反転均整唐草紋である。瓦当部はやや欠失するが、平瓦部は完存する（２）と同笵の資料は幅 25㎝、全長

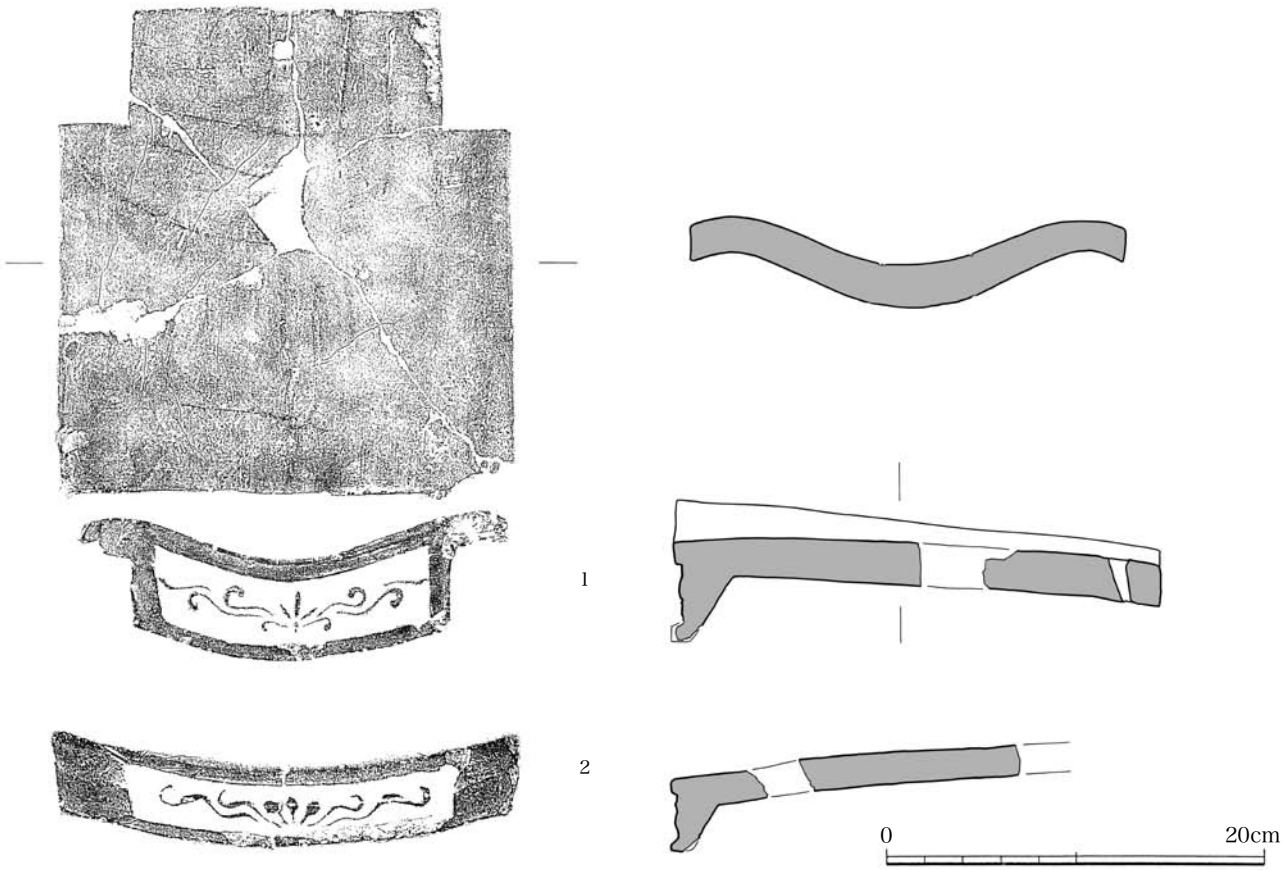
ＳＫ 17 出土丸瓦・平瓦・桟瓦集計表

番号	種類	破片数(点)	割合(%)	重量(g)	割合(%)
①	丸瓦	199	17.16	28,115	13.52
②	両桟瓦	4	0.34	5,970	2.87
③	右桟瓦	6	0.52	1,990	0.96
④	右桟瓦か両桟瓦	43	3.71	10,140	4.88
⑤	左桟瓦か両桟瓦	40	3.45	11,970	5.76
⑥	桟瓦	121	10.43	21,410	10.30
⑦	平瓦	4	0.34	8,190	3.94
⑧	桟瓦か平瓦	743	64.05	120,128	57.78
合計		1,160	100.00	207,913	100.01

ＳＫ 17 出土丸瓦・平瓦・両桟瓦の法量表

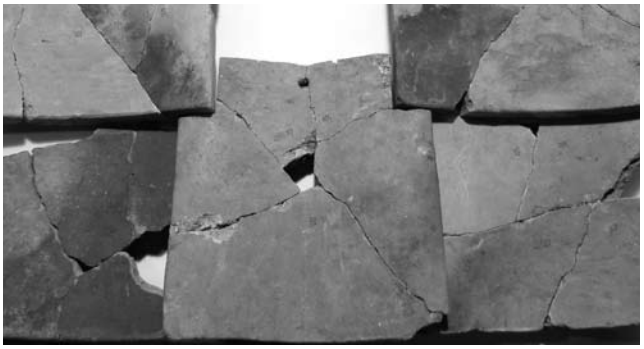
丸瓦	狭端径	広端径	全長	玉縁長	厚さ	重量
	14.0	13.0	26.0	4.0	1.7	(1,080)
	備考：広端径より狭端径のほうが長い。９割残存資料。					
平瓦	狭端幅	広端幅	全長	広端側厚さ	狭端側厚さ	重量
	23.0	24.0	26.7	2.0	1.7	2,020
	備考：完存品					
両桟瓦	幅		全長		厚さ	重量
	23.0		26.0		1.7	(1,660)
	備考：広端・狭端の差は無く、切り欠き・釘穴も無い。９割残存資料。					

凡例　１．単位については重量がｇ、その他がすべて㎝である。
２．それぞれ最も残りの良い資料１点の計測値である。丸瓦・両桟瓦は、最も残りの良い資料が９割残存のため、重量は（　）付きで記した。



ＨＪ第 605 次調査　ＳＫ 17 出土軒瓦（1/4）

想定される「二平葺き」



「両桟軒瓦」狭端部切欠きと両側の平瓦隅部との合わせ

26.2㎝、狭端部の厚さ 1.7㎝である。外縁はヨコナデで平滑に仕上げる。接合面にカキメを施した顎貼り付け式段顎である。顎面と顎部瓦当裏面はヨコナデを施す。興福寺ＸⅡ平Ａ９[7] と同笵の可能性が高い。興福寺ＸⅡ期は大きく天正８年（1580 年）から享保２年（1717 年）と区分されているが、1680 年頃まで残る瓦当上縁における中央幅広の面取り[8] は無く、1680 ～ 1717 年の製作とみられる。軒平瓦（２）の年代観から、これと組み合う「両桟軒瓦」の製作年代は 17 世紀第４四半期から、18 世紀第１四半期の間におさまると考える。

ＳＫ 17 の瓦類を用い、「二平葺き」を復元したのが上の写真である。「両桟軒瓦」の狭端部が凸字形を呈するのは、ここに軒平瓦の上に重なる平瓦の隅が当たる為と判断できる。したがって軒平瓦と、その上にくる平瓦との重ねは 6.0㎝で、軒平瓦のきき足は 20.2㎝と、全長の 77％と算出できる。また「両桟軒瓦」のきき幅は「両桟軒瓦」の桟の幅が３㎝であることから 19㎝となり、全幅の 76％と算出できる。

なお「両桟瓦」を用いた「二平葺き」は、唯一の使用例の岩国市の旧城下町でも限定的で、綿見から岩国・川西・横山地区の住宅のみに見られると報告されている。奈良の地で、なぜ岩国城下町の一部でしか見られない瓦が使用されたのか、興味深い問題である。　（原田憲二郎）

その他の遺物　ＳＸ 09 からは石臼の上臼の上縁部分の破片（110）が出土している。径は 28.0㎝で花崗岩製である。

（中島和彦）

Ⅴ　調査所見

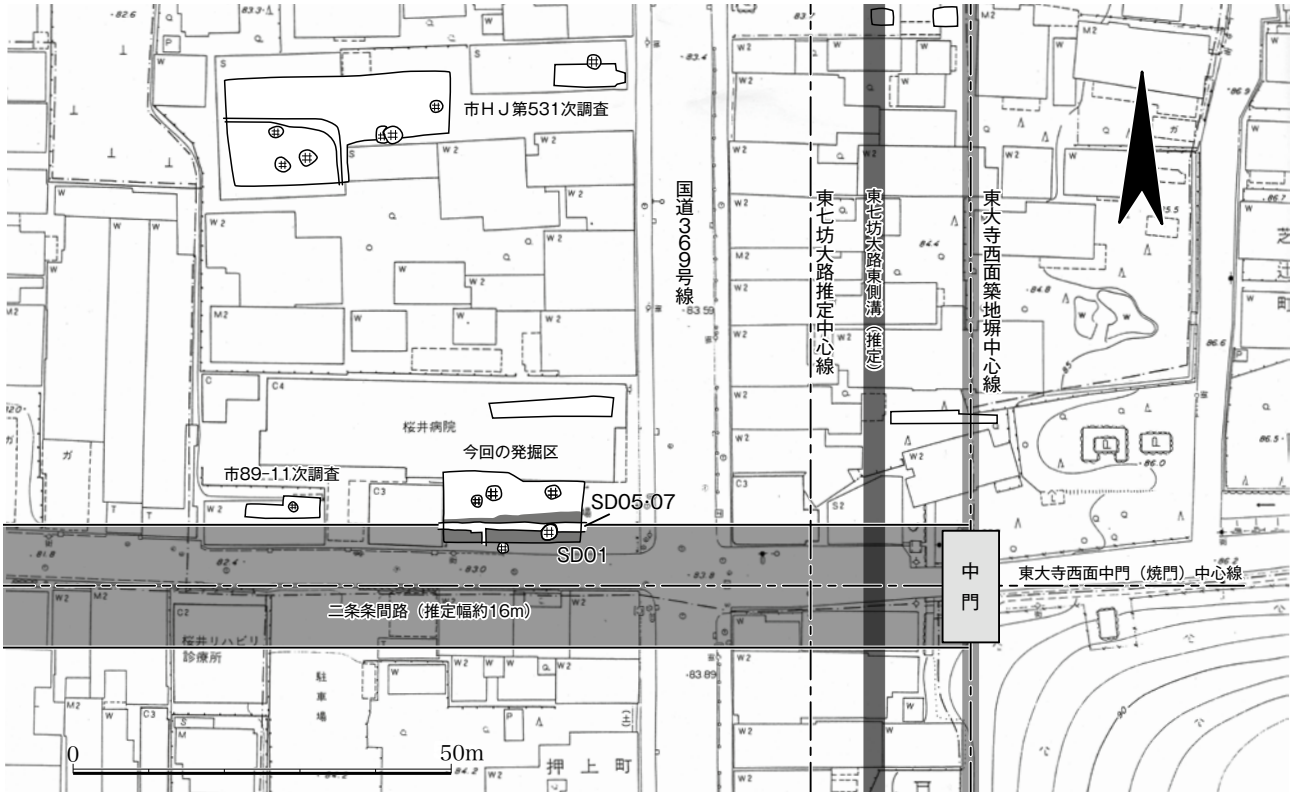
今回の発掘調査では、限られた範囲であったが、奈良～江戸時代の各時期の遺構を数多く検出した。特に奈良時代の二条条間路を検出し、奈良～江戸時代に至る道路の変遷と、室町時代以降の宅地割の変化が判明したことが注目される。

ＳＤ 01 は、東大寺西面中門（焼門）との位置関係からほぼ二条条間路北側溝の位置にあたり、出土遺物の年代からも二条条間路に関する遺構と考えられる。しかしながら、ＳＤ 01 は北岸を検出したのみで全容が判明せず、二条条間路の北側溝にあたるか、溝状に切り下げられた二条条間路自体にあたるかの２つの可能性が考えられる。出土遺物から、ＳＤ 01 は 10 世紀前半には埋没する。

二条条間路上は、ＳＤ 01 埋没後も道路として機能していたようである。11 ～ 15 世紀には、明瞭な区画施設を確認していないものの、路面上には遺構が分布しないことがそれを裏付けている。16 世紀後半には、道路と宅地の間に東西溝ＳＤ 05 他が掘られ、境界が明瞭となる。さらにその後ＳＸ 09 以東の部分で溝を一部埋立て宅地が南側に約 1.5 m拡張する。

この宅地の拡張が、道路全体一律に行われずに、ＳＸ 09 以東の部分のみに行わていることは注目される。道路部分が浸食されて宅地化することは、平安京内でも確認されているが、当調査地では平安時代以降、道路の位置はほぼ一定であったと見られる。これは東大寺の西面中門正面の道路としての性格があったためとも考えられる。道路部分への宅地の拡大は、この制約が 16 世紀後半には失われたことを示唆する。さらにＳＸ 09 を境にして東西で宅地の拡張の差が見られることから、ＳＸ 09 を境に東西２つの宅地割を想定できる。この場合、調査地東側の現在の南北道路（国道 369 号線）は中世に遡る道路であることから、この道路を超えて東側に宅地が存在するとは考えられず、ＳＸ 09 ～国道間の約 17 m内に１つ以上の宅地が収まることがわかる。これらの状況を考慮すると、調査地内には、旧二条条間路上の道路に間口をあけた南北方向の宅地が２つ想定でき、東側の宅地が間口正面部分を道路側に拡張したと考えられる。

一方、現在の今小路町は、国道 369 号線を中心にその東西に宅地がひろがり、調査地では東に間口をもつ宅地となっている。また安永２年（1773 年）の今小路町を描いた絵図「今小路北南両町大絵図券文（天保４年［1833 年］



ＨＪ第 605 次調査発掘区とその周辺（1/1,000）

写し）[9]」にも、現在と同じ宅地割りが描かれている。さらに発掘調査検出の井戸の分布からも、調査地内では 17 世紀初頭には、東に間口をもつ宅地が確認できる。

以上のことから、調査地内では 16 世紀後半には南に間口を持つ宅地が存在していたが、17 世紀初頭には東に間口をもつ現在の宅地割に変わったことがわかる。またこの時期に、旧二条条間路上の東西道路も幅を狭め、発掘区南側 3.7 mの所にある現在の道路となっている。奈良町遺跡内の町割り構造の変化を考える上で貴重な類例であろう。16 世紀末～ 17 世紀初頭の時期は、元興寺旧境内の主要伽藍地区でも大規模な造成が行われ、土地の改変が激しい時期である。これらの改変が奈良町遺跡全体に及ぶものか、部分的なものかは不明であるが、今後の発掘調査において注意する必要があろう。

最後に江戸時代の宅地内の様相を記す。先の今小路町の絵図によると、調査地は東西に長い宅地が南から３つならび､南から｢戸屋嘉兵衛｣｢油屋孫三郎｣｢墨屋利右衛門｣の宅で、それぞれ間口は「三間五尺、四間一尺、五間四尺六寸」とある。この間口の合計は現在の敷地の東端の幅とほぼ同じであり、調査地内にこれら宅地が収まっていたことがわかる。南端の「戸屋嘉兵衛」とその北「油屋孫三郎」との宅地境を、発掘区内に当てはめると、ＳＥ 11 とＳＫ 17 の間にあたり、おおよそ遺構の空白地に宅地境があることがわかり、この線上にあるＳＸ 16 は宅地境に作られた暗渠遺構となる。またＳＫ 17 の北肩が境界線に沿って直線的であること、さらにＳＥ 11 と 12 は別々の宅地の井戸であると考えれば、今小路町の絵図に描かれた宅地割は 17 世紀初頭まで遡り、江戸時代を通じて存在していたことが考えられる。

その場合、ＳＫ 17 は、後の「戸屋嘉兵衛」宅となる南端の宅地の住人が、宅地内で塵芥処理を行った遺構であり、その出土遺物も 18 世紀前半の当宅地の住人に由来するものと考えられる。　（中島和彦）

1) 藤澤良祐 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター　研究紀要　第 10』(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター　2002
2) 森下惠介・立石堅志 「大和北部における中近世土器の様相」『奈良市　埋蔵文化財センター紀要　1986』 奈良市教育委員会 1986
3) 乗岡実 「備前焼大甕編年レクチャー資料」『関西近世考古学研究Ⅸ』関西近世考古学研究会 2001
4) 鎌倉時代の東大寺の軒瓦型式番号は、奈良県教育委員会『東大寺防災施設工事・発掘調査報告書』東大寺 2000 に拠った。
5) (財) 文化財建造物保存技術協会『重要文化財目加田家住宅修理工事報告書』岩国市 1979 によると、この種の瓦は、「一般に用いられている桟瓦に対し、両傍に丸みを付けた平男瓦式の桟瓦で、土地では通称両袖瓦と」呼ばれるという。しかし「袖瓦」とは丸瓦・桟瓦の端部に「袖垂れ」が付くもので、破風に使うものと定義されている。(坪井利弘『図鑑瓦屋根』理工学社 1977) このことから「両袖瓦」の名称には疑問があり、ここでは両端に桟がある瓦、「両桟瓦」と呼び、さらに瓦当部があるものは「両桟軒瓦」の名称を用いた。
6) 大脇潔「左桟瓦紀行」『帝塚山大学考古学研究所研究報告Ⅸ』帝塚山考古学研究所 2007
7) 興福寺の軒瓦型式番号は、藪中五百樹「安土桃山・江戸時代に於ける興福寺の造営と瓦」『帝塚山大学考古学研究所研究報告Ⅶ』帝塚山考古学研究所 2005 に拠った。
8) 山崎信二『近世瓦の研究』奈良国立文化財研究所 2008
9) 個人蔵

7．平城京跡（左京五条四坊十二坪・東四坊坊間路）の調査　第606次

事 業 名	共同住宅新築	調 査 期 間	平成20年5月21日～6月17日
届出者名	個人	調 査 面 積	216㎡
調 査 地	奈良市大安寺六丁目841番1	調査担当者	久保清子

Ⅰ　はじめに

調査地は、条坊復原によると左京五条四坊十二坪の南西隅及び東四坊坊間路上に相当する。これまでに十二坪内では、調査地の東側において平成3年度に市試掘第91-5次調査を実施しており、時期不明の土坑を確認している。北隣の十一坪では、平成14年度の市ＨＪ第481次調査で古墳時代以前の溝、奈良時代の掘立柱建物、土坑を確認している。また、南側の五条大路が想定される地点では、昭和59年度の市ＨＪ第79次調査を実施しているが、旧河道内にあたるため大路を確認していない。

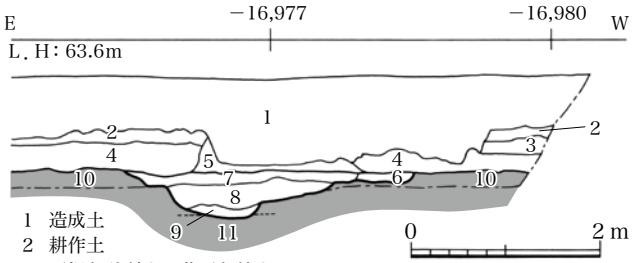
本調査は、十二坪の様相ならびに東四坊坊間路を確認することを目的として調査を行った。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本層序は、北端で造成土（0.6～0.7 m）、耕作土（0.1～0.2 m）と続き、現地表下0.8 mで黄灰色粘土の地山となる。南端では耕作土の下に、灰褐色砂質土と黄灰色粘土の混合土（0.1～0.2 m）、その下に12～13世紀の遺物を含む灰褐色砂質土（0.2～0.3 m）が堆積し、現地表下1.0 mで黄灰色粘土の地山となる。地山面は北から南に向かって緩やかに下がっており、その標高は、北端で62.5 m、南端で62.2 mである。遺構検出作業はすべて地山上面で行った。

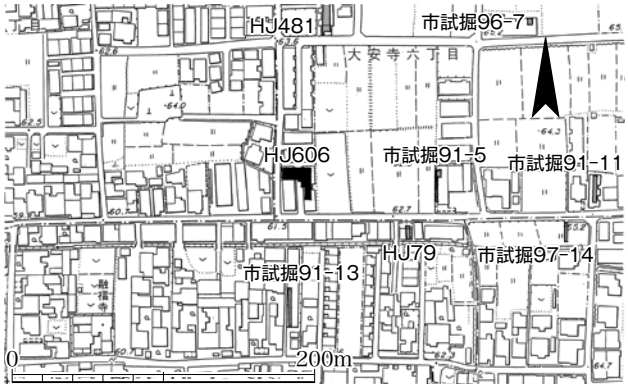
Ⅲ　検出遺構

検出遺構には奈良時代の東四坊坊間路（ＳＦ01）及び同東側溝（ＳＤ02）、井戸1基（ＳＥ03）、掘立柱列2条（ＳＡ04･05）、江戸時代の土坑11基（ＳＫ06～16）がある。各遺構の概要は一覧表にまとめた。



1　造成土
2　耕作土
3　灰褐色砂質土と黄灰色粘土
4　灰褐色砂質土
（12～13世紀の遺物を含む）
5　灰色砂質土と茶灰色粘土（旧畦畔土）
6　黄灰色粘土と灰色砂
7　灰茶色砂質土
8　茶灰色粘土と灰色粘砂
9　灰褐色砂
10　黄灰色粘土（地山）
11　黄灰色砂（地山）
（6～9はＳＤ02埋土）

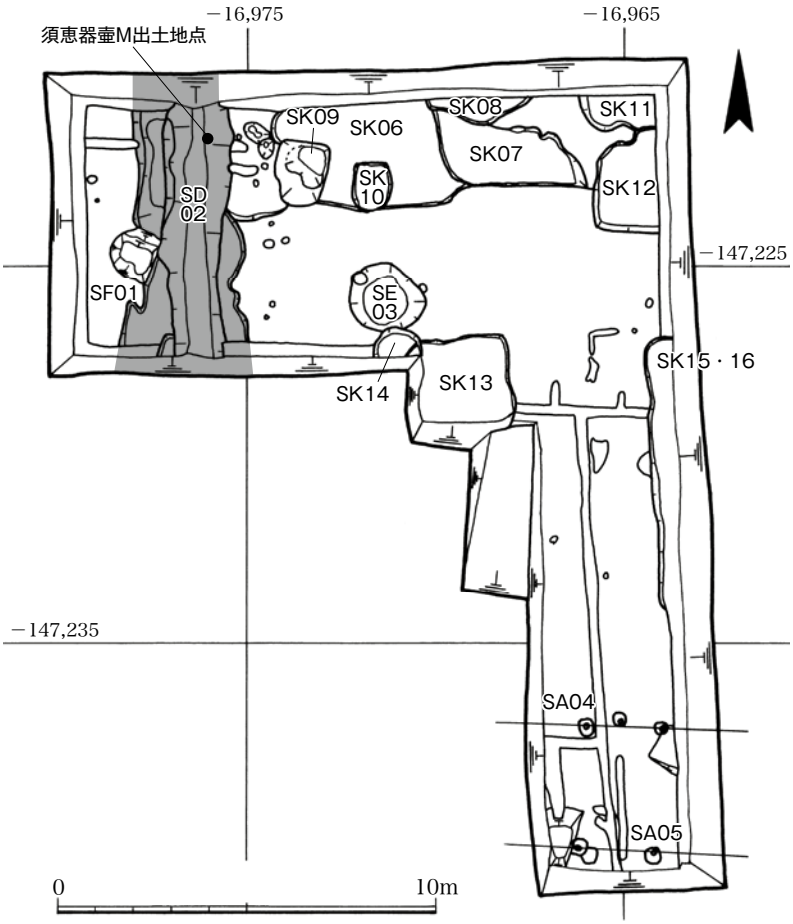
東四坊坊間路東側溝ＳＤ02土層図（1/80）



ＨＪ第606次調査　発掘区位置図（1/5,000）

発掘区全景（南から）

発掘区北半（西から）



ＨＪ第 606 次調査 遺構平面図（1/200）

坊間路東側溝 SD02 須恵器壷M出土状況（北から）

井戸ＳＥ 03（東から）

奈良時代の遺構　ＳＦ 01 は東四坊坊間路、ＳＤ 02 は同東側溝である。ＳＦ 01 の路面幅は、東側溝西肩から 1.5 m分を検出している。西側溝は発掘区外のため、坊間路の幅員は不明である。東側溝ＳＤ 02 最深部の国土座標値は、Ｘ＝−147,220.80、Ｙ＝−16,976.50 で、調査地北側の五条四坊地点（市ＨＪ第 459-1 ～４次調査）で検出している坊間路東側溝最深部との振れは、Ｎ 0° 10′ 8″Ｅである。また、溝底の標高は北端で 61.8 m、南端 61.7 m と南に向かって低くなっており、南側の五条大路との交差点に向かって排水していたことが考えられる。東側溝ＳＤ 02 の埋土は、基本的に上から灰茶色砂質土、茶灰色粘土と灰色粘砂の混合土、灰褐色砂の順に堆積し、埋土中からは、８世紀後半～末頃の土器などが遺物整理箱２箱分出土している。出土遺物の大半は破片であるが、中層埋土中からは、須恵器壷Mが２点接する状態で出土した。２点とも口縁部分が欠損している。壷内には上半部に土が入っていたのみで、他に内容物はなかった。

十二坪内では、東側溝ＳＤ 02 の約３m東で井戸ＳＥ 03 を検出した。枠材はすべて抜き取られている。枠抜き取り穴の埋土中には３㎝前後の炭が多量に含まれていることから、当初据えられていた枠の底には、濾過装置としてこれらの炭が敷かれていたことが考えられる。掘形埋土中からは８世紀後半頃の土器や木製品、桃核などが少量出土した。枠抜き取り穴の埋土中からは、８世紀後半～末頃の土器、緑色ガラス片１点などが遺物整理箱２箱分出土した。

この他、坪の南端にあたる地点では、東西方向の掘立柱列ＳＡ 04・05 を検出した。いずれも、主軸が国土方眼方位に対し西でやや北に振れている。

江戸時代の遺構　発掘区東半で土坑ＳＫ 06 ～ 16 を検出した。掘形の平面形は隅丸方形・円形・不整形で、検出面からの深さは 0.4 ～ 1.1 m と様々であるが、埋土はいずれも黄灰色粘土ブロックと灰色砂質土もしくは茶灰色砂質土との混合土である。埋土中からは、16 世紀後半から 17 世紀にかけての土師器・国産陶磁器片などが少量出土している。調査地周辺には、良質の粘土層が厚く堆積していることから、これらの土坑は粘土採掘を目的として掘削されたものと考えられる。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱 10 箱分の遺物が出土した。遺物には時期不明のサヌカイト製楔型石器・剥片、古墳時代前期の土師器、古墳時代中期の埴輪、８世紀後半～９世紀初頭の土師器、

須恵器、黒色土器、墨書土器、線刻土器、製塩土器、土製品、軒平瓦、丸瓦、平瓦、木製品、石製品、鋳造関連遺物、12～13世紀の須恵器・瓦器・焼締陶器、16世紀後半～17世紀の土師器、信楽産陶器擂鉢、肥前産染付碗などがある。

このうちＳＥ03枠抜き取り穴の出土土器には、土師器杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂか皿Ｂ・皿Ａ・皿Ｃ・杯か皿蓋・高杯、須恵器杯か皿・壷・壷蓋・甕、製塩土器の破片などがある。土師器、須恵器ともにその出土量の過半数を食器類が占める。土師器の杯Ａと皿Ａは口縁部下半から底部外面にかけてヘラケズリで仕上げている。また、土師器杯か皿の底部外面に「十」と墨書されているものや、皿Ｃの口縁端部に煤が付着しているもの、判読不明の墨書がある須恵器杯Ｂか皿Ｂ、墨痕のある須恵器杯または皿及び蓋、口縁部内面に漆が付着している杯または皿がある。

Ⅴ　調査所見

今回、東四坊坊間路及び同東側溝を検出した。西側溝は、調査地西側に隣接する現道路下にあるものと想定される。東側溝は、北から南に下がる地形に沿って五条大路との交差点に向かって排水されていたものと考えられる。調査地北側の市ＨＪ第459-1～４次調査（左京五条四坊七・九・十坪）においても同坊間路を検出しているが、東側溝は五条条間北小路に向かって北へ排水されており、同じ五条地点でも地形条件により、排水経路が異なることが考えられる。

十二坪の様相については、坪の南西隅に井戸と東西方向の掘立柱列を設けているが、坪の西端を限る掘立柱列等の閉塞施設については、今回の調査では見つからなかった。平安時代以降には、耕作地として利用する他、江戸時代に粘土採掘を行っていた時期があることがわかる。

（久保清子）

ＨＪ第606次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		備　　考
		桁行×梁行	(m)	(m)	桁　行	梁　行	
ＳＡ04	東西	1以上	2.1以上		2.1		柱穴の深さ0.4 m。
ＳＡ05	東西	1以上	2.1以上		2.1		柱穴の深さ0.4 m。

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	主な出土遺物	備　　考
ＳＦ01	南北道路	路面幅1.5 m分、長さ6.5 m分検出			東四坊坊間路。
ＳＤ02	南北溝	幅2.3～3.5 m、長さ6.5 m以上	0.5～0.8	古墳時代中期：円筒埴輪、８世紀後半～９世紀初頭：土師器杯・皿・高杯・壷・甕、須恵器杯・皿・蓋・壷・鉢・甕、黒色土器Ｂ類、製塩土器、土馬、軒平瓦（6671Ｉ・6716Ｆ）、丸瓦、平瓦、鉄滓	東四坊坊間路東側溝 最深部座標値 Ｘ＝−147,220.80、 Ｙ＝−16,976.50
ＳＥ03	円形	径1.9～2.0 m	1.0	**（掘形）**時期不明サヌカイト製楔形石器・剥片、８世紀後半：土師器杯・皿・蓋・高杯・甕、須恵器杯・皿・蓋・壷・甕・平瓶、製塩土器、平瓦、斎串、棒状木製品、桃核、砥石 **（枠抜取穴）**古墳時代前期：土師器甕、８世紀後半～末：土師器杯・皿・蓋・高杯・甕、須恵器杯・皿・壷・壷蓋、墨書土器、線刻土器、製塩土器、平瓦、曲物、燃えさし、切炭、緑色ガラス片	枠は抜き取られている。 枠底には濾過用に炭敷があったことが考えられる。 枠抜き取り穴出土の土師器・須恵器はともに食器類が過半数を占める。
ＳＫ06	不整形	東西4.5以上×南北3.0以上	0.6	16世紀後半～17世紀：国産陶器擂鉢（信楽産）、土師器皿・羽釜、須恵器甕、瓦質土器片、格子平瓦	ＳＫ07・08・09・10より古い。
ＳＫ07	不整形	東西3.5×南北2.0	0.5	出土遺物なし	ＳＫ08より古くＳＫ06より新しい。
ＳＫ08	不整形	東西2.8×南北1.0以上	0.5	出土遺物なし	ＳＫ06・07より新しい。
ＳＫ09	隅丸方形	東西1.4×南北1.8	0.6	須恵器壷、平瓦	ＳＫ06より新しい。
ＳＫ10	隅丸方形	東西1.0×南北1.3	0.4	16世紀後半～17世紀：土師器羽釜、須恵器片、平瓦、格子平瓦	ＳＫ06より新しい。
ＳＫ11	不整形	東西2.4以上×南北1.2以上	0.6	13世紀：焼締陶器甕（常滑産）、16世紀後半～17世紀：国産磁器染付椀（肥前産）、須恵器甕、土師器片、平瓦	ＳＫ12より古い。
ＳＫ12	不整形	東西2.0以上×南北2.8	0.8	須恵器甕、土師器皿、瓦片	ＳＫ11より新しい。
ＳＫ13	隅丸方形	東西2.8×南北2.4以上	1.1	須恵器甕、丸瓦、平瓦	ＳＫ14より古い。
ＳＫ14	円形	東西1.3×南北0.8以上	0.6	16世紀後半以降：土師器皿、平瓦	鎌倉時代の遺物包含層上面から掘られている。
ＳＫ15	不整形	東西0.7以上×南北3.7	0.4	丸瓦、平瓦	ＳＫ16より古い。
ＳＫ16	不整形	東西0.7以上×南北7.5	0.8	出土遺物なし	ＳＫ15より新しい。

8．平城京跡（左京四条二坊五坪・四条条間南小路）の調査　第607次

事 業 名	社宅付配送センター新築	調 査 期 間	平成20年6月2日～6月26日
届出者名	株式会社　共栄商会	調 査 面 積	264㎡
調 査 地	奈良市尼辻町乙454-2他	調査担当者	池田裕英

Ⅰ　はじめに

調査地は平城京の条坊復原では左京四条二坊五坪の北西隅に位置し、北辺に四条条間南小路が、西辺に東二坊坊間西小路が通ることが想定される場所にあたる。調査地周辺では、過去に四条二坊三坪で平成7年度に市ＨＪ第346次調査[1)]、平成18年度に市ＨＪ第550次調査[2)]を実施している。第346次調査では奈良時代の掘立柱建物、掘立柱塀、井戸の他、5世紀末葉の方墳1基を検出した。ＨＪ第550次調査では奈良時代の掘立柱建物、掘立柱塀、河川などとともに古墳時代の溝2条を検出し、この溝からは川西編年Ⅳ期の円筒埴輪、盾、鳥形などの形象埴輪が出土している。

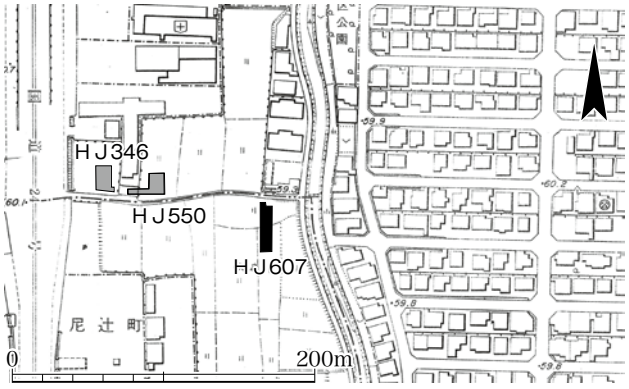
このように本調査地周辺の発掘調査では、奈良時代の遺構の他、古墳時代の遺構を検出していることから、この調査においても坪境小路の検出や宅地内の様相を把握するとともに、奈良時代以前の遺構・遺物の広がりを確認することを目的として調査を行った。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本的な層序は、造成土の下に黒褐色土、灰褐色砂質土、暗灰褐色砂質土と続き、現地表下約1.6mで暗褐茶色土もしくは黄褐色土（地山）となる。遺構は全てこの暗褐茶色土、黄褐色土上面で検出した。暗褐茶色土は後述する奈良時代以前の溝の埋土である。遺構検出面の標高は概ね58.4mである。

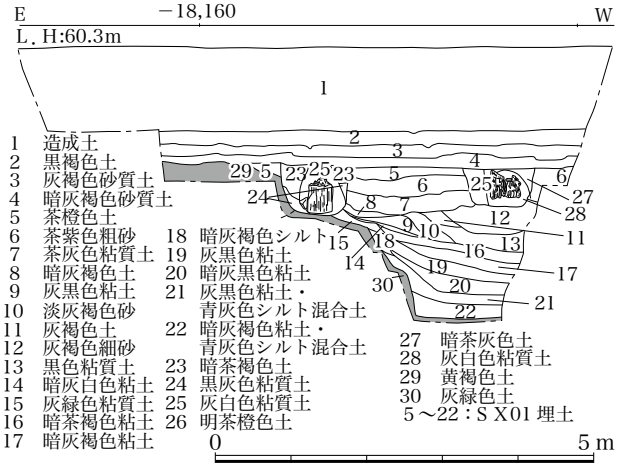
Ⅲ　検出遺構

検出した遺構には、奈良時代以前の溝、奈良時代の四条条間南小路とその両側溝、掘立柱建物、掘立柱塀、土坑、井戸、江戸時代の土坑がある。

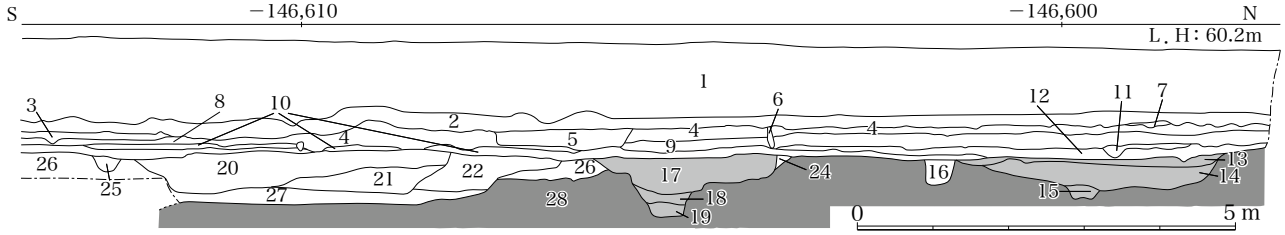


ＨＪ第607次調査　発掘区位置図（1/5,000）

奈良時代以前の遺構　ＳＸ01は幅4.3m以上、深さ2.2mの溝で、溝底は北東から南東にむけて低くなる。埋土は灰褐色から黒灰色の粘土が堆積しており（南壁土層図5～22）、流水が少なく、滞水していたような状態であったと考えられる。上層の埋土の堆積状況から、最終的には人為的に埋められたと思われる。遺物が出土しな



ＨＪ第607次調査　発掘区南壁壁土層図（1/100）



1 造成土	5 青黄褐色土	9 青褐色土	13 暗灰茶色粘質土	17 暗茶灰色土	21 暗灰褐色粘質土	25 灰茶色土
2 黒褐色土	6 明黒褐色粘質土	10 暗黄灰色砂質土	14 暗橙茶色土	18 暗茶灰色土	22 明灰褐色粘質土	26 暗褐茶色土
3 明黄灰色砂質土	7 暗灰紫色土	11 暗黄灰色土	15 灰褐色土	19 暗黒灰色粘質土	23 灰紫粘質土	27 茶橙色土
4 黄褐色土	8 黄灰色土	12 明黄褐色粘質土	16 明黄褐色粘質土	20 明茶灰色土	24 灰黄色粘質土	28 黄茶色土

（13～15はＳＤ03埋土、17～19はＳＤ04埋土、28は地山）

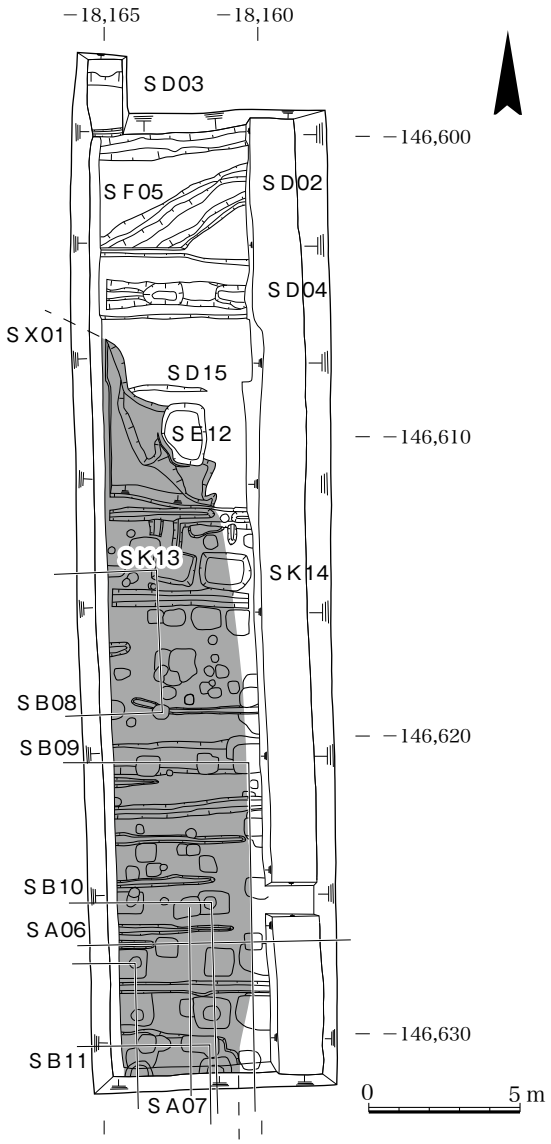
ＨＪ第607次調査　発掘区西壁土層図（1/100）

ＨＪ第 607 次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模 (桁行 × 梁行)	桁行全長 m	梁行全長 m	桁行柱間寸法 m	梁行柱間寸法 m	廂の出 m	備　考
ＳＡ 06	東西	2 以上	2.7 以上		2.7			ＳＢ 09 より新しい
ＳＡ 07	南北	2 以上	3.0 以上		3.0			ＳＢ 10 より古い
ＳＢ 08	東西？	2 以上 ×3	1.5 以上	4.5	1.5	1.5		
ＳＢ 09	南北？	5 以上 ×2 以上	10.4 以上	3.3 以上	2.4–1.8–2.4–1.8–1.8	3.3		
ＳＢ 10	東西？	1 以上 ×3 以上	–	3.6 以上	–	1.8 等間	2.4	掘形底に礎盤
ＳＢ 11	不明	1 以上	1 以上	東西 2.4m 以上	–	東西 2.4		

遺構番号	掘形	井戸枠	主な出土遺物・備考
ＳＥ 12	東西 1.7m× 南北 2.1m	残存しない	土師器・須恵器・黒色土器、奈良時代末頃に枠を抜き取り

遺構番号	平面形	平面規模（m）	深さ（m）	主な出土遺物	備　考
ＳＤ 03	東西溝	幅 3.0、長さ 4.8	0.5	8 世紀：土師器・須恵器	四条条間南小路北側溝
ＳＤ 04	東西溝	幅 2.2、長さ 4.8	0.7 ～ 1.0	8 世紀：土師器・須恵器	四条条間南小路南側溝
ＳＫ 13	隅丸方形	東西 1.5、南北 1.0	0.3	18 世紀：陶器	
ＳＫ 14	隅丸方形	東西 1.7、南北 1.2	0.5	18 世紀：陶器	

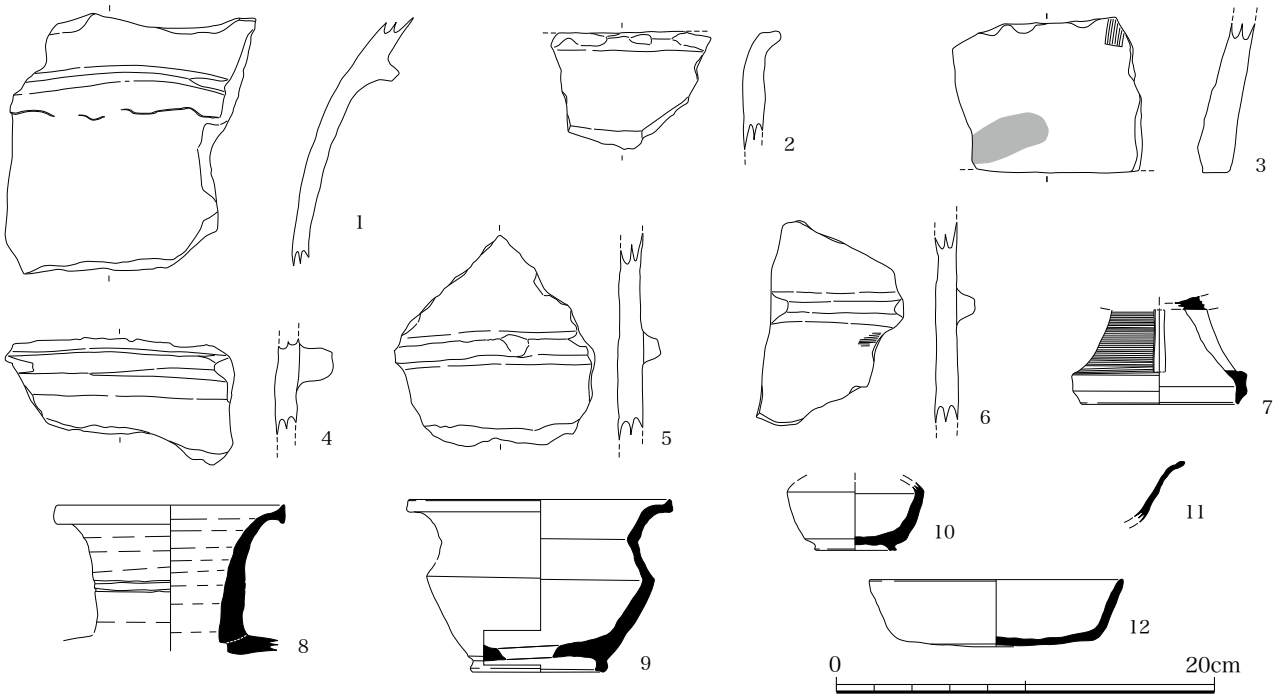


ＨＪ第 607 次調査　発掘区遺構平面図（1/250）

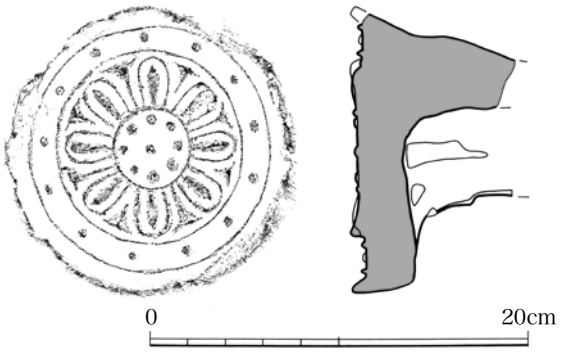
かったたため、時期は不明である。ＳＤ 02 は北東–南西方向の斜行溝で、重複関係から後述するＳＤ 04 より古い。幅 1.5m、深さ 0.2m である。埋土から奈良時代の遺物が出土し、奈良時代に埋められたと考えられる。

奈良時代の遺構　ＳＤ 03 は四条条間南小路北側溝、ＳＤ 04 は同南側溝、ＳＦ 05 は四条条間南小路路面である。ＳＤ 03 は幅 3.0m、深さ 0.5m、ＳＤ 04 は幅 2.2m、深さ 0.7 ～ 1.0m。いずれも２段掘りで、下段部の断面は逆台形状である。ＳＦ 05 は路面幅約３m、側溝心心間距離（側溝の最深部間距離）は 5.6m で、道路心の国土座標値は X=–146,602.5、Y=–18,163 である。ＳＡ 06 は東西方向の掘立柱列で、柱間は 2.7m。ＳＡ 07 は南北方向の掘立柱列としたが、建物の側柱の可能性もある。柱間は 3.0m。ＳＢ 08 は南北棟建物の東半部と考える。桁行３間（4.5m）、梁行１間（1.5m）を検出した。柱間は桁行、梁行とも 1.5m。ＳＢ 09 は南北棟建物の一部と考える。桁行５間（10.4m）、梁行１間（3.3m）分を検出した。発掘区外西、南に続く。柱間は桁行 1.8 ～ 2.4m、梁間 3.3m。ＳＢ 10 は東西棟建物の北東隅部と考える。発掘区外西、南へ続く。北・東面に廂が付く。身舎部分の梁行は 1.8 m、廂の出は 2.4m。柱掘形の底に石や磚を用いて礎盤にしているものがある。掘形から８世紀後半の軒瓦が出土した。ＳＢ 11 は発掘区外西、南へ続く建物の北東隅と考えておきたい。柱間は 2.4m。ＳＥ 12 は東西 1.7m、南北 2.1m の平面隅丸方形で、深さは 1.1 mである。湧水が激しいことから、枠が抜き取られた井戸跡と思われる。埋土から８世紀後半の土師器、須恵器、黒色土器が出土した。

江戸時代の遺構　ＳＫ 13 は東西 1.5m、南北 1.0m、深さ 0.3m、ＳＫ 14 は東西 1.7m、南北 1.2m、深さ 0.5m のいずれも平面隅丸方形の土坑で、ＳＫ 14 から 18 世紀中頃以降の信楽焼・唐津焼片が出土し、ＳＫ 13 も同時期と考えておきたい。



ＨＪ第 607 次出土土器（1/4）



ＨＪ第 607 次調査　出土軒丸瓦（1/4）

Ⅳ　出土遺物

今回の調査では遺物整理箱にして 16 箱分の遺物が出土した。出土遺物には古墳時代の円筒埴輪、須恵器、奈良時代の土師器、須恵器、黒色土器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、磚、平安時代の灰釉陶器、江戸時代中頃以降の信楽焼・唐津焼片がある。

古墳時代の遺物

埴輪　発掘区の広範囲にわたって出土し、破片数で 50 点以上ある。出土した埴輪には円筒埴輪（2 ～ 6)、朝顔形埴輪（1)、形象埴輪（盾？）があるが、いずれも小片で摩滅が激しい。円筒埴輪は口縁の形態がわかる例は 2 のみで、端部が外側に屈曲する。体部はヨコハケ調整が認められる例（1）がある。厚さ 0.9 ～ 1.3cm、タガの高さは 0.8 ～ 1.4cm である。底部片（3）の下端付近に黒斑がある。埴輪は川西編年Ⅳ期に位置づけられるものであろう。 1 のみＳＤ 15 出土で、それ以外は SX01 の発掘区南端部で出土したものである。

須恵器　高杯（7）はＳＤ 03 から出土した。短脚で、三あるいは四方向透しである。脚部外面をカキ目で調整している。田辺編年ＴＫ 23 からＴＫ 47 の幅で考えておきたい。　(池田裕英)

奈良時代の遺物

瓦　瓦塼類は遺物整理箱で 6 箱分出土した。大半は丸瓦・平瓦であるが、軒丸瓦 4 点、軒平瓦 1 点、塼 10 点がある。軒丸瓦は全て柱穴から出土しており、ＳＢ 08 東側廂北から 2 つ目の柱掘形から 6133 Ｄａ種 1 点、6134 Ｄ種 1 点、6133Db 種 1 点（『平城宮調査報告ＸＶ』による分類のⅡ段階）が、同じく 3 つめの柱掘形から 6133 Ｄ種 1 点、6801 Ａ種が出土した。図示した 6134 Ｄ種は既存の瓦当文様を補うものである。今回の資料で弁数が単弁 8 弁であることと外区内縁の珠文数が 13 個であることが判明した。　(山前智敬)

土器類　8 ～ 10・12 は須恵器である。 8 はＳＤ 14 から出土した長頸壷である。頸部に 2 条の沈線がみられる。頸部の接合方法は 3 段構成である。 9 はＳＤ 15 から出土した壷Ｈで、口径 13.8cm（復原)、器高 9.2cm。底部が穿孔されている。10 はＳＤ 16 から出土した。ミニチュアの壷であろう。底部外面に「×」のヘラ記号がある。12 はＳＥ 12 から出土した杯Ａで、口縁部内外面ともロクロナデである。

平安時代の遺物　11 はＳＫ 13 から出土した灰釉陶器椀である。内外面ともロクロナデで調整している。

Ⅴ　調査所見

今回の調査で最も時期の古い遺構は、遺物が出土しな

発掘区全景（南から）

ＳＤ03・04・ＳＦ05（北西から）

ＳＸ01断面（北から）

ＳＢ08礎盤・柱根（西から）

かったため時期は特定できないが、重複関係からみてＳＸ01である。第550次調査で奈良時代に埋められる河川03の西肩を検出しているが、その埋土が基本的に砂であるのに対して、ＳＸ01は粘土であり、埋土に違いがある。ＳＸ01がこの河川の東肩になるかどうかは現状では不明である。あるいは、埋土が黒色～灰褐色粘土であり、滞水していたようであることや調査区全域から埴輪が出土していること、付近で古墳が検出されていることなどから推測すれば、ＳＸ01が古墳の周濠である可能性も考えられるのかもしれない。

奈良時代の遺構では、当初の想定通り四条条間南小路を検出した。ＳＤ03とＳＤ04の側溝心心間距離を溝の最深部で測ると5.6mとなる。小路の多くは幅員が約6mであり、それらと比べると若干狭い。溝から出土した遺物からみると奈良時代に埋まったと考えられる。ＳＤ04の南に幅3m程の遺構のない部分があり、遺構としては残らないような閉塞施設があった可能性も考えられる。なお、発掘区西辺に想定された東二坊坊間西小路は検出されなかったことから、小路はさらに西にあるものと考えられる。発掘区南半部では奈良時代の掘立柱建物や掘立柱塀を検出した。発掘区の幅が狭いため規模がわかるものはなく、敷地内の建物配置などはわからない。建物はＳＤ01が埋まった部分に建てられており、地盤が弱かったためか柱掘形の底に石や磚などを置いて礎板にしているものがいくつかみられた。建物の位置や重複関係から3時期以上の宅地の変遷が考えられる。

平安時代以降の遺構としては江戸時代の土坑（ＳＫ13・14）があるが、湧水が激しく、東西方向の素掘り溝とともに水田耕作にともなう遺構と考えられる。

以上のことから、奈良時代以前、この地域には古墳や溝があったが、平城京造営に伴い土地が造成され、宅地化されたとみられる。そして都が長岡京に遷ってからほどなくして宅地としては使われることはなくなり、水田化が進んでいった様子を窺うことができる。（池田裕英）

1)「4平城京左京四条二坊三坪の調査 第346次」『奈良市埋蔵文化財発掘調査概要報告書』平成8年度　1997奈良市教育委員会
2)「平城京左京四条二坊三坪の調査　第550次」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成18年度』 2008　奈良市教育委員会

9．平城京跡（左京四条一坊二坪）の調査　第609次

事 業 名	賃貸住宅新築	調 査 期 間	平成20年7月7日～8月4日
届出者名	個人	調 査 面 積	200㎡
調 査 地	奈良市四条大路三丁目966-1他	調査担当者	原田香織

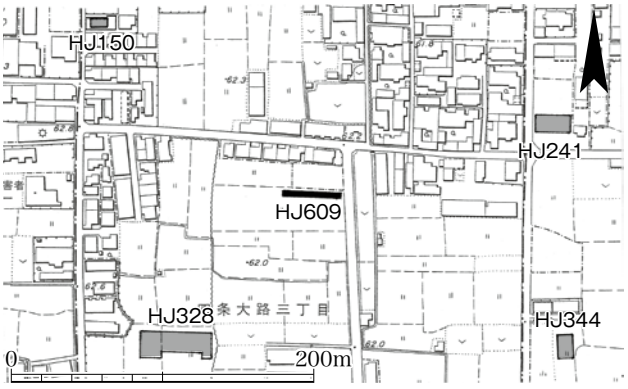
Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によると左京四条一坊二坪の東半部北寄りに相当する。二坪の調査としては、平成7年度市ＨＪ第328次調査で、弥生時代の溝・土坑、下ッ道、朱雀大路、四条条間路などを検出した際に二坪南西隅を確認したが、宅地内の調査は今回が初めてである。

調査は、道路敷設予定部分に東西40ｍ、南北5ｍ、面積200㎡の発掘区を設定し、平城京の宅地内の様相の確認を目的に行った。また、ＨＪ第328次調査で、弥生時代の遺構を検出しており、奈良時代以前の遺構の有無の確認も合わせて行った。

Ⅱ　基本層序

上から黒灰色砂質シルト（耕作土）、淡灰色砂質土（床土）、明黄茶灰色粘質土（床土）と続き、発掘区東端部では地表下約0.3ｍで奈良時代の遺構面である旧河川堆積土（古墳時代の遺物を包含する淡黄灰色シルトなど）上面に至る。標高は概ね61.85ｍである。しかし発掘区のほとんどの部分では、同一面からさらに淡灰茶色粘砂土（16世紀以前の遺物包含層）があり、旧河川堆積土上面の標高は概ね61.7ｍとなる。



ＨＪ第609次調査　発掘区位置図（1/5,000）

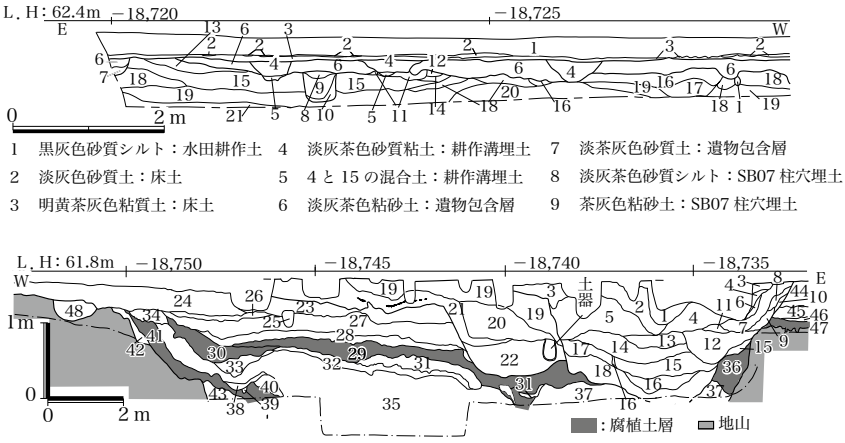
遺構検出は、旧河川堆積土上面で行った。

Ⅲ　検出遺構

主な検出遺構には、古墳時代の河川に平行する溝（ＳＤ01）、奈良時代の掘立柱建物6棟（ＳＢ02～07）・溝1条（ＳＤ08）・土坑2基（ＳＫ09・10）、整地1（ＳＸ11）、平安時代以降の耕作溝（ＳＤ12他）、16世紀以降の土坑5基（ＳＫ13～17）がある。

古墳時代の遺構

発掘区内は全面が旧河川堆積土に覆われており、そこから古墳時代の土器が出土したため、発掘区南半に東西



1　黒灰色砂質シルト：水田耕作土
2　淡灰色砂質土：床土
3　明黄茶灰色粘質土：床土
4　淡灰茶色砂質粘土：耕作溝埋土
5　4と15の混合土：耕作溝埋土
6　淡灰茶色粘砂土：遺物包含層
7　淡茶灰色砂質土：遺物包含層
8　淡灰茶色砂質シルト：SB07柱穴埋土
9　茶灰色粘砂土：SB07柱穴埋土
10　淡灰褐色粘砂：SB07柱穴埋土
11　淡灰黄色砂質シルト（土器片含む）
12　淡灰褐色粗砂
13　淡灰黄色シルト質砂
14　灰白色シルト質砂
15　淡黄灰色シルト
16　灰白黄色シルト質細砂
17　灰白黄色細砂
18　淡黄灰色シルト質砂
19　淡灰褐色砂（炭・土器片含む）
20　淡灰色砂（炭片含む）
21　淡灰茶色粘土
※　11以下旧河川埋土

1　灰色砂質シルト
2　黄茶灰色シルト質細砂
3　黄灰色砂質シルト
4　白灰色砂・細砂互層
5　淡灰色シルト・灰白色細砂
6　茶灰色砂質シルト
7　淡灰色シルト・砂互層
8　灰褐色粘砂土
9　灰色砂質シルト
10　灰褐色砂質シルト
11　淡灰色砂
12　淡灰茶色粗砂
13　灰白色砂・シルト互層
14　灰白色砂・シルト互層
15　淡灰色粗砂・中粒砂互層
16　灰色シルト質砂
17　淡灰色砂
18　淡灰色中～粗砂
19　淡灰色シルト砂混じり
20　淡灰色シルト・灰白色細砂
21　淡灰色砂質シルト（黒褐色腐植薄層含む）
22　灰色粗砂
23　淡灰色砂・粘土互層
24　淡灰褐色砂質粘土
25　撹乱土
26　灰色砂質粘土
27　灰色シルト・淡灰色細砂互層
28　灰色シルト質砂
29　暗灰色砂質シルト
30　黒褐灰色粘質土
31　灰青色シルト質砂
32　暗灰色砂質シルト
33　灰色砂質シルト
34　灰色粘土・青灰色粘土混じり
35　青灰色細砂・シルト
36　暗灰色シルト質粘土
37　淡灰色砂
38　オリーブ灰色シルト質粘土
39　灰青色砂質シルト
40　青灰色中～粗砂
41　黒色シルト・灰色シルト質粘土・砂
42　灰色砂質シルト・粘土混合
43　オリーブ灰色シルト
44　淡灰茶色砂質シルト
45　淡灰色砂
46　黄白灰色砂質シルト
47　暗灰色粘土
48　灰茶色砂：SD01埋土

ＨＪ第609次調査　上：発掘区南壁土層断面図（1/100）・下：補足調査区北壁古墳時代河川土層図（縦1/100　横1/200）

23 mの補足調査区を設定し、人力や重機によって掘削した。その結果、発掘区中央付近をほぼ北から南へ流れる河川を検出した。奈良時代の遺構検出面からの深さは東肩で0.7 m、西肩で0.4 mである。補足調査区北壁での川幅は16.8 mであるが、河川を斜めに横断しているので、実際には少し狭くなる。埋土の主体が砂であり、湧水が激しく危険であるため、奈良時代の遺構検出面から深さ2.1 m（標高59.64 m）までしか確認できなかった。断面観察からは、全体がある程度埋まった段階で、2回ほど位置を東へ変えた小規模な流路があり、それらの埋土が最終的に周辺を覆った様子が窺える。河川掘削底付近で古墳時代前期前半の土師器、埋土上層から古墳時代中期中～後半の土師器・須恵器が出土した。また、上層に重複する小規模流路埋土や、発掘区全体を覆っている埋土から古墳時代中期後半～末の土師器・須恵器が出土した。

ＳＤ01　河川の西側に平行する素掘りの溝。奈良時代の遺構検出面から東肩までの深さは0.4 m、西肩までの深さは0.2～0.3 m。溝幅1.0 m。溝底の標高は北端で61.13 m、南端で61.09 m。埋土は灰茶色砂。河川と共に埋没する。

奈良時代の遺構

ＳＢ02～07　掘立柱建物6棟のいずれも発掘区外へ続いており、全容が分かるものはない。各建物の詳細は一覧表にまとめた。

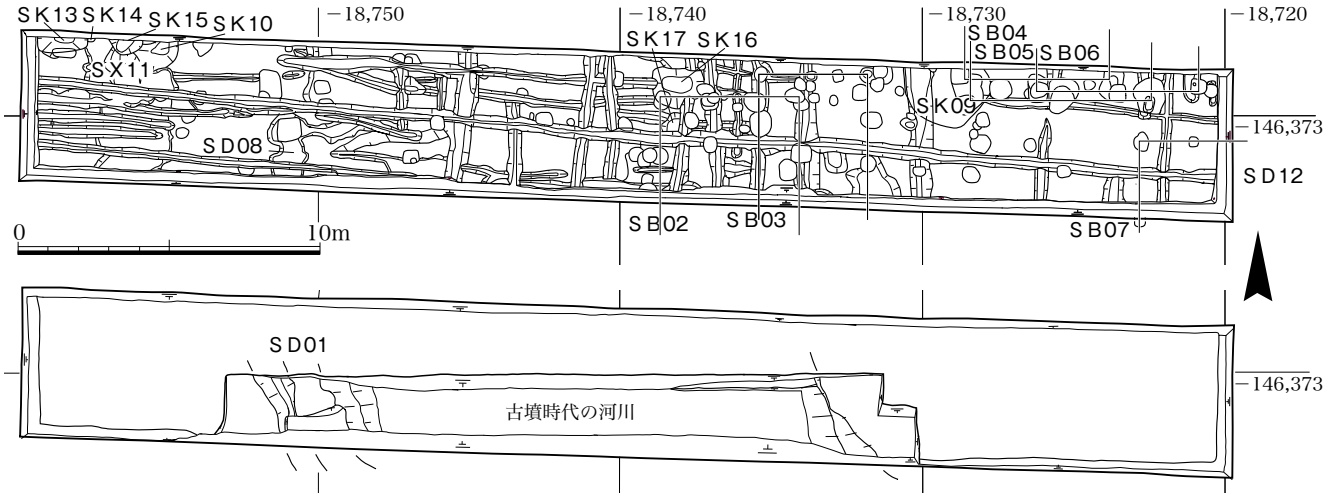
ＳＢ02から8世紀後半の土師器杯または皿・甕、須恵器杯・杯または皿・杯蓋・壷・甕、ＳＢ05から5世紀と6世紀の須恵器杯身、8世紀後半の土師器杯または皿・高杯・甕、須恵器杯または皿・壷・鉢・甕、ＳＢ06・07から8世紀後半～末の土師器杯・皿・甕、須恵器杯・杯蓋・皿・甕が出土した。ＳＢ03からはこれらに加えて8世紀末～9世紀初頭の黒色土器Ａ類も出土した。ＳＢ04は8世紀の土師器杯または皿・甕が出土したが小片のため詳細な時期は不明である。この他に丸瓦・平瓦、製塩土器、鉄滓が出土した。

柱穴は発掘区全体で検出したが、建物としてまとまらないものが多い。浅くて確認できないもの以外は、すべて柱を抜き取っている。また、東半にくらべて西半ではまばらになり、深さも東半では0.05～0.6 m、西半では0.05～0.35 mと浅くなる傾向がある。

ＳＤ08　発掘区西側で検出した南から東へＬ字に曲がる素掘りの溝。溝の続きが南壁で確認できないことから南端はその直前まで、東端は耕作溝と重複する付近とみられる。遺構検出面からの深さは、南端で0.05 m、東端で0.15 m。埋土は淡灰色砂質シルトである。8世紀の土師

ＨＪ第613次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		備　考
		桁行×梁行	(m)	(m)	桁行	梁行	
ＳＢ02	東西	3×1以上	4.5	1.8以上	1.5等間	1.8–	柱穴の深さ：妻柱西0.35、東0.45、北側柱西から0.5・0.35・0.4・0.35 m。
ＳＢ03	南北	2以上×2	3.0以上	3.6	1.5等間	1.8等間	柱穴の深さ：妻柱0.15、西側柱北から0.3・0.3、東側柱北から0.55・0.5・0.4 m。
ＳＢ04	南北	？×2		4.8		2.4等間	柱穴の深さ：妻柱0.45、その他0.5・0.45 m。ＳＢ05より新しく、ＳＢ06より古い。
ＳＢ05	南北	？×2		6.0		3.0等間	柱穴の深さ：妻柱0.35、その他0.4・0.25 m以上。ＳＫ09より新しく、ＳＢ04より古い。
ＳＢ06	南北	？×2		5.4		2.7等間	柱穴の深さ：妻柱0.4 m、その他0.5・0.4 m。ＳＢ04・05より新しい。
ＳＢ07	南北？	1以上×1以上	2.4以上	1.8以上	2.4–	1.8–	柱穴の深さ：妻柱0.1、その他0.4・0.4 m。



ＨＪ第609次調査　上：発掘区遺構平面図・下：補足調査区遺構平面図（1/250）

器杯または皿・甕、須恵器壷が出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。

ＳＫ09　発掘区東側で検出した土坑で、発掘区外北へ続く。掘形の断面形は、東半では椀形、西半では台形状に底が広くなる。底面は平坦である。深さは0.5 m。埋土は茶褐灰色砂質土にブロック状の地山（灰白色シルト・暗灰色粘土）が混合したもので、上部の一部に淡灰茶色砂質土、底面の一部に薄く灰色粘質砂礫がある。７世紀末～８世紀初頭の須恵器杯蓋、８世紀の土師器杯または皿・甕、須恵器甕、丸瓦が出土した。ＳＢ04・05よりも古い。

ＳＫ10　発掘区西端で検出した土坑で、発掘区外北へ続く。深さは0.3 m。埋土は淡茶灰色細砂。重複関係からＳＸ11よりも古い。８世紀の土師器高杯･甕が出土した。

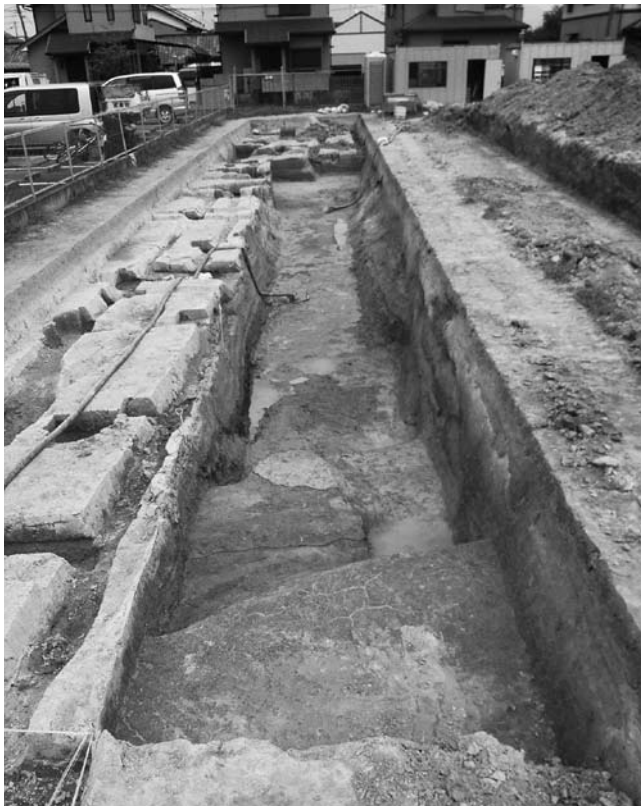
ＳＸ11　発掘区西端で検出した浅い凹みで、南へ行くほど薄くなり、発掘区南壁の手前で終わる。深さは北東部で0.18 m、中央付近で0.07 m、南端で0.02 mである。埋土は北部が茶褐灰色土、南部が茶灰色砂質土。８世紀後半の土師器杯または皿・杯蓋・甕、須恵器杯・杯蓋・皿・甕、丸瓦・平瓦、製塩土器が出土した。この部分の地盤面は、旧河川埋土のシルト質砂で、かなり軟弱であるため、これを埋めて整地したものと考える。

その他の遺構

平安時代以降の耕作溝　東西方向と南北方向の溝がある。東西溝は方眼方位西で北に振れる。南北溝は、東西溝とほぼ同角度に方眼方位北で東に振れるものと、北でやや西に振れるものとがある。埋土は淡灰色～淡灰茶色砂質粘土である。すべて奈良時代の遺構よりも新しく、南北溝は淡灰茶色粘砂土よりも古いものと新しいものがあり、それらよりも東西溝が新しい。さらに発掘区西部では東西溝よりも新しい南北溝がある。これらのうち、東西溝ＳＤ12は、発掘区を横断して発掘区外に続いているもので、他の耕作溝が断面半月形で深さ0.15 m前後を中心に0.05～0.25 mであるのに対して、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立つ断面箱形をしている。深さは東端で0.25 m、西端で0.35 mである。埋土は上下２層に分かれ、上層は淡灰茶色砂質粘土、下層は茶灰色粘質土である。５世紀の土師器甕、須恵器杯蓋と８世紀後半～末の土師器杯・杯または皿・椀・高杯・甕、須恵器杯・杯蓋・皿・鉢・壷・壷蓋、８世紀末～９世紀初頭の黒色土器Ａ類、丸瓦・平瓦、製塩土器、流紋岩製砥石、漆の塊が出土した。さらに他の耕作溝から軒丸瓦（型式不明１点）、軒平瓦（6721型式Ａ種１点）、鉄釘、鉄滓、取瓶が出土した。

ＳＫ13～17　ＳＫ13～15は発掘区西側で、ＳＫ16・17は発掘区中央付近で検出した。前三者は発掘区外北に続く。深さは番号の若い順から0.3 m、0.15 m、0.25 m、0.3 m、0.15 mである。埋土はいずれも灰色砂質土で、耕作溝や淡灰茶色粘砂土よりも新しい。ＳＫ15・17か

発掘区全景（東から）



補足調査区全景（西から）

ら８世紀の土師器杯または皿・甕、須恵器杯・杯蓋・杯または皿・鉢・壷・甕、丸瓦・平瓦が、ＳＫ16からはこれらに加えて14～16世紀の土師器羽釜・皿、16世紀の天目茶碗が出土した。ＳＫ13・14からの出土遺物はなかった。

Ⅳ　出土遺物

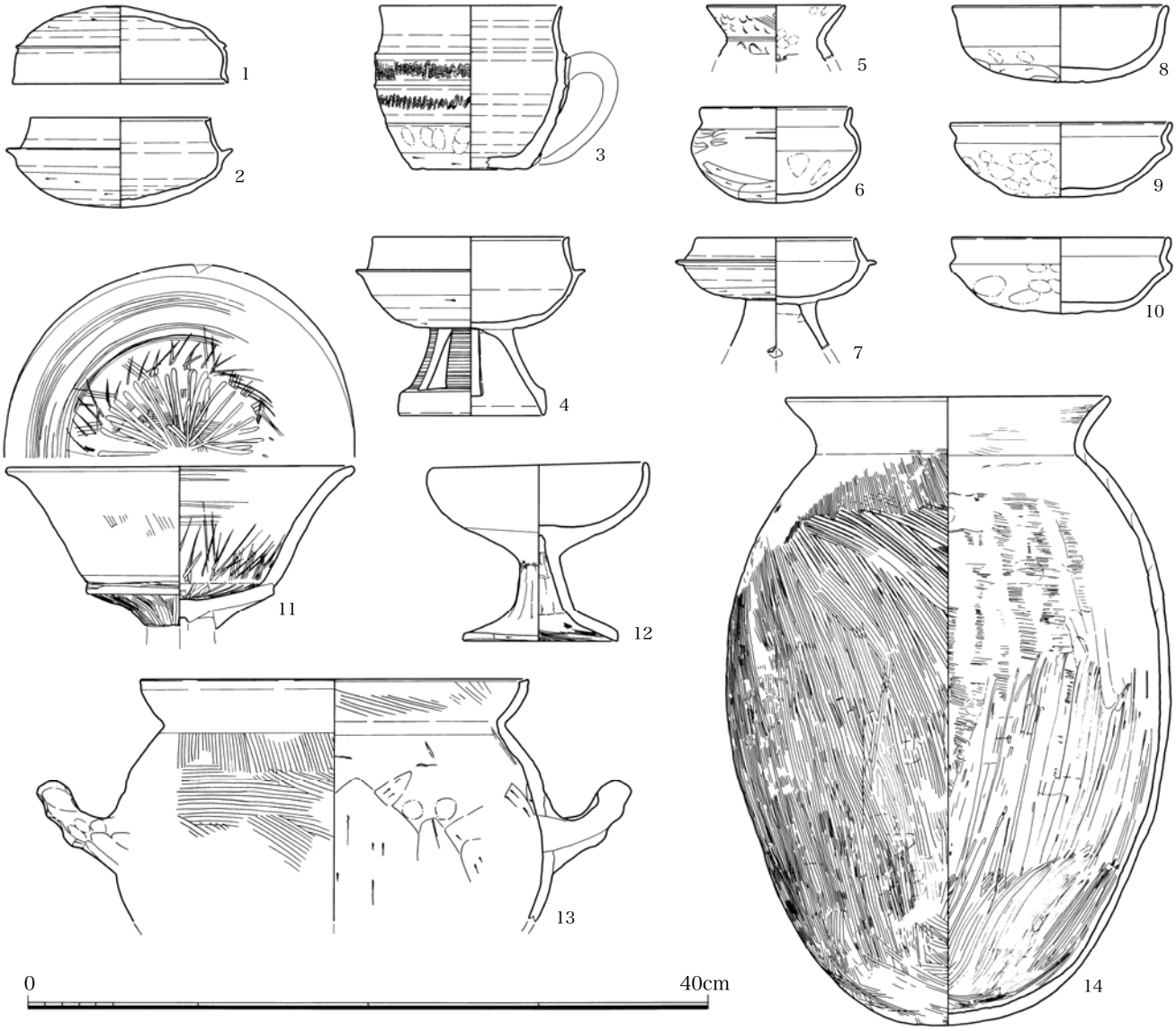
古墳時代の河川から土器類、木製品、サヌカイト剥片、モモ核、ウリ種、奈良時代の各遺構や時期が下る耕作溝・土坑・遺物包含層から、奈良時代の瓦類（軒丸瓦6282Ｂａ１点・6703Ａ１点・型式不明２点、軒平瓦6271Ａ１点、6721種別不明１点・型式不明２点）・土器類・金属製品・鋳造関係品、漆の塊、室町時代の土器類などが、遺物整理箱で28箱分出土した。これらのうち、古墳時代の河川から出土した遺物について記す。　（原田香織）

古墳時代の河川出土遺物

古墳時代の河川は層位と重複関係によって、西半部に厚く土砂が堆積するＡ期と東半部に流路が偏るＢ期に分かれる。そして、Ａ期の堆積層は中位に堆積する腐植土層を境にして上下層に分かれ、Ｂ期の堆積層は砂を主体とする下層とシルトが堆積する上層に大きく分かれる。ここからは遺物整理箱７箱分の須恵器・土師器、３箱分の木製品が出土した。

河川Ａ期出土土器　須恵器杯蓋・把手付椀、土師器甕・高杯・壷・鍋・製塩土器が出土している。図示した須恵器把手付椀（３）と土師器高杯の有稜大型品（11）･鍋（13）は下層出土品である。11は硬質の窖窯焼成品。

腐植土層出土土器は、土師器甕・高杯・製塩土器に限られる。土師器甕には球形と長胴形があり、土師器高杯には有稜大型品１点・椀形品（12）８点・形状不明10点がある。両者の比率は甕20％・高杯80％で、高杯の出土率が非常に高い点は平城宮下層ＳＤ6030上層[1]と共通する。



ＨＪ第609次調査　出土土器実測図（1/4）

製塩土器は器壁が薄く砂粒を含まない筒形の小型品で、外面ナデの破片が多いものの、外面タタキの破片も少量認められる。紀淡海峡周辺に分布するものと同類だろう。

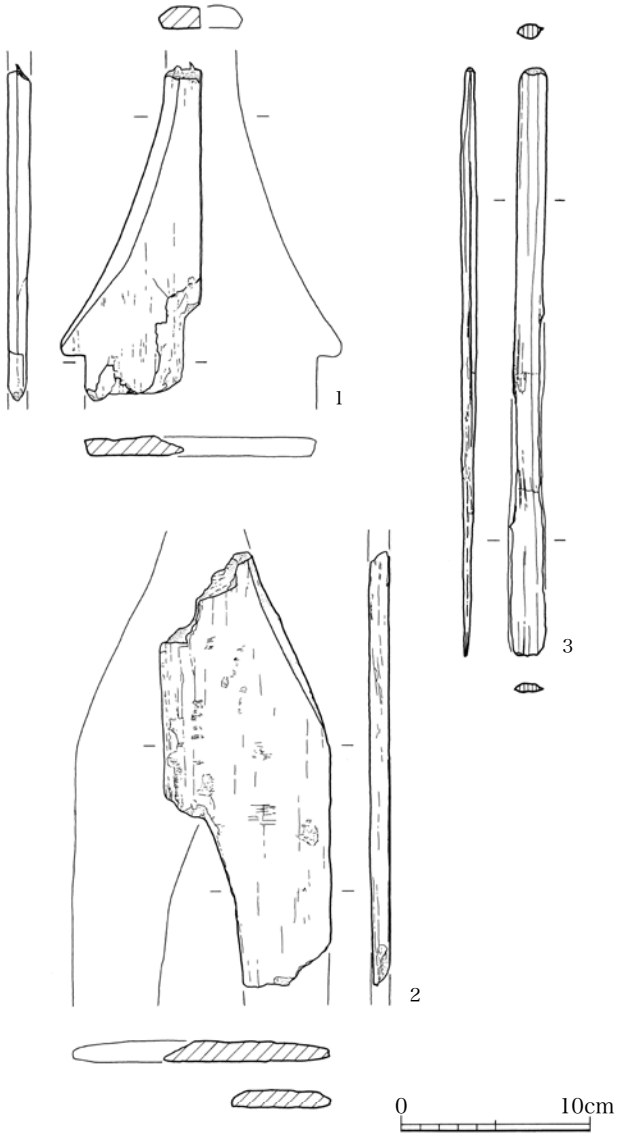
なお、湧水が激しく河川底まで掘削できなかったが、下層の下位に堆積する砂層から庄内～布留式古相の土器が若干出土しており、旧河川の上限時期を推察させる。

河川Ｂ期出土土器　須恵器には、杯〔蓋26点・身35点・分別不明32点〕・有蓋高杯〔身６点・蓋４点〕・無蓋高杯４点・壷５点・甕42点・甑３点・器台２点の破片がある。その中心はＴＫ208～ＴＫ47型式で、ＴＫ216型式・ＭＴ15型式の個体が少量認められる。下層からＴＫ216～ＴＫ208型式、上層からＴＫ23～47型式が出土する傾向を看取できる。図示した須恵器有蓋高杯（7）は下層出土品、杯身（２）・杯蓋（１）・有蓋高杯（４）は上層出土品である。

土師器には甕〔41％〕・高杯〔37％〕・杯〔７％〕・鉢〔１％〕・壷〔８％〕・器台〔１％〕・甑〔２％〕・鍋〔１％〕があり、他に製塩土器〔３％〕がある。鉢・器台は小型品で、Ａ期と比べて甕の出現率が高くなり、杯が新たに加わる。甕では、長胴甕（14）の比率が高く75%を占める。高杯には、有稜〔32%〕・無稜〔16%〕・椀形〔51%〕があり、椀形が約半数を占める。杯は口縁部の形態によって、Ｓ字状に強く屈曲するａ類（９・10）〔14点〕、内湾するｂ類〔４点〕、直立して短く外反するｃ類（８）〔１点〕、内湾した後に直立するｄ類〔１点〕に分類でき、ａ類の出土比率が高い。種別が判明する壷は少ないが、口縁部～肩部の外面に竹管文を付ける小型壷片（５）が１点認められる。図示した土師器甕（14)・杯（８・10)・壷（６）は下層出土品、杯（９）・壷（５）は上層出土品である。

製塩土器はＡ期の出土品と同類である。　（鐘方正樹）

河川出土木製品[2)]　曲柄又鍬・鍬・農具柄・杓子形木器・杭・板材・カゴ残欠がある。１は曲柄平鍬Ｄ式または又鍬Ｄ式で、いわゆるナスビ形である。残存長17.9㎝、残存幅7.4㎝、厚さ1.1㎝。２は曲柄又鍬である。ＣⅡ式かＤⅢ式かは不明であるが、供伴土器の時期からＤⅢ式となる可能性が高い。残存長22.9㎝、残存幅9.1㎝、厚さ1.2㎝、刃部復原幅13.8㎝。３は杓子形木器である。柄と身は直線を成し、身は柄よりもやや幅広く、両側や先に向けて薄く作る。全長31.1㎝、柄幅1.5㎝、身残存幅1.9㎝、厚さ0.8㎝。３点とも河川Ａ期上層から出土した。



ＨＪ第609次調査　出土木製品実測図（1/4）

Ⅴ　調査所見

今回の発掘調査で、古墳時代前期～中期後半の河川と溝を検出した。平城宮周辺で同時期の遺構が確認されているが、遺物の残存状態は非常に良好で、流されたことによる摩耗がほとんどみられないことから、調査地近辺にも同時期の遺構が存在する可能性が考えられる。当初想定した弥生時代の遺構はなかった。

奈良時代については、柱穴は浅いものが多く、全体的に後世の削平を受けていると考えられるが、発掘区西半においては特に柱穴が希薄で建物としてまとまるものがない。このことは、ある時期空閑地であった可能性を示すものと考える。発掘区西端から朱雀大路東側溝までは約45ｍで、この部分は坪内北半中央付近に相当する。また、建物の重複関係から少なくとも３回の建て替えが行われていたことが判明し、二坪における宅地利用状況を解明する手掛かりが得られた。　（原田香織）

1)　『平城京発掘調査報告　Ⅹ』　奈良国立文化財研究所　1981
2)　木製品の型式は『史料第36冊　木器集成図録　近畿原始篇』奈良国立文化財研究所　1993による。

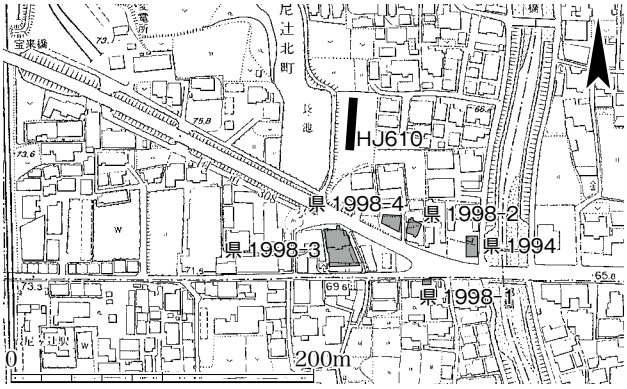
10. 平城京跡（右京三条二坊五坪）の調査　第610次

事 業 名	共同住宅新築	調 査 期 間	平成20年7月31日～8月21日
届出者名	個人	調 査 面 積	238㎡
調 査 地	奈良市尼辻北町327-1	調査担当者	大窪淳司

Ⅰ　はじめに

調査地は平城京の条坊復原では右京三条二坊五坪の北西部に相当する。同坪内南半部の調査[1)]では、坪を東西に二分する奈良時代中葉の区画溝や柱列、近世の粘土採掘坑、秋篠川の旧流路等が見つかっている。本調査は、坪内北西部の様相確認を主目的として実施した。

なお、調査地は西から東へ緩やかに下がる傾斜地に位置し、農業用貯水池「長池」の東隣に位置する。付近の貯水池が谷地形に造成されていることから、調査地全体が谷地形内に位置する可能性も考えられた。



ＨＪ第610次調査　発掘区位置図（1/5,000）

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本層序は、現代の耕作土（暗灰色砂質シルト）の下に床土（橙色砂質シルト）、旧耕作土（灰白色砂質シルト）と続き、現地表下0.3～0.5ｍで黄白色シルト質極細砂の地山となる。ただし発掘区南側の一部では、旧耕作土の下に８世紀の土器片を含む黄灰色砂質シルトがあり、この直下で褐灰色シルトの地山となる。地山上面の標高は、67.4～67.5ｍで南西から北東へ緩やかに下がる。遺構検出は地山上面で行った。

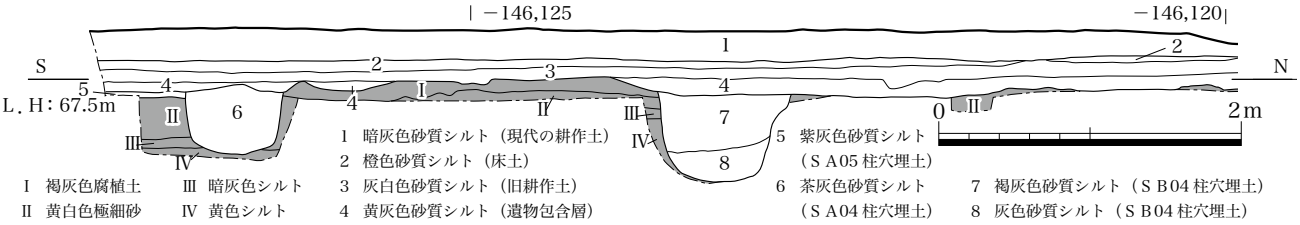
Ⅲ　検出遺構

ほぼ発掘区全域に遺構が分布するが、地山の標高がやや高い発掘区南半で遺構密度が高い。検出遺構には奈良時代の掘立柱建物６棟、掘立柱列４条、土器埋納遺構１基があり、また、時期不明の土坑２基、溝２条がある。このうち掘立柱建物と柱列の概要については、表にまとめた。以下、主要な遺構について述べる。

掘立柱建物・柱列　掘立柱建物は、方位に対する主軸方向から、ほとんど振れのないもの（ＳＢ02・06）、北

ＨＪ第610次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	規　模	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		主軸方向	備　　考
	桁行(間)×梁行(間)	(m)	(m)	桁行	梁行		
ＳＢ01	2×4	7.5	3.6	2.1-1.8-1.8-1.8	1.8等間	N 03° 29′ 0″ E	間仕切りあり。重複関係からSB02より新。
ＳＢ02	2×2	4.8	3.6	2.4等間	1.8等間	南北	
ＳＢ03	2×3	1.5以上	1.8以上	1.5	1.8	N 01° 20′ 0″W	間仕切りあり。重複関係からＳＡ09より新。
ＳＢ04	2以上×3以上	7.2以上	5	2.4等間	不明	E 02° 10′ 30″N	柱抜取り埋土から多量の瓦片と、８世紀後半～末の土器が出土。平行する柵列の可能性あり。
ＳＢ05	3×2以上	4.5	1.5以上	1.5等間	1.5	N 02° 37′ 20″W	Ｌ字に曲がる柱列の可能性もあり。ＳＢ04より古。
ＳＢ06	1以上×2	2.7以上	4.2	2.7	2.1等間	E 00° 15′ 00″N	
ＳＢ07	1以上×2	2.1以上	3.4	2.1等間	1.7等間	N 03° 58′ 00″W	重複関係からＳＡ11より古。
ＳＡ08	1以上	1.9以上		1.9		E 00° 58′ 50″N	
ＳＡ09	3以上	5.4		1.8		N 02° 23′ 20″W	重複関係からＳＢ05より新、ＳＢ04より古。
ＳＡ10	2以上	5.1以上		2.7-2.4		N 02° 09′ 40″W	
ＳＡ11	2以上	4.8以上		2.4等間		E 03° 52° 10″N	掘立柱建物の可能性もあり。
ＳＡ12	1以上	2.4以上		2.4		E 01° 08° 20″N	掘立柱建物の可能性もあり。

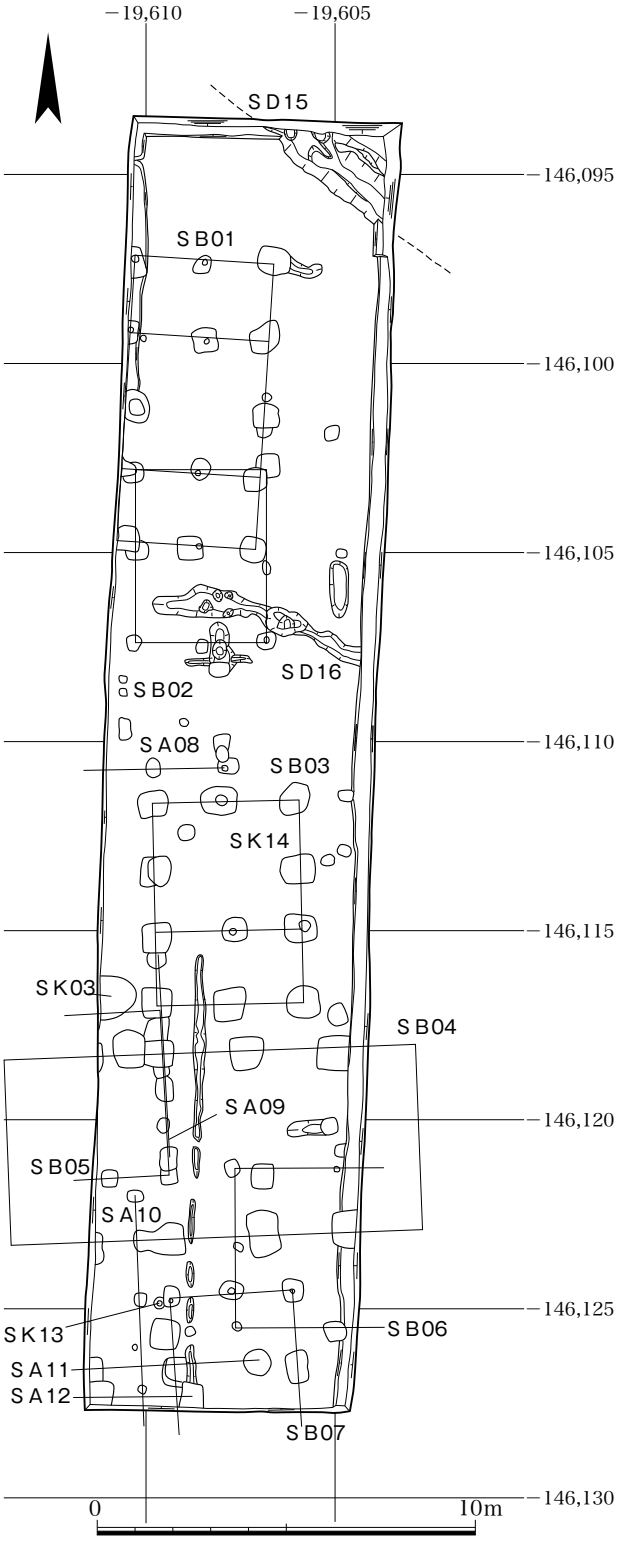


ＨＪ第610次調査　西壁土層断面図（1/50）

に対し約３°東に振れるもの（ＳＢ01)、北に対し西、あるいは東に対し北に約１～４°振れるもの（ＳＢ03～05・07）の３群に分けられる。また柱穴の規模から、一辺0.6 m以上の柱穴の建物（ＳＢ01・03・04)、一辺0.5 m前後の柱穴が大半を占める建物（ＳＢ02・05～07）の２群に分けられる。柱穴の深さは0.1～0.3 mと浅いものが多く、かなり削平を受けていると考えられるが、ＳＢ04のみ約0.6 mと際だって深い。また大半の建物からほとんど遺物が出土しないのに対し、ＳＢ04のみ柱の抜取埋土から８世紀後半～末の土器と多量の瓦が出土するなど、他と異なった特徴が認められた。

掘立柱列は発掘区南半にあり、柱穴の規模が一辺0.5 m以下の比較的小さな柱列（ＳＡ08・10）と、一辺0.6前後の柱列（ＳＡ09・11・12）がある。柱穴の深さは、ＳＡ11が0.5 m前後と最も深く、この他は0.1～0.2 mと浅い。出土遺物には８世紀の土師器・須恵器の細片がある。また主軸方向の振れがＳＢ03～05・07とほぼ共通し、重複関係からＳＡ09がＳＢ04より古い。

ＳＫ13　発掘区南端部で検出した直径約0.3 m、深さ約0.04 mの円形土坑で、内部に８世紀の須恵器壷Ａ・壷Ａ蓋を埋納する。後世の削平により壷底部から約４cm分しか残っておらず、壷口縁部と蓋の破片は中から検出された。細片化した銅銭が表面に露出するため、Ｘ線撮影を実施したところ、壷内部に銅銭４枚（和同開珎２・不明２）を確認した。銅銭の一部には布が付着し、壷底部には緑錆を一部に帯びた平面台形状の付着物(長さ5.5㎝・最大幅4.2㎝）が残存する。炭化種実１点が内部から出土した。重複関係からＳＢ07より古い。



ＨＪ第610次調査 発掘区遺構平面図（1/200）

発掘区全景（北から）

発掘区全景（南東から）

ＳＫ 14　発掘区中央部で検出した直径約 0.5 m、深さ約 0.05 mの円形土坑である。底面の地山直上に直径約 3.5 mの円形礫敷があり、礫には直径３～７cm のチャート製円礫が用いられていた。時期を示す出土遺物がなく、時期不明である。

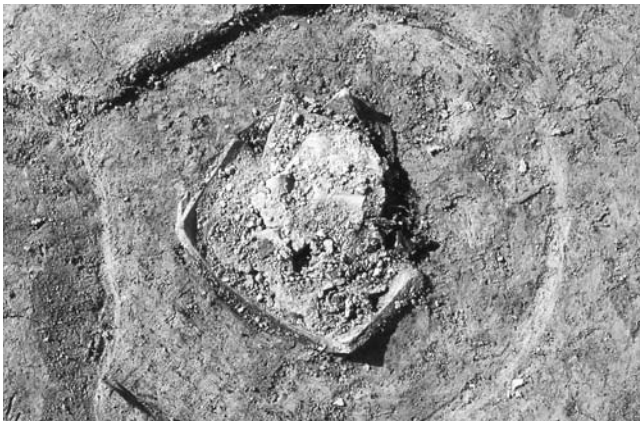
ＳＫ 15　発掘区南部の西壁際で検出した短径１.1 m、長径１m以上、深さ約 0.4 mの土坑である。埋土から８世紀の土師器の細片が出土した。

ＳＤ 16　発掘区北東隅で検出した幅約 2.0 m以上、深さ約 0.6 mの溝の一部である。埋土は橙色細砂・茶灰色極細砂・灰色粗砂等の水成堆積層で構成され、少なくとも４時期に区分できるが、出土遺物はなかった。

ＳＤ 17　発掘区中央で検出した幅 0.3 ～ 0.9 m、深さ約 0.1 ～ 0.5 mの溝である。埋土は灰白色細砂の水成堆積層で、８世紀の土師器の細片が１点出土した。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱３箱分の遺物があり、その内訳は古墳時代の形象埴輪（盾形１・不明１）と８世紀の土師器・須恵器が２箱、８世紀の丸瓦・平瓦が１箱である。大半がＳＢ 04 からの出土であるが、他にＳＫ 13 出土の須恵器壷Ａ・壷Ａ蓋１点とこの内部に納められていた銅銭４枚（和同開珎２、不明２）がある。



ＳＫ 13 須恵器壷Ａ出土状態（北から）

ＳＫ 14（南西から）

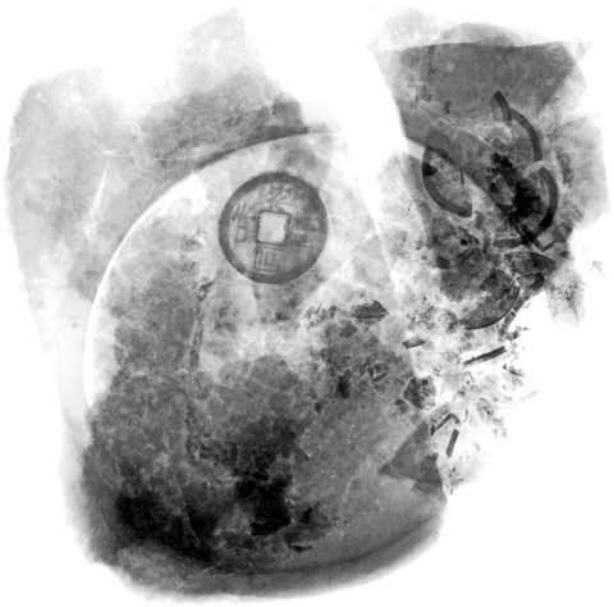
Ⅴ　調査所見

谷地形内部に位置するという当初の予想に反し、比較的浅い位置で多数の奈良時代遺構を検出し、銅銭４枚等を納めた土器埋納遺構を発見することができた。

掘立柱建物や柱列は、詳細な時期を特定できる遺物がほとんどないものの、重複関係から奈良時代末までに少なくとも３時期以上の変遷があることが分かり、とりわけＳＢ 04 が他と一線を画した建物であったことが窺える。また、建物位置からは、発掘区南半でＳＢ 03・07 の西側柱列やＳＢ 05 の東妻柱列、またＳＡ 14 の柱列が南北一列に並ぶ。県 1998 の一連の成果から、この付近に坪の東西１/４ラインを想定できるが、このラインを重視する何らかの意図があったのかもしれない。

地形に関しては、発掘区北東隅へ向かって地山が緩やかに下がることや、調査地北側の水田が周囲より一段低いことから、調査地北側が谷地形となる可能性が高い。ＳＤ 15 が谷を流れる流路の一部となる可能性もあろう。したがって、長池は谷地形に造成されたのではなく、むしろ西から東へ延びる微高地の一部を掘削して造成されたと考えられる。また、遺構は地山の標高の高まりと共にその密度を増すが、これは近接する谷地形に制約を受けているのかもしれない。　（大窪淳司）

1）　奈良県教育委員会 1995「平城京右京三条二坊五坪の調査」『奈良県遺跡調査概報 1994 年度』
奈良県教育委員会 1998「平城京右京三条二坊五坪の調査」『奈良県遺跡調査概報 1998 年度』



ＳＫ 13 須恵器壷Ａ　Ｘ線写真（上が東南方向）

11．平城京跡（右京三条二坊十五坪）・菅原東遺跡の調査　第611次

事 業 名	個人住宅新築	調 査 期 間	平成20年8月6日～8月20日
届出者名	個人	調 査 面 積	62㎡
調 査 地	奈良市西大寺国見町二丁目10-13	調査担当者	中島和彦

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京三条二坊十五坪の中央部のやや北よりにあたり、また古墳時代の遺跡の菅原東遺跡とも重複する。調査地の西側隣接地の発掘調査では、平城京の遺構とともに古墳時代後期の埴輪窯跡群が確認された（市ＨＪ第200次調査）。今回の調査は、平城京の遺構とともに、埴輪窯関連の遺構の検出が想定された。なお敷地が狭小なため、南北２回に分けて発掘調査を行った。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、上から近現代の造成土（土層図１・４、以下同じ）、耕作土（５）、淡茶灰色砂質土（６）、暗茶灰色砂質土（８）、黄橙色砂質土（10）、淡茶褐色砂質土（13）、茶褐色砂質土（14）とつづき、地表下約1.6ｍで明オリーブ灰色砂の地山となる。地山面の標高は概ね70.3ｍである。14層は奈良時代の整地層と考えられ、多くの古墳時代後期の埴輪・土師器とともに、奈良時代の土器・瓦が僅かに出土する。淡茶褐色砂質土上面で奈良時代の遺構を、地山上面で古墳時代前期の遺構を検出した。

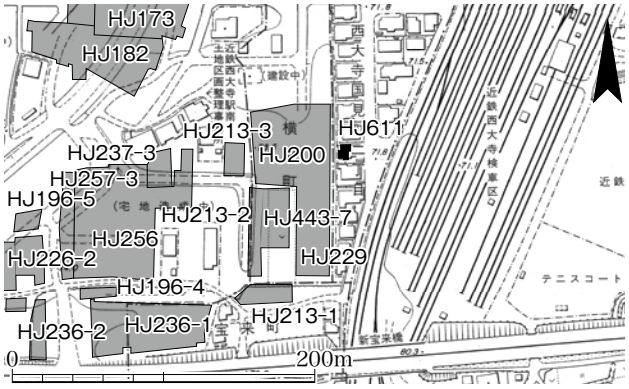
Ⅲ　検出遺構

古墳時代前期の溝１条、奈良時代の掘立柱建物１棟・土坑１基・小柱穴21個を検出した。

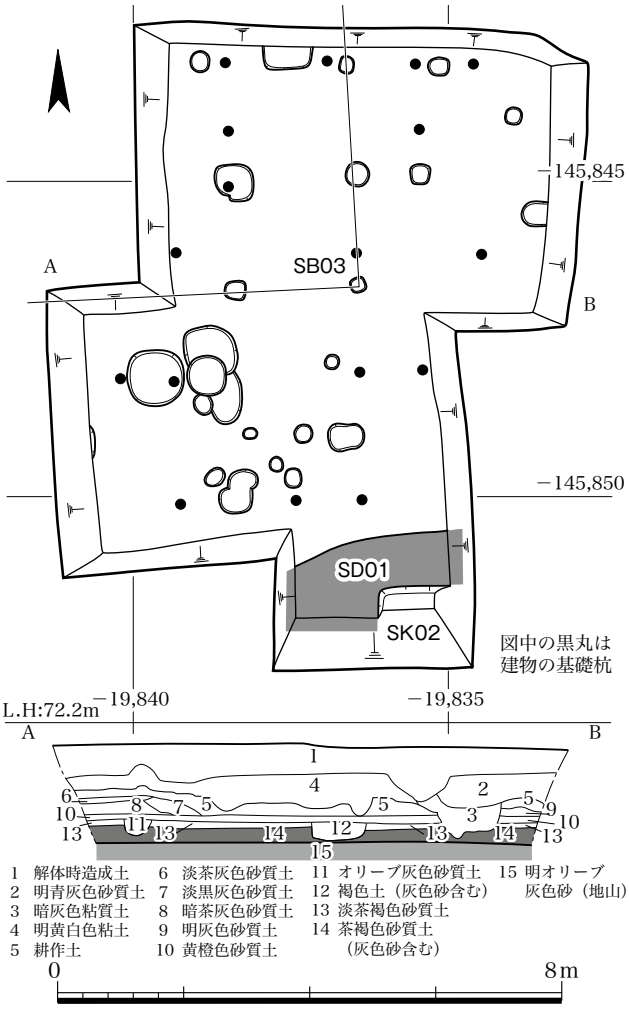
ＳＤ01　発掘区南端で検出したやや斜行した東西方向の溝である。北肩から約1.2ｍ分を検出し発掘区外へつづく。深さは約0.5ｍで、最下層から土師器甕の破片が９点出土した。甕は口縁部が受口状で、底部は平底である。肩部に櫛描直線文と列点文を施しており、近江系のものと考えられる。古墳時代前期初頭頃のものである。

ＳＫ02　東西約1.2ｍ以上、南北約0.5ｍ以上で、平面形は方形と考えられる。発掘区外東と南に続く。壁面はほぼ垂直で、深さ約0.8ｍまで掘削したが底には至らず、井戸の可能性がある。土師器杯１点・皿１点、須恵器杯Ａ１点・甕Ｃ１点・壷１点と、円筒埴輪５点が出土した。土器は形態等から８世紀でも古い様相を示す。

ＳＢ03　東西１間（1.95ｍ）以上、南北２間（3.6ｍ）以上の建物と考えられる。南東隅部を検出したのみで全容は不明。柱間は東西が1.95ｍ、南北が1.8ｍである。



ＨＪ第611次調査　発掘区位置図（1/5,000）



ＨＪ第611次調査　遺構平面図・発掘区中央部土層図（1/120）

柱穴からは少量の土師器と須恵器が出土したが、詳細な時期は不明である。

この他に小柱穴を21個検出したが、発掘区が狭く建物としてはまとめられなかった。

発掘区北半部全景（北東から）

発掘区北半部全景（北西から）

発掘区南半部全景（北東から）

発掘区南半部全景（北西から）

Ⅳ　出土遺物

出土遺物には、土器類が遺物整理箱１箱分、・瓦類が１箱分ある。土器類には古墳時代前期の土師器甕、古墳時代後期の埴輪・土師器、８世紀の土師器・須恵器がある。瓦類には８世紀と考えられる丸瓦と平瓦があるが、全部で７点（635g）にすぎない。

Ⅴ　調査所見

今回の発掘調査地は、埴輪窯跡群が立地する微高地の北東側の約２ｍほど低い谷部に位置しているが、灰原等の埴輪窯関係の遺構は確認できなかった。一方で古墳時代前期の溝が確認され、菅原東遺跡の広がりの一端を知る資料が得られた。奈良時代には整地後に掘立柱建物が築かれて、宅地として利用されていたことが確認できた。

（中島和彦）

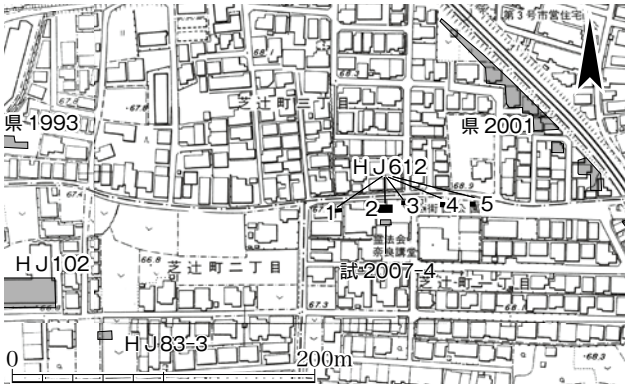
12. 芝辻遺跡・平城京跡（左京二条大路）の調査　第612次

事 業 名	市道二条線拡幅事業	調 査 期 間	平成20年8月20日～9月8日
届出者名	奈良市長	調 査 面 積	68㎡
調 査 地	奈良市芝辻一丁目地内	調査担当者	武田和哉　松浦五輪美

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京条坊復原では左京五坊付近の二条大路が想定される場所に該当する。周辺地に調査事例があり、二条大路北側溝と思われる遺構[1]や、東五坊坊間路などの条坊関連遺構[2]などの遺構を検出している。加えて、前年度に調査地南隣の敷地で実施した市試掘07–4次では、弥生時代後期後半頃の河川跡を検出した。

こうした成果を踏まえて、本調査では奈良時代およびそれ以前の遺構の様相把握を目的として、調査を実施した。発掘区は5箇所で計68㎡であり、西側から順に第1～第5発掘区とした。



ＨＪ第612次調査　発掘区位置図（1/5,000）

Ⅱ　基本層序

調査地は地形的にみて、東側の山地から西側の平野部分へとさしかかる付近に該当している。東から西へとゆるやかに下っており、基本層序も発掘区によって幾分異なる。ただし、5箇所の発掘区のうち、第2と第3発掘区、そして第4と第5発掘区の基本層序は概ね類似した様相を呈している。

第1発掘区の基本層序は、造成土以下、暗褐色土（旧耕作土）、暗灰色粘質土（旧床土）、茶灰色粘質土と続き、現地表下0.7～0.8ｍで、暗褐色または灰色の砂礫層に達する。砂礫層は数層に分かれていて、さらに下層へと続いている。砂礫層の上面の標高は67.4ｍ前後である。

第2・3発掘区の基本層序は、造成土以下、黒褐色土（旧耕作土）、暗灰色粘質土（旧床土）、と続き、現地表下約1.2ｍで、青灰色シルトの層に達する。この層は厚さ約0.2ｍ程度で遺物包含層であり、その下に青灰色粘土またはシルトの地山層がある。地山層はさらに数層に分かれているが、上面の標高は67.2～67.3ｍである。第2発掘区では青灰色シルト層の上面と地山上面の2面で遺構検出を実施した。

第4・5発掘区の基本層序は、造成土以下、暗黄褐色土、暗茶灰色土と続き、その下に暗茶灰色粘質土、暗灰色土が堆積している。暗灰色土には17～19世紀頃の陶磁器が含まれており、その下層に青灰色粘土またはシルトの地山層がある。地山上面の標高は67.6ｍ前後である。

Ⅲ　検出遺構

本調査では、河川跡2条を検出した。

河川01は、第2発掘区の南東側で検出した。発掘区内では北肩部分を検出したのみで、残りは発掘区外へと続いている。第2発掘区の南約5ｍの地点で前年に実施した市試掘07–4次調査では、やはり同様な層相で、発掘区全体が河川の中に収まる状況であったので、この続きではないかとみられる。そのように仮定した場合、少なくとも幅員が7～8ｍ以上あると推定される。深さは第2発掘区内では約0.95ｍである。埋土には木質が含まれており、弥生時代後期後半の土器が出土した。

河川02は、第2発掘区の北西隅および第1発掘区で検出した。幅は少なくとも20ｍ以上はあるものと推測される。深さは少なくとも1ｍ以上あり、埋土には拳大の砂礫や粗砂が多く含まれている。今回の調査では遺物が出土しなかったため、その時期を特定する直接の手掛かりはない。ただし、第2発掘区の内の土層観察の結果から、河川02は地山の上に堆積する青灰色シルト層の上面で検出しているので、前述の河川01より新しいことが判る。遺物はほとんど出土しなかった。

このほか、各発掘区において、小土坑や東西方向の素掘溝等を検出しているが、詳細な時期は不明である。

Ⅳ　出土遺物

第2発掘区の河川01から弥生時代後期後半の土器（甕）、第5発掘区の包含層から古墳時代の円筒埴輪（5世紀後半～6世紀）が出土した。また、各発掘区から8～9世紀前半の須恵器・土師器、丸瓦・平瓦の小片、16世紀の瓦質土器が出土している。この他に時期不明の土管・桃核等も合わせて、整理箱4箱分の遺物が出土した。

V　調査所見

今回検出した河川 01 は、北東から南東方向へと水流があったとみられ、弥生時代後期後半の遺物が出土したことは、周辺地域に当該時代の遺構が存在している可能性が高いことを示唆している。

また、河川 02 は想定される幅も比較的規模が大きく、東北東から西南西へと流れていくものとみられる。調査地の西南西約 400 mの地点では、過去の調査においてやはり幅員 20 m近い河川跡が確認されており、中世の時期の遺構と推定されている[3)]。本調査では河川 02 に関しては詳細な時期の特定はできなかったが、河道の方向がほぼ合致しており、規模や埋土の様相も類似していることから、この河川跡の上流部分である可能性が高いと考えられる。　（武田和哉）

1)　奈良市教育委員会「平城京跡（左京二条五坊五・十二坪）の調査　第 444・448・456 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成 12 年度』2002
2)　奈良県立橿原考古学研究所「平城京跡の調査　左京三条五坊七・八坪の調査」『奈良県遺跡調査概報 2001 年度』（第 1 分冊）奈良県教育委員会　2002　および　同「平城京左京三条五坊十坪」『奈良県遺跡調査概報 2003 年度』（第 1 分冊）2004
3)　奈良国立文化財研究所『平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報』1980

第 5 発掘区全景（南より）

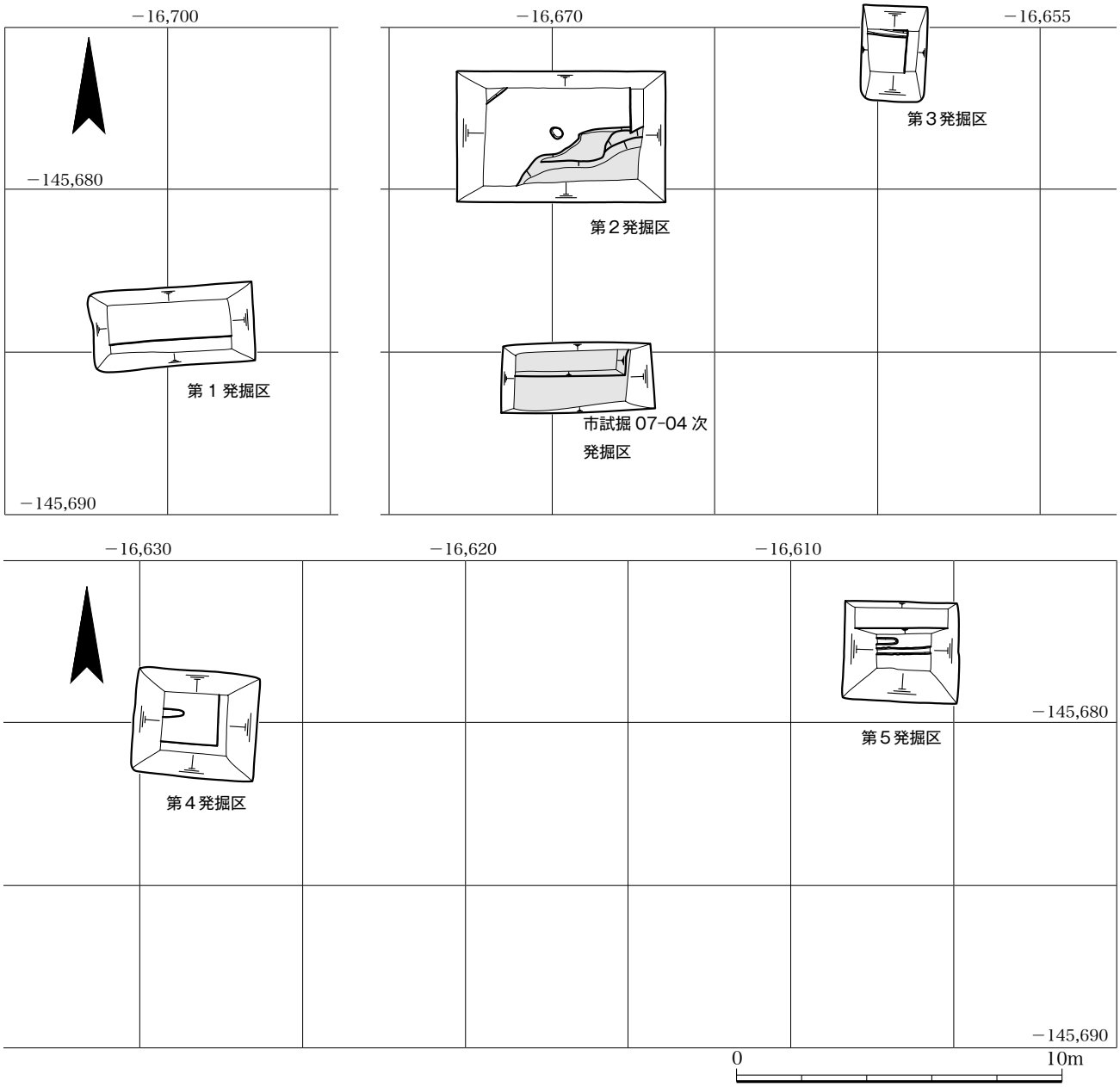
第 4 発掘区全景（西より）

第 2 発掘区全景（東より）

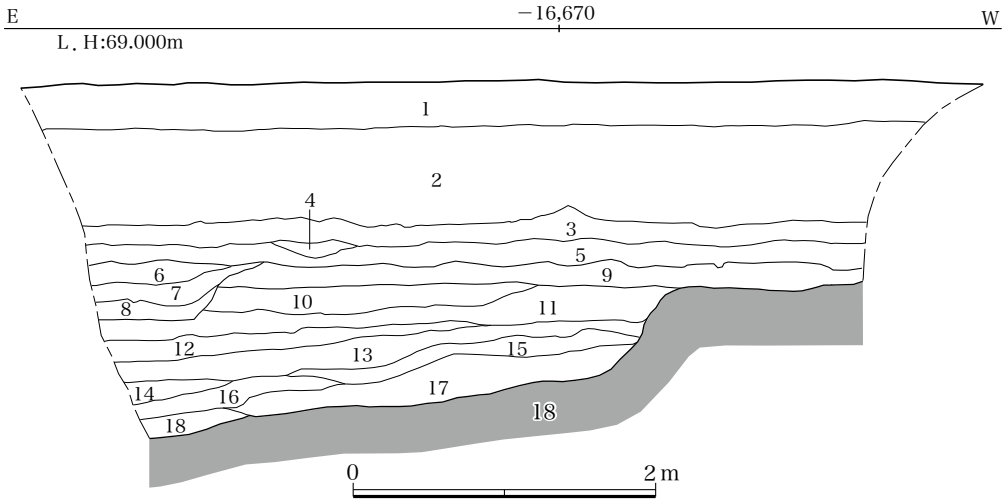
第 2 発掘区流路断面（北西より）

第 3 発掘区全景（北より）

第 1 発掘区全景（東より）



ＨＪ第 612 次調査　発掘区遺構平面図（1/200）



1　造成土（真砂土）
2　造成土（真砂土＋砂礫）
3　黒褐色粘土（旧耕作土）
4　暗灰色土
5　暗灰色粘質土（旧床土）
6　暗褐色粘土（土坑埋土）
7　暗茶灰色土（土坑埋土）
8　暗灰色粘細砂（土坑埋土）
9　青灰色シルト（遺物包含）
10　暗青灰色砂（河川 01 埋土）
11　暗灰色粘細砂（河川 01 埋土）
12　暗灰色粘砂（河川 01 埋土）
13　暗褐色粘土
　（木質含む・河川 01 埋土）
14　暗褐色粘土（河川 01 埋土）
15　灰色粗砂（河川 01 埋土）
16　暗褐色土＋灰色砂
　（木質含む・河川 01 埋土）
17　灰色砂礫（河川 01 埋土）
18　灰色砂（河川 01 埋土）
地山　青灰色粘土または暗灰色粘土
　または灰色粗砂

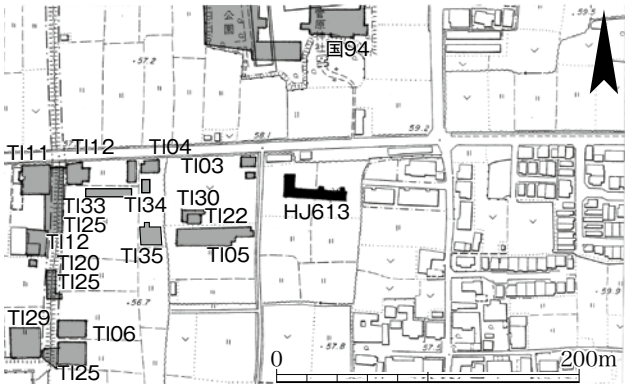
ＨＪ第 612 次調査　第２発掘区南壁土層断面図（1/50）

13. 平城京跡（左京八条三坊十四坪）の調査　第613次

事 業 名	道路工事・宅地造成	調 査 期 間	平成20年8月20日～9月18日
届出者名	株式会社　福岡屋住宅流通	調 査 面 積	310㎡
調 査 地	奈良市東九条町491他	調査担当者	原田香織

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によると左京八条三坊十四坪の北辺部西半に相当する。当坪は東市市町の一部に推定されている。昭和57・59年度に実施した東市跡推定地第３・５次調査で、十四坪西側の坪境小路とその東西両側溝を検出しているが、坪内における調査は今回が初めてである。調査は、宅地内道路敷設予定地に南北15 m、東西41 m、幅６ｍのＬ字形に発掘区を設定し、坪内の様相確認を目的に行った。



ＨＪ第613次調査　発掘区位置図（1/5,000）

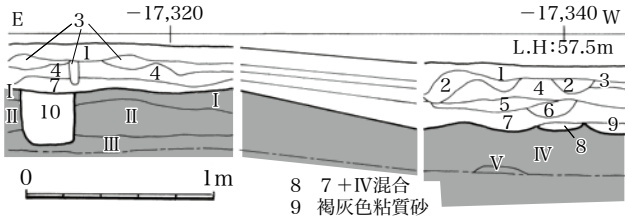
Ⅱ　基本層序

上から黒灰色土（耕作土）、淡灰色砂質土、明茶灰色粘質砂、マンガンを含む灰褐色土、発掘区西端ではさらに褐灰色粘質砂と続き、東側は現地表下0.3 m（標高57.8 m）で灰黄茶色砂質シルト、西側は現地表下0.4 m（標高57.6 m）で灰褐色砂の地山に至る。遺構検出は地山上面で行った。

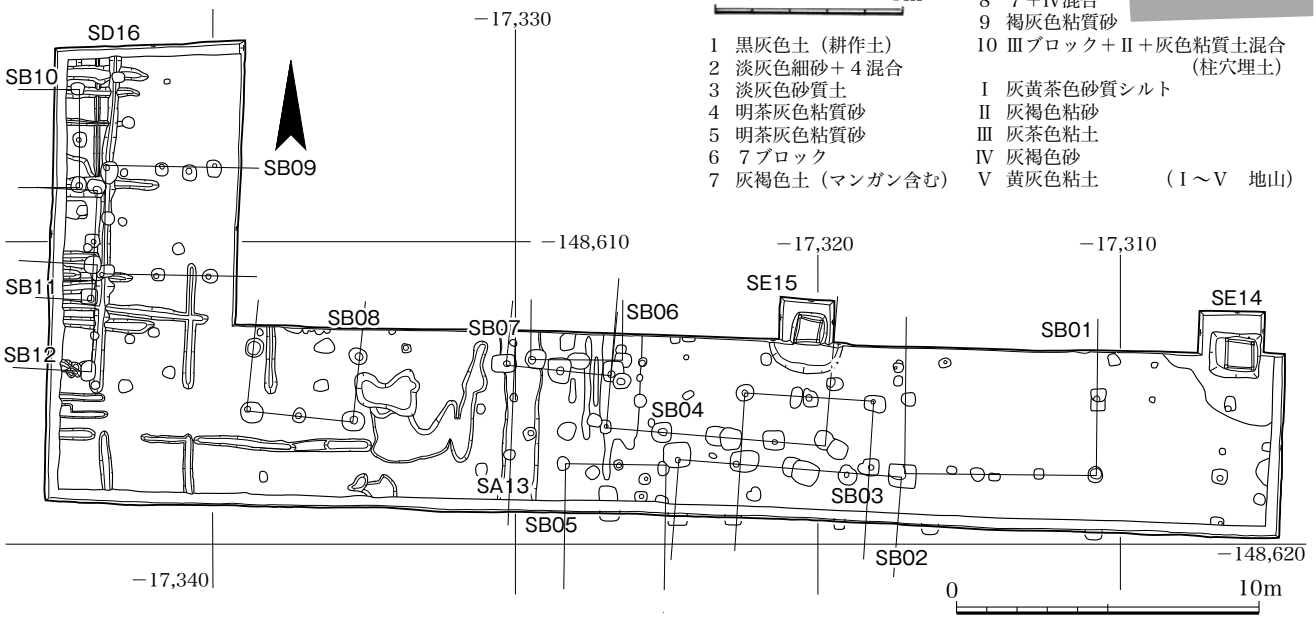
発掘区全景（南西から）

Ⅲ　検出遺構

主な検出遺構には、奈良時代の掘立柱建物12棟（ＳＢ01～12)・掘立柱塀１条（ＳＡ13)・井戸２基（ＳＥ14・15)・南北溝１条（ＳＤ16)、平安時代以降の耕作に伴うとみられる素掘溝などがある。掘立柱建物・塀・井戸の詳細については次頁の表にまとめた。以下、各遺構の概要について述べる。



1　黒灰色土（耕作土）
2　淡灰色細砂＋４混合
3　淡灰色砂質土
4　明茶灰色粘質砂
5　明茶灰色粘質砂
6　７ブロック
7　灰褐色土（マンガン含む）
8　７＋Ⅳ混合
9　褐灰色粘質砂
10　Ⅲブロック＋Ⅱ＋灰色粘質土混合（柱穴埋土）
Ⅰ　灰黄茶色砂質シルト
Ⅱ　灰褐色粘砂
Ⅲ　灰茶色粘土
Ⅳ　灰褐色砂
Ⅴ　黄灰色粘土　（Ⅰ～Ⅴ　地山）



ＨＪ第613次調査　発掘区遺構平面図（1/250)・発掘区南壁土層図（1/40）

掘立柱建物・塀はすべて発掘区外に続いており、全容の分かるものはない。これらのうちＳＢ01・05・06・09・10の棟方向はほぼ国土方眼方位に沿っている。その他の棟方向については、国土方眼方位北でやや東に振れる。また、柱穴は浅いものが多く、遺構面が後世の耕作によって削平されているとみられる。ＳＢ01・06の柱穴埋土から８世紀後半の土師器・須恵器、ＳＢ02・04・11の柱穴埋土から８世紀後半から９世紀初頭の土師器・須恵器、ＳＢ03・08・10の柱穴埋土から８世紀後半から９世紀初頭の土師器・黒色土器Ａ類・須恵器が出土した。ＳＢ05・07・09・12は８世紀代の土師器・須恵器が出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。ＳＡ13は出土遺物がなかった。

井戸ＳＥ14は発掘区北東隅で検出し、掘形の北と東は発掘区外に続く。掘形が広く歪で、掘形埋土に多くの遺物が含まれている点から判断すると、ＳＥ14より古い井戸が重複している可能性がある。掘形埋土から８世紀後半の土器類、枠内埋土から７世紀の軒平瓦、８世紀後半～９世紀初頭の土器類・土馬・檜扇等が出土した。

井戸ＳＥ15は発掘区中央付近で検出し、掘形の北は発掘区外に続く。井戸枠上部断割の際に発掘区を拡張したところ、井戸西側でＳＥ15より古い井戸の掘形の一部を確認した。ＳＥ14と同様にほぼ同位置で井戸の掘り直しが行われていたことがわかる。掘形埋土から８世紀後半の土器類、枠内埋土から７世紀の軒平瓦、８世紀後半～９世紀初頭の土器類・斎串・砥石等が出土した。

南北溝ＳＤ16は、発掘区西端付近で検出した素掘りの溝である。11.5 m分を検出したが、北は発掘区外に続く。

ＨＪ第613次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		備　　考
		桁行×梁行	(m)	(m)	桁行	梁行	
ＳＢ01	東西？	3×１以上	6.3	2.4以上	西から2.4–2.1–1.8	2.4	ＳＢ02より古い。柱穴の深さ0.05～0.3 m
ＳＢ02	東西	4×１以上	7.4		西から1.9–2.0–1.7–1.8		ＳＢ01・03・05より新しい。柱穴の深さ0.1～0.5 m
ＳＢ03	南北	２以上×２	2.1以上	4.2	2.1	2.1等間	ＳＢ02より古い。柱穴の深さ0.2～0.25 m
ＳＢ04	東西	4×１以上	5.4	1.8以上	1.8等間	1.8	ＳＢ07より古い。柱穴の深さ0.2～0.25 m
ＳＢ05	南北	１以上×２		3.3		西から1.8–1.5	ＳＢ02より古い。柱穴の深さ0.1～0.15 m
ＳＢ06	南北	１以上×２		3.0		1.5等間	ＳＢ07より古い。柱穴の深さ0.2～0.35 m
ＳＢ07	南北	１以上×２		3.5		西から1.8–1.7	ＳＢ04・06より新しい。柱穴の深さ0.3～0.35 m
ＳＢ08	南北	１以上×２	2.1以上	3.55	2.1	西から1.75–1.8	柱穴の深さ0.2～0.4 m
ＳＢ09	東西	２以上×２	3.45以上	3.5	西から1.75–1.7	1.75等間	ＳＢ12・ＳＤ16より古い。柱穴の深さ0.2～0.55 m
ＳＢ10	東西	１以上×２		3.3		北から1.8–1.5	柱穴の深さ0.25 m
ＳＢ11	東西	１以上×２		3.6		北から1.7–1.9	ＳＤ16より新しい。柱穴の深さ0.3～0.4 m
ＳＢ12	東西	１以上×２		3.4		妻柱遺存しないため不明	ＳＢ09より新しく、ＳＤ16より古い。柱穴の深さ0.25・0.3 m
ＳＡ13	南北	２以上	3.6以上		1.8–1.8		柱穴の深さ0.2 m

遺構番号		掘　形		井戸枠		水溜・濾過施設等	主な出土遺物・備考
	平面形	平面規模(m)	深さ(m)	構造	内法(m)		
ＳＥ14	不整形	東西4.0以上×南北3.6以上	2.25	方形縦板組隅柱横桟留	東西0.84×南北0.85	一部礫敷き	**掘形）** ８世紀後半：土師器杯・皿・内面漆付着皿・高杯・甕、須恵器杯蓋・皿・壷・甕、平瓦 **枠内）** ７世紀：軒平瓦（重孤紋）、８世紀：丸・平瓦、８世紀後半～９世紀初：土師器杯・皿・高杯・鉢・甕、黒色土器Ａ類杯、須恵器杯・杯蓋・皿・壷・鉢・甕、製塩土器、ミニチュア竈、土馬、桧扇、曲物底板・側板、刀子、榛原石、サヌカイト剥片、鱗、桃核・梅核・瓜・瓢箪の種子
ＳＥ15	隅丸方形	東西2.5×南北2.4以上	3.1	方形縦板組隅柱横桟留	東西0.7×南北0.67	礫敷き	**掘形）** ８世紀後半：土師器杯・皿・高杯・壷・甕、須恵器杯・杯蓋・壷・鉢、平瓦 **枠内）** ７世紀：軒平瓦（重孤紋）、８世紀：丸・平瓦、８世紀後半～９世紀初：土師器杯・竈、杯蓋・皿・椀・高杯・壷・甕、黒色土器Ａ類杯、須恵器杯・杯蓋・皿・壷・壷蓋・獣脚・甕、製塩土器、円盤型土製品、鞴羽口、斎串、曲物底板、建築部材、サヌカイト剥片、砥石、桃核

幅は約0.4 m、遺構検出面からの深さは北端で0.12 m（底面標高57.39 m）、南端で0.09 m（底面標高57.43 m）である。溝底は、ほぼその深さの範囲で凸凹しており、南北どちらに向かって低くなるのかは明確ではない。埋土は灰黄茶色粘質土で、８世紀後半の土師器・須恵器の破片が出土した。重複関係からＳＢ09・12が壊された後に掘削され、ＳＤ16が埋まった後にＳＢ11が建てられたことがわかる。

平安時代以降の耕作溝は南北方向のものと東西方向のものがある。埋土は灰褐色粘質土や砂質土で、出土する土器類はほとんどが８世紀のものであるが、ごくわずかに９世紀半ば～後半の土師器、12世紀の瓦器椀を含む。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱10箱分の遺物が出土し、サヌカイト剥片、７世紀の軒平瓦（重弧紋）・８世紀の丸瓦・平瓦、８世紀後半～９世紀初頭の土師器・須恵器・黒色土器Ａ類・製塩土器・土馬・ミニチュア竈・墨書のある檜扇・斎串・曲物・建築部材・用途不明木製品・刀子・砥石・モモ核・ウメ核・瓜の種子類、９世紀半ば～後半の土師器、12世紀の瓦器などがある。

このうちＳＥ14井戸枠内出土の檜扇は、骨板が16枚分以上確認でき、そのうちの１枚には、「…麻呂」「…刀四刀自女」などの人名の一部とみられる文字が墨書されている。墨書は骨板上端に文字の途中から残っており、もともと一枚の木簡を再利用して製作されたと考えられる。長さ22.55cm以上、幅2.85cm、厚さ0.05cm。

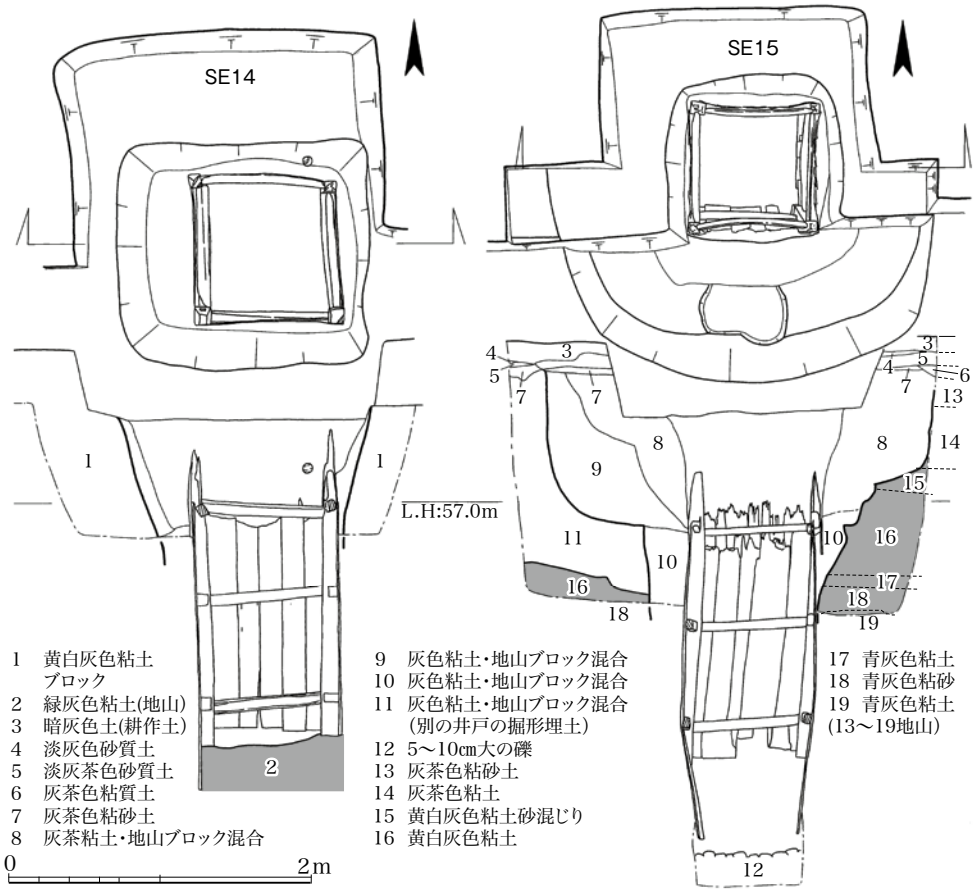
Ⅴ　調査所見

掘立柱建物の新古は、重複関係からＳＢ09→ＳＢ12→ＳＤ16→ＳＢ11、ＳＢ06→ＳＢ04→ＳＢ07となる。このうちＳＢ11は、同時期のＳＢ10との位置関係から併存はあり得ないので、少なくとも奈良時代には４回の建て替えが行われていたとみられ、重複関係や出土遺物から、国土方眼方位に沿っている建物の方が、東に振れている建物より古い傾向にあることがわかった。また、奈良時代後半に造られて末頃廃絶した２基の井戸が、14.5 mほど離れて東西に並んでおり、これらの間に宅地の境界が存在した可能性が考えられる。そしてＳＤ16では、溝が掘られた前後とも溝に重複して建物の端が揃えられており、この付近にも宅地の境界があった可能性が考えられる。このことから奈良時代後半には、十四坪内を東西に分割して宅地利用されていたと推測できる。

（原田香織）

麻呂□□□□
□刀四刀自女

ＳＥ14出土木簡赤外線写真
（撮影：奈良文化財研究所　中村一郎氏）



ＨＪ第613次調査　井戸ＳＥ14（左）・ＳＥ15（右）平面・立面図（1/50）

14. 平城京跡（左京三条六坊十二坪）・奈良町遺跡の調査　第614次

事 業 名	店舗新築	調 査 期 間	平成20年9月8日～9月12日
届出者名	株式会社藤本忠商店	調 査 面 積	30㎡
調 査 地	奈良市小西町29-1・2・3	調査担当者	池田裕英

Ⅰ　はじめに

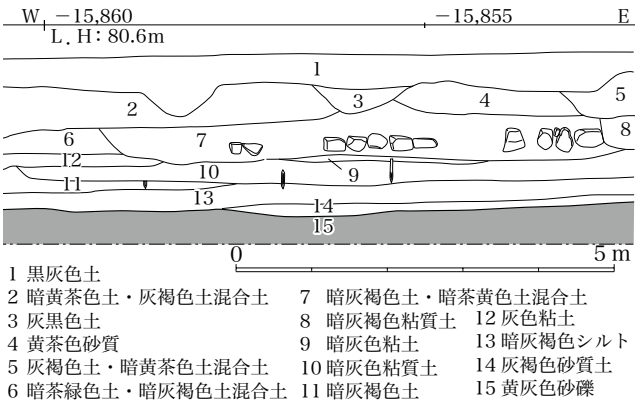
本調査地は、平城京の条坊復原では左京三条六坊十二坪のほぼ中央部にあたる。十二坪では、昭和60年度に市ＨＪ第89次調査、平成元年度に市ＨＪ第176次調査、平成5年度に市ＨＪ第228次調査、平成18年度に市ＨＪ第556次調査が行われている。それらの調査では奈良時代の井戸、平安時代の掘立柱建物・土坑、室町時代の土坑・溝・石組遺構、江戸時代の土坑・井戸を検出している。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本的な層序は、造成土、暗黄茶色土・灰褐色土混合土、暗茶緑色土・暗灰褐色土混合土、暗灰色粘質土、灰色粘土、暗灰褐色シルトと続き、現地表下約2.1ｍで黄灰色砂礫の地山にいたる。暗灰褐色シルトから8世紀の土器が出土した。遺構はすべて地山上面で検出した。地山上面の標高は78.2～78.4ｍで、東から西に向かって緩やかに下る。

Ⅲ　検出遺構

検出した遺構は土坑2基である。SK01は発掘区東端で検出した径0.5ｍ以上、深さ0.3ｍの平面円形の土坑、ＳＫ02は発掘区西端で検出した東西3ｍ以上、南北0.8ｍ以上、深さ0.3ｍの土坑である。いずれも12世紀後半の土師器が出土した。なお、時期は不明であるが北壁の中程に東西方向の石列があり、南端部で面を揃えている。



HJ第614次調査　発掘区北壁土層図（1/100）

ＨＪ第614次調査　発掘区位置図（1/5,000）

石列あるいは石組遺構の南端部と考えられる。

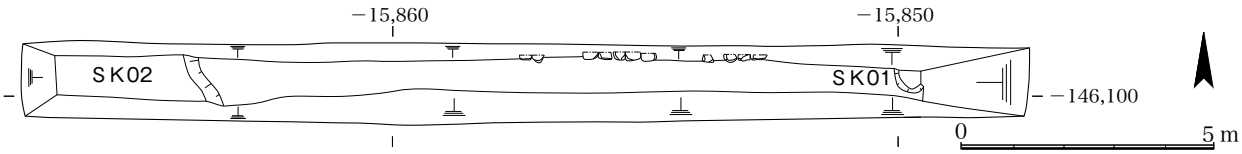
Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱2箱分の遺物が出土した。土坑から出土した12世紀後半の土師器の他に、包含層から出土した8世紀の土器、18～19世紀の土師器・陶磁器、瓦類がある。

Ⅴ　調査所見

今回の調査では平安時代の土坑を部分的に検出したが、それ以前の時期については地山直上の暗灰褐色シルトから奈良時代の土器が出土したのみで遺構はなかった。周辺の調査で奈良時代の遺構が検出されているところもあるが、発掘区が狭いこともあり、今回の調査から奈良時代の様相を推測することは困難である。更なる周辺での調査の増加を待ちたい。　（池田裕英）

発掘区全景（東から）



ＨＪ第614次調査　発掘区遺構平面図（1/150）

15. 平城京跡（左京五条五坊十一坪・東五坊坊間路）の調査　第615次

事 業 名	倉庫新築	調 査 期 間	平成20年10月6日～10月31日
届出者名	小山株式会社	調 査 面 積	173㎡
調 査 地	奈良市西木辻町76-5	調査担当者	秋山成人

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では左京五条五坊十一坪西辺北側から東五坊坊間路に該当する。東側の隣地では平成14年に市ＨＪ第478次調査を実施しており、時期不明の自然流路、古墳時代の土坑、奈良時代と平安時代の掘立柱建物･塀、井戸、土坑、溝を検出している。また、ＪＲ関西本線の線路を挟んで南側では、平成６年に市ＨＪ第313次調査を行い、奈良時代以前の時期不明の自然流路、奈良時代の東五坊坊間路とその両側溝、掘立柱建物、土坑を検出している。

今回の調査はＨＪ第313次調査で検出した東五坊坊間路の続きを検出し、また、周辺に点在する弥生時代・古墳時代の遺物散布地の広がりを確認する目的で実施した。

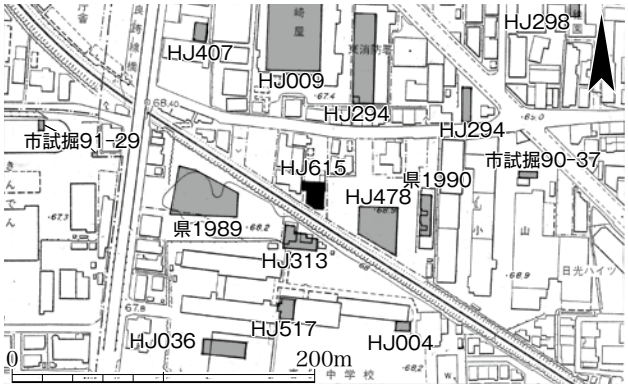
Ⅱ　基本層序

調査地は東側から西側に下る扇状地の先端部にあたる。発掘区内の基本的な層序は上から造成土、黒灰色土、灰色土で、現地表面から約1.4ｍで黄褐色土（奈良時代時代の路面整地層）、若しくは灰褐色砂質土や灰色砂礫土などの地山層となる。遺構検出は整地層及び地山上面で行った。遺構面の標高は67.5ｍである。

Ⅲ　検出遺構

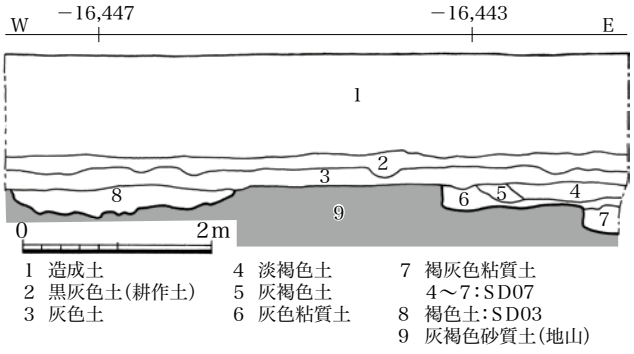
検出した遺構は、弥生時代の溝、奈良時代の東五坊坊間路とその東側溝、門、掘立柱列、溝である。

ＳＤ01　発掘区東半中央部で検出した西で北に振れる東西方向の素掘溝である。長さ3.8ｍ以上幅3.5ｍ、深さ0.3ｍである。埋土は２層で、上層は赤褐色土、下層は赤褐色砂質土である。埋土の堆積状況からＳＤ01は除々に埋没したと考えられる。下層埋土から弥生時代前期の壷が出土した。

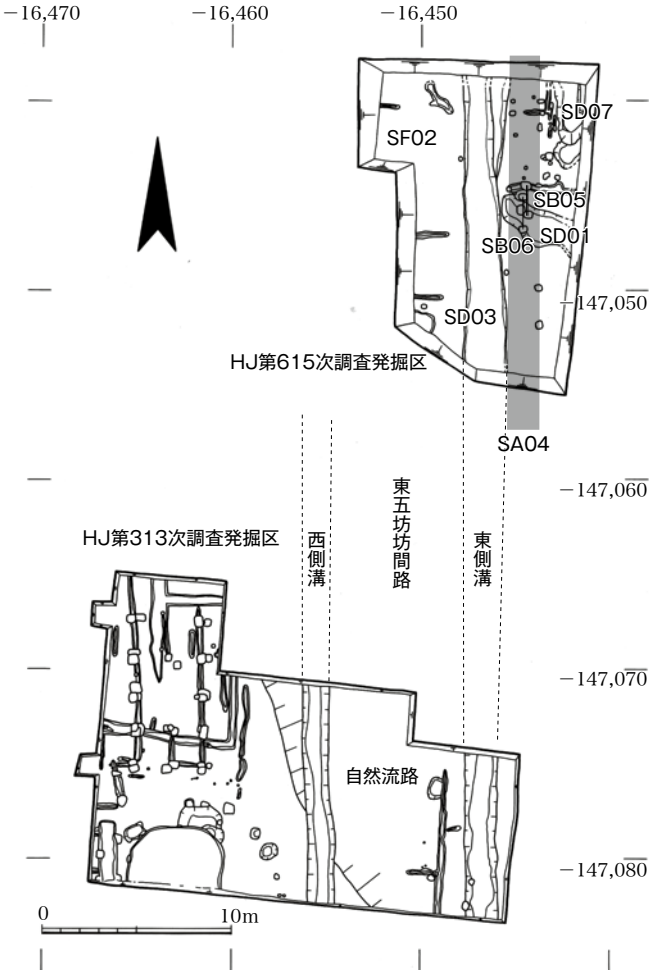


ＨＪ第615次調査　発掘区位置図（1/5,000）

ＳＦ02　南側のＨＪ第313次調査の成果から東五坊坊間路と考えられる。幅4.5ｍ分を検出しており、発掘区外西側に続く。路面には黄褐色土を0.05～0.1ｍの厚



ＨＪ第615次調査　発掘区北壁土層図（1/80）



ＨＪ第615次調査　発掘区遺構平面図（1/400）

さで敷き整地をしている。

ＳＤ03　発掘区中央で検出した南北方向の素掘溝である。ＨＪ第313次調査で検出した東五坊坊間路東側溝の延長上にあることから、続きの溝と考える。幅2.4ｍ、深さ0.3ｍで15.4ｍ分検出している。埋土は褐色土一層で埋没している。８世紀後半の土師器、須恵器、丸瓦、須恵質の土製紡錘車が出土した。溝心の座標値はＸ＝−147,038.67ｍ、Ｙ＝−16,446.73である。

ＳＡ04　ＳＤ03の東側に沿って２列の小柱穴の柱列を確認している。柱列の柱穴は直径0.2ｍ程度で、不定の間隔に並んでいる。２列の間隔は1.5ｍである。検出状況から、これらの柱列の間の空間には十一坪の宅地を限る築地塀が想定され、柱列は構築時の添柱と考える。

ＳＢ05・ＳＢ06　発掘区中央やや東寄りの位置で検出した柱列である。添柱列の間で検出していることから築地塀に取り付く門であると考える。ともに南北１間の柱列で柱間はＳＢ05が1.5ｍ、ＳＢ06が1.65ｍである。柱穴は重複せず、新古関係は不明である。

ＳＤ07　発掘区北東隅で検出した南北方向の素掘溝である。東肩は発掘区外東になり、幅1.92ｍ分、長さ3.4ｍ分を確認した。埋土は上から淡褐色土、灰色粘質土、褐灰色粘質土の順に堆積し、最上層から８世紀後半の遺物が出土した。ＳＡ04と並行することから、雨落溝であると考える。また、溝は門に想定されるＳＤ05・06付近で途切れていることから、この位置に東西道路が取り付く可能性がある。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱で２箱分が出土した。ＳＤ01からは弥生時代前期の壷（口縁部が欠失）１個体分、サヌカイト片が出土し、溝、柱穴などから８世紀後半の土師器甕・高杯・皿、須恵器壷、甕・杯身・杯蓋、丸瓦、須恵質の土製紡錘車が出土した。

Ⅴ　調査所見

当初の目的どおり、東五坊坊間路およびその東側溝を検出することができた。また、東五坊坊間路東側の十一坪を限る築地塀の存在をうかがわせる添柱列、雨落溝を確認し、東西方向の坪内道路が取り付く可能性も想定できた。

さらに、今回弥生時代前期の壷を含む溝ＳＤ01を検出した。これまで発掘区西方の大森町において中期〜後期の遺構を確認しているが、前期は今回が初例である。周辺を含めた弥生時代集落の変遷を考える上で重要な成果を得ることができた。

（秋山成人）

発掘区全景（北から）

16. 平城京跡（左京四条四坊十坪）の調査　第616次

事 業 名	個人住宅新築	調 査 期 間	平成21年1月7日～2月4日
届出者名	個人	調 査 面 積	143㎡
調 査 地	奈良市三条宮前町6-12	調査担当者	中島和彦

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京四条四坊十坪の北東部にあたる。調査地の東側の十五坪では、奈良市教育委員会が広範囲にわたる発掘調査を行っており、古墳時代の流路、奈良・平安時代の建物群、中近世の粘土採掘土坑群などを確認している。今回の調査地でも同様な遺構の検出が想定された。なお造成土が厚く排土置き場を確保しつつ、東から順に西に第１～５発掘区を連続して設定し調査を行った。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、上から現代の造成土（0.6 m）、耕作土（0.1 m）、灰色砂質土（0.2 m）、淡灰色砂質土（0.05 m）、暗オリーブ灰色粘土（0.05 m）とつづき、地表下約1.0 mでオリーブ灰色粘土または明黄橙色粘土の地山となる。地山面の標高は概ね62.4 mである。遺構面はオリーブ灰色粘土上面であるが、遺構検出は地山上面で行った。なお暗オリーブ灰色粘土からは縄文時代の石鏃が１点出土した。

Ⅲ　検出遺構

奈良時代の掘立柱建物２棟、掘立柱列１条、鎌倉時代以降の粘土採掘土坑群、素掘小溝を検出した。

ＳＢ01　東西５間（9.75 m）、南北１間（3.0 m）以上の北廂付東西棟建物で、発掘区外南側につづく。柱間は東西が1.95 m等間、廂の出は3.0 mである。柱掘形は深さ約１mで、柱はすべて抜き取られている。柱穴の１つから、８世紀中頃～後半頃の土器が出土した。

ＳＢ02　東西４間（6.6 m）、南北１間以上の掘立柱建物で、発掘区外南側につづく。柱間は西から1.5-1.8-1.8-1.5 mで、柱間が不等間の東西棟建物の北側柱列、または東西廂付の南北棟建物の北妻柱列と考えられる。重複関係からＳＢ01より古い。なお両建物は、南北方向の中軸線が同じである。

ＳＡ03　柱穴を一部欠くが東西４間以上の掘立柱列で、柱間は3.0 m等間である。柱穴からの遺物は小片のため時期不明である。

ＳＸ04　複数の粘土採掘土坑が重複したもので、重複が複雑で個々の規模は不明である。深さは最大約0.7 mで、底面は凹凸がはげしい。土坑群は、明黄橙色粘土を採掘

ＨＪ第616次調査　発掘区位置図（1/5,000）

しており、粘土が分布しない発掘区西側と南側には及ばない。埋土から８～９世紀の土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・壷・甕、丸瓦、平瓦、12～13世紀の瓦器椀、常滑産陶器甕が出土した。

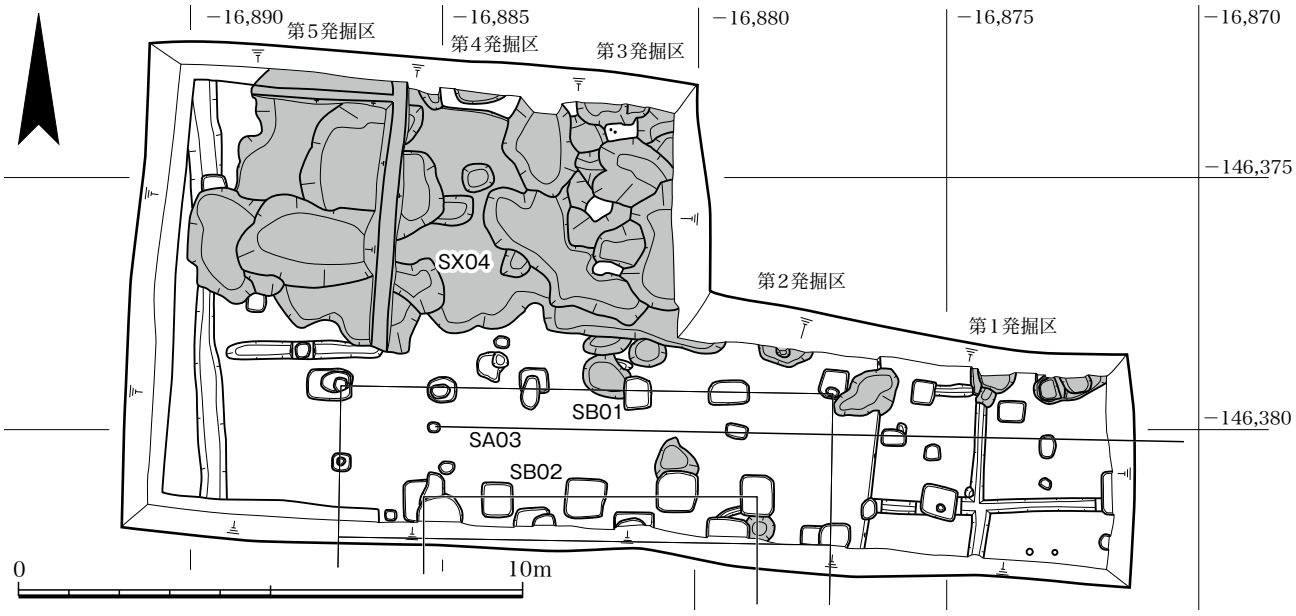
Ⅳ　出土遺物

出土遺物には縄文時代の石鏃１点、８～９世紀の土師器・須恵器・製塩土器、瓦類、12・13世紀の土師器・瓦器・国産陶器が遺物整理箱２箱分、土器の多くは小片で、ＳＸ04出土のものが多い。

Ⅴ　まとめ

今回の発掘調査では、当初の想定通り奈良時代の掘立柱建物、列、中世の粘土採掘土坑群が検出された。掘立柱建物は２時期以上あることがわかるが、発掘区が狭く全容は不明である。　（中島和彦）

発掘区全景（第１発掘区　北から）



ＨＪ第 616 次調査　発掘区遺構平面図（1/150）

発掘区全景（第２発掘区　北から）

発掘区全景（第３発掘区　北から）

発掘区全景（第４発掘区　北から）

発掘区全景（第５発掘区　北から）

17. 平城京跡（右京一条二坊十二坪）の調査　第617次

事 業 名	共同住宅新築	調 査 期 間	平成21年2月9日～3月12日
届出者名	近鉄不動産株式会社	調 査 面 積	135㎡
調 査 地	奈良市西大寺国見町2137-86、-88	調査担当者	秋山成人

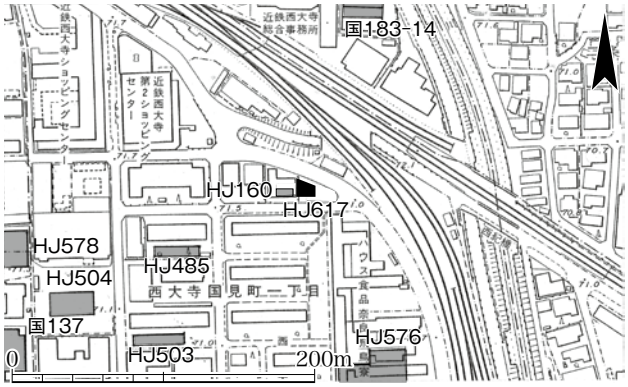
Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京一条二坊十二坪の南東にあたる。今回の調査対象地の西半では、昭和63年に市ＨＪ第160次調査を実施しており、古墳時代から奈良時代にかけての流路、奈良時代以降の小土坑を確認している。また、調査地から約70ｍ南西の位置で平成14年に実施した市ＨＪ第485次調査でも奈良時代以前の流路、奈良時代の土坑、平安時代の土坑を確認している。さらに南側で、平成15年度に実施した市ＨＪ第504次調査でも、弥生後期から古墳時代にかけての溝、奈良時代の西二坊坊間西小路とその両側溝、掘立柱建物・掘立柱列・土坑を検出している。これまでの調査例から周辺には奈良時代以前の流路、遺構が点在し、奈良時代の遺構も見つかっているが、その遺構密度は低い。

今回の調査は、周辺の調査結果を考慮し、奈良時代以前の遺構の有無の確認と十二坪内の宅地の様相確認を目的として実施した。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本的な層序は、上から造成土（0.15ｍ）、黒灰色土（0.5ｍ）、赤灰色土（0.15ｍ）の順で堆積し、現地表下0.8ｍで黄灰色砂質土の地山に至る。発掘区西端は、旧建物の基礎掘削で遺構面が失われている。

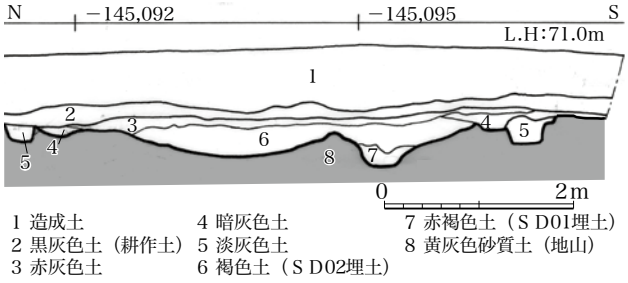


ＨＪ第617次調査　発掘区位置図（1/5,000）

遺構検出は地山上面で行った。遺構検出面の標高は70.0ｍである。

Ⅲ　検出遺構

古墳時代前期の溝ＳＤ01・02、土坑ＳＫ03、奈良時代後半の掘立柱建物ＳＢ04・05、掘立柱列ＳＡ06～



ＨＪ第617次調査　発掘区東壁土層図（1/80）

ＨＪ第617次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	平面形	平面規模（m）	深さ（m）	主な出土遺物・備考
ＳＤ01	斜行溝	幅0.6～1.0、長さ10.7以上	0.3～0.4	古墳時代前期の土師器壷・鉢
ＳＤ02	斜行溝	幅2.3～3.5、長さ8.3以上	0.3	古墳時代前期の土師器壷・鉢　ＳＤ01より新しい
ＳＫ03	不整形	長径1.8× 短径0.8	0.2	古墳時代前期の土師器壷

遺構番号	棟方向	規模	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		備　　考
		桁行×梁行	(m)	(m)	桁行	梁行	
ＳＢ04	南北？	2以上×2	4.2以上	2.1	2.1	2.1	総柱建物　柱穴掘形一辺0.5～0.8ｍ、深さ約0.3ｍ。
ＳＢ05	南北	1以上	5.0以上	1.8以上	3	1.8以上	柱穴掘形一辺0.8ｍ、深さ0.2ｍ。
ＳA06	南北	2以上	3.6以上		1.8		柱穴掘形一辺0.35ｍ、深さ0.1～0.3ｍ。
ＳＡ07	東西	3以上	7.2以上		2.4		柱穴掘形一辺0.2～0.3ｍ。
ＳＡ08	東西	1以上	2.1以上		2.1以上		柱穴掘形一辺0.6ｍ、深さ0.4ｍ。重複関係からＳＢ04より新しい。

遺構番号		掘　形		井戸枠		主な出土遺物・備考
	平面形	平面規模(m)	深さ(m)	構造	内法(m)	
ＳＥ09	隅丸方形	東西1.6× 南北1.3	1.1	抜取り	0.6	８世紀後半：土師器杯・椀・甕・須恵器壷・甕
ＳＥ10	不整円形	一辺3.3 改修後径2.5	2.4	方形縦板組 隅柱横桟留	0.9 改修後0.6	**(掘形)**　８世紀：須恵器壷・壷蓋・甕 **(抜取)**　８世紀後半：土師器高杯・須恵器高杯・壷・甕・平瓦・軒平瓦6675A，6664C・刻印平瓦「理」１点 **(枠内)**　８世紀中頃：土師器皿　８世紀後半：椀・甕・須恵器杯・甕

08、井戸ＳＥ09、10を検出した。なお、検出遺構については一覧表にまとめ、井戸ＳＥ10について詳述する。

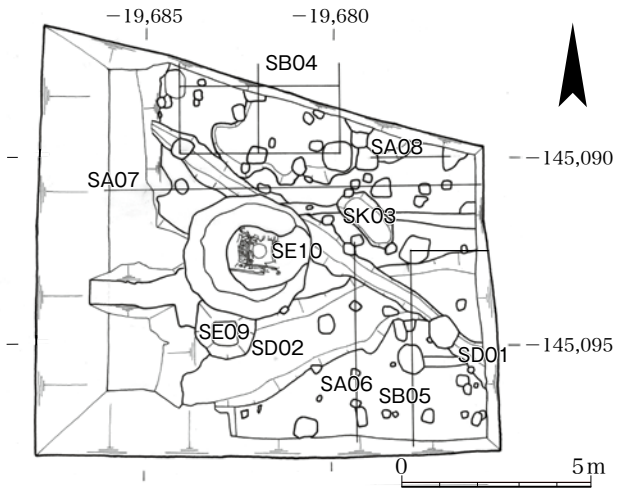
ＳＥ10　発掘区中央部で検出した方形縦板組隅柱横桟留の井戸。掘形は二重になっており、当初の井戸枠はすべて抜き取られ新たに造り替えられていることがわかる。造り替えた後、西側の側板が崩落したため、隅柱と横桟を加えて補修をしている。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱で38箱分が出土した。ＳＤ01・02、ＳＫ03から古墳時代前期の布留式土器古段階の壷・鉢・甕が出土した。ＳＢ04、ＳＡ05～08、ＳＥ09・10などから８世紀後半の土師器椀・皿・杯・甕、須恵器杯身・杯蓋・壷・甕、軒丸瓦6311Ａａ型式１点、軒平瓦6664Ｃ・6675Ａ各型式１点、刻印平瓦「理」ｂ種１点、丸瓦・平瓦、磚が出土した。

Ⅴ　調査所見

今回の調査では、隣地の調査成果と同様に古墳時代前期の溝・土坑を確認した。調査地より約400ｍ南西方向の一帯は古墳時代の菅原東遺跡が広がり、それとの関連性も考慮される。また、井戸ＳＥ09・10の重複関係・造り替え・補修行為から、同じ場所で長期間井戸の利用が継続したと考えられ、奈良時代後半に重点的に宅地利用されていることがわかる。掘立柱建物・塀は発掘区外に続くものが多く、詳細不明である。　（秋山成人）



ＨＪ第617次調査遺構平面図（1/200）

井戸ＳＥ10（南から）

発掘区全景（東から）

18. 平城京跡（右京北辺三坊六坪）の調査　第618次

事 業 名	宅地造成	調 査 期 間	平成21年２月２日～２月５日
届出者名	吉川商事	調 査 面 積	40㎡
調 査 地	奈良市西大寺北町一丁目358番４他	調査担当者	武田和哉

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京北辺三坊六坪の南西隅付近に該当している。同坪内での調査は過去に例がなく、遺構の様相把握を目的として、調査を実施した。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本層序は、黒灰色粘土（水田耕作土）以下、暗灰色粘質土（水田床土）、茶褐色粘質土、暗灰褐色粘質土（遺物包含層）と続き、現地表下約0.3～0.4ｍで黄褐色粘土の地山に達する。遺構検出作業は地山上面において実施した。地山上面の標高は、78.3～78.4ｍである。

Ⅲ　検出遺構

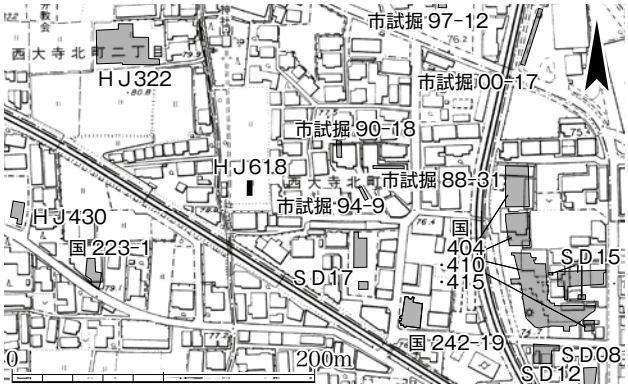
検出した主要な遺構には、奈良時代の土坑１基、柱列２条などがある。以下、その概要について記す。

ＳＫ01は発掘区の北側で検出した土坑。平面ほぼ円形を呈し、径約1.6ｍ、深さ約0.4ｍ。埋土から、８世紀の土師器・須恵器が出土したが、ごく僅かであり、かつ小片のため、詳細な時期については不明である。ＳＡ02は発掘区の中央やや北寄りで検出した東西方向の柱列。発掘区内では１間分を検出したのみである。柱間は4.2ｍ、柱穴はともに一辺約0.5～0.6ｍで、検出面からの深さは0.6～0.8ｍである。ＳＡ03は発掘区の中央やや南寄りで検出した東西方向の柱列。発掘区内では１間分を検出したのみである。柱間は3.6ｍ、東側の柱穴は一辺約1.0ｍの方形で、検出面からの深さは0.6ｍである。西側の柱穴には沈下防止のための根石や、瓦・塼の破片が埋め込まれていた。

Ⅳ　出土遺物

遺物は、８世紀後半～９世紀初の土師器・須恵器・丸瓦・平瓦・塼、12世紀頃の輸入青磁（龍泉窯系）、時期不明の製塩土器・鞴羽口・鉄滓・凝灰岩切石が、遺物整理箱２箱分出土した。

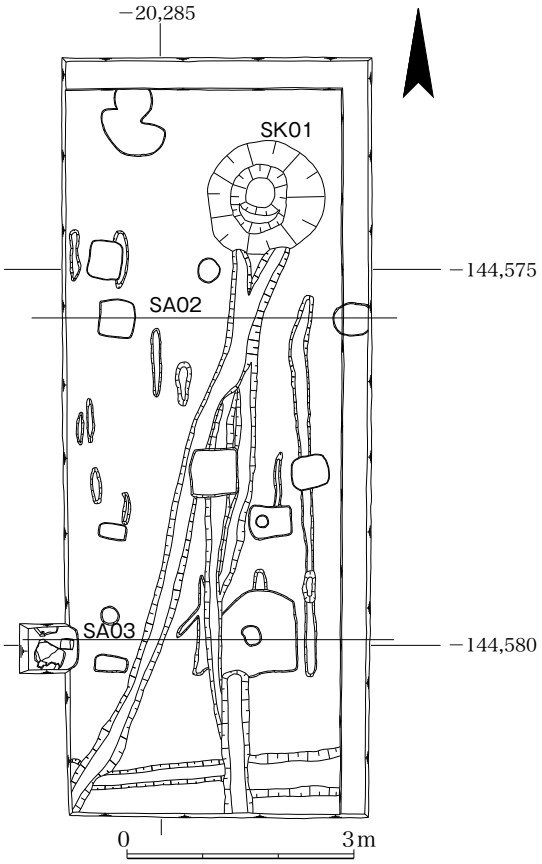
発掘区全景（西より）



ＨＪ第618次調査　発掘区位置図（1/5,000）

Ⅴ　まとめ

本調査では、奈良時代の遺構の存在が確認された。ＳＡ03の柱穴は比較的規模が大きく柱間も長いことから、大型建物の一部である可能性も考えられる。（武田和哉）



ＨＪ第618次調査　発掘区遺構平面図（1/100）

19. 平城京跡（左京六条一坊七坪・東一坊坊間路）の調査　第619次

事 業 名	宅地造成	調 査 期 間	平成21年3月9日～3月19日
届出者名	個人	調 査 面 積	185㎡
調 査 地	奈良市柏木町157-1他	調査担当者	武田和哉

Ⅰ　はじめに

調査地は、条坊復原によると左京六条一坊七坪東辺中央付近および東一坊坊間路に相当する。同坪内での調査は過去に例がなく、遺構の様相把握を目的として西・東・南の３発掘区を設定し調査を行った。

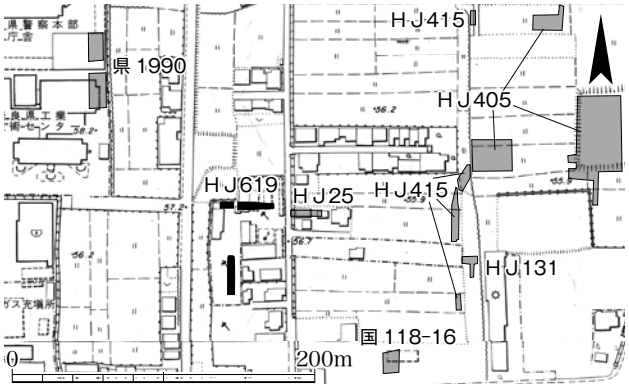
Ⅱ　基本層序

基本層序は各発掘区により異なる。東発掘区では、造成土の下に黒灰色粘土（旧耕作土）、暗褐色粘土（奈良時代遺物包含）と続き、地表下約1.0ｍで淡灰色シルトまたは黄灰色粘土の地山となる。地山上面の標高は55.9～56.1ｍである。西発掘区では、造成土の下に黒灰色粘土（旧耕作土）、暗灰色土（旧床土）、黄灰色シルト、暗灰色粘土と続き、現地表下約1.0ｍで淡灰色シルトまたは黄灰色粘土の地山となる。地山上面の標高は55.9～56.0ｍである。南発掘区では、造成土の下に黒灰色粘土（旧耕作土）、暗灰色土（旧床土）、暗茶褐色粘質土および暗灰色粘土（８世紀の遺物包含）と続き、現地表下1.8～1.9ｍで淡灰色シルトの地山となる。地山上面の標高は55.4～55.5ｍである。

遺構検出作業は、各発掘区とも地山上面で実施した。南発掘区は西・東発掘区に比べ地山上面の標高が低く、その上に暗茶褐色粘質土の層が堆積していた。当該層は、奈良時代以降の堆積とみられ、その下面では遺構を確認していない。また西発掘区では遺構は検出できなかった。

Ⅲ　検出遺構

主要な遺構は、東発掘区で検出した奈良～平安時代前半の溝２条である。ＳＤ01は、東発掘区の西側で検出した南北方向の溝。発掘区内では約３ｍ分を検出し、幅約2.0ｍ、深さ約0.5ｍ。埋土は概ね３層に大別され、うち下の２層は溝本体部分の埋土を構成する。他方、上の１層は溝の中央から西側にかけて薄く広がる幅広い堆積である。上層には遺物がほとんどなく、下層からは８世紀後半～９世紀前半の土師器・須恵器、丸・平瓦が出土した。ＳＤ02は、東発掘区の中央やや東寄りで検出した南北方向の溝で、ＳＤ02との間に約２ｍの間隔がある。発掘区内では約３ｍ分を検出し、幅は約６ｍ、深さは約1.55ｍ。埋土は砂と粘土が主体で数層に分かれており、どの層からも８～９世紀前半の丸・平瓦、土師器・須恵器が出土。溝の最深部分の国土座標値は、Ｘ＝−147,409.0 Ｙ＝−18,582.0である。



ＨＪ第619次調査　発掘区位置図（1/5,000）

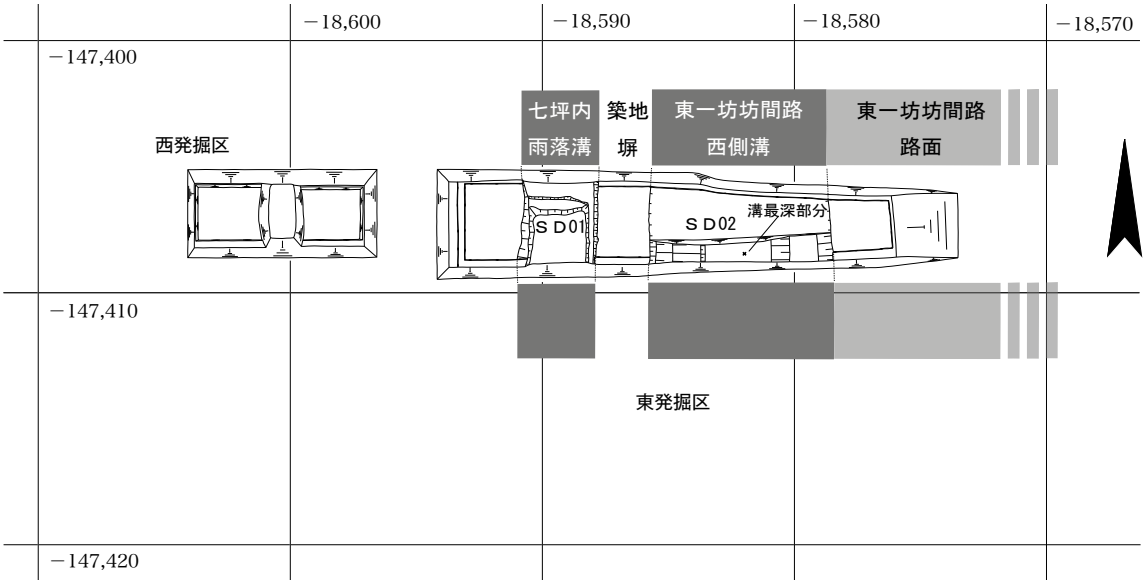
Ⅳ　出土遺物

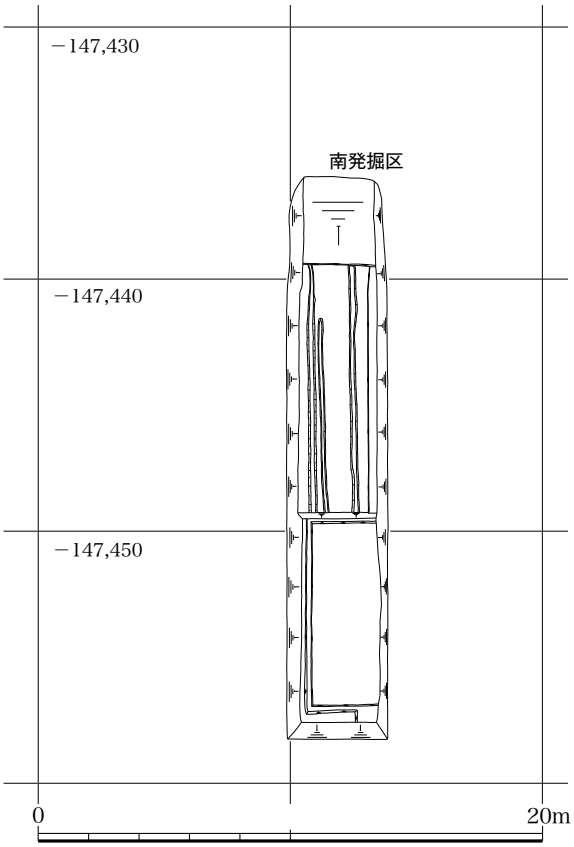
出土遺物は比較的少なく、遺物整理箱４箱分が出土した。遺物包含層から８世紀の軒丸瓦（型式不明）が出土したほか、８世紀後半～９世紀前半の土師器・須恵器、丸・平瓦がある。これらのほとんどはＳＤ01・02から出土したもので、瓦類が大半を占めている。

Ⅴ　まとめ

本調査で検出した溝ＳＤ02は、周辺での調査例や調査地近隣の遺存地割の様相などから、東一坊坊間路の西側溝とみられる。ＳＤ01は七坪内の築地塀の雨落ち溝である可能性があり、ＳＤ02と01の間には築地の存在が想定される。双方の溝から出土した遺物の大半が瓦類であることも、この想定を補強する事実であると言えよう。

東一坊坊間路は、平城宮南面の壬生門に通じる条坊道路であり、平城京内の他の坊間路に比べて広い幅員で設定されていることが知られている。さらに、その西側溝はこれまでに京域内で確認された条坊側溝の中でも大規模な部類に属する。過去の京域内での調査でこの西側溝は４地点で検出されている。そのうち３地点は本調査地の近辺であり、その様相は類似する。残りの１地点は、本調査地より約1.7km北の平城宮南面に程近い地点で検出されているが、その幅と深さの規模は本調査で検出したＳＤ02と大差がない。西側溝は宮内からの主たる排水路の役割を果たすとともに、京内においても幹線的な排水路の機能を果たしていたとみられる。　（武田和哉）

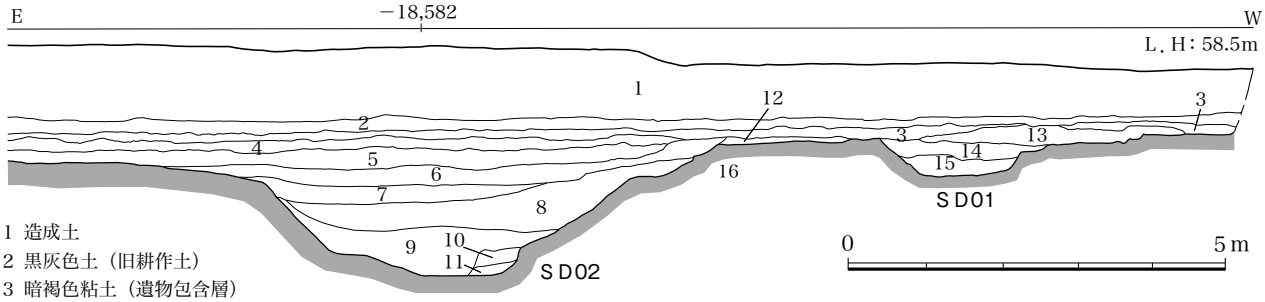




ＨＪ第619次調査　発掘区遺構平面図（1/300）

東発掘区西半とＳＤ01（西から）

東発掘区ＳＤ02堆積土層（北から）



1 造成土
2 黒灰色土（旧耕作土）
3 暗褐色粘土（遺物包含層）
4 暗茶灰色砂質土
5 灰色砂（ＳＤ02埋土）
6 暗茶褐色粘質土（砂含む・ＳＤ02埋土）
7 黒灰色粘土（ＳＤ02埋土）
8 暗灰色細砂（ＳＤ02埋土）
9 暗灰色粘土＋粗砂の互層（ＳＤ02埋土）
10 暗灰色粘土（ＳＤ02埋土）
11 暗灰色細砂（ＳＤ02埋土）
12 灰色砂
13 暗茶灰色土（砂含む・ＳＤ01埋土）
14 暗茶褐色粘質砂（ＳＤ01埋土）
15 暗灰色砂（ＳＤ01埋土）
16 黄灰色粘土または淡灰色シルト（地山）

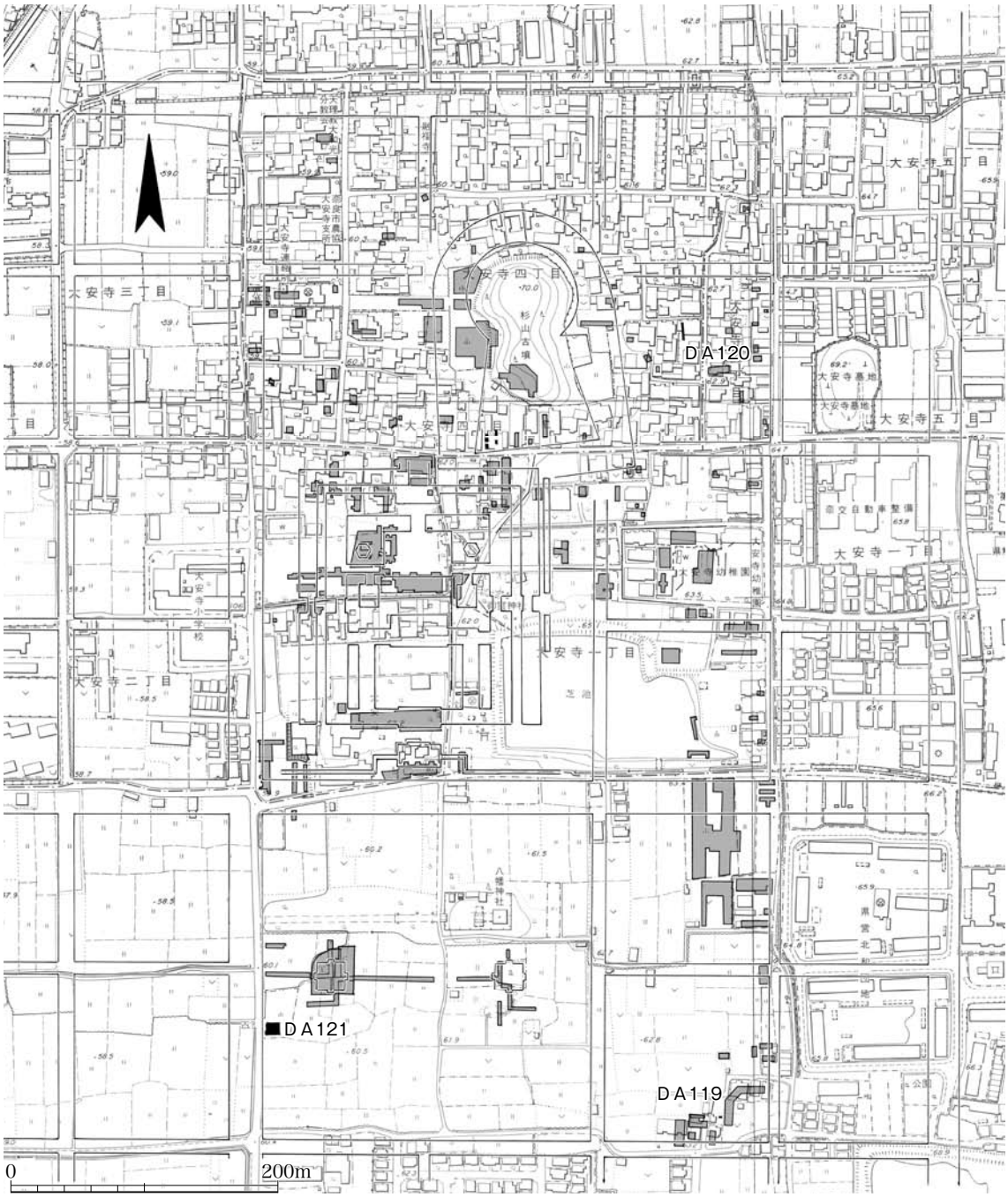
ＨＪ第619次調査　東発掘区南壁土層図（1/100）

20．史跡大安寺旧境内の調査

奈良市教育委員会では、平成 20 年度に史跡大安寺旧境内において計３件の調査を実施した。第 119 次調査は「花園院推定地」で、第 120 次調査は「賤院推定地」にあたる。第 121 次は「塔院」の西塔跡の南の位置で実施した。いずれも現状変更許可申請に係る調査で、ともに条件付き許可となったものである。

平成 20 年度　史跡大安寺旧境内　発掘調査一覧表

調査次数	事　業　内　容	調　査　地	調 査 期 間	調査面積	調査担当者
ＤＡ第 119 次	農業用倉庫新築	東九条町 1376-2 他	H20．6．2～6．6	4㎡	安井
ＤＡ第 120 次	住宅の除却及び新築	大安寺四丁目 1103-2 他	H20.12.10 ～ 12.19	24㎡	原田香
ＤＡ第 121 次	史跡大安寺旧境内保存整備事業	東九条町 1348-1 他	H21．2.23 ～ 3.19	103㎡	松浦



史跡大安寺旧境内の調査　発掘調査位置図（1/5,000）

（1） 花園院地区の調査　第119次

Ⅰ　はじめに

調査地は花園院推定地の南辺東寄りにあたり、現状は畑地である。周辺では過去に5件の調査が実施されており、すぐ西側で実施した市ＤＡ第17～19次調査（昭和59年度）・41次調査（平成元年度）では、水田面下1.0～1.5ｍ（標高61.0～61.4ｍ）の地山上面で奈良時代の七条条間路北側溝とみられる東西溝や平安時代後半の土坑が検出されている。

今回の調査は、奈良時代の遺構面の様相の確認を目的として実施した。

Ⅱ　調査の概要

発掘区内の層序は、畑地の耕作土（厚さ0.1ｍ）及び盛土（厚さ0.6ｍ）、旧水田の耕作土（厚さ0.1ｍ）及び床土（5層あり、厚さ1.2ｍ）の下で沖積層の地山上面となる。旧水田の床土は灰色あるいは黄褐色砂質シルトで斑鉄がみられ、8世紀以降の土器片を含む。

奈良時代の遺構面はオリーブ褐色砂質シルトの地山上面で、その標高は概ね61.5ｍである。地山上面で遺構検出を行ったが、遺構はなかった。

Ⅲ　出土遺物

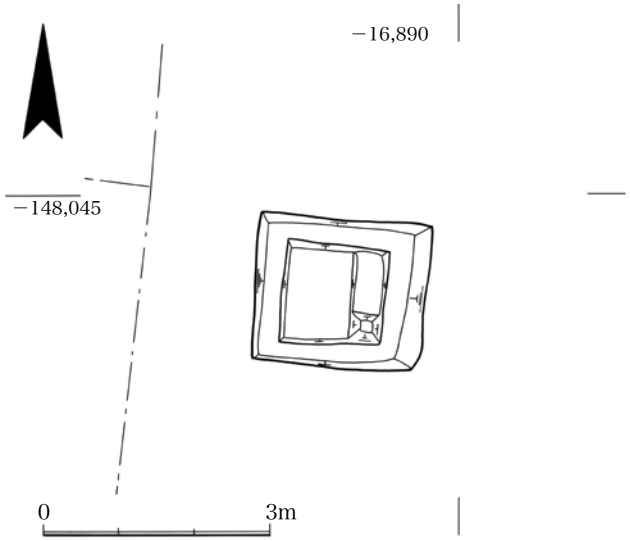
遺物整理箱で1箱分あり、その内訳は旧水田の床土から出土した8世紀の須恵器甕・杯Ｂ、土師器甕と18世紀後半頃の磁器椀である。いずれも小片である。

Ⅳ　まとめ

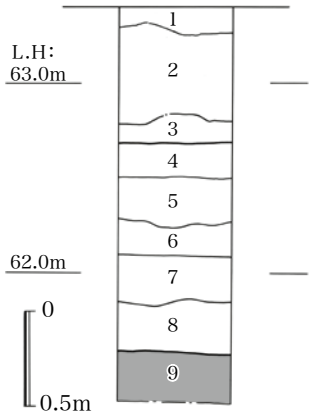
近接する調査地とほぼ同様に、旧水田面下1.3ｍで奈良時代の遺構面である地山上面を確認した。調査地一帯の地山上面の標高の差が小さいことから、奈良時代の旧地形はかなり平坦であったと推察される。　（安井宣也）

調査地全景（東から）

発掘区全景（北から）



ＤＡ第119次調査　発掘区平面図（1/100）



1　暗灰黄色砂質シルト
2　黄褐色シルト混じり砂
3　黒褐色砂質シルト
4　灰色砂質シルト
5　暗灰黄色砂質シルト
6　黄灰色砂質シルト
7　灰色砂質シルト
8　黄褐色砂質シルト
9　オリーブ褐色砂質シルト

1　畑の耕作土
2　畑の盛土
3　旧水田の耕作土
4～8　旧水田の床土
9　地山

ＤＡ第119次調査　発掘区土層模式図（1/40）

（2） 賤院地区の調査　第 120 次

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京条坊復原では左京六条四坊十坪中央部にあたり、賤院推定地区内の杉山古墳東側に相当する。この付近での過去の調査はどれも規模が小さく、奈良時代の遺構は、調査地南西のＤＡ第 22 次調査で井戸１基、調査地南東のＤＡ第 40 次調査で坪境小路西側溝、調査地東向かいのＤＡ第 107 次調査で掘立柱建物１棟が確認されている。また、奈良時代の可能性がある遺構として、調査地北東のＤＡ第 59 次調査の溝１条がある。

今回の調査は、奈良時代の遺構面の深さと、その残存状態の把握を目的として実施した。

Ⅱ　基本層序

層序は、近・現代の造成土（暗褐色土、暗茶褐色土）が厚さ 0.2 ～ 0.4 mあり、発掘区南側ではその直下が地山（黄灰色粘質シルト）となる。北側南寄りでは、造成土と地山との間に固く締まった灰黄色砂質土が厚さ 0.1 mほど堆積している。発掘区全体では現地表下 0.3 ～ 0.4 mで地山上面となり、その標高は 63.55 ～ 63.65 mである。遺構検出は地山上面で行った。

Ⅲ　検出遺構

検出した遺構には、奈良時代の可能性が高い柱穴６基（Ｐ 01 ～ 06）、溝１条（ＳＤ 07）、井戸１基（ＳＥ 08）、室町時代以降の溝２条（ＳＤ 09・10）、井戸２基（ＳＥ 11・12）、土坑１基（ＳＫ 13）があり、この他に近・現代の撹乱がある。なお、遺構保存の観点から、遺構は完掘せず一部を掘削するにとどめた。

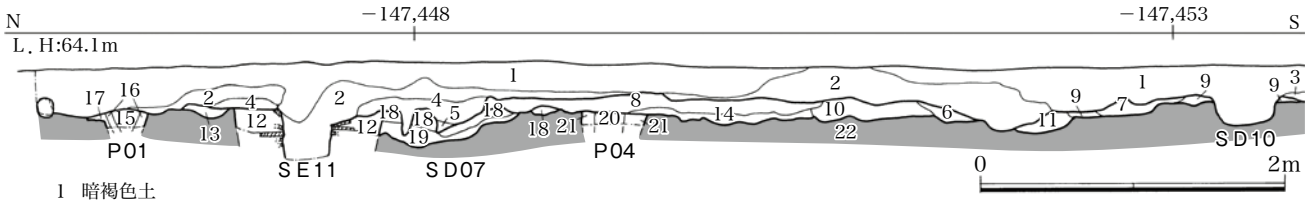
奈良時代の遺構

柱穴は平面隅丸方形で、Ｐ 03 の平面規模は一辺 0.85 m、それ以外の平面規模は一辺 0.4 ～ 0.6 mである。これらのうち、Ｐ 03 を断割ったところ、深さは 0.25 mで、柱は抜き取られていた。掘形埋土から土師器小片が出土したが、残存状態が悪く、詳細な時期は不明である。どの柱穴も、層序や重複関係から他の遺構よりも古い。発掘区が狭く、ほとんどが建物としてまとまらないが、Ｐ 01 とＰ 04 は 3.2 mの間隔で南北方向に並んでおり、掘立柱建物の一部になる可能性がある。

発掘区全景（北から）

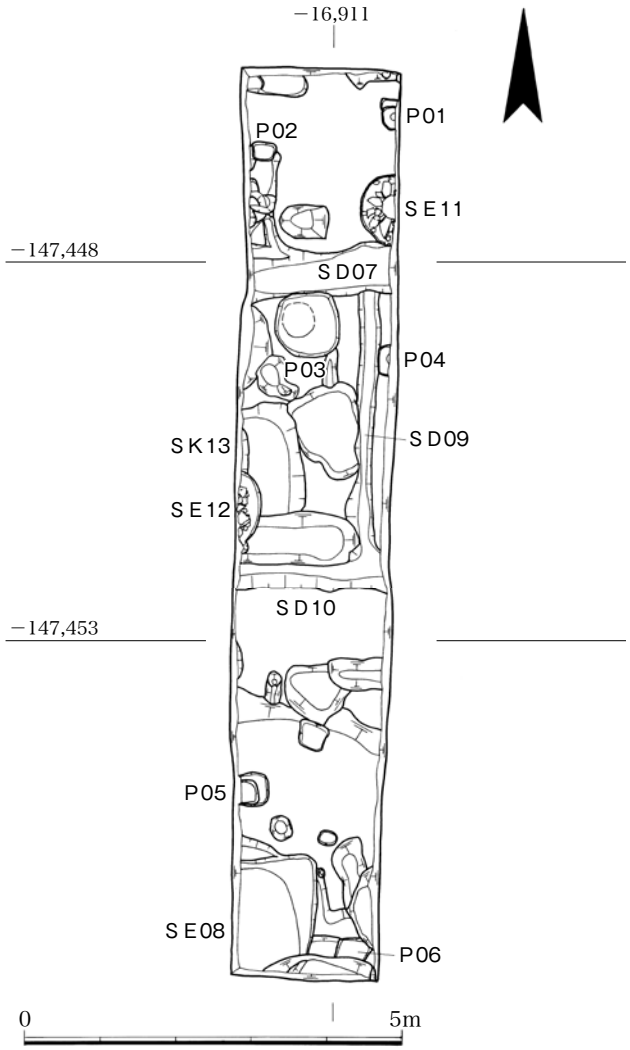
ＳＤ 07 は発掘区北側で検出した東西溝で、幅 0.65 m、深さは 0.25 mである。埋土から８世紀の土師器甕、須恵器杯・甕、熨斗瓦・平瓦が出土した。重複関係からＰ 03 より新しく、後述のＳＤ 09 よりも古い。発掘区西壁沿いに同じ埋土で深さ 0.03 mのごく浅い窪みが北に延びているが、溝となるのかは発掘外に続くため不明である。

ＳＥ 08 は発掘区南西隅で検出した井戸の一部で、平面形は隅丸方形になると思われる。西壁沿いに幅 0.3 m、

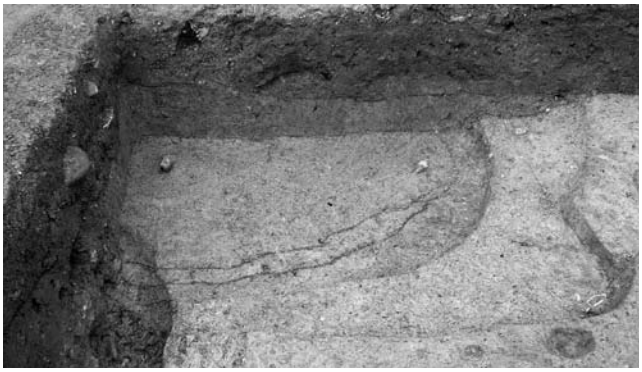


1 暗褐色土
2 暗茶褐色土
3 暗灰色砂質土
4 暗灰色砂質シルト
5 ４と灰茶色土の混合土
6 灰褐色砂質土
7 灰色砂質土（炭多く含む）
8 灰黄色砂質土（固く締まる）
9 灰黄色砂質土
10 淡灰色砂質土
11 淡灰色砂質土（ＳＤ10）
12 灰褐色砂礫（ＳＥ11掘形）
13 地山と淡灰茶色土の混合土
14 黄灰色土（土器片含む）
15 灰色土と灰黄色粘土の混合土（Ｐ01）
16 灰黄色土（Ｐ01）
17 灰色土と地山ブロックの混合土（Ｐ01）
18 淡灰黄色砂質シルト（ＳＤ07）
19 淡灰色砂質シルト（ＳＤ07）
20 淡灰色細粒砂質シルト・地山小ブロック少量混合（Ｐ04）
21 淡灰色細粒砂質シルトと地山小ブロック混合土（Ｐ04）
22 黄灰色粘質シルト（地山）

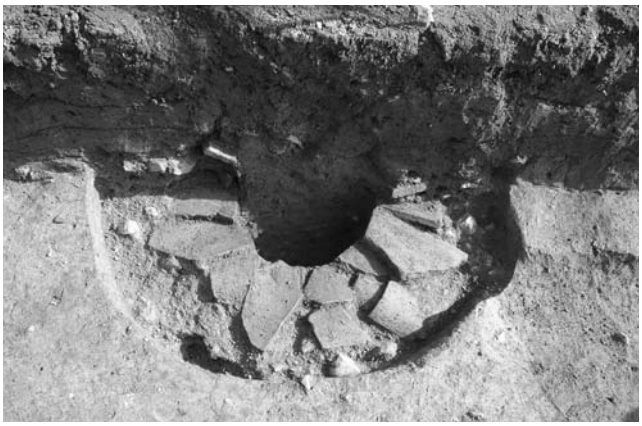
ＤＡ第 120 次調査　発掘区東壁土層図（1/50）



ＤＡ第 120 次調査　発掘区遺構平面図（1/100）



井戸ＳＥ 08 検出状況（東から）



井戸ＳＥ 11 検出状況（西から）

深さ 0.4 mほど掘り下げた結果、枠が抜き取られていることが判明した。埋土から５世紀後半の埴輪、８世紀の土師器杯か皿・甕、須恵器杯・杯蓋・壺・甕、製塩土器、丸・平瓦、流紋岩製砥石が出土した。

室町時代以降の遺構

ＳＤ 09 は発掘区北側東寄りで検出した南北溝で、後述のＳＤ 10 に南端で接続する。幅は 0.25 ～ 0.35 m、深さは 0.05 mで、ＳＤ 07 より新しい。

ＳＤ 10 は発掘区中央で検出した東西溝である。幅は 0.5 m、深さは 0.15 mで、ＳＤ 09 よりも深い。ＳＤ 09・10 とも８世紀の土師器小片・平瓦・塼のほかに 15 世紀後半の青磁椀、瓦質土器擂鉢が出土した。固く締まった灰黄色砂質土層よりも古い。

ＳＥ 11 は発掘区北側で検出した瓦積みの井戸で、東半部は発掘区外となる。井戸枠材に用いられている瓦は布目がなく、成形時に離れ砂を使用し、燻さず焼成した平瓦・丸瓦である。掘形は平面円形で直径 1.0 m、枠内径は 0.42 mで、枠内上部は近・現代の造成土で埋まっている。掘形から土師器小片とともに 14 世紀後半から 15 世紀前半にかけての土師器羽釜が出土した。

ＳＥ 12 は発掘区中央で検出した石組みの井戸で、井戸枠の裏込めの一部しか検出できなかったため、詳細は不明。掘形は近・現代の造成時に壊されている。15 世紀の瓦質土器火鉢、土師器小片が出土した。

ＳＫ 13 は発掘区中央で検出した平面隅丸方形の土坑で、発掘区外西へ続く。検出面からの深さ 0.15 mで、西壁の際で 0.25 mとさらに一段深くなる。８世紀の土師器小片・須恵器・平瓦、14 世紀半ばの土師器羽釜が出土した。重複関係ではＳＥ 12 より古い。

Ⅳ　出土遺物

出土遺物には、前述の各遺構から出土したもののほか、撹乱、造成土などから埴輪、８世紀の土師器・須恵器・丸瓦・平瓦、14 ～ 15 世紀の土師器・丸瓦・平瓦、15 世紀後半の土師器・瓦質土器、17 ～ 19 世紀の土師器・陶磁器・丸瓦・平瓦・桟瓦が合わせて遺物整理箱３箱分ある。その大半は小片のため、詳細な時期は不明である。

Ⅴ　まとめ

調査地周辺では、後世の削平により奈良時代の遺構が残存しないことも多い。今回、残存状態は悪いが、奈良時代の可能性が高い柱穴や井戸・溝を検出することができた。今後も資料の蓄積を期待したい。　（原田香織）

（3） 塔院地区の調査　第121次

Ⅰ　はじめに

史跡大安寺旧境内保存整備事業に係る塔院地区の調査は平成13年度から着手し、今回が7回目の調査となる。これまで塔跡を中心に調査してきたが、今回は寺地の西を区切る東三坊大路と塔院敷地との関連を探るべく、想定される築地塀等の区画施設の位置を知ることを目的として調査を実施した。

調査地は西塔跡の南西約50 mに位置し、塔院敷地の西辺中央からやや南に下がった場所にあたる。現在の旧境内西端を南北に走る道路は、東三坊大路を踏襲したものと考えられ、道路に若干の湾曲があるが、現況は遺存地割りをよく表しているものと見られる。この状況に基づき、調査区はできるだけ現道路に接近させる状態で設定し、一部についてはさらに道路際（歩道の側溝）まで補足確認をおこなった。

Ⅱ　基本層序

基本層序は、水田耕作土である黒色土約0.2 mと灰色土約0.05 m以下、濁黄灰色粘質土が0.05～0.15 m堆積し、礫混じり橙褐色土の地山に達する。しかし、発掘区内の地山面は西に向かって下っており、発掘区西端では旧河川が南北に貫流している。そしてこの旧河川および河岸部を覆うように、整地土と考えられる褐色シルト質土が最大0.4 mの厚さで堆積しており、発掘区東半の地山面と高さを合わせ、敷地を平坦にした意図をうかがわせる。この層には瓦・須恵器・土師器・黒色土器Ａ類が含まれており、９世紀末以降に行われた整地と考えられる。また、この整地範囲付近のみ、上部に最低３度の砂層の堆積が認められ、この付近が常に流路となっていた状態がうかがえる。

地山上面の標高は発掘区東端付近で約59.4 m、旧河川東肩部で約59.1 m。整地土上面は、範囲の東端で約59.3 m、発掘区西端でも約59.3 mである。

Ⅲ　検出遺構

整地層上面レベルで、掘立柱塀跡１条、掘立柱建物跡１棟、溝３条、土坑１基、整地層下で溝１条、土坑１基および旧河川１条を検出した。遺構については一覧にまとめ、補足点を記す。

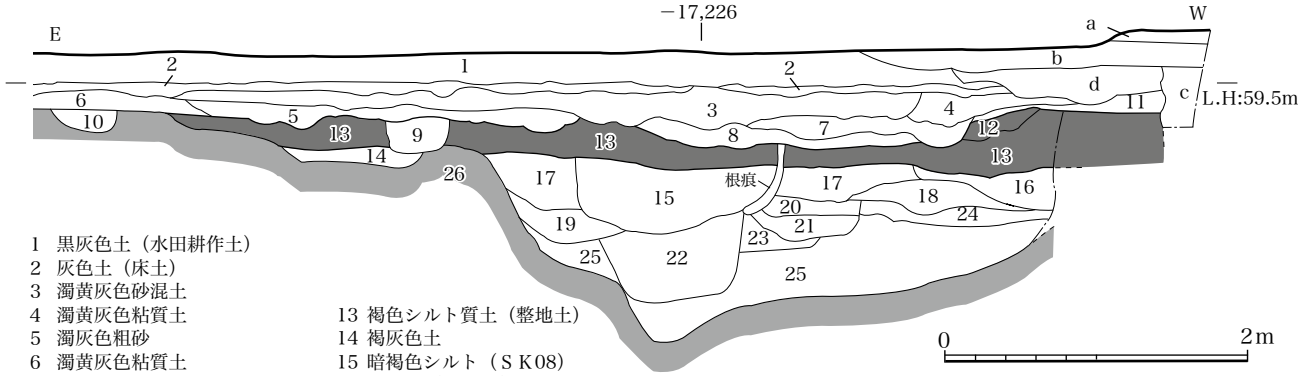
掘立柱建物・柱列については可能性として示したが、実態および時期は不明確である。

溝ＳＤ03は、整地層上面から掘り込まれた状態をみせるが、あるいは整地作業の段階で窪んだ状態に成形された可能性も考えられる。埋土には明灰色の細～中粒砂が充填しており、かなりの水流があったものと判断される。砂層中に含まれる土器・瓦は小片が多く、埋没時期の詳細は不明である。

溝ＳＤ05と土坑ＳＫ06との切り合い関係は極めて不明瞭であったが、溝が土坑より古いと判断した。溝の埋土には弥生土器が若干含まれるが、主軸は南北方位にのっており、出土遺物のみで弥生時代に帰属させることには慎重な検討を要するものと思われる。

ＳＫ08は土坑の一部と考えられ、埋土は締まりのよい暗褐色シルトである。弥生土器片が僅かに出土したが、時期は不詳である。

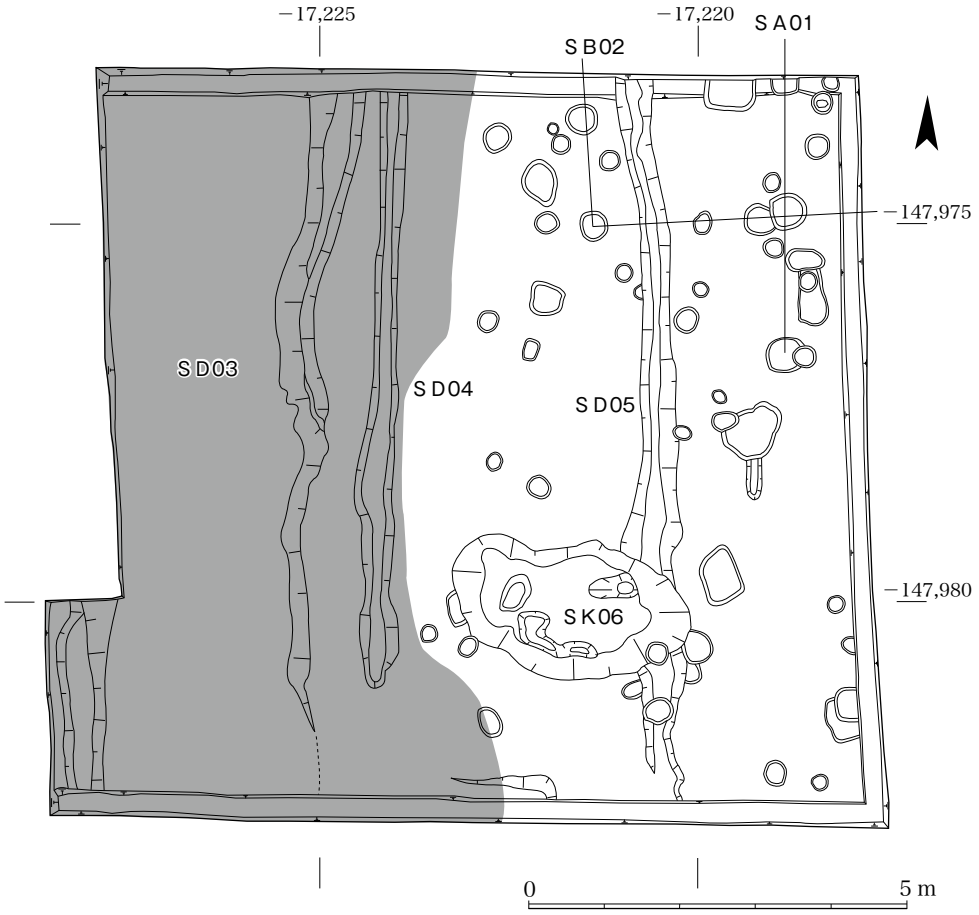
旧河川は幅５m以上、深さ0.9m前後で発掘区西端を南北に貫流している。東肩のみ確認したが、底面が発掘区内で西へ上がり始めている部分もあることから、狭いところでは幅５m程度であろう。断面を観察すると堆積した砂層は数層に分別可能で、なかには粘質土がレンズ



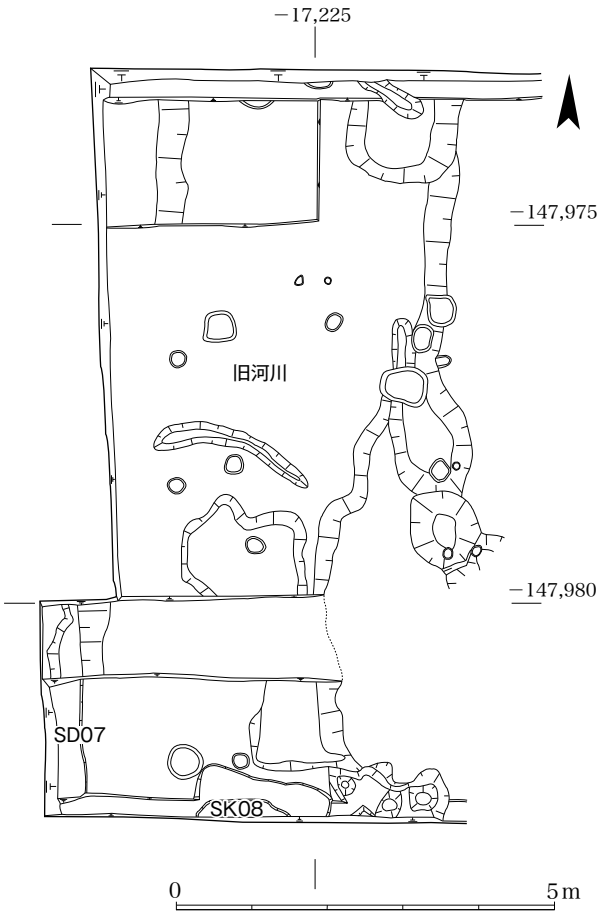
1　黒灰色土（水田耕作土）
2　灰色土（床土）
3　濁黄灰色砂混土
4　濁黄灰色粘質土
5　濁灰色粗砂
6　濁黄灰色粘質土
7　淡褐灰色粘質土
8　明褐色細砂～中粒砂（ＳＤ03）
9　明褐灰色土（ＳＤ04）
10　灰褐色土
11　濁灰色砂
12　明褐色シルト質土
13　褐色シルト質土（整地土）
14　褐灰色土
15　暗褐色シルト（ＳＫ08）
16　褐色土（ＳＤ07）
17　褐色砂
18　明灰色粗砂
19　濁暗灰褐色砂
20　明紫灰色粘質土
21　明灰色砂
22　黒色粘質土
23　黒灰色砂
24　濁暗黄色シルト
25　暗灰色～灰色粗砂～砂礫
26　礫混じり橙褐色土

ａ～ｄは現代の盛土および撹乱坑

ＤＡ第121次調査　南壁西半土層図（1/50）



ＤＡ第 121 次調査　遺構平面図（1/100）　網掛けは整地範囲



ＤＡ第 121 次調査　整地層下遺構平面図（1/100）

状に嵌入したり、層界からの掘り込みが認められたりする部分もあり、流水と滞水が繰り返された状況がうかがえる。堆積土の大半を占める灰色粗砂中には弥生時代前期～古墳時代初頭の土器が含まれている。

Ⅳ　出土遺物

出土遺物は整理箱８箱分で、主な遺物には石鏃、弥生土器、古式土師器、８～９世紀と考えられる須恵器、土師器、瓦がある。河川出土の土器は摩滅しているものが多いが弥生前期およびＶ様式の壺と判断されるものを認めている。整地層からは、少量であるが杯とみられる黒色土器Ａ類が出土している。なお、軒瓦は確認していない。

Ⅴ　調査所見

今回の調査では当初目的とした築地塀およびその関連遺構と断定できる遺構は確認できなかった。平成 15 年度のＤＡ第 104 次調査の成果から推定される大安寺西面築地塀位置から考えても、塔院西面築地塀は現道路下になる可能性が高い。ＤＡ第 104 次調査で検出された築地塀の雨落ちと考えられる溝については、同様のものが存在したとすれば、今回の発掘区と僅かに重なってくる可能性がある。しかし推定位置に近い溝ＳＤ 07 は検出部分が少ないため、築地塀に関連するものとは判断し難く、形状や埋土からみると、雨落ちとは異なる可能性が高いと考える。

この付近では敷地西端が整地されていることが判明したが、これは旧地形の傾斜や旧河川の砂層に対しての処置と考えられる。本調査地の北側でおこなったＤＡ第 94 次調査でも一部には整地と思われる層が認められているが、標高差が大きく層の様相も異なっており、同一層とは判断し難い。整地層の上面には浅く広い溝が走っており、この溝が整地に伴って成形された、塔院敷地周囲を廻る排水施設（堆積砂からすると恒常的な流路として機能していた可能性が高い）とするならば、出土遺物から

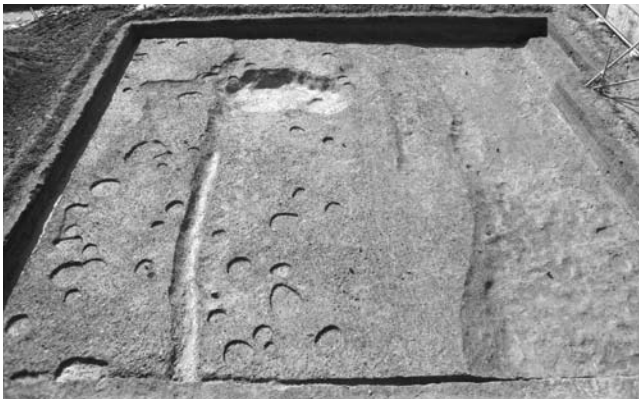
ＤＡ第 121 次調査　検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模（間）	桁行全長	梁行全長	柱間寸法（m）		備　　考
		桁行 × 梁行	(m)	(m)	桁　行	梁　行	
ＳＡ 01	南北	２以上	3.6 以上		1.8-1.8		柱穴深さ 0.2 ～ 0.25 m
ＳＢ 02	不明	２以上 ×2 以上	2.1 以上	1.5 以上	2.1	1.5	柱穴深さ 0.1 ～ 0.25 m

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	主な出土遺物	備　　考
ＳＤ 03	南北溝	長さ 10 以上 × 幅 3.0 前後	0.2	8 ～ 10 世紀:土師器杯か皿、須恵器杯・甕、灰釉陶器椀、平瓦・丸瓦	ほとんどが小破片
ＳＤ 04	南北溝	長さ 10 以上 × 幅 0.3 前後	0.2	8 世紀：土師器・須恵器	少量
ＳＤ 05	南北溝	長さ 10 以上 × 幅 0.4 前後	0.2	弥生時代末～古墳時代初頭：土器	ＳＫ 06 より古い
ＳＫ 06	楕円形	長径 3.2× 短径 1.7	0.25	8 世紀後半：土師器杯・皿、須恵器杯Ｂ・甕	ＳＤ 05 より新しい
ＳＤ 07	南北溝	長さ 1.5 以上 × 幅 1.0 以上	0.25	土師器小片	
ＳＫ 08	円形	径 1.3 以上	0.4 以上	弥生土器壺か甕	

ＳＤ 03 の堆積砂（南東から）

ＳＤ 03（南から）



発掘区全景（北から）

発掘区全景（整地下層）（北から）

みて９世紀末から 10 世紀の間に塔院敷地が改めて整備されたものと考えられる。９世紀前半に完成したと推測される西塔の建立時期とは少し時間を隔てたものであり、少なくとも創建時の作業との関連性は薄いと考えられる。また、８世紀後半にはＳＫ 06 のような土器廃棄用の土坑が掘られており、この付近は塔院区画内でも当初あまり手をつけられなかった場所かもしれない。

この整地作業が、何に端を発しているかは不明であるが、鎌倉時代までは東塔を中心に何度か修覆や整備が行われており、西塔の焼失後も西面築地周辺については手が入れられた可能性がある。想定される築地塀とどのように繋がっていくのかは今回の調査区では確認できなかったが、地形の様相から推測すると、東三坊大路は塔院敷地より原地形が低かったと考えられることから、築地塀の建造に関しても何らかの工夫が施された可能性があろう。今回の調査地付近は現道路が東にやや寄っている部分で、遺存地割りとは言え、条坊復原としては塔院敷地側に入り込んでいる部分である。したがって塔院区画施設については、より西側に張り出した区域での確認が必要となる。　（松浦五輪美）

21．東紀寺遺跡の調査　第 10・11 次

事 業 名	奈良市立病院建替事業	調 査 期 間	ＨＫ第 10 次　平成 20 年 7 月 1 日～8 月 26 日
			ＨＫ第 11 次　平成 21 年 4 月 10 日～5 月 1 日
届出者名	奈良市長	調 査 面 積	ＨＫ第 10 次　360㎡　ＨＫ第 11 次　96㎡
調 査 地	奈良市東紀寺町一丁目 50 番 1	調査担当者	ＨＫ第 10 次・第 11 次　池田裕英

Ⅰ　はじめに

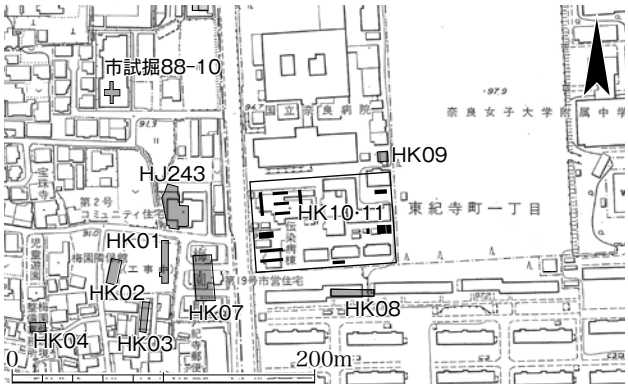
本調査地は東紀寺遺跡の西端部に位置する。東紀寺遺跡は、これまでに奈良国立文化財研究所（現奈良文化財研究所）、奈良県立橿原考古学研究所、奈良市教育委員会によって発掘調査が行われており、古墳時代や奈良時代の遺構が検出されている遺跡である。

調査は平成 20 年度と 21 年度の 2 カ年にわたって実施した。平成 20 年度の第 10 次調査は事業予定地が広いことから遺構の有無と分布、その範囲の確認を目的に実施した。事業対象地を 4 区域に分け、A ～Kの計 11 の発掘区を設けて試掘調査を行った。平成 21 年度の第 11 次調査は、試掘調査の結果に基づき奈良時代の遺構を検出したＪ発掘区の西に隣接して、遺構の時期や広がりを確認するため 2 箇所の発掘区を設けて実施した。

Ⅱ　基本層序

第１区（A ～Ｅ発掘区）　層序は上からクラッシャー・真砂土・造成土・黒灰色土（旧耕土）・暗黒灰色砂質土（床土）・暗灰褐色砂質土（遺物包含層）と続き、灰緑色土の地山となる。地山上面の標高は、最も東に位置するＥ発掘区で 94.5 m、西に位置するＡ発掘区で 93.7 mである。地山は東から西に向かって下り、敷地中央のＢ・Ｃ・Ｄ発掘区の西半部には水田耕作に伴うとみられる地下げによる段差がある。遺構は全て地山上面で検出した。

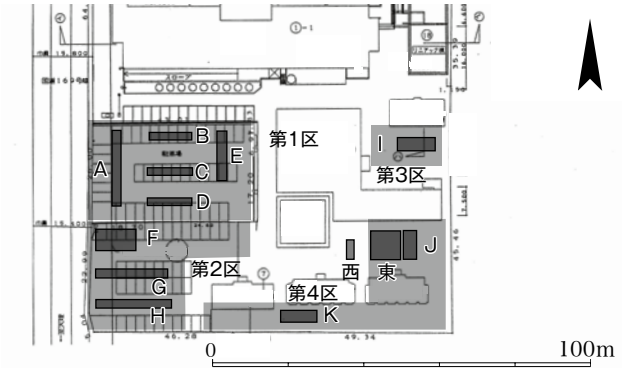
第２区（F ～H発掘区）　駐車場のクラッシャーを除去すると、すぐに旧陸軍聯隊の煉瓦造りの基礎を検出した。基礎の一部にコンクリートが敷設された箇所があり、この部分は旧国立病院の建物であったと考えられる。最も南のＨ発掘区では煉瓦の基礎の南にコンクリート管が埋設されていたため、部分的な掘り下げにとどまった。地山上面の標高は、南端の発掘区が 93.5 m、北端の発掘区が 93.9 mである。



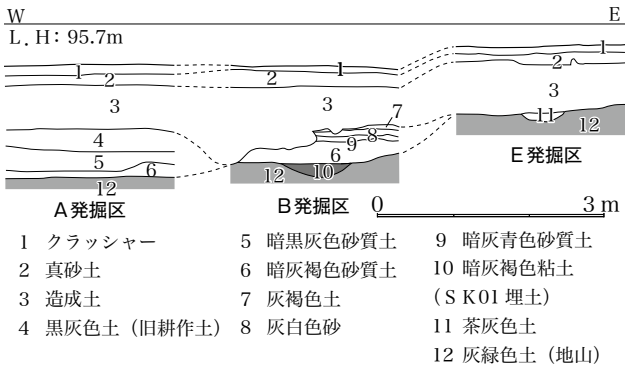
ＨＫ第 10・11 次調査　発掘区位置図（1/5,000）

第３区（Ｉ発掘区）　上から造成土、灰黒色土（旧耕土）、灰褐色砂質土（床土）、茶灰色砂質土、灰褐色砂と続き、現地表下約 1.1 mで暗茶褐色粘土の地山にいたる。地山上面の標高は概ね 95.5 mである。

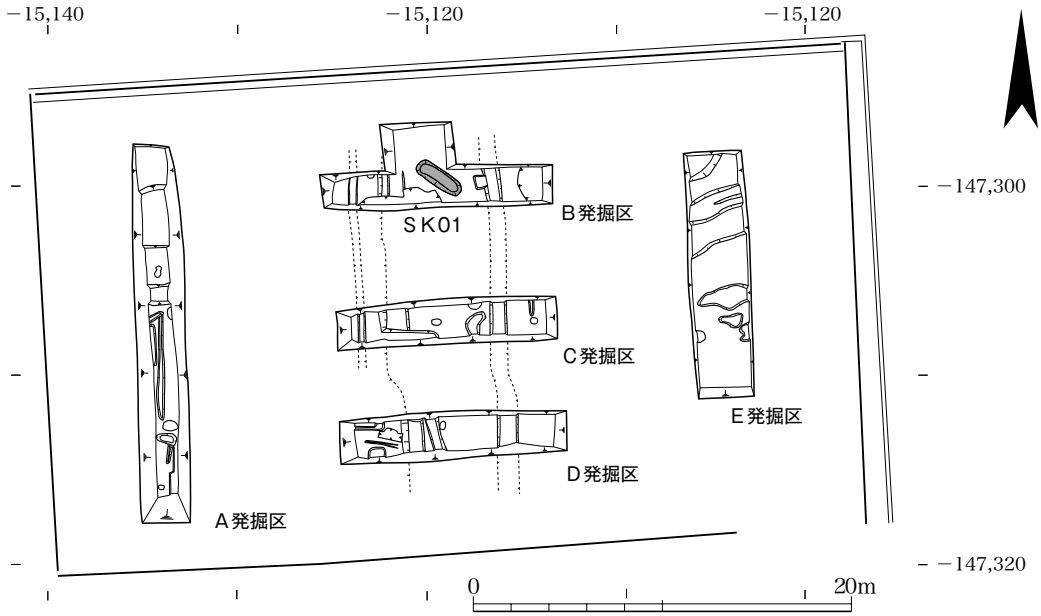
第４区（Ｊ･Ｋ発掘区）　Ｊ発掘区は、上から黒色腐植土、造成土、灰褐色土と続き、現地表下 0.3 mで黄茶色土の地山にいたる。第 11 次調査区も同様である。Ｋ発掘区では黒灰色腐植土、造成土、灰褐色土、茶橙色土・茶褐色土混合土、茶褐色砂、茶褐色粗砂、黄茶色砂質土、暗灰白色粗砂と続き、現地表下 1.3 ～ 1.5 mで暗灰褐色砂礫の地山にいたる。地山上面の標高は 93.8 ～ 94.1 mである。



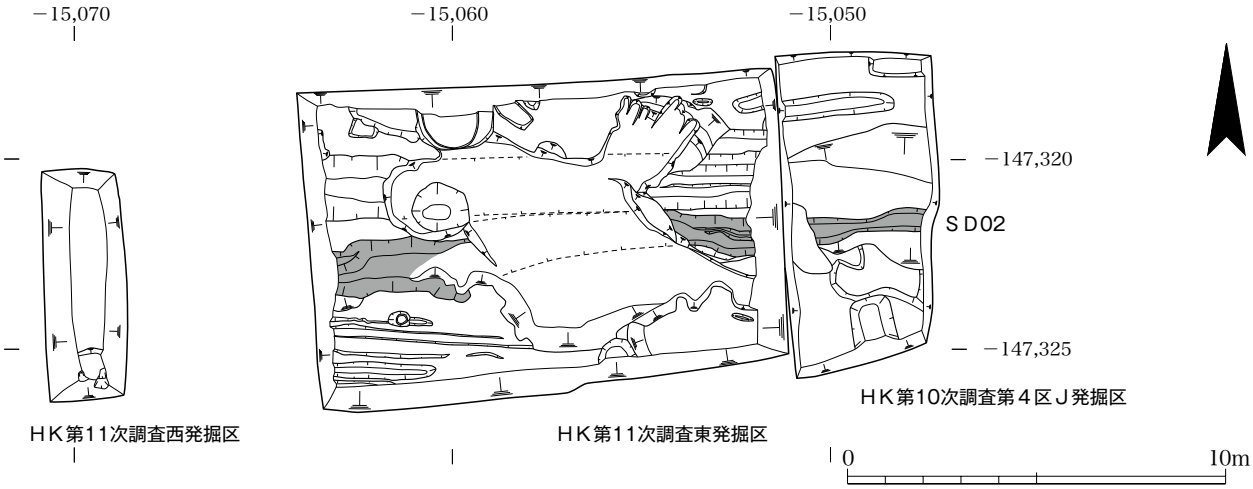
ＨＫ第 10・11 次調査　発掘区配置図（1/2,000）



ＨＫ第 10 次調査　第 1 区土層柱状図（1/100）



ＨＫ第 10 次調査　第１区遺構平面図（1/400）



ＨＫ第 10・11 次調査　第４区遺構平面図（1/200）

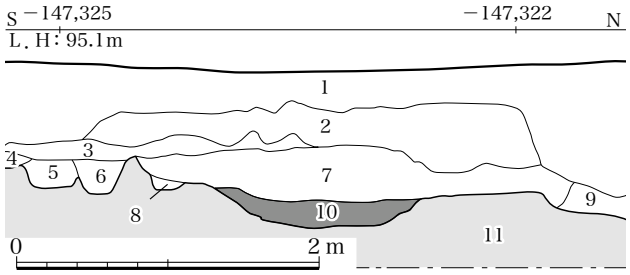
Ⅲ　検出遺構

第１区　Ｂ発掘区で長辺 2.7 m、短辺 0.8 m、深さ 0.2 mの土坑ＳＫ 01 を検出した。埋土から土師器の小片が１点出土したが、時期は不明である。これ以外には 19 世紀以降の素掘溝や土坑を検出したのみである。

第２区　Ｇ・Ｈ発掘区は遺構がなかった。Ｆ発掘区では土坑を検出したが、土坑は灰緑色粘土の部分にだけ認められ、粘土採掘坑であったと思われる。埋土から 18 ～ 19 世紀の土師器、陶器、磁器が出土したが、これらの中に８世紀の土師器・須恵器もみられた。

第３区　水田耕作に伴うとみられる素掘溝を検出した以外に遺構はなかった。

第４区　Ｋ発掘区は遺構がなかった。Ｊ発掘区では中央部に攪乱坑があったが、この攪乱の土を除去すると、暗灰色粗砂が堆積する幅約 0.3 ～ 0.7 mの東西方向の溝ＳＤ 02 を検出した。深さは 0.2m である。埋土からは８世紀の土師器・須恵器が出土し、上部は削平されているものの奈良時代の溝の底部が残ったものと判断した。このため、この溝の方向や時期を確認することを目的として、そのすぐ西側に東西２つの発掘区を設けてＨＫ第 11 次調査を実施した。その結果、東発掘区でＨＫ第 10 次調査で検出したＳＤ 02 の続きを検出した。幅約 1.4m、深さ 0.15m で、長さは中央部が攪乱により壊されているが東西 11m 分を検出した。国土方眼方位西で南に若干振れている。埋土は灰褐色砂で、水が流れた痕跡と考えられる。地形や溝底の標高からみて東から西に流れていたのであろう。埋土から８世紀の土師器､須恵器が出土したが、小片のため詳しい時期は不明である。また、６世紀後半



1　造成土
2　暗灰色土
3　灰色砂質土・暗灰青色土混合土
4　暗茶褐色砂質土
5　灰褐色砂質土
6　暗灰褐色砂礫
7　茶灰色砂質土・灰褐色粘質土混合土
8　暗茶褐色土
9　暗灰白色粗砂
10　灰褐色砂（ＳＤ02 埋土）
11　茶黄色土（地山）

ＨＫ第 11 次調査　東発掘区西壁土層図（1/50）

の須恵器も出土しており、周辺に古墳時代の遺構があったことが推測される。

SD02 が西に続くかどうかを確認するため、西発掘区を設定した。現地表下 1.6m(標高 94.1m)まで掘り下げたが、攪乱が続き東発掘区の遺構検出面より１ｍ深い位置で黄茶色粘土の地山を検出した。遺構はなく、遺構面は削平されたものと考えられる。

Ⅳ　出土遺物

本調査では遺物整理箱で７箱分の遺物が出土した。出土遺物には５世紀中頃の埴輪、６世紀後半の須恵器、８世紀の須恵器・土師器、16 世紀の土師器・瓦質土器、17 ～ 19 世紀の土師器・陶器・磁器・瓦・木製品（下駄）、銭貨（寛永通宝）がある。遺構に伴うものは第１区ＳＫ 01 出土の土師器小片と第２区Ｆ発掘区の粘土採掘坑出土の 18 世紀の土師器、陶磁器、第４区ＳＤ 02 出土の６世紀後半の須恵器杯蓋、８世紀の土師器杯・甕、須恵器杯・壷・甕である。

Ⅴ　調査所見

本調査地は平城京外に位置するが、奈良時代の東西溝ＳＤ 02 を検出した。この溝について、出土遺物が小片なため掘られた時期や埋没した時期の詳細な特定は困難であるが、その位置が南北の出入りはあるものの添上郡京東五条三里の条里遺存地割にほぼ合致することに留意したい。溝中央の座標値はＸ =−147321.9、Ｙ =−15050.0 である。本調査例だけでの断定はできないが、条里に関わる遺構の可能性も考えられよう。今後の周辺での調査成果に期待したい。ＨＫ第 11 次調査西発掘区の状況やＨＫ第 10 次調査の成果を勘案すると、この西発掘区より西側では遺構面は削平されている可能性が高いと思われる。これらのことから、本調査地は東紀寺遺跡の範囲内でも遺構の密度が低く、かつ本来は存在した遺構が削平された部分が多い地点と考えられる。　（池田裕英）

第４区発掘区の位置と条里遺存地割（『大和国条里復原図』に加筆）

ＨＫ第 10 次調査　第２区Ｈ発掘区全景（東南から）

ＨＫ第 10 次調査　第４区Ｊ発掘区全景（南から）

ＨＫ第 11 次調査　東発掘区全景（東から）

22. 池田遺跡・中ツ道推定地の調査　第１次

事 業 名	倉庫新築	調 査 期 間	平成 20 年 6 月 30 日～7 月 15 日
届出者名	株式会社ペーパル	調 査 面 積	168㎡
調 査 地	奈良市池田町 201-1	調査担当者	武田和哉・鐘方正樹

Ⅰ　はじめに

本調査は、倉庫建設に伴う発掘調査である。調査地付近は、池田遺跡および中ツ道の推定地に該当している。

調査地周辺では奈良県立橿原考古学研究所が調査を実施しており[1)]、５～６世紀の土坑群を検出したほか、５～８世紀にかけての土器を包含する堆積層を確認している。ただし、中ツ道と推定される遺構は検出できてない。

本調査地は、上述の奈良県調査における第７・11 トレンチの中間点から北北東に約 40 m離れた地点に、東西約 21 mの発掘区を２箇所（合計面積 168㎡）設定し、遺構の様相把握を目的として調査を実施した。

Ⅱ　基本層序

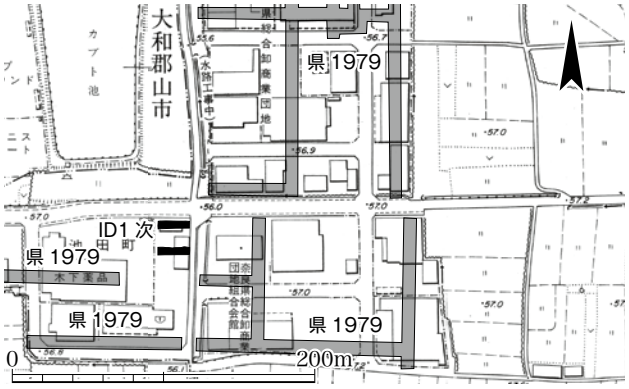
南発掘区では、造成土が約 0.8 mあり、その下に黒灰色粘質土（旧水田耕土）、暗茶灰色粘土（旧水田床土）、暗茶褐色粘質土、淡茶褐色粘土（遺物包含層）と続き、地表下約 1.4 mで暗灰色粗砂もしくは黄灰色（または青灰色）粘土の地山となる。また北発掘区では、造成土が約 0.8 m程度あり、その下に黒灰色粘質土（旧耕作土）、暗茶灰色粘土（旧床土）、暗茶褐色粘質土、暗灰褐色粘土（遺物包含層）と続き、現地表下約 1.2 mで暗灰色粗砂もしくは黄灰色（または青灰色）粘土（粗砂）の地山となる。遺構面の標高は、北・南発掘区ともに 54.9 m前後である。遺構検出作業は地山上面で実施した。

Ⅲ　検出遺構

本調査で検出した主要な遺構には、溝２条、土坑３基、性格不明遺構２基がある。以下にその概要を記す。

ＳＤ 01 は北発掘区の西端で検出した溝。後述のＳＸ 07 より古い。概ね南南東より北北西へと流れる様相を呈す。最大幅約３m・深さ約 0.3 mで、埋土は灰色粗砂である。出土遺物はなく、時期は不明である。ＳＤ 02 は北・南発掘区の東端で検出した南北方向の溝。東肩は発掘区のため幅員は不明であるが、少なくとも 2.5 m以上ある。深さ約 0.3 mで、埋土からは６世紀後半～末の土師器・須恵器が出土した。ＳＤ 03 は北・南発掘区の中央付近で検出した溝で、概ね南北方向に流れるが北でやや西に振れる。幅 1.0 ～ 1.5 m・深さ約 0.15 mで、７世紀以前の土師器および８世紀の須恵器が出土した。

ＳＫ 04 は南発掘区の中央東寄りで検出した土坑。平面



ID 第１次調査　発掘区位置図（1/5,000）

楕円形を呈し、長径約 0.8 m・深さ約 0.1 mである。６世紀後半～７世紀前半頃の土師器（高杯主体）・須恵器が出土した。ＳＫ 05 は北発掘区の中央付近で検出した土坑。平面は不整形を呈し、長径約 1.0 m・深さ約 0.1 mである。土師器破片が少量出土したのみで詳細な時期は不明。ＳＫ 06 は北発掘区の中央東よりで検出した土坑。平面ほぼ隅丸方形を呈し、東西幅約 0.8 m・深さ約 0.15 mで、６世紀末の須恵器破片が出土した。

ＳＸ 07 は北発掘区の西側で検出した性格不明の遺構。西側に向かって徐々に低くなる様相を呈し、幅は５m以上、深さは約 0.15 m。ＳＸ 08 は南発掘区西側で検出した性格不明の遺構。上述のＳＸ 07 同様に西側に向かって徐々に低くなる。幅は 10 m以上、深さは約 0.3 mで 14 世紀後半～ 15 世紀の土師器片が出土している。

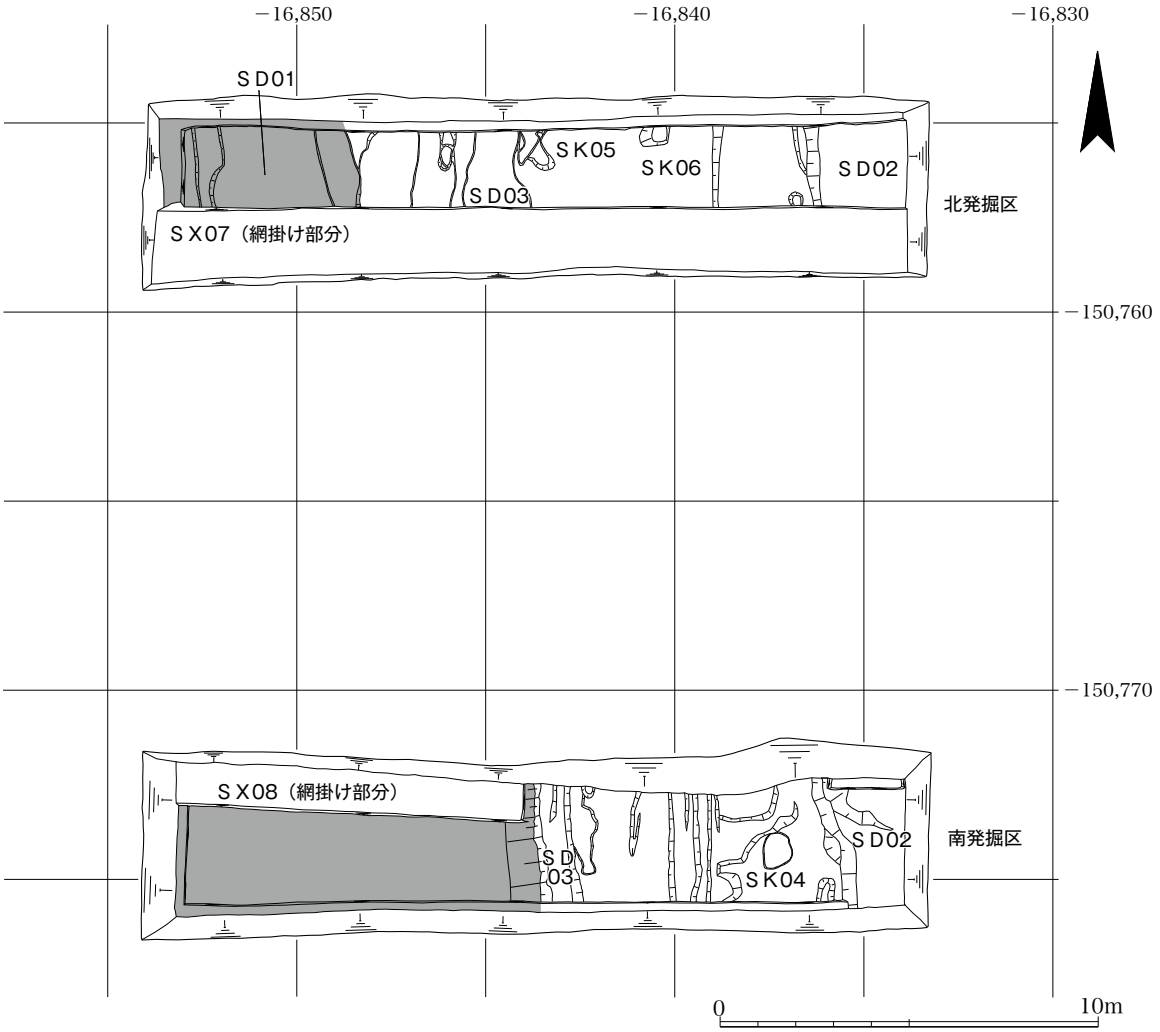
Ⅳ　出土遺物

出土遺物は、整理箱約６箱分が出土した。大半を６～７世紀の土師器・須恵器が占める。土師器高杯の出土量が多く、注意される。この他８世紀の須恵器、丸・平瓦、12 ～ 13 世紀の瓦器、14 世紀後半～ 15 世紀の土師器があるが、いずれも小片が多い。

Ⅴ　まとめ

本調査で検出したＳＤ 02・03 は、ともに南北方向の溝であり、埋土に６～７世紀の土器を含んでいることから、調査地付近に推定されている中ツ道に関連する遺構である可能性がある。今後の近隣地等での調査成果を待って検討したい。　（武田和哉）

1)　奈良県立橿原考古学研究所「奈良市池田遺跡試掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1979 年度第一分冊　1980



ＩＤ第１次調査　発掘区遺構平面図（1/200）

南発掘区全景（東から）

北発掘区全景（東から）

23. 奈良山第52号窯の調査　第1次

事 業 名	宅地造成	調 査 期 間	平成20年5月26日～6月20日
届出者名	三和住宅株式会社	調 査 面 積	150㎡
調 査 地	奈良市秋篠町1546-1の一部他	調査担当者	山前智敬

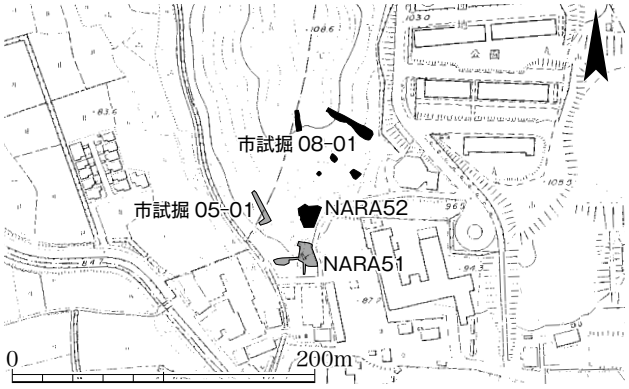
Ⅰ　はじめに

調査地は、奈良盆地の北縁を画する奈良山丘陵の西縁部で、県営平城団地西側の北から南に延びる尾根の先端部の東斜面に位置する。現状は、西から東に延びる舌状の高まりとなっており、北・南及び東縁は切土により急崖に改変されている。

今回の調査地が位置する尾根の東斜面では、昭和39・40年に奈良国立文化財研究所が日本住宅公団の平城ニュータウン造成計画に伴い実施した遺跡の分布調査により、奈良山第51号窯（奈良県遺跡地図[1]第1分冊5Ａ-21）・同第52号窯（同5Ａ-22）の2基の奈良時代の瓦窯が確認されている。ただし、この分布調査成果[2]の報告書の所在が確認できないので、県遺跡地図に記載されているものの具体的な位置は不明であった。

平成18年に奈良市教育委員会が宅地造成に伴う試掘調査を実施したところ、奈良時代の瓦窯1基を確認したため、発掘調査を実施した[3]。この調査で、51号窯の位置とその構造が明らかになった。51号窯は瓦の専業窯で、半地下式の無牀平窯である。焼成室半ばから煙出し部が残存しており、平面方形の焼成室と、その奥壁から天井にむかってのびる煙突3本を確認した。奈良山丘陵上では40基近くの窯が確認されているものの詳細不明な場合が多く、51号窯は構造が判明する貴重な例である。操業時期や供給先は、軒瓦の出土がなく確定できないが、恭仁宮出土の平瓦と同技法の平瓦が出土していることから恭仁宮以降の8世紀中頃と考えられている。この調査の結果、今回の調査地が位置する尾根の東斜面に瓦窯跡がある可能性が考えられた。

ＮＡＲＡ52第1次調査　発掘区全景（北東から）



ＮＡＲＡ52第1次調査　発掘区位置図（1/5,000）

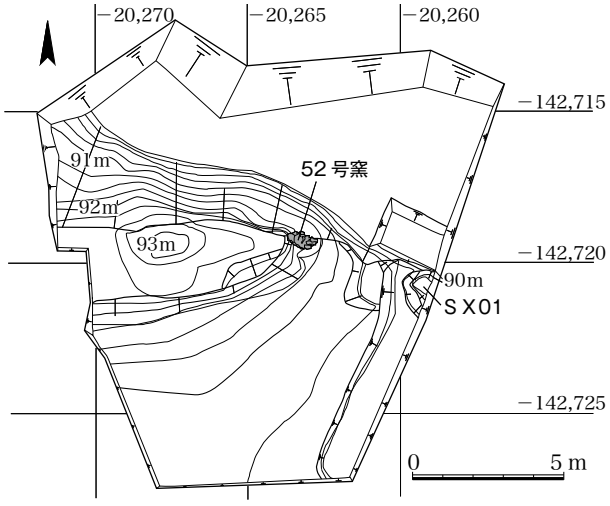
平成20年に、今回の調査地とその北側一帯の尾根の東斜面で宅地造成が計画されたため、市教委が予定地内の遺跡の有無を把握することを目的に、6箇所（総面積389㎡）の発掘区を設定し試掘調査（市試掘08-01）を実施した。その結果、届出地南端の舌状の高まりの東縁の急崖で瓦窯1基を確認し、以下の4点が判明した。

a　県遺跡地図に51・52号窯が記載されている場所は谷であり、瓦窯跡は存在しない。

b　調査地北方の尾根の東斜面では、奈良時代の遺物の散布や遺物包含層がみられず、地山上面でも遺構は検出されなかった。

c　調査地北方の尾根の裾部と、今回調査を実施した舌状の高まりの北縁は、調査地の西側にあった溜池の堤防を築成するための採土の結果、急崖になっている。

d　舌状の高まりの東縁の急崖は、里道や現況道路の敷



トーン部分は奈良山第52号窯　コンタは25㎝間隔

ＮＡＲＡ52第1次調査　発掘区平面図（1/250）

周辺の地形と発掘区位置図　(1/1,000)

設工事の際の切土で形成されたものである。

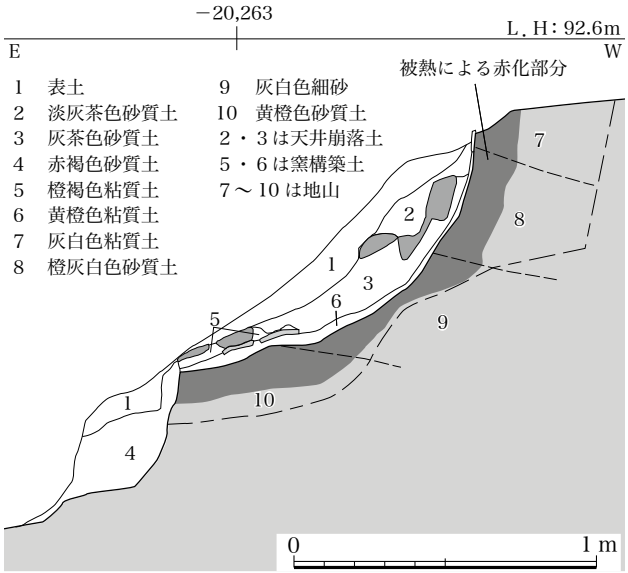
以上のことから、尾根の東斜面に残存する瓦窯が、前述した平成 18 年調査の瓦窯跡とこの瓦窯の２基しかないことがわかり、昭和 39・40 年の分布調査で確認された 51 号窯、52 号窯に比定できた。

この試掘調査の結果を踏まえて、予定地内の取扱いについて、奈良県教育員会ならびに開発事業者と協議した結果、届出地南端で確認した瓦窯の残存状況や構造を把握し、加えて瓦窯跡に関連する遺構の有無を確認することを目的に発掘調査を実施した。

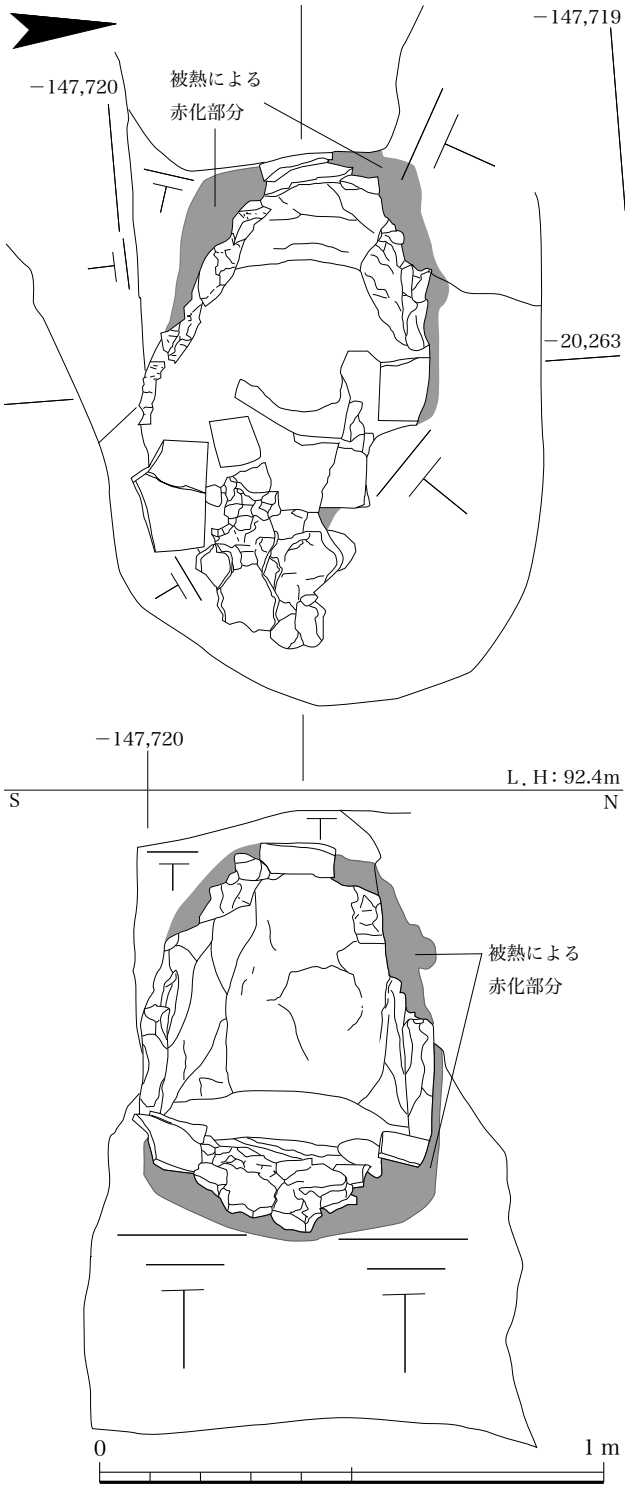
Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、尾根の高まりおよびその東・南と高まりの北で大きく異なる。前者は表土直下で灰白色粘質土の地山となる。地山上面の標高は、高まりの上面で 92.3 ～ 93.0 m、高まり南の平坦面で 90.5 ～ 91.1 m である。高まりの北・東縁は切土により大きく削平されて

瓦窯全景（東から）



ＮＡＲＡ 52 第１次調査　瓦窯断面図（1/25）



瓦窯平面図（上）・立面図（下）（1/15）

いる。後者は表土層、崩落土、砂とシルトの互層からなる谷内の堆積層となる。発掘区のすぐ北東側ではボーリング調査が実施されており、その成果から谷内の堆積層は現地表下５ｍまで続き、その下で地山の砂層となることが推察される。

Ⅲ　検出遺構

高まりの東縁で瓦窯１基、土坑１基を検出した。

瓦窯　後世の削平により大部分が破壊されているが、平窯の奥壁の通焔孔と煙出し部分が遺存していた。残存長 1.0 m、残存幅 0.5 m、残存高 0.7 m。窯体は地山を掘り込んで構築されている。奥壁の通焔孔部分は長さ約 0.4 m、幅約 0.5 m。残存していたのはその最下部で、地山上面に４cm 程の厚さで粘土を貼り、その上に平瓦を置いて、さらに粘土を５cm 程の厚さで貼り造っている。粘土の上面は焼き締まっている。煙出し部は長さ約 0.6 m、幅約 0.5 m。わずかに粘土を貼り付けて造っている。奥壁の通焔孔部分と同様に焼き締まっている。南に残る部分から、円弧を描いて煙出しの天井に向かう。熱の影響で地山が赤く変色している部分が南に比べ北の範囲が広いので東側に焚口を向ける平窯の端であると思われる。

ＳＸ01　発掘区の東で検出した、東西 0.9 m以上、南北 1.6 m以上、深さ 0.5 mの平面隅丸方形の土坑で、発掘区東に続く。埋土から奈良時代の丸瓦･平瓦が出土した。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱で 13 箱分あり、大半は８世紀の瓦類で２次的に堆積した崩落土から出土した。

瓦類には、８世紀の丸瓦 213 点（16.81kg）・平瓦 944 点（108.865kg）・丸平不明瓦 204 点（1.38kg）・熨斗瓦１点（0.46kg）がある。

平成 18 年度報告の 51 号窯で分類した基準[3]（平瓦分類表）を使用し平瓦を分類した（型式別出土表）。ＳＸ01 からはⅡＢａ１型式が 30 点（3.21kg）・ⅡＢａ２型式が 14 点（1.17kg）・ⅡＢｂ１型式が 15 点（1.19kg）・型式不明が 157 点（6.09kg）、瓦窯の上部からはⅡＢａ１型式が 11 点（4.52kg）・ⅡＢｂ１型式が４点（0.48kg）・型式不明６点（0.56kg）、瓦窯の部材はⅡＡｂ１型式が１点（0.2kg）・ⅡＡｂ２型式が１点（0.93kg）・ⅡＢａ１型式が５点（2.3kg）、これ以外は崩落土および表土から出土した。重量比較ではⅡＢａ１が４割５分、ⅡＡｂ１が１割５分出土しており、型式不明を除くと、その他は微量であることわかる。51 号窯と同じく出土瓦の主体は窯の構築部材であるⅡＢａ１型式である。なお、試掘調査時に、軒丸瓦２点・軒平瓦２点が出土しているが、いずれも型式不明である。

ＮＡＲＡ 51・52 第１次調査　出土平瓦分類表

凹面		凸面		型式名
模骨痕	ナデ調整	最終調整	砂目	
有（Ⅰ類）	無（A類）	タタキ（a類）	無（1類）	ⅠＡａ１
			有（2類）	ⅠＡａ２
		ナデ調整（b類）	無（1類）	ⅠＡｂ１
			有（2類）	ⅠＡｂ２
	有（B類）	タタキ（a類）	無（1類）	ⅠＢａ１
			有（2類）	ⅠＢａ２
		ナデ調整（b類）	無（1類）	ⅠＢｂ１
			有（2類）	ⅠＢｂ２
無（Ⅱ類）	無（A類）	タタキ（a類）	無（1類）	ⅡＡａ１
			有（2類）	ⅡＡａ２
		ナデ調整（b類）	無（1類）	ⅡＡｂ１
			有（2類）	ⅡＡｂ２
	有（B類）	タタキ（a類）	無（1類）	ⅡＢａ１
			有（2類）	ⅡＢａ２
		ナデ調整（b類）	無（1類）	ⅡＢｂ１
			有（2類）	ⅡＢｂ２

ＮＡＲＡ 52 第１次調査　出土平瓦型式別出土表

形式名	点　数	%	重量（g）	%
ⅡＡａ１	24	2.5%	2,017	1.9%
ⅡＡａ２	1	0.1%	120	0.1%
ⅡＡｂ１	96	10.2%	16,860	15.5%
ⅡＡｂ２	2	0.2%	946	0.9%
ⅡＢａ１	233	24.7%	48,744	44.8%
ⅡＢａ２	30	3.2%	3,440	3.1%
ⅡＢｂ１	19	2.0%	1,670	1.5%
ⅡＢｂ２	42	4.5%	5,871	5.4%
不明	497	52.6%	29,197	26.8%
	944		108,865	

Ⅴ　まとめ

奈良山第 52 号窯は大きく削平を受けていたが、平窯の奥壁通焔孔と煙出し部の一部が残存していた。焚口を東に向ける平窯の南西隅であろう。

51 号窯と構造面での共通性は残存状態が悪いので不明である。ただ、52 号窯で瓦窯の構築材として確認できるものは１群[3]（ⅡＢａ２型式を除く平瓦群で、51 号窯の構築材として利用された一群）だけで、３群[3]（ⅡＢａ２型式の平瓦群で、51 号窯の製品の可能性が高い一群）が使用されていないことから、８世紀中頃とされる 51 号窯に遅れることなく築造されたと思われる。51 号窯から出土した模骨痕があるⅠ類が１点も出土していない。

ＳＸ01 からは 51・52 窯の構築材である１群と 51 号窯の製品の可能性がある３群が出土している。瓦窯に関連する遺構の可能性も考えられるが、窯が大きく削平されているので詳細は不明である。　（山前智敬）

1）『奈良県遺跡地図　第１分冊』 奈良県教育委員会　1998.3
2）『文化財分布調査（平城地区）及び開発と保存の一般的ルールについて』 日本住宅公団大阪支所　1975.4
3）『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成 18（2006）年度』 奈良市教育委員会　2009.3

24. 帯解黄金塚古墳の調査　第１・２次

事 業 名	１次：水道工事 ２次：重要遺跡範囲確認調査	調 査 期 間	１次：平成 19 年７月 18 日～７月 30 日 ２次：平成 21 年１月 14 日～３月 18 日
届出者名	１次：奈良市水道事業管理者 ２次：奈良市教育委員会教育長	調 査 面 積	１次：18㎡ ２次：120㎡
調 査 地	１次：奈良市田中町地内 ２次：奈良市田中町 574-1・-3	調査担当者	１・２次：安井宣也・大窪淳司

Ⅰ　はじめに

帯解黄金塚古墳は、大和高原の西麓で菩提仙川の北側に広がる台地の南寄りに位置する飛鳥時代の方墳である。明治 23 年に墳丘が開墾された際に石室が発見され、同年に宮内庁が墳丘を御陵墓伝説地（大正 15 年以降は陵墓参考地）に指定している。

現状の墳丘は一辺約 27 mで、２段の段築が認められる。埋葬施設は「榛原石」と呼ばれる流紋岩質溶結凝灰岩の磚を積み上げて構築された磚積式の横穴式石室である。石室の全長は約 16 mと推定され、平面が正方形に近い玄室と二か所の柱状の張り出し部で区画された羨道がある。石室内部には塗られていた漆喰の一部が残る。奈良盆地北部で磚積式の横穴式石室を埋葬施設とする唯一の古墳で、かつ墳丘や石室の規模が大きい部類に入る。

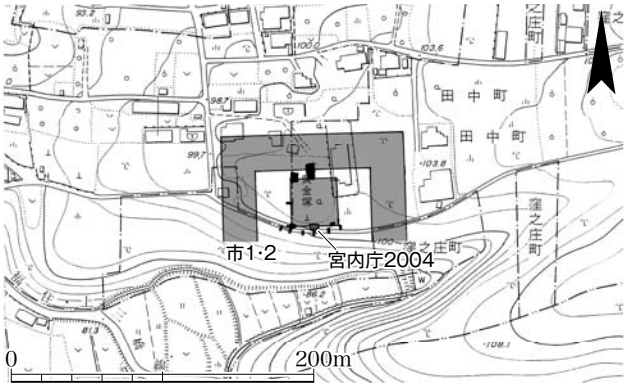
墳丘の周囲には平坦面があり、その東・西・北辺を外堤がコの字状に囲む（以下、東外堤・西外堤・北外堤とする）ことが以前から指摘されている。外堤の規模は東西約 120 m、南北約 65 m、幅 10 ～ 20 mで、上部が粘土ブロックの盛土で構築されていることが削られた断面で観察できる。東外堤上では流紋岩質溶結凝灰岩製の組合式石棺を埋葬施設とする田中古墳が確認されている [1)]。

古墳の現状に関しては、墳丘と東外堤は比較的旧状を保つが、西外堤の南寄り、北外堤の中央部と市道の南側は切土による改変が著しい。また、墳丘の東側に接し北外堤を横断する南北に細長い宅地が造成されている。

この古墳に関する過去の主な調査には、墳丘とその周辺及び横穴式石室の測量調査と発掘調査がある。

昭和 26 年には日本考古学協会、昭和 33 年には宮内庁が墳丘周辺及び横穴式石室の実測調査を実施した。その後、平成 18・19 年には宮内庁が墳丘及び横穴式石室の詳細な実測調査を実施した。これらの調査成果は、平成 20 年に宮内庁によってまとめて公表された [2)]。

平成 16 年には、市道の拡幅計画に伴い、宮内庁が墳丘南面中央の拝所部分で遺構の有無の確認を目的とした発掘調査を実施したところ、現地表下 0.5 m（標高 99.1 ～ 99.2 m）で墳丘裾とそれに沿う石列、石敷を検出し、



ＫＧＺ第１・２次調査　発掘区位置図（1/5,000）

墳丘裾の位置が現状の約 1.6 m南であることを確認した。また、石列や石敷の石材には付近の河川で採取したものとみられる 10 ～ 30cm 大の花崗岩、斑糲岩やチャートの礫が主に用いられていることもわかった [3)]。

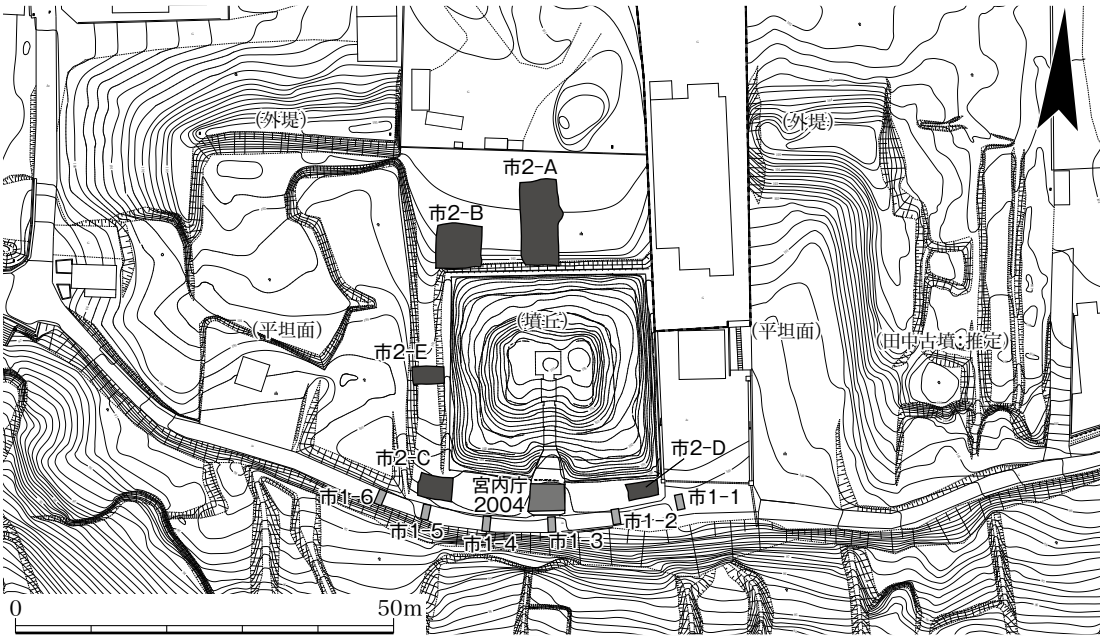
平成 19 年には、墳丘南側の平坦面上を東西に通る市道の水道管敷設工事に先立ち、本市教委が遺構の有無の確認を目的として市第１次調査を実施した。６箇所の発掘区（東から西に向かって第１～６発掘区と呼ぶ）を設定して調査を実施した結果、後述するように石敷が市道の下まで広がることを確認した。

これらの調査の出土遺物はきわめて少なく、築造時期を把握する手掛かりとなるものは今のところない。

以上の経緯と遺跡の重要性を踏まえ、本市教委ではこの古墳の範囲確認調査を今後継続的に実施することにした。平成 19 年度には墳丘周辺の現状を把握するための地形測量を実施し、宮内庁から墳丘測量図の提供を得て、外提を含めた古墳全体の測量図（1/100、等高線間隔 25㎝）を作成した。

平成 20 年度の市第２次調査は、墳丘規模の確認と墳丘周囲の遺構の様相及び遺存状態の確認を目的として、墳丘の北面にＡ・Ｂ、墳丘南面にＣ・Ｄ、墳丘西面にＥの計５箇所の発掘区を設定して実施した。

ここでは、未報告の第１次調査と合わせて調査成果を報告する。なお、平成 19 年度に作成した古墳の測量図は付図とし、第２次調査で行った石敷の礫種同定とその使用傾向の分析成果報告を本書第２章に掲載した。



ＫＧＺ第１・２次調査　調査地平面図（1/1,000）

墳丘全景（東から）

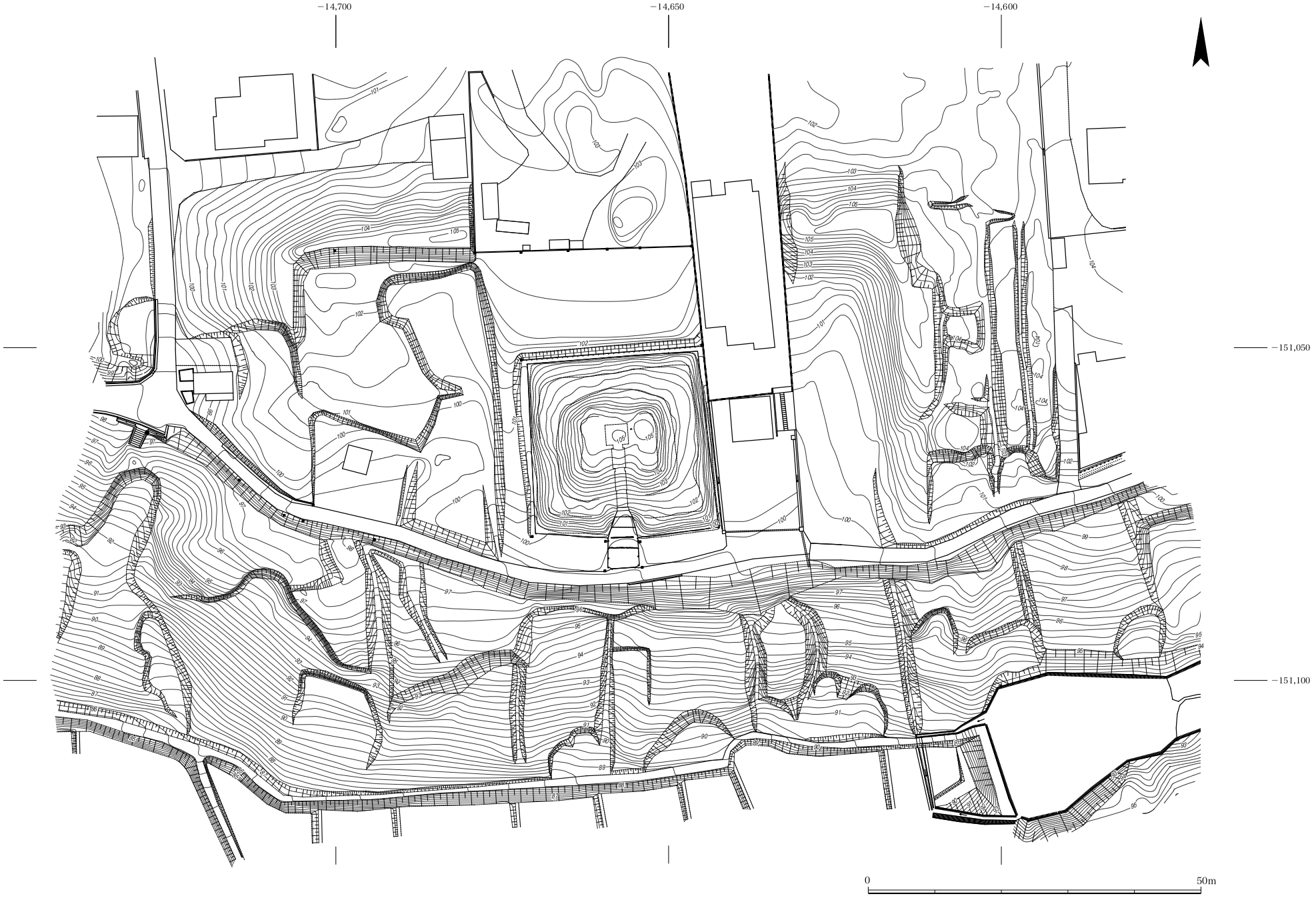
墳丘全景（北西から）

西外堤（南西から）

墳丘西側の平坦面と北外堤（南から）

墳丘北側の平坦面（北西から）

墳丘東側の平坦面と東外堤（南西から）



帯解黄金塚古墳　周辺地形測量図（1/500、主曲線：25㎝間隔、計曲線：１ｍ間隔、墳丘部分は宮内庁作成の墳丘測量図を挿図）

（この図はＰＤＦ化にあたり全体を66％に縮小しています。）

Ⅱ　調査の概要

１　墳丘南面の調査（第１次調査　第１～６発掘区、第２次調査　Ｃ・Ｄ発掘区、以下次数略）

(1)　基本層序

市道上の第１～６発掘区では、道路に伴うアスファルト舗装・盛土層（厚さ 0.3 ～ 0.4 m）、灰色や黄色の砂質粘土層（厚さ 0.2 ～ 0.3 m）の下で築造時の面となる。

墳丘南西隅に面したＣ発掘区では、近年の表土層及び盛土層（厚さ 0.2 ～ 0.3 m）、褐色や黄褐色の砂質粘土混じりシルト層（厚さ 0.6 ～ 0.7 m）の下で築造時の面となる。また、墳丘南東隅に面したＤ発掘区では、表土層（厚さ 0.1 m）、黄褐色の砂質粘土混じりシルト層（厚さ 0.2 m）の下で築造時の面となる。

各発掘区で築造時の面を覆う砂質シルトあるいは粘土層は概して層厚の変化が少なく層理が水平に近いことから、人為的な盛土層と考えられる。Ｃ発掘区北東部でみられる明黄褐色砂質粘土混じりシルト層（土層図 10 層）から７世紀の土器片が出土した。

(2)　検出遺構

第１～６発掘区　墳丘南面の平坦面と石敷等を検出した。

平坦面は、東寄りの第１～３発掘区では大阪層群の地山を成形しているのに対し、西寄りの第４～６発掘区では主に黄褐色の砂質シルトあるいは粘土の盛土で形成されており、第６発掘区では盛土の厚さが 0.5 m以上あることを確認した。上面の標高は、第１発掘区が 99.3 m、第２発掘区が 99.1 m、第３～５発掘区が 98.9 m、第６発掘区が 98.7 mで、東から西に向かって緩やかに下る。

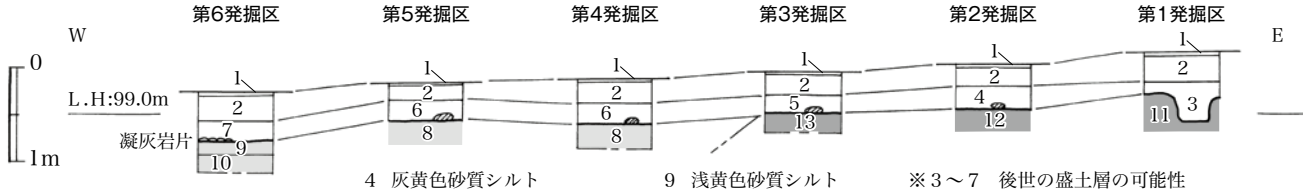
石敷は墳丘南側の第２～５発掘区で検出したが、遺存状態は良くない。10 ～ 30㎝大の花崗岩を主とした礫が用いられている。

なお、東端の第１発掘区では地山上面で時期不明の東西方向の溝（幅 0.8 m、深さ 0.4 m）を検出したが、古墳に伴うものではない。また、西端の第６発掘区の南寄りでは、盛土上面で５～ 10cm 大の流紋岩質溶結凝灰岩片の集積を検出した。

Ｃ発掘区　墳丘南西隅の基底部とそれに面する平坦面、墳丘裾に沿う石材抜取痕跡と墳丘の外周に沿う石敷を検出した。

墳丘基底部は上段石敷の上面から 0.5 m上までを検出した。全体に大阪層群の地山を成形している。上位は後世の切土によって改変されているため、現状の墳丘南西隅の位置は築造時よりも北へ約 3.5 m、東へ約 1.5 m後退している。

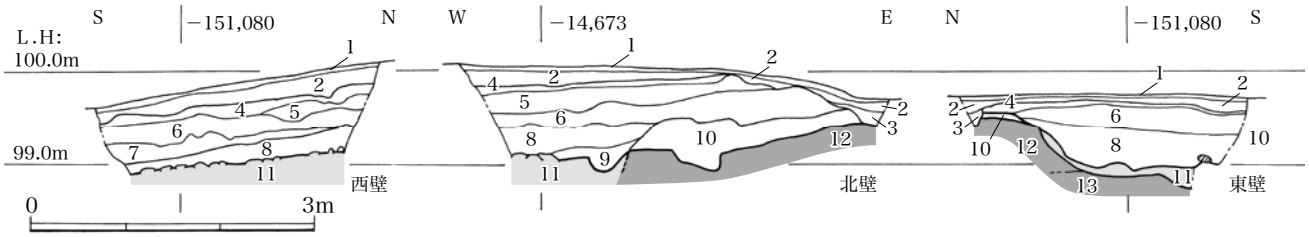
平坦面は黄褐色砂質粘土混じりシルトの盛土によって形成されており、発掘区南西隅では盛土の厚さが 0.4 m



1　アスファルト舗装
2　道路の盛土
3　灰色砂質粘土
4　灰黄色砂質シルト
5　灰色砂質粘土
6　黄色砂質粘土
7　黄橙色砂質粘土
8　黄褐色礫混じり砂質粘土
9　浅黄色砂質シルト
10　黄褐色砂質シルト
11　灰白色砂質シルト
12　赤黄色砂質粘土
13　黄褐色砂質粘土

※３～７　後世の盛土層の可能性
８～10　平坦面を形成する盛土層
11～13　大阪層群の地山

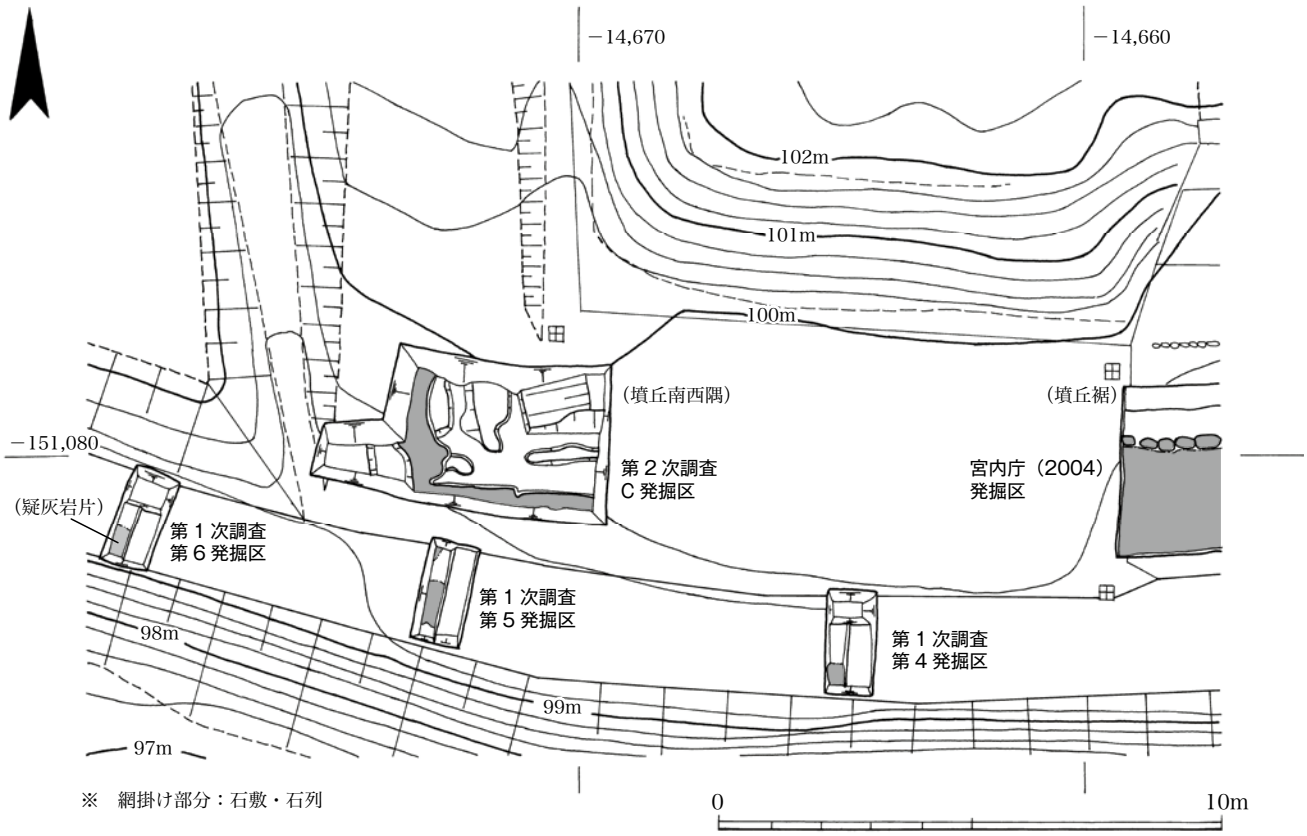
ＫＧＺ第１次調査　第１～６発掘区土層模式図（1/80）



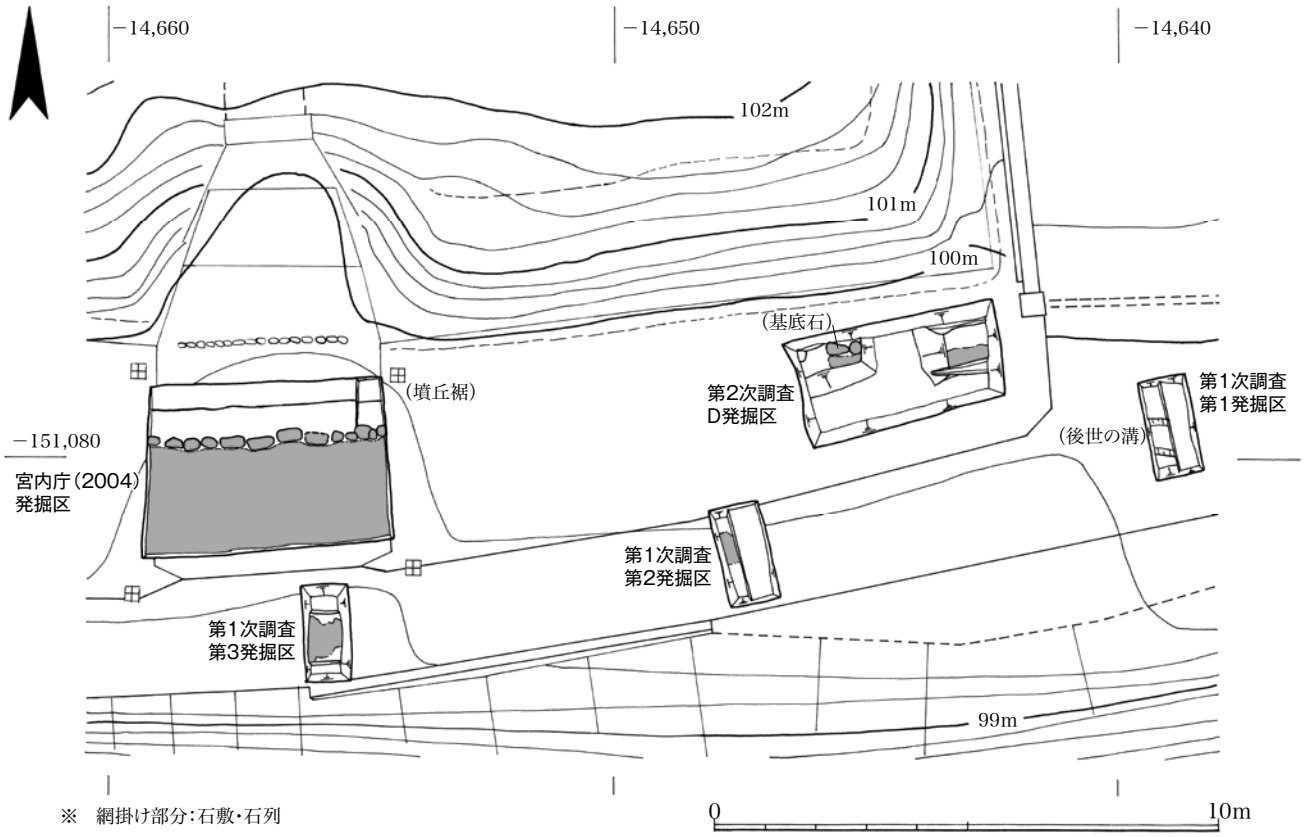
1　表土
2　黄褐色シルト混じり砂
3　黄褐色砂質シルト・粘土
4　黄褐色砂質シルト・粘土
5　黄褐色砂質シルト・粘土ブロック
6　褐色砂質粘土混じりシルト
7　黄褐色砂質シルト・粘土ブロック
8　黄褐色砂質シルト・粘土
9　黄褐色礫混じり砂質シルト
10　明黄褐色砂質粘土混じりシルト
11　黄褐色砂質粘土混じりシルト
12　明黄褐色砂質シルト・粘土
13　橙色砂質シルト・粘土

※１・２　近年の表土・盛土層
３～９　後世の盛土層の可能性
10　７世紀の遺物包含層
11　平坦面を形成する盛土層
12・13　大阪層群の地山

ＫＧＺ第２次調査　Ｃ発掘区土層断面図（1/80）



墳丘南面西半　発掘区平面図（1/150）



墳丘南面東半　発掘区平面図（1/150）

第１次調査　第１発掘区全景（北東から）

第１次調査　第２発掘区全景（東から）

第１次調査　第３発掘区全景（東から）

第１次調査　第４発掘区全景（南東から）

第１次調査　第５発掘区全景（東から）

第１次調査　第５発掘区　石敷（南から）

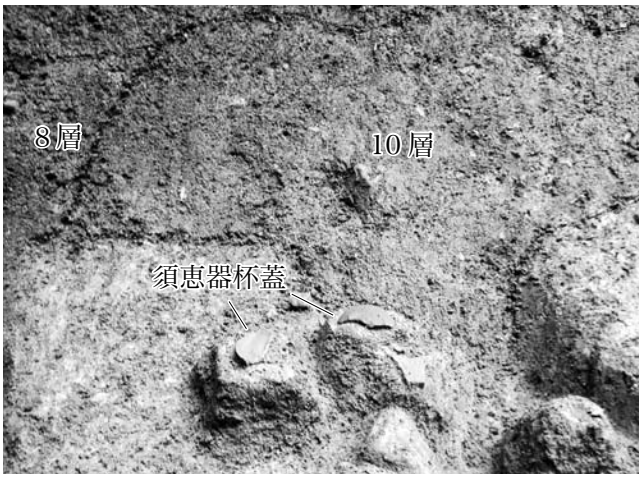
第１次調査　第６発掘区全景（北東から）

第１次調査　第６発掘区　凝灰岩片の集積（上から）

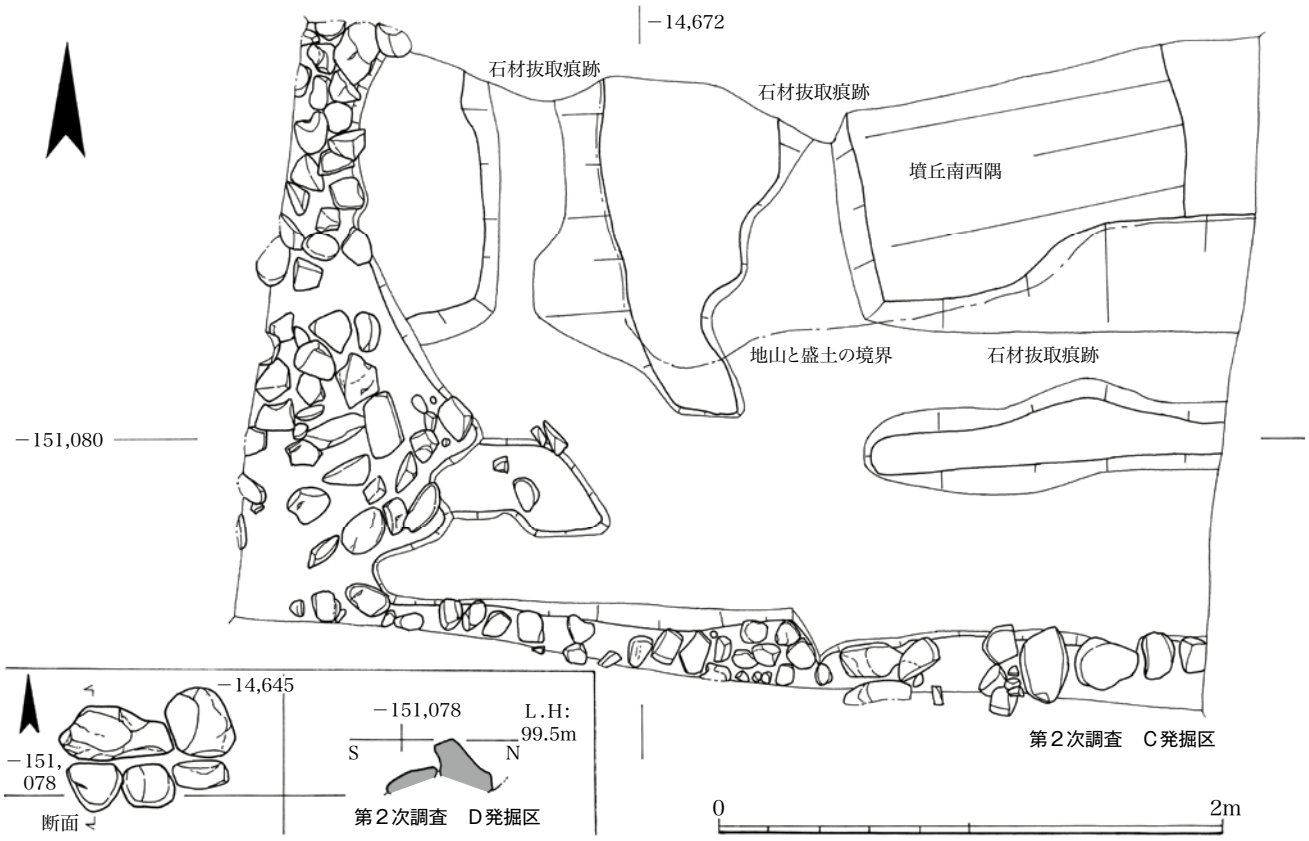
第２次調査　Ｃ発掘区全景
（南西から）

第２次調査　Ｄ発掘区全景
（南東から）

第２次調査　Ｄ発掘区北西隅　基底石・石敷（南東から）



第２次調査　Ｃ発掘区　北壁土層・７世紀土器出土状況（南から）



ＫＧＺ第２次調査　Ｃ発掘区　平面図、（左下）Ｄ発掘区北西隅　基底石・石敷平面・断面図（ともに 1/30）

以上あることを確認した。

墳丘裾沿いは後世の改変が著しく、石敷は発掘区の南・西辺で残存する。石敷には 10 ～ 20㎝大の花崗岩や斑糲岩の礫が主に用いられている。上面の標高は 99.0 ～ 99.2 mで、北から南に向かって低くなる。

なお、幅 0.4 m、深さ 0.1 mの溝状の凹みを墳丘の西裾沿いに２条、同南裾沿いに１条検出したが、後述する墳丘西面のＥ発掘区の状態を踏まえれば、墳丘裾沿いの基底石や石敷の縁石の石材抜取痕跡と判断される。

Ｄ発掘区　墳丘南面の平坦面と墳丘裾の基底石、石敷を検出した。後世の改変が著しく、遺存状態は良くない。

平坦面は地山を成形している。基底石は発掘区の北西隅、石敷は発掘区の北西隅や北東隅に残存する。基底石には 30 ～ 40㎝大、石敷には 20㎝大の花崗岩の礫が用いられている。石敷上面の標高は 99.5 mである。

なお、地山上面で石室の構築部材とみられる磚が１点出土した。

２　墳丘北面の調査（第２次調査　Ａ・Ｂ発掘区）

（1）　基本層序

Ａ・Ｂ発掘区の基本層序はほぼ同様で、近年の表土層及び造成土層（厚さ 1.1 ～ 1.3 m）、黄褐色の砂質シルト・粘土層あるいはシルト・粘土ブロック層（厚さ 1.0 ～ 1.2 m）の下で築造時の面となる。

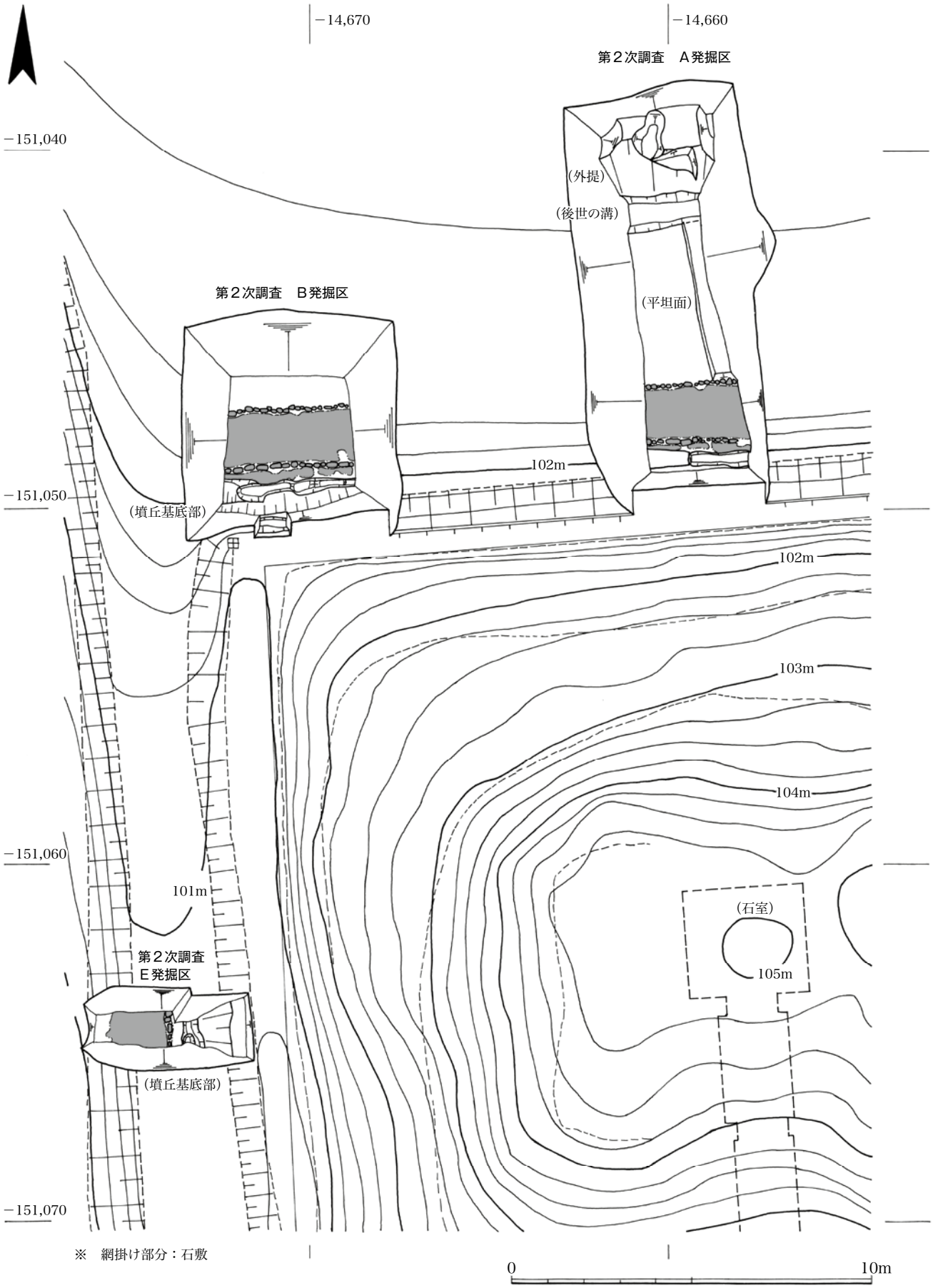
築造時の面を覆う黄褐色の砂質シルト・粘土層あるいはシルト・粘土ブロック層の層理は比較的水平で、層相や周辺の状態を踏まえれば外堤や墳丘を切り崩して形成された盛土層と判断される。Ｂ発掘区の明黄褐色礫混じりシルト・粘土ブロック層（土層図 12 層）から 18 世紀の磁器片が出土した。

（2）　検出遺構

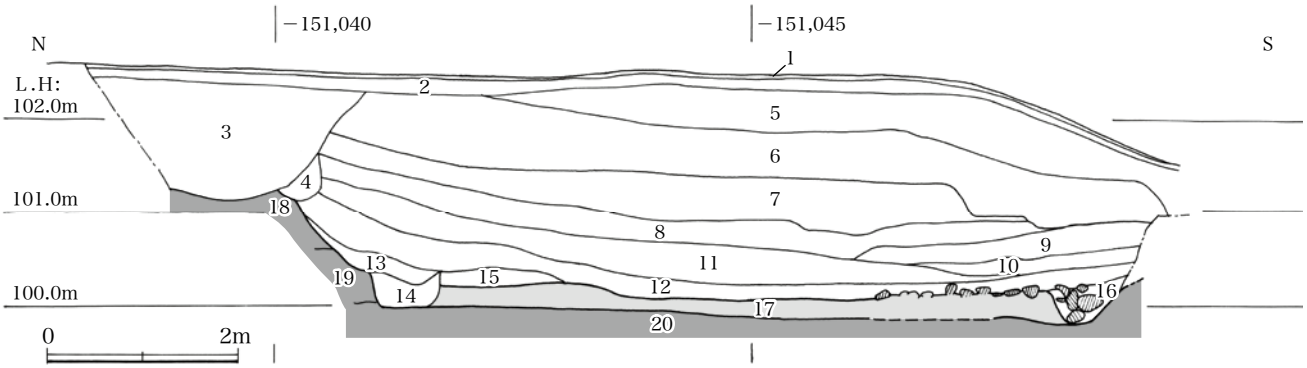
Ａ発掘区　墳丘裾、墳丘北面の平坦面、外堤下部、墳丘裾に沿う基底石の石材抜取痕跡と墳丘の外周を巡る石敷を検出した。

墳丘裾、墳丘北面の平坦面と外堤下部は、地山を削って一体で成形されている。墳丘裾の位置は、現状の約１m北である。平坦面は幅 7.2 mで、外堤から墳丘に向かって緩やかに下る。地山直上にはシルト・粘土ブロックを敷いた整地土層（厚さ 0.2 m）があり、後述する石敷はこの上面に敷設されている。外堤は平坦面の地山上面から 1.3 m上までが残るが、後世の改変が著しい。墳丘や外堤の裾に排水施設は設けられていない。また、崩落して堆積した土や外装施設の石材はみられない。

墳丘裾に沿う基底石の石材抜取痕跡は幅 0.4 m、深さ 0.4 mの溝状で、平坦面の整地土層上面で検出した。



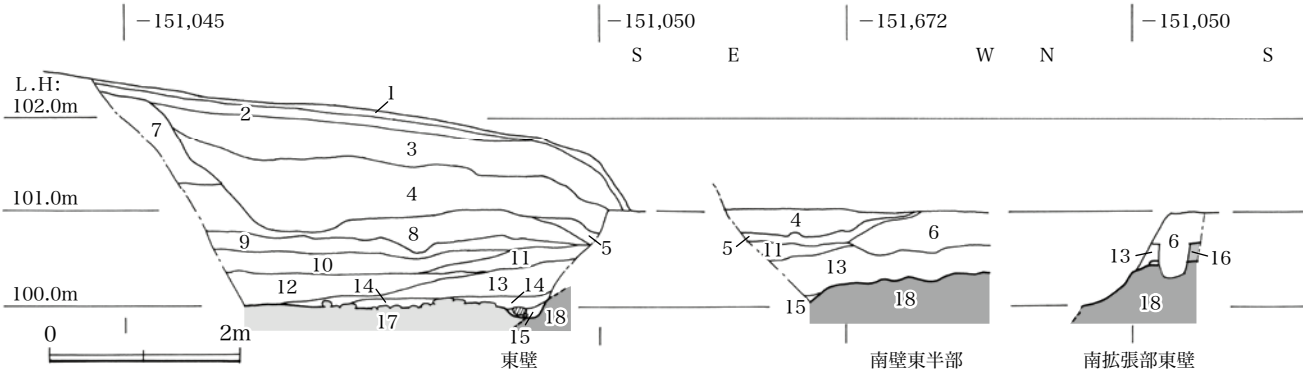
墳丘北・西面　発掘区平面図（1/150）



1　表土
2　黄褐色シルト混じり砂礫
3　黄褐色砂質シルト・粘土
4　明黄褐色砂質粘土混じりシルト
5　明黄褐色砂質シルト・粘土
6　黒褐色腐植質シルト・粘土
　廃材等含む
7　黄褐色砂質粘土混じりシルト
　ブロック
8　黄褐色砂質粘土混じりシルト
9　浅黄色砂質シルト・粘土
10　黄褐色砂質シルト・粘土ブロック
11　明黄褐色砂質粘土混じりシルト
12　黄褐色砂質粘土混じりシルト
13　明黄褐色砂質粘土混じりシルト
14　明黄褐色砂礫質粘土混じりシルト
15　明黄褐色砂質シルト・粘土
16　黄色砂質シルト・粘土
17　破砕された18層と灰色砂質シルト
　・粘土ブロック
18　灰白色砂質シルト・粘土
　花崗岩片等を含む
19　灰白色砂質シルト・粘土
20　花崗岩等の砂礫、隙間に淡黄色砂
　質シルトが混じる

※1〜6　近年の表土・造成土
7〜12　外堤や墳丘裾を切り崩
　して形成された盛土層
13・15　外堤斜面の崩積層
14　後世の溝の埋土
16　石材抜取痕跡の埋土
17　平坦面の整地層
18〜20　大阪層群の地山

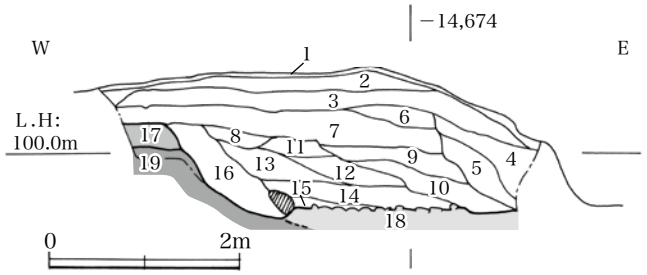
ＫＧＺ第２次調査　Ａ発掘区　東壁土層断面図（1/80）



1　表土
2　黄褐色シルト混じり砂礫
3　明黄褐色砂質シルト・粘土ブロック
4　黒色腐植質砂質シルト
　黄色砂質シルト・粘土ブロック含む
5　黒色腐植質砂質シルト
6　暗灰黄色腐植混じり砂質シルト
7　明黄褐色砂礫質シルト・粘土ブロック
8　明黄褐色砂質シルト・粘土ブロック
9　黄褐色砂質シルトブロック
10　明黄褐色砂質シルト・粘土ブロック
11　明黄褐色砂質シルト・粘土ブロック
12　明黄褐色砂質シルト・粘土ブロック
　ブロック間に砂礫多く含む、18Cの磁器片出土
13　褐色砂質シルト・粘土
14　黄色砂質シルト・粘土
15　明黄褐色砂質シルト・粘土ブロック
16　18層のブロック、ブロック間に砂礫含む
17　浅黄色又は明黄褐色砂質シルト・粘土ブロック
18　灰白色砂質シルト・粘土

※　1〜6　近年の表土・造成土
　7〜14　外堤や墳丘裾を切り崩して形成された
　　盛土層
　15　石材抜取痕跡の埋土
　16　墳丘盛土　　17　平坦面の整地層
　18　大阪層群の地山

ＫＧＺ第２次調査　Ｂ発掘区　土層断面図（1/80）



※1〜5　近年の表土・造成土
　6〜15　後世の盛土層
　16　墳丘基底部斜面の堆積層
　17　墳丘盛土　　18　平坦面の整地層
　19　大阪層群の地山

1　表土
2　黄褐色シルト混じり砂
3　灰黄褐色砂質粘土混じりシルト
4　灰黄褐色腐植質シルト混じり砂
5　オリーブ褐色砂質粘土混じりシルト
6　明黄褐色砂質シルト・粘土ブロック
7　黄褐色砂質粘土混じりシルト
8　黄褐色砂礫質シルト・粘土
9　黄橙色砂質シルト・粘土
10　黄橙色砂質シルト・粘土ブロック
11　黄褐色砂質シルト・粘土
12　黄褐色砂質粘土混じりシルト
13　黄褐色砂質シルト・粘土
14　黄褐色砂礫質シルト・粘土
15　黄褐色シルト・粘土混じり砂礫
16　橙色砂礫質シルト・粘土
17　黄橙色砂質シルト・粘土ブロック
　ブロック間に花崗岩片等を含む
18　黄褐色砂質シルト・粘土
19　花崗岩等の砂礫、隙間に灰白色砂質シ
　ルトが混じる

ＫＧＺ第２次調査　Ｅ発掘区　南壁土層断面図（1/80）

第２次調査　Ａ発掘区全景
（北西から）

第２次調査　Ａ発掘区　石敷
（南から）

第２次調査　Ａ発掘区全景（南から）

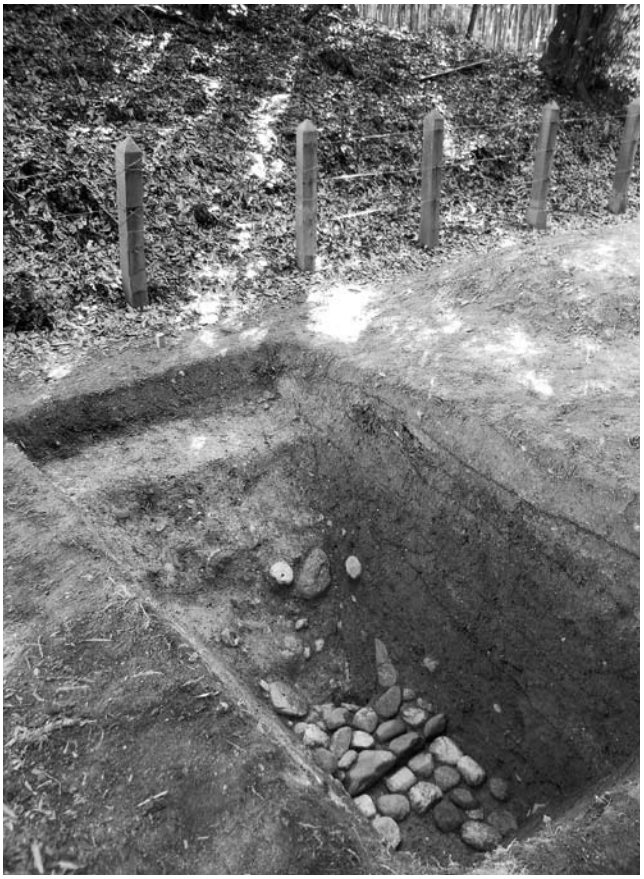
第２次調査　Ａ発掘区　墳丘裾付近（南西から）

第２次調査　Ｂ発掘区全景
（北西から）

第２次調査　Ｂ発掘区　石敷
（南から）

第２次調査　Ｂ発掘区　基底石の石材抜取痕（西から）

第２次調査　Ｂ発掘区　墳丘基底部（西から）



左：第２次調査　Ｅ発掘区東半部（北西から）
上：第２次調査　Ｅ発掘区西半部（北から）

底面には石材を反映する凹凸があり、使用された石材は 40 ～ 50㎝大の礫と推察される。

墳丘の外周を巡る石敷は、高低差がある上下二段の石敷で構成される。墳丘裾の基底石に沿う上段は幅 0.5 m、その外側にある下段は幅 1.6 mで、ともに外縁を縁石で区画する。上段は下段よりも５～ 10㎝高い。上・下段とも敷石には 10 ～ 20㎝大、縁石には 20 ～ 30㎝大の礫を用いており、礫種は花崗岩と斑糲岩が多い。飛鳥の寺院跡や宮殿遺跡の外装施設とよく似ている。

主な部位の標高は、上段石敷の上面が 100.3 m、下段石敷の上面が 100.2 m、平坦面の整地土層上面が 100.1 ～ 100.2 mである。

Ｂ発掘区　墳丘基底部、墳丘北面の平坦面、墳丘裾に沿う基底石の石材抜取痕跡、墳丘の外周を巡る石敷を検出した。墳丘裾に沿う基底石の石材抜取痕跡、墳丘の外周を巡る石敷は、前述のＡ発掘区とほぼ同様である。

墳丘基底部は上段石敷の上面から 0.7 m上までを検出した。上段石敷の上面から 0.5 m上までが地山で、その上は地山の粘土ブロックの盛土となる。基底部の斜面は後世の切土による改変を受けている。裾付近に墳丘から崩落して堆積した土や外装施設の石材はない。

主な部位の標高は、上段石敷の上面が 100.2 m、下段石敷の上面が 100.1 mで、Ａ発掘区よりわずかに低い。

３　墳丘西面の調査（第２次調査　Ｅ発掘区）

（1）　基本層序

近年の表土層及び造成土層（厚さ 0.4 m）、黄橙色や黄褐色の砂質シルト・粘土層や砂質シルト・粘土ブロック層（厚さ 1.1 m）の下で築造時の面となる。築造時の面を覆う砂質シルト・粘土層や砂質シルト・粘土ブロック層には層理がほぼ水平で、層厚の変化が少ない層もある。層相及び周辺の状態を踏まえれば、墳丘や外堤を切り崩して形成された盛土層と判断される。

（2）　検出遺構

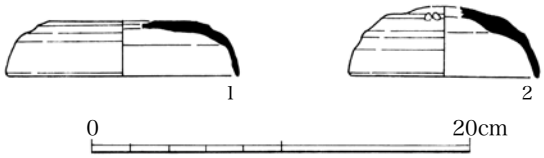
墳丘基底部、墳丘裾に沿う基底石の石材抜取痕跡、墳丘の外周を巡る石敷を検出した。

墳丘裾の位置は現状より約３m西である。墳丘基底部は上段石敷の上面から 0.9 m上までを検出した。上段石敷の上面から 0.6 m上までが地山で、その上は地山の粘土ブロックの盛土となる。基底部の斜面は後世の改変を受けて凹凸が多く、３～ 10㎝大の礫を含む橙色砂礫質シルト･粘土層（図中 16 層、厚さ 0.3 m）で覆われている。

石敷の様相はＡ・Ｂ発掘区と同様で、整地土層上に敷設されている。下段石敷の西端は失われているが、残存部の幅は 1.7 mで、Ａ・Ｂ発掘区よりも広い。

主な部位の標高は、上段石敷の上面が 99.6 m、下段石敷の上面が 99.5 mで、墳丘北面のＡ・Ｂ発掘区より低い。

ＫＧＺ第２次調査　Ａ・Ｂ・Ｅ発掘区　基底石の抜取痕及び石敷平面・断面図（1/30）



ＫＧＺ第２次調査　Ｃ発掘区出土須恵器杯Ｈ蓋（1/4）

Ⅲ　出土遺物

遺物整理箱で１箱分がある。その内訳は、古墳時代の埴輪、７世紀の土師器、須恵器、磚と18世紀頃の陶磁器で、埴輪と土器のほとんどが小片である。

このうち大半を占めるのは、Ｃ発掘区の明黄褐色砂質粘土混じりシルト層（土層図10層）から出土した７世紀の土器で、器種には土師器杯・高杯・甑、須恵器杯Ｈ蓋・甕がある。須恵器杯Ｈ蓋は２点ある。１は口径12.3㎝、器高2.9cm。天井部はヘラ切り無調整で平たい。２は口径10.2cm、器高3.6cm。天井部はヘラ切り無調整で丸みを帯びる。これらの須恵器杯Ｈ蓋は、形態や法量から飛鳥Ⅰ～Ⅱ段階のものとみられる。

埴輪には、Ｅ発掘区の築造時の面を覆う盛土層の掘削時に出土した円筒埴輪片と、第６発掘区の黄橙色砂質粘土層（土層図７層）から出土した朝顔形埴輪片が１点ずつある。ともに突帯の形状から埴輪編年Ⅲ～Ⅳ期のものとみられる。磚は、Ｄ発掘区から１点出土した。ほぼ完形で、長さ25cm、幅14cm、厚さ６cm。流紋岩質溶結凝灰岩製で、石室の構築部材とみられる。

Ⅳ　まとめ

市ＫＧＺ第１・２次調査では、墳丘の南・北・西辺の基底部及びその周囲の平坦面と外装施設、墳丘北面の外堤の基底部を検出した。その結果、墳丘の本来の形状・規模、古墳の築造方法、墳丘の外装施設に関する新たな知見を得ることができた。

墳丘の本来の形状・規模については、現状の墳丘裾の１～３ｍ外側で築造当初の墳丘裾を検出したことから、一辺約30ｍの方墳に復元できる。また、墳丘裾とそれに面した平坦面が北から南に向かって約１ｍ、東から西に向かって約0.5ｍ低くなることが判明した。

古墳の築造方法については、墳丘北辺の基底部と墳丘北面の平坦面及び外堤の基底部が地山の切土によって一体で成形され、墳丘西・南辺の基底部と墳丘南面東寄りの平坦面も地山の切土によって成形されていることや、墳丘南面西寄りの平坦面が盛土によって形成されていることを確認した。このことから、墳丘周囲の平坦面及び外堤が古墳に伴うもので、築造にあたって地形をかなり広範囲に造成していることが明確になった。

墳丘の外装施設については、墳丘の裾に沿う基底石の周囲に石敷が巡り、その範囲が墳丘南面で５ｍ以上、北面で2.1ｍ、同西面で2.1ｍ以上あることを確認した。また、石敷は飛鳥の寺院跡や宮殿遺跡の外装施設とよく似ており、同時期の古墳であまり例を見ない外装施設を伴うことが明らかになった。

遺存状態が良くない墳丘南西隅の石敷については、墳丘西面のＥ発掘区との対比から、２条ある石材抜取痕跡が基底石と上段石敷の縁石に対応し、墳丘北・西面と同様の形状であったと考えられる。また、位置関係から宮内庁調査地の石列は上段石敷の縁石、Ｄ発掘区の石敷は上段石敷にあたると判断できる。

未調査である墳丘東面の外装施設については、平坦面や外堤の形態が墳丘の南北中軸線に対して対称であることを踏まえれば、西面と同様と想定される。墳丘基底部については、裾付近に墳丘から崩落した土や石材がみられず、墳丘西面のＥ発掘区で斜面上を覆う橙色砂礫質シルト・粘土層に３～10㎝大の礫を含むことを考慮すれば、礫を用いた外装施設が本来存在し、後世に石材が持ち去られている可能性がある。

なお、Ｃ発掘区の明黄褐色砂質粘土混じりシルト層から出土した７世紀の土器は、出土遺物の大半を占めることから、古墳の築造時に使用されたものと推測され、築造時期を推定する手掛かりになると考えられる。飛鳥Ⅰ～Ⅱ段階のものとみられる須恵器杯Ｈ蓋が含まれることを踏まえれば、築造時期は７世紀中頃と推定される。飛鳥Ⅰ～Ⅱ段階の土器は、奈良盆地南部にある磚積式の横穴式石室を埋葬施設とする古墳にも副葬されており[4]、帯解黄金塚古墳はこれらの古墳と同時期に築造された可能性がある。　（安井宣也）

1)　小島俊次「奈良市田中町字上之口　田中古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』８　奈良県教育委員会　1956
2)　清喜裕二「黄金塚陵墓参考地の墳丘及び石室現況調査報告」『書陵部紀要』59　宮内庁陵墓課　2008
3)　清喜裕二「黄金塚陵墓参考地石室前面部の事前調査」『書陵部紀要』57　宮内庁陵墓課　2006
奥田　尚「黄金塚陵墓参考地の石材の石種とその採取地」『書陵部紀要』57　宮内庁陵墓課　2006
4)　林部　均「土器からみた磚積石室の年代」『舞谷古墳群の研究』磚槨墳研究会編　1994

25. 平成 20 年度実施 試掘調査一覧

調査次数	遺　跡　名	調　査　地	調査期間	調査面積	事業者 / 事業内容	届出受理番号
2008-1	遺物散布地 (県遺跡地図 5A-20) 奈良山第 51・52 窯	押熊町 689-1 他	H20.4.21 ～ 5.16	389.21㎡	三和住宅株式会社 / 宅地造成	H20.3467
	調査結果：奈良時代の瓦窯 1 基を確認。なお、県遺跡地図の奈良山第 51・52 号窯の位置には瓦窯がなかったことから、この瓦窯が奈良山第 52 号窯、平成 18 年度に南隣接地で確認された瓦窯が同第 51 号窯であることが判明。 調査後の措置：瓦窯 1 基（奈良山第 52 号窯）を本調査。					
2008-2	平城京右京五条三坊十三坪	五条三丁目 9-1	H 20.12.1	64㎡	共栄社化学株式会社 / 共同住宅新築	H20.3293
	調査結果：盛土面下 0.1 ～ 0.6m（標高 79.3 ～ 79.8 m）の地山上面で奈良時代の柱穴と土坑を確認。 調査後の措置：次年度に本調査を予定していたが計画中止。届出の取り下げ。					
2008-3	平城京左京四条一坊一坪	四条大路三丁目 943-2 他	H21.2.13	24㎡	大和情報サービス株式会社 / 店舗新築	H20.3403
	調査結果：水田面下 0.3 ～ 0.8m（標高 62.1 ～ 62.3m）の地山上面で奈良時代の柱穴、土坑を確認。 調査後の措置：基礎形状を計画変更し、遺跡保護の協力を得て工事立会。					
2008-4	平城京左京六条三坊十五坪	大安寺三丁目 82-2 他	H21.2.19	26.1㎡	個人 / 共同住宅新築	H20.3247
	調査結果：盛土面下 0.5m（標高 58.3m）の地山上面で奈良時代の柱穴、土坑、井戸を確認。 調査後の措置：基礎形状を計画変更し、遺跡保護の協力を得て工事立会。					
2008-5	平城京左京三条四坊六坪	大宮町三丁目 162-2	H21.3.11	33.4㎡	個人 / 共同住宅新築	H20.3398
	調査結果：盛土面下 0.9m（標高 63.8 m）の地山上面で奈良時代の柱穴を確認。広範囲で撹乱を受け、遺構がほとんど残存しないことが判明。 調査後の措置：基礎掘削時に工事立会。					

26. 平成 20 年実施 工事立会一覧

（1）平成 20 年度文化財保護法第 93 条 1、第 94 条の 1 の埋蔵文化財届出書及び通知に伴う工事立会

番号	届出･通知受理番号	遺　跡	届出地	届出･通知者	事業内容	現況	立会日	立会結果
1	H19.3466	左京二条六坊八坪	法蓮町 1007-12、1097-10、2081	個人	共同住宅新築	宅地	H20.4.1	ＧＬ -0.7 mまで掘削、盛土内。
2	H19.3138	左京二条五坊一坪	法蓮町 724 ～ 328	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.4.1	ＧＬ -0.75 mまで掘削、黄灰色砂層確認。
							H20.4.2	ＧＬ -0.7 mまで掘削、灰色砂礫確認。
							H20.4.3	ＧＬ -0.75 mまで掘削､黄灰色土確認。
3	H19.3395	左京三条四坊十四坪	大宮町二丁目 127-64・65	個人	診療所付住宅	宅地	H20.4.2	ＧＬ -1.7 mまで掘削、ＧＬ -1.2 mで地山確認。
4	H19.3418	右京五条一坊十五坪・西一坊坊間西小路	五条町地内	奈良市長	下水道工事	道路	H20.4.3	ＧＬ -1.7 mまで掘削、灰色土内。
5	H19.3475	二条条間路	法蓮町 238-6 ～ 21	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.4.4	ＧＬ -1.5 mまで掘削、旧河川埋土内。
6	H19.3443	左京八条二坊五坪・八条条間南小路	杏町 66-2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.4.7	ＧＬ -0.25 mまで掘削、耕作土内。
7	H19.3465	右京四条四坊十坪・四条条間北小路	宝来四丁目 224-1・2	個人	共同住宅新築	駐車場	H20.4.8	ＧＬ -1.1 mまで掘削、ＧＬ -1.0 mで地山確認。
8	H19.3389	左京四条四坊九坪	三条宮前町 2-3 ～ 5-6	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.4.8	ＧＬ -0.8 mまで掘削、盛土内。
9	H19.3472	東五坊大路　奈良町遺跡	油阪町 382-2 他	㈜蓮長寺	寺院（トイレ）改築	宅地	H20.4.9	整地のみ。
10	H20.3012	左京四条三坊十五坪	三条栄町 199-3	㈱奈良オートセンター	中古車展示場	宅地	H20.4.9	ＧＬ -1.3 mまで掘削、盛土内。
11	H19.3449	左京二条七坊二坪奈良町遺跡	北袋町 21	個人	個人住宅新築	宅地	H20.4.14	ＧＬ -0.2 mまで掘削、盛土内。
12	H19.3433	右京七条四坊五坪	七条西町一丁目 627-97	個人	個人住宅新築	宅地	H20.4.14	ＧＬ -0.2 mまで掘削、盛土内。
13	H19.3362	元興寺旧境内	中院町 32-1	個人	店舗新築	宅地	H20.4.14	ＧＬ -1.0 mまで掘削、盛土内。
14	H19.3450	左京五条二坊十坪	四条大路南 385 番地 19	個人	個人住宅新築	宅地	H20.4.15	ＧＬ -0.3 mまで掘削、盛土内。
15	H19.3458	右京北辺二坊八坪	秋篠早月町 209-23	個人	個人住宅新築	宅地	H20.4.18	ＧＬ -0.3 mまで掘削、盛土内。
16	H19.3482	右京四条五坊十一坪	杉ヶ町 45-4	奈良交通㈱	事務所改築	宅地	H20.4.18	ＧＬ -1.7 mまで掘削、ＧＬ -1.0 mで地山確認。
17	H20.3010	左京五条四坊十二坪	大安寺六丁目 830-5、828-1 の一部	個人	賃貸住宅新築	宅地	H20.4.18	ＧＬ -0.6 mまで掘削、ＧＬ -0.35 mで地山確認。
							H20.5.13	ＧＬ -0.9 mまで掘削、耕作土内。
18	H19.3477	五条東二坊大路	四条大路南町 439-12	オーエスハウジング㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.4.18	ＧＬ -0.1 mまで掘削、盛土内。
19	H20.3007	古市城跡	古市町 2059-23 番地	個人	宅地造成 個人住宅新築	宅地	H20.4.21	ＧＬ -0.4 mまで掘削、ＧＬ -0.15 mで地山確認。
							H20.7.14	ＧＬ -0.4 mまで掘削、盛土内。

番号	届出・通知受理番号	遺　跡	届出地	届出・通知者	事業内容	現況	立会日	立会結果
20	H19.3474	左京二条五坊十三坪	北市町 20 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.4.21	ＧＬ –0.4 mまで掘削、盛土内。
21	H19.3399	二条六坊坊間路	法蓮南二丁目 1089 ～ 1071	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.4.22	ＧＬ –0.7 mまで掘削、盛土内。
22	H19.3501	紀寺跡　奈良町遺跡	紀寺町 658–8	㈱日本中央住販	分譲住宅新築	宅地	H20.4.22	ＧＬ –0.2 mまで掘削、盛土内。
23	H19.3478	左京三条一坊五坪三条大路	三条大路二丁目～三丁目・四条大路二丁目～三丁目地先の国道24号線・国道 308 号線・市道中部第 264 号線	西日本電信電話㈱	NTT 設備支障移転工事	道路	H20.4.23	ＧＬ –0.8 mまで掘削、灰色土（遺物包含層）内。
24	H19.3371	左京五条二坊五坪	四条大路南町 368 番 36	個人	個人住宅新築	宅地	H20.4.23	ＧＬ –0.3 mまで掘削、盛土内。
25	H19.3421	左京一条条間路	今在家町 45–1 ～手貝町 3	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.4.25	ＧＬ –1.0 mまで掘削、盛土内。
26	H19.3487	右京北辺四坊四坪	西大寺宝ヶ丘 723–5	㈲宝住建	分譲住宅新築	宅地	H20.4.25	ＧＬ –0.5 ～ 1.5 mまで掘削、ＧＬ –0.5 ～ 1.5 mで地山確認。
27	H20.3018	右京五条三坊十五坪	平松二丁目 325、339	㈱八州エイジェント	青空資材置場	水田	H20.4.25	掘削なし。
							H20.5.13	ＧＬ –0.95 mまで掘削、ＧＬ –0.6 mで地山確認。
28	H19.3392	左京五条七坊六坪・七坊坊間西小路	井上町 6–1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.4.28	ＧＬ –0.7 mまで掘削、ＧＬ –0.5 mで地山確認。
29	H19.3333	西二坊二条大路	二条大路南五丁目 454 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.4.28	ＧＬ –0.3 ～ 0.4 mまで掘削、盛土内。
							H20.6.11	ＧＬ –2.0 mまで掘削、盛土内。
30	H19.3484	左京五条四坊四坪	大安寺七丁目 2–10	個人	自己用倉庫新築	宅地	H20.4.30	ＧＬ –0.4 mまで掘削、赤褐色土（遺物包含層）内。
31	H19.3488	右京五条三坊三坪	五条二丁目 11–18 他	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.5.7	ＧＬ –0.7 mまで掘削、盛土内。
32	H19.3331	左京八条四坊十一坪	東九条町 622–7	個人	青空駐車場	畑地	H20.5.8	ＧＬ –0.5 mまで掘削、灰色土内。
33	H19.3460	右京二条三坊八坪	西大寺芝町一丁目 2105–15	個人	個人住宅新築	畑地	H20.5.8	ＧＬ –0.5 mまで掘削、盛土内。
34	H20.3011	左京五条四坊十二坪	大安寺六丁目 830–1	個人	賃貸住宅新築	雑種地	H20.5.9	ＧＬ –1.2 mまで掘削、ＧＬ –1.0 mで地山確認。
35	H20.3004	左京八条四坊十二坪	東九条町 686、688、644 番の一部	個人	駐車場利用	水田	H20.5.12	盛土のみ。
36	H20.3021	右京一条四坊六坪	法蓮町 536–1、–2、537–2 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.12	ＧＬ –1.0 mまで掘削、盛土内。
37	H19.3491	南紀寺遺跡	南紀寺三丁目 64 番 4、5	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.12	ＧＬ –0.1 mまで掘削、盛土内。
38	H19.3503	左京五条四坊五坪	大安寺七丁目 853 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.12	ＧＬ –0.4 mまで掘削、盛土内。
39	H19.3473	左京三条五坊十四坪　東五坊大路	今辻子町 34 番 1	個人	店舗付個人住宅新築	宅地	H20.5.12	ＧＬ –0.4 mまで掘削、盛土内。
40	H19.3498	左京七条四坊十三坪	東九条町 1099 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.15	ＧＬ –0.3 mまで掘削、盛土内。
41	H19.3497	左京五条六坊九坪奈良町遺跡	南城戸町 42–5	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.15	ＧＬ –0.3 mまで掘削、盛土内。
42	H19.3489 H19.3397	左京二条四坊九坪	法蓮町 407–1 の一部	個人	賃貸住宅新築	水田	H20.5.15	盛土のみ。
							H20.5.16	ＧＬ –0.15 mまで掘削、耕作土内。
							H20.5.21	ＧＬ –0.6 mまで掘削、茶褐色土内。
43	H19.3464	左京九条三坊十二坪	東九条町 16 番 1	㈜真澄寺	フェンス、スロープ通路の新設	駐車場	H20.5.19	ＧＬ –0.45 mまで掘削、耕作土内。
44	H20.3053	左京五条四坊五坪	五条三丁目 867–6	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.20	ＧＬ –1.2 mまで掘削、地表面が地山。
45	H19.3431	左京四条三坊十五坪	三条添川町～三条栄町地内	奈良市長	下水道埋設	道路	H20.5.21	ＧＬ –2.4 mまで掘削、黄灰色土内。
							H20.5.23	ＧＬ –1.7 mまで掘削、盛土内。
46	H20.3027	左京二条五坊北郊	法蓮町 939–2	個人	個人住宅増築	宅地	H20.5.22	ＧＬ –0.35 mまで掘削、盛土内。
47	H19.3494	右京五条三坊十六坪	平松二丁目 241–3	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.22	ＧＬ –0.3 mまで掘削、灰白色砂確認。
48	H19.3500	右京五条三坊十五坪	平松二丁目 281 番 118、119	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.23	ＧＬ –0.6 mまで掘削、盛土内。
49	H19.3422	左京二条五坊十坪	法蓮町 273–1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.26	ＧＬ –0.4 mまで掘削、盛土内。
50	H19.3417	東一坊九条大路	西九条四丁目市道九条線	関西電力㈱	電気の管路新設	道路	H20.5.26	ＧＬ –1.25 mまで掘削、盛土内。
							H20.5.27	ＧＬ –1.7 mまで掘削、ＧＬ –0.9 mで地山（遺構面？）確認。
51	H20.3051	右京五条四坊十一坪	平松四丁目 402–19	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.28	ＧＬ –0.55 mまで掘削、盛土内。
52	H20.3014	左京二条五坊三坪	法蓮町 64–2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.5.30	ＧＬ –0.1 mまで掘削、盛土内。
53	H20.3022	左京五条三条十六坪・四条大路	恋の窪一丁目 624–6	個人	個人住宅新築	宅地	H20.6.2	ＧＬ –0.3 mまで掘削、盛土内。

番号	届出・通知受理番号	遺　跡	届出地	届出・通知者	事業内容	現況	立会日	立会結果
54	H20.3032	左京三条三坊三坪	大宮町七丁目１番57号	㈱ケイ・キャット	アンテナ支持鉄柱設置	宅地	H20.6.2	ＧＬ −1.0 mまで掘削、盛土内。
55	H19.3504	東七坊一条南大路奈良町遺跡	東包永町２、３、4-1、５	個人	共同住宅新築	宅地	H20.6.2	ＧＬ −1.0 mまで掘削、盛土内。
56	H20.3026	東二坊大路・四条大路	四条大路南町439-7	オーエスハウジング㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.6.2	ＧＬ −0.2 mまで掘削、盛土内。
57	H20.3016	左京九条二坊十坪	西九条町二丁目13-1	大明㈱	携帯基地局の無線設備増設	宅地	H20.6.2	ＧＬ −0.4 mまで掘削、盛土内。
58	H19.3479	左京六条二坊七坪	八条町358番-1	日本食研㈱	事務所新築	水田	H20.6.2	ＧＬ −0.2 mまで掘削、床土上面で収まる。
							H20.6.5	ＧＬ −0.8 mまで掘削、床土内。
59	H20.3052	左京五条六坊十六坪　奈良町遺跡	鳴川町39	個人	個人住宅新築	宅地	H20.6.4	擁壁工事。ＧＬ −1.6 mまで掘削、黒褐色土内。
							H20.6.19	建物基礎工事、ＧＬ −0.2 mまで掘削、盛土内。
60	H20.3038	二条東六坊大路	北袋町17-5	個人	個人住宅新築	宅地	H20.6.6	ＧＬ −0.4 mまで掘削、盛土内。
61	H19.3172	西大寺旧境内	西大寺国見一丁目2196-1	近畿日本鉄道㈱	駅舎増築	駅舎	H20.6.7	プラットホーム上面から −2.0 mまで掘削、黄灰色粗砂上面で土坑一基確認。
62	H20.3041	六条山東遺跡	六条西三丁目1481番72	個人	個人住宅新築	宅地	H20.6.9	工事先行。
63	H20.3063	左京四条六坊六坪奈良町遺跡	西城戸町7-4、馬場町14-5	個人	店舗新築	宅地	H20.6.9	ＧＬ −1.0 mまで掘削、盛土内。
64	H20.3009	元興寺旧境内　奈良町遺跡	中院町20-1	個人	店舗付住宅改装	宅地	H20.6.10	ＧＬ −0.5 mまで掘削、暗茶褐色土層内。
65	H20.3005	右京三条三坊五坪	宝来一丁目84-7、8、9	個人	宅地造成	畑地	H20.6.11	ＧＬ −0.3 mまで掘削、床土内。
66	H20.3057	左京五条三坊八坪	恋の窪一丁目607-1の一部	オーエスハウジング㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.6.12	ＧＬ −0.3 mまで掘削、盛土内。
67	H20.3024	右京二条二坊十二坪	西大寺国見町二丁目291-22	個人	個人住宅新築	宅地	H20.6.12	ＧＬ −0.9 mまで掘削、盛土内。
68	H19.3476	田村第跡	四条大路一丁目726-3	ファースト住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.6.12	ＧＬ −0.4 mまで掘削、盛土内。
69	H19.3427	左京五条一坊十六坪・東一坊大路集落跡　（奈良県遺跡地図５Ｃ-67）	柏木町572番4、581番１	個人	店舗新築	宅地	H20.6.16	ＧＬ −1.2 mまで掘削、盛土内。
70	H20.3062	左京三条五坊九坪	芝辻町11-79	ＵＳ建築デザイン研究所	分譲住宅新築	宅地	H20.6.16	ＧＬ −0.2 mまで掘削、盛土内。
71	H19.3480	右京七条一坊十二坪	七条町1174他	三和建設㈱	倉庫新築	宅地	H20.6.16	ＧＬ −0.8 mまで掘削、盛土内。
72	H19.3461	西大寺旧境内	西大寺小坊町306番の一部、316番３	個人	共同住宅新築	宅地	H20.6.17	ＧＬ −0.3 mまで掘削、暗褐色土内。
73	H20.3003	左京三条二坊四坪	三条大路一丁目581-3、582-2、584-54	大和ハウス工業㈱	店舗新築	宅地	H20.6.17	ＧＬ −0.3 mまで掘削、盛土内。
74	H20.3040	右京北辺三坊一坪	西大寺新町一丁目123-13	個人	個人住宅新築	宅地	H20.6.20	ＧＬ −0.2 mまで掘削、盛土内。
75	H19.3403	東四坊二条大路	芝辻町二丁目244-3他３筆	個人	賃貸住宅新築	宅地	H20.6.20	ＧＬ −0.2 mまで掘削、盛土内。
							H20.6.23	ＧＬ −1.0 mまで掘削、耕作土内。
76	H20.3002	奈良町遺跡	紀寺町1037～992-1	大阪ガス㈱	ガス管敷設	宅地	H20.6.25	ＧＬ −0.65 mまで掘削、茶褐色土内。
77	H20.3060	東七坊一条南大路奈良町遺跡	東包永町13番１	㈱アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H20.6.27	ＧＬ −0.2 mまで掘削、盛土内。
78	H20.3017	左京一条三坊五坪・東三坊坊間路	法華寺1275の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H20.6.27	ＧＬ −0.2 mまで掘削、盛土内。
79	H20.3047	奈良町遺跡	高畑町908-1、908-2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.6.30	ＧＬ −0.1～0.4 mまで掘削、盛土内。
80	H20.3061	左京三条五坊九坪奈良町遺跡	芝辻町11-38	ＵＳ建築デザイン研究所	分譲住宅新築	宅地	H20.6.30	ＧＬ −0.4 mまで掘削、旧表土内。
81	H20.3034	東五坊二条大路	芝辻町三丁目49番24	個人	個人住宅新築	宅地	H20.6.30	盛土のみ。
82	H19.3502	左京六条三坊十一坪	大安寺二丁目８番１号の一部	㈱アーキネット	モデルハウス新築	宅地	H20.7.1	ＧＬ −0.45 mまで掘削、盛土内。
83	H20.3025	右京四条四坊九坪	宝来四丁目9-5～224-1	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.7.1	ＧＬ −0.4 mまで掘削、ＧＬ −0.3 mで地山確認。
							H20.7.2	ＧＬ −1.2 mまで掘削、ＧＬ −0.6 mで地山確認。
84	H18.3026	左京二条五坊三坪奈良町遺跡	北市町72-1、２他	㈱徳山堂	共同住宅新築	宅地	H20.7.7	ＧＬ −0.2 mまで掘削、茶褐色土内。
85	H20.3090	左京四条六坊六坪奈良町遺跡	西城戸町7-4、馬場町14-5	個人	看板新設	宅地	H20.7.10	ＧＬ −1.6 mまで掘削、ＧＬ −1.0 mで地山確認。

番号	届出・通知受理番号	遺　跡	届出地	届出・通知者	事業内容	現況	立会日	立会結果
86	H20.3093	紀寺跡 奈良町遺跡	紀寺町 658–7	㈱日本中央住販	分譲住宅新築	宅地	H20.7.10	ＧＬ –0.2 mまで掘削、盛土内。
87	H20.3068	右京五条四坊四坪・西四坊坊間東小路	五条三丁目 867 番 4	個人	個人住宅新築	宅地	H20.7.10	ＧＬ –1.8 mまで掘削、地表面が地山。
88	H20.3074	左京四条一坊十一坪・四条条間南小路	四条大路二丁目 42–1	個人	賃貸・共同住宅新築	宅地	H20.7.11	ＧＬ –0.2 mまで掘削、盛土内。
89	H20.3036	一条南大路・西四坊大路	若葉台三丁目 1913–14	個人	個人住宅新築	宅地	H20.7.14	ＧＬ –0.3 mまで掘削、盛土内。
90	H20.3055	東四坊八条大路	東九条 279–1 番地	個人	駐車場造成	水田	H20.7.15	ＧＬ –0.45 mまで掘削、盛土内。
91	H20.3037	窪之庄北浦遺跡	山町 682–1、窪之庄町 519–1 他	個人	個人住宅新築	宅地	H20.7.17	ＧＬ –0.4 ～ 0.5 mまで掘削、ＧＬ –0.1 ～ 0.4 mで地山確認。
92	H20.3118	東紀寺遺跡	東紀寺一丁目 703–6	個人	個人住宅新築	宅地	H20.7.17	ＧＬ –0.2 ～ 0.3 mまで掘削、盛土内。
93	H19.3414	東二坊三条大路・東二坊坊間路 田村第跡	三条大路一丁目～四条大路一丁目地内	奈良市長	下水道工事	宅地	H20.7.17	ＧＬ –1.2 mまで掘削、盛土内。
94	H20.3066	左京二条六坊北郊	法蓮町 916–4 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H20.7.22	ＧＬ –0.4 ～ 1.0 mまで掘削、水田造成土内。
95	H20.3082	右京六条三坊六坪	六条一丁目 744–4	㈱乾工務店	分譲住宅新築	宅地	H20.7.22	ＧＬ –0.1 ～ 0.7 mまで掘削、盛土内。
96	H20.3124	左京四条一坊五坪	四条大路三丁目 941–1 他	個人	個人住宅新築	宅地	H20.7.22	ＧＬ –0.3 mまで掘削、盛土内。
97	H20.3065	三条大路・左京三条一坊五坪	三条大路二丁目～三丁目・四条大路二丁目～三丁目地先の国道 24 号線・国道 308 号線・市道中部第 264 号線	西日本電信電話㈱	ＮＴＴ設備支障移転工事	道路	H20.7.22	ＧＬ –1.3 ～ 1.7 mまで掘削、北西部分ＧＬ –1.0 mで地山確認。
98	H20.3116	左京二条四坊十三坪	芝辻町三丁目 94–2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.7.22	ＧＬ –0.4 mまで掘削、盛土内。
99	H20.3083	多聞城跡	法蓮町 1514–21、1514–61	個人	個人住宅新築	宅地	H20.7.23	ＧＬ –1.0 mまで掘削、盛土内。
							H20.7.28	工事先行。ＧＬ –2.0 mまで掘削、一部でＧＬ –0.1 mで地山確認。
							H20.8.18	ＧＬ –0.6 mまで掘削、盛土内。
100	H20.3101	元興寺旧境内	鵲町 9–1、2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.7.25	ＧＬ –0.3 ～ 0.5 mまで掘削、盛土内。
101	H20.3125	左京四条一坊八坪	四条大路三丁目 932–1、2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.7.25	ＧＬ –0.2 mまで掘削、盛土内。
102	H19.3419	右京四条一坊八・九坪	四条大路四丁目～五丁目地内	奈良市長	下水道工事	道路	H20.7.25	ＧＬ –2.2 mまで掘削、ＧＬ –0.9 mで遺構面・地山確認。
							H20.7.29	ＧＬ –1.9 mまで掘削、ＧＬ –1.4 mで地山確認。
							H20.7.30	ＧＬ –2.0 mまで掘削、灰色砂層内。
							H20.7.31	ＧＬ –2.0 mまで掘削、灰色砂層内。
103	H19.3485	右京三坊五条大路	五条町二丁目 590–1 の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H20.7.29	ＧＬ –0.9 mまで掘削、ＧＬ –0.35 mで地山確認。
104	H20.3050	左京四条三坊九・十五坪	三条添川町～三条栄町地内	奈良市水道事業管理者	水道工事	道路	H20.7.31	ＧＬ –2.0 mまで掘削、ＧＬ –1.25 mで地山確認。
							H20.8.1	ＧＬ –1.3 mまで掘削、耕作土内。
							H20.8.4	ＧＬ –1.5 mまで掘削、ＧＬ –1.3 mで地山確認。
105	H20.3099	東紀寺遺跡	東紀寺町一丁目 703–5 の一部、	㈳市立病院	託児施設新設	宅地	H20.8.1	ＧＬ –0.5 mまで掘削、盛土内。
106	H20.3081	右京四条二坊二坪	四条大路五丁目 6–1	奈良市長	学校体育倉庫新築	学校地	H20.8.6	ＧＬ –0.45 mまで掘削、盛土内。
107	H20.3143	佐伯院跡　奈良町遺跡	西木辻町	㈱栗見住宅	宅地造成	宅地	H20.8.6	ＧＬ –2.0 mまで掘削、ＧＬ –1.2 m下で地山確認。
108	H19.3279	左京二条七坊北郊 奈良町遺跡	多門町 1、川上町 563–4	奈良社会福祉院	共同住宅新築	宅地	H20.8.6	ＧＬ –0.45 mまで掘削、盛土内。
109	H20.3035	左京三条五坊十三坪　奈良町遺跡	下三条町 33–1	個人	店舗付個人住宅新築	宅地	H20.8.7	Ｇｌ –1.0 mまで掘削、盛土内。
110	H20.3078	左京四条五坊五坪	杉ヶ町 28–1	個人	店舗新築	宅地	H20.8.7	ＧＬ –1.0 mまで掘削、盛土内。
111	H20.3076	二条東五坊坊間路	法蓮町 292–1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.7	工事先行。
							H20.8.12	ＧＬ –0.4 mまで掘削、床土内。
112	H20.3067	七条東四坊大路	東九条町 1556–6	㈱Ｋネクスト	店舗新築	宅地	H20.8.7	ＧＬ –2.7 mまで掘削、盛土内。
							H20.9.1	ＧＬ –0.8 ～ 1.3 mまで掘削、盛土内。
113	H20.3079	六条大路・西四坊大路	六条西四丁目 3–2	一建設㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.8.8	ＧＬ –1.4 mまで掘削、ＧＬ –0.8mで地山確認。
114	H19.3453	田村第跡	四条大路一丁目 462–102	㈱福岡屋住宅流通	分譲住宅新築	宅地	H20.8.8	ＧＬ –0.2 mまで掘削、盛土内。
115	H18.3025	左京二条五坊十四坪　奈良町遺跡	北市町 72–1 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.8	ＧＬ –0.1 mまで掘削、盛土内。
116	H20.3015	左京二条六坊一坪	法蓮町 1000 番地	㈱エヌ・ティ・ティ・ドコモ関西	携帯電話工事に伴うアース線設置	学校用地	H20.8.11	ＧＬ –0.9 mまで掘削、ＧＬ –0.5 m下で地山確認。

番号	届出・通知受理番号	遺　跡	届出地	届出・通知者	事業内容	現況	立会日	立会結果
117	H20.3142	西四坊二条条間小路　法世寺跡	疋田町一丁目１番１	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.11	ＧＬ −0.3 mまで掘削、盛土内。
118	H20.3112	田村第跡	四条大路一丁目462−90	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.11	ＧＬ −0.9 mまで掘削、盛土内。
119	H20.3110	田村第跡	四条大路一丁目1000番地112	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.18	ＧＬ −0.35 mまで掘削、盛土内。
120	H20.3087	右京三条一坊十二坪・西一坊坊間路	三条大路四丁目490、491−1	個人	賃貸住宅新築	青空駐車場	H20.8.18	ＧＬ −0.2 mまで掘削、盛土内。
121	H19.3414	東二坊三条大路・東二坊坊間路　田村第跡	三条大路一丁目〜四条大路一丁目地内	奈良市長	下水道工事	道路	H20.8.18	ＧＬ −2.5 mまで掘削、ＧＬ −2.4 mで地山確認。
122	H20.3148	左京五条三坊八坪	恋の窪一丁目607−12	オーエスハウジング㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.8.19	ＧＬ −0.4 mまで掘削、盛土内。
123	H20.3059	左京五条六坊九坪	南城戸町42番４	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.19	ＧＬ −0.25 mまで掘削、盛土内。
124	H20.3172	右京三条二坊十五坪　菅原東遺跡	西大寺国見町二丁目385番７	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.19	ＧＬ −0.35 mまで掘削、盛土内。
125	H20.3085	右京三条四坊十坪	宝来町950−1、949、944	㈱大誠	葬儀会館新築	宅地	H20.8.19	ＧＬ −0.85 mまで掘削、盛土内。
126	H20.3133	左京二条五坊北郊	法蓮町829−5、10	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.20	ＧＬ −0.3 mまで掘削、盛土内。
127	H19.3505	紀寺跡	紀寺町682番１	個人	店舗新築	水田	H20.8.20	ＧＬ −2.0 mまで掘削、ＧＬ −2.0 mで地山確認。
128	H20.3019	左京二条三坊十四坪	菅原町291番４の一部	個人	賃貸住宅新築	宅地	H20.8.21	ＧＬ −0.3 mまで掘削、盛土内。
129	H20.3091	七条東三坊大路	東九条町1279番１、1279番４	㈱アイロード・ジャパン	資材置場造成	水田	H20.8.22	ＧＬ −0.5 mまで掘削、旧水田耕作土内。掘削床で炭、時期不明の土師器・瓦片の包含層確認。
130	H20.3155	東四坊二条大路	芝辻町二丁目9−15〜38	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.8.25	ＧＬ −0.8〜1.3 mまで掘削、ＧＬ −0.9 mで地山確認。
131	H20.3137	右京五条三坊一坪	五条一丁目481番74	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.26	ＧＬ −0.4〜0.9 mまで掘削、旧耕作土内。一部ＧＬ −0.65 mで地山確認。
132	H20.3168	左京六条二坊八坪・五条大路	大安寺町497−1	個人	畑地造成	水田	H20.8.26	工事先行。ＧＬ −0.5 mまで掘削、旧水田耕作土内。
133	H20.3071	田村第跡	四条大路一丁目462番86	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.27	ＧＬ −0.6 mまで掘削、盛土内。
134	H20.3048	左京二条六坊九坪	法蓮町1095−7他	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.8.27	ＧＬ −0.7 mまで掘削、耕作土内。
135	H20.3147	二条東七坊坊間東小路	南半田東町３番地	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.28	ＧＬ −0.4 mまで掘削、盛土内。
136	H20.3073	六条朱雀大路	西ノ京町1−4	個人	個人住宅新築	宅地	H20.8.29	ＧＬ −0.4 mまで掘削、盛土内。
137	H20.3126	佐伯院跡　奈良町遺跡	西木辻町200−12〜47	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.8.29	ＧＬ −0.8〜1.1 mで掘削、ＧＬ −0.55〜0.9 mで地山確認。
138	H20.3075	西大寺旧境内	西大寺小坊町360番１	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.1	ＧＬ −0.26 mまで掘削、盛土内。
139	H20.3163	奈良町遺跡	紀寺町891−6	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.2	ＧＬ −0.5 mまで掘削、暗茶褐色土内。
140	H20.3103	右京六条三坊十五坪	六条一丁目826−1、826−2の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.4	ＧＬ −0.6 mまで掘削、ＧＬ −0.2 mで地山確認。
141	H20.3146	左京九条一坊九坪	西九条町五丁目２番９の一部	アサノ不動産㈱	店舗新築	宅地	H20.9.4	ＧＬ −0.7 mまで掘削、盛土内。
142	H20.3097	右京北辺二坊八坪	西大寺新町一丁目118−20	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.4	ＧＬ −0.25 mまで掘削、盛土内。
143	H20.3157	右京北辺四坊四坪	西大寺宝ヶ丘723−5	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.4	ＧＬ −0.2 mまで掘削、盛土内。
144	H20.3175	右京二条二坊十三坪	西大寺国見町二丁目291番27	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.8	ＧＬ −0.6 mまで掘削、盛土内。
145	H20.3006	左京五条二坊六坪	八条町363−2他	㈱フクダ不動産	道路建設	道路	H20.9.10	ＧＬ −0.7 mまで掘削、一部ＧＬ −0.7 mで堤の盛土確認。
146	H20.3152	左京五条二坊四坪	大安寺町504−1他	㈲小嶋	店舗新築	宅地	H20.9.11	ＧＬ −1.3 mまで掘削、盛土内。
147	H20.3173	右京六条三坊十五坪	六条一丁目826番３	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.12	ＧＬ −0.2〜0.4 mまで掘削、ＧＬ −0.2〜0.4 mで地山確認。
148	H20.3158	秋篠町遺物散布地	秋篠町1667番地の一部	オーエッチ工業㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.9.12	ＧＬ −0.1 mまで掘削、盛土内。
149	H20.3156	秋篠町遺物散布地	秋篠町1667番地の一部	オーエッチ工業㈱	宅地造成	原野	H20.9.12	工事先行。
150	H20.3225	右京七条一坊一坪・六条大路	西ノ京町1−54	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.12	ＧＬ −0.2 mまで掘削、盛土内。
151	H20.3115	左京三条一坊三坪	三条大路三丁目地内	奈良市長	下水道工事	道路	H20.9.12	ＧＬ −1.0mまで掘削、コンクリートスラブ上面。
							H20.9.17	ＧＬ −1.6 mまで掘削、ＧＬ −1.4 mで地山確認。
152	H20.3194	左京七坊五条大路奈良町遺跡	紀寺町658−12	㈱日本中央住販	分譲住宅新築	宅地	H20.9.17	ＧＬ −0.3 mまで掘削、盛土内。
153	H20.3141	左京五条三坊八坪	恋の窪一丁目607−4	オーエスハウジング㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.9.19	Ｇｌ −0.4 mまで掘削、盛土内。
154	H20.3209	奈良町遺跡	紀寺町922−14、13の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.22	ＧＬ −0.2 mまで掘削、盛土内。

番号	届出・通知受理番号	遺　跡	届出地	届出・通知者	事業内容	現況	立会日	立会結果
155	H20.3104	左京二条五坊十三坪　奈良町遺跡	北市町 26–1、2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.22	掘削なし。
156	H20.3209	左京二条五坊北郊	法蓮町 727–9	ミサワホーム近畿㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.9.24	ＧＬ –0.2 mまで掘削、盛土内。
157	H20.3132	右京五条三坊六坪	五条二丁目 601 番 59	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.25	ＧＬ –0.4 mまで掘削、ＧＬ –0.2 mで地山確認。
158	H20.3167	右京四条四坊八坪	宝来町三丁目 190 番 1 他	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.25	ＧＬ –0.2 mまで掘削、盛土内。
159	H20.3214	左京六条四坊十三坪	大安寺一丁目 1228–1 他	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.9.26	ＧＬ –0.9 mまで掘削、盛土内。
160	H20.3179	西大寺旧境内	若葉台三丁目 1968 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H20.9.29	ＧＬ –0.2 ～ 0.3 mまで掘削、地表面で地山確認。
161	H20.3205	左京五条三坊八坪	恋の窪一丁目 607–11	ＯＳハウジング㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.9.29	ＧＬ –0.2 mまで掘削、盛土内。
162	H20.3206	左京五条三坊八坪	恋の窪一丁目 607–8	ＯＳハウジング㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.9.29	ＧＬ –0.2 mまで掘削、盛土内。
163	H20.3121	右京五条一坊十四坪	五条町 195–6 の一部	個人	個人住宅新築	水田	H20.9.30	ＧＬ –1.5 mまで掘削、ＧＬ –1.3 mで地山確認。
164	H20.3193	左京五条七坊六坪 奈良町遺跡	井上町 3–5、5–3 の一部	興和不動産	下水道建設	宅地	H20.10.1	ＧＬ –2.0 mまで掘削、ＧＬ –0.3m で地山確認。
							H20.10.2	ＧＬ –2.0 mまで掘削、ＧＬ –0.3m で地山確認。
165	H20.3211	右京七条四坊十二坪	七条西町一丁目 627–34	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.2	工事先行。ＧＬ –0.4m まで掘削、盛土内。
166	H20.3096	西大寺旧境内	西大寺芝町 2526–1、2	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.3	ＧＬ –0.3 mまで掘削、盛土内。
167	H20.3181	左京二条四坊二坪	法蓮町 381–1 の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H20.10.6	ＧＬ –0.15 mまで掘削、盛土内。
168	H20.3182	左京二条四坊二坪	法蓮町 381–1 の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H20.10.6	ＧＬ –0.1 ～ 0.15 mまで掘削、盛土内。
169	H20.3183	左京二条四坊二坪	法蓮町 381–1 の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H20.10.6	ＧＬ –0.1 mまで掘削、盛土内。
170	H20.3227	左京八条四坊十三坪	東九条町 639–1 他	㈱おたすけマン	デイサービスセンター新築	宅地	H20.10.6	ＧＬ –0.6 mまで掘削、盛土内。
171	H20.3145	元興寺旧境内　奈良町遺跡	鳴川町 18 番地	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.6	工事先行。ＧＬ –0.2 ～ 0.4 mまで掘削、盛土内。
172	H20.3210	五条西三坊坊間西小路	平松二丁目 281–96 他	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.8	ＧＬ –0.25 mまで掘削、盛土内。
173	H20.3178	左京五条七坊十六坪	十輪院畑町 12–1 ～ 13–1	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.10.8	ＧＬ –0.7 mまで掘削、ＧＬ –0.25 mで 14 ～ 15 世紀の遺物包含層確認。
174	H20.3160	右京二条三坊十五坪	青野町 92 番 1 他	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.10	ＧＬ –0.5 mまで掘削、Ｇ１ –0.3 m以下で遺物包含層２層確認。
175	H20.3180	左京二条四坊二坪	法蓮町 381–1 の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H20.10.14	ＧＬ –0.2 mまで掘削、盛土内。
176	H20.3199	右京五条三坊十五坪	平松二丁目 325–1 の一部	ファースト住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.10.14	ＧＬ –0.3 mまで掘削、盛土内。
177	H20.3196	左京二条五坊北郊	法蓮町 714–1 他	個人	共同住宅新築	宅地	H20.10.15	ＧＬ –0.15 ～ 0.2 mまで掘削、盛土内。
178	H20.3127	右京三条三坊五坪	宝来一丁目 84–8	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.15	ＧＬ –0.4 mまで掘削、盛土内。
179	H20.3120	奈良町遺跡	高畑町 880 番 1 他	個人	共同住宅新築	宅地	H20.10.15	ＧＬ –1.2 mまで掘削、ＧＬ –0.7 mで遺構面の可能性がある灰青色シルト質細砂層確認。
							H20.11.5	ＧＬ –0.3 mまで掘削、盛土内。
180	H20.3246	奈良山第 17 号窯	中山町 1296–7 他	㈱ソニック	分譲住宅新築	宅地	H20.10.16	ＧＬ –0.1 mまで掘削、盛土内。
181	H20.3138	左京二条七坊一坪 広上王宅跡　奈良町遺跡	西笹鉾町 30 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.16	ＧＬ –0.3 mまで掘削、黒褐色土の表土層内。
182	H20.3241	右京五条四坊十三坪	五条西一丁目 1029–23	㈱ファーストホーム	分譲住宅新築	宅地	H20.10.20	ＧＬ –0.1 ～ 0.3 mまで掘削、盛土内。
183	H20.3230	左京二条三坊一坪 東二坊大路	法華寺町 368–6	個人	共同住宅新築	宅地	H20.10.20	ＧＬ –0.3 mまで掘削、盛土内。
184	H20.3201	二条東四坊大路	芝辻町三丁目 76 番 13 他	㈱未来	個人住宅新築	宅地	H20.10.21	掘削なし。
185	H20.3149	遺物散布地（奈良県遺跡地図 5A–51）	山陵町 639 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.21	ＧＬ –0.2 mまで掘削、盛土内。
186	H20.3207	左京五条六坊十坪 奈良町遺跡	西木辻町 289	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.10.22	ＧＬ –0.9 mまで掘削、盛土内。
187	H20.3139	右京六条一坊三坪	西ノ京町 1 番 14	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.24	ＧＬ –0.3 mまで掘削、盛土内。
188	H20.3229	左京一条四坊十一坪	法蓮町 599–3	個人	共同住宅新築	宅地	H20.10.27	ＧＬ –0.7 mまで掘削、ＧＬ –0.3 mで地山確認。
189	H20.3239	東二坊九条大路	西九条町四丁目 2–6 他	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.10.27	ＧＬ –0.8 ～ 1.3 mまで掘削、盛土内。
190	H20.3046	東紀寺遺跡	東紀寺町一丁目 50–1	奈良市長	病院新築	宅地	H20.10.28	ＧＬ –0.1 mまで掘削、盛土内。

番号	届出・通知受理番号	遺　跡	届出地	届出・通知者	事業内容	現況	立会日	立会結果
191	H20.3240	三条東三坊大路	大宮町三丁目218-3	個人	店舗新築	宅地	H20.10.28	ＧＬ -0.7 mまで掘削、ＧＬ -0.45 m流路埋土（15 世紀遺物包含）確認。
192	H19.3445	右京四条一坊七坪	四条大路四丁目41-1 他	奈良市長	水路工事	水田	H20.10.28	ＧＬ -1.4 mまで掘削、ＧＬ -1.2 mで地山確認。
							H20.10.30	ＧＬ -1.0 mまで掘削、ＧＬ -0.7 m下で地山確認。
							H20.11.5	ＧＬ -1.0 mまで掘削、ＧＬ -0.8 mで地山確認。
							H20.11.6	ＧＬ -1.0 mまで掘削、ＧＬ -0.8 mで地山確認。
							H20.11.13	ＧＬ -1.0 mまで掘削、ＧＬ -0.8 mで地山確認。
							H20.11.18	ＧＬ -1.0 mまで掘削、ＧＬ -0.8 mで地山確認。
193	H20.3084	左京五条二坊十六坪	四条大路南 439-11	オーエスハウジング㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.10.29	ＧＬ -0.15 mまで掘削、盛土内。
194	H18.3312	左京五条二坊八坪	大安寺町 565-1・2	オーエスハウジング㈱	共同住宅新築	宅地	H20.10.30	ＧＬ -0.5 mまで掘削、盛土内。
195	H20.3138	左京二条七坊一坪 広上王宅跡　奈良町遺跡	西笹鉾町 30 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.30	ＧＬ -0.2 mまで掘削、盛土内。
196	H20.3228	左京二条六坊北郊	法蓮町 1263-3 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.30	ＧＬ -0.4 mまで掘削、盛土内。
197	H20.3261	遺物散布地（奈良県遺跡地図 5A-20）	押熊町 689-10	三和建設㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.10.30	ＧＬ -0.4 mまで掘削、盛土内。
198	H20.3202	二条西一坊大路	二条町三丁目 90 番 34	個人	個人住宅新築	宅地	H20.10.31	ＧＬ -0.4 mまで掘削、盛土内。
199	H20.3154	右京二条三坊三坪 菅原東遺跡	菅原町 185、186、194-1	㈱ひかりエステート	店舗新築	宅地	H20.11.4	ＧＬ -1.7 mまで掘削、一部ＧＬ -1.35 mで地山確認。遺構・遺構面あり。
200	H20.3184	左京三条五坊十二坪	油阪地方町 5 番地	個人	店舗付個人住宅新築	宅地	H20.11.4	ＧＬ -1.4 mまで掘削、ＧＬ -1.0 mで地山（遺構面）確認。
201	H20.3259	左京四条一坊十三坪	四条大路二丁目 24 番 11	個人	個人住宅新築	宅地	H20.11.4	ＧＬ -1.0 mまで掘削、耕作土内。
202	H20.3098	東三坊三条大路・左京四条三坊一坪	大宮町七丁目～三条栄町地内	奈良市水道事業管理者	水道工事	道路	H20.11.5	ＧＬ -1.7 mまで掘削、ＧＬ -1.65 mで地山確認。
203	H20.3232	左京三条五坊一坪	芝辻町一丁目 77 番 60	個人	個人住宅新築	宅地	H20.11.6	工事先行。ＧＬ -0.2 mまで掘削、盛土内。
204	H20.3287	古市城跡	古市町 268 番地	奈良市長	体育倉庫新築	学校地	H20.11.7	ＧＬ -0.4 mまで掘削、盛土内。
205	H20.3243	左京八条四坊十一坪	東九条町 684-2 他	個人	上下水道埋設工事	宅地	H20.11.10	ＧＬ -1.45 mまで掘削、ＧＬ -0.7 mで奈良時代の遺構面確認。
206	H20.3123	東一坊坊間路	南新町 77-1	個人	青空駐車場造成	水田	H20.11.11	ＧＬ -0.5 mまで掘削、一部ＧＬ -0.5 mで地山確認。
207	H20.3266	左京八条四坊六坪	東九条町 623-1	個人	青空駐車場造成	水田	H20.11.12	掘削なし。
208	H20.3295	南紀寺遺跡	南紀寺町四丁目 109-1・3 の一部	個人	店舗新築	宅地	H20.11.12	ＧＬ -0.6 mまで掘削、盛土内。
209	H16.4002	菖蒲下池	あやめ池北一丁目 9 番地 1 号他地内	近畿日本鉄道㈱	区画整理	公園跡地	H20.11.12	ＧＬ -1.5 mまで掘削、ＧＬ -1.5 mで池の堆積層。
210	H20.3262	奈良町遺跡	紀寺町 891-20	個人	個人住宅新築	宅地	H20.11.17	ＧＬ -0.25 mまで掘削、盛土内。
211	H20.3310	左京二条七坊十一坪　奈良町遺跡	押小路町 9 番 3	㈱神明	分譲住宅新築	宅地	H20.11.17	ＧＬ -0.8 mまで掘削、盛土内。
212	H20.3318	六条山東遺跡	六条西三丁目 1481-108	個人	個人住宅新築	宅地	H20.11.19	ＧＬ -0.2 mまで掘削、盛土内。
213	H20.3162	左京六条二坊十二坪	八条五丁目 425 番 1、426 番 2 の各一部	個人	共同住宅新築	宅地	H20.11.20	ＧＬ -0.2 mまで掘削、盛土内。
214	H20.3190	左京四条二坊六坪	四条大路一丁目 462-91	個人	個人住宅新築	宅地	H20.11.20	ＧＬ -0.5 mまで掘削、盛土内。
215	H20.3129	左京三条三坊十坪	大宮町六丁目 -2-8	㈱損保ジャパン	駐車場増設	駐車場	H20.11.20	ＧＬ -0.45 mまで掘削、盛土内。
216	H20.3256	奈良町遺跡	高畑町 1203-6	個人	個人住宅新築	宅地	H20.11.25	ＧＬ -0.35 mまで掘削、盛土内。
217	H20.3290	左京六条一坊十一坪（管路新設部分）	柏木町 395 地先県道京終停車場薬師寺線	関西電力㈱	電気工事	宅地	H20.11.25	ＧＬ -2.1 mまで掘削、ＧＬ -0.87 mで遺物包含層確認。ＧＬ -1.05 mで地山確認。
218	H20.3135	左京四条六坊五坪・五条六坊八坪　奈良町遺跡	北風呂町～南袋町地内	奈良市長	下水道工事	道路	H20.11.25	ＧＬ -1.5 mまで掘削、ＧＬ -1.5 m地山確認。
219	H20.3161	左京四条六坊五坪 奈良町遺跡	南魚屋町 13 番 1	個人	共同住宅新築	宅地	H20.11.25	ＧＬ -0.2 ～ 0.4 mまで掘削、盛土内。
220	H20.3260	左京三条二坊十三・十四坪	三条大路一丁目 1-1 ～四条大路一丁目 1-30	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.11.26	ＧＬ -1.15 mまで掘削、盛土内。

番号	届出・通知受理番号	遺　跡	届出地	届出・通知者	事業内容	現況	立会日	立会結果
221	H20.3188	左京三条三坊十三坪	大宮町四丁目241-1	個人	賃貸住宅新築	宅地	H20.11.27	ＧＬ -0.7 mまで掘削、ＧＬ -0.7 mで地山確認。地山面が遺構面。
222	H20.3281	左京八条三坊十四坪	東九条町493-3～491	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.11.27	ＧＬ -1.6 mまで掘削、盛土内。
223	H20.3304	右京五条三坊三坪	五条二丁目578-6	個人	個人住宅新築	宅地	H20.11.28	ＧＬ -0.2～0.25 mまで掘削、盛土内。
224	H20.3280	左京九条三坊十五坪	東九条町383-1の一部、382の一部	㈱ライラック	倉庫新築	宅地	H20.12.1	ＧＬ -1.3 mまで掘削、淡灰色粘砂層(流路埋土内、中・近世出土遺物あり。)
225	H20.3317	左京五条七坊六坪奈良町遺跡	井上町5-3の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H20.12.1	ＧＬ -0.4 mまで掘削、盛土内。
226	H20.3187	西大寺旧境内	西大寺新田町505	個人	個人住宅新築	宅地	H20.12.1	ＧＬ -2.1 mまで掘削、ＧＬ -0.3 mで地山確認。
227	H20.3244	骨蔵器出土地(奈良県遺跡地図12B-83)	都祁吐山町3625	ＫＤＤＩ㈱	携帯電話無線基地局新設	水田	H20.12.1	ＧＬ -2.5 mまで掘削、現地表面が地山面。
228	H20.3306	右京北辺坊三坊五坪	西大寺北町三丁目409-1の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H20.12.3	工事先行。
229	H20.3170	左京三条五坊五坪	大宮町一丁目15番4	個人	店舗新築	宅地	H20.12.4	ＧＬ -2.0 mまで掘削、盛土内。
230	H20.3327	奈良町遺跡	紀寺町1064-7	㈱日本中央住販	分譲住宅新築	宅地	H20.12.4	ＧＬ -1.7 mまで掘削、ＧＬ -0.6 mで地山確認。
231	H20.3251	右京三条三坊五坪	宝来一丁目9-11～10	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.12.4	ＧＬ -1.1 mまで掘削、旧水田耕土内。
232	H20.3226	佐伯院跡　奈良町遺跡	京終地方東側町12番地1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.12.8	ＧＬ -0.5 mまで掘削、盛土内。
233	H20.3297	左京四条四坊十・十一坪	三条宮前町279-1	個人	店舗新築	宅地	H20.12.9	ＧＬ -0.8 mまで掘削、ＧＬ -0.8 mで地山確認。
234							H20.12.10	
	H20.3286	左京二条五坊北郊	法蓮町717番3他	個人	個人住宅新築	宅地	H20.12.10	ＧＬ -0.2 mまで掘削、盛土内。
235	H20.3303	左京九条五坊十六坪	東九条町215-20～236	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H20.12.15	ＧＬ -0.7 mまで掘削、ＧＬ -0.7 mで地山確認。地山面が遺構面。
236							H20.12.16	ＧＬ -0.7 mまで掘削、旧水田土内。
							H20.12.17	ＧＬ -0.7 mまで掘削、水田床土内。
	H20.3291	左京五条三坊一坪・東二坊大路　遺物散布地（奈良県遺跡地図5C-66）	四条大路南町439-14	オーエスハウジング㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.12.16	ＧＬ -0.4 mまで掘削、盛土内。
237	H20.3309	西大寺旧境内	西大寺新池町1739-8	個人	個人住宅新築	宅地	H20.12.17	ＧＬ -0.4 mまで掘削、ＧＬ -0.1 mで地山確認。
238	H20.3325	遺物散布地（奈良県遺跡地図5A-41）	秋篠町1667-4	オーエッチ工業㈱	分譲住宅新築	宅地	H20.12.19	ＧＬ -0.4 mまで掘削、盛土内。
239	H20.3308	左京二条三坊十四坪・二条条間南小路・東三坊坊間東小路	法華寺町83-18	松浦林業㈱	店舗新築	宅地	H20.12.22	ＧＬ -1.1 mまで掘削、盛土内。
240	H20.3299	六条西二坊大路	六条一丁目551-1	個人	個人住宅新築	宅地	H20.12.22	ＧＬ -0.3 mまで掘削、ＧＬ -0.3 mで地山確認。
241	H20.3305	奈良町遺跡	肘塚町178-5他	個人	賃貸・共同住宅新築	宅地	H20.12.24	ＧＬ -0.7 mまで掘削ＧＬ -0.7 mで地山確認。
242	H20.3316	左京六条三坊十六坪	大安寺三丁目109番1	個人	個人住宅新築	水田	H20.12.24	ＧＬ -0.6～0.7 mまで掘削、床土、時期不明遺物包含層内。
243	H20.3258	左京六条二坊十六坪	大安寺西二丁目281	奈良市長(衛生浄化センター)	施設増築	宅地	H20.12.26	ＧＬ -1.0 mまで掘削、盛土内。
244	H20.3354	元興寺旧境内	高御門町4-1	個人	店舗付個人住宅新築	宅地	H20.12.26	ＧＬ -0.3 mまで掘削、盛土内。
245							H21.1.8	
	H20.3354	左京六条四坊八坪	六条二丁目1008-1他	㈱アスカ電工	庭の造成	水田	H21.1.6	ＧＬ -0.65 mまで掘削、ＧＬ -0.4 mで地山確認。
246	H20.3254	左京八条四坊十二坪	東九条町684-2他	個人	賃貸・共同住宅新築	宅地	H21.1.7	ＧＬ -0.3 mまで掘削、盛土内。
247	H20.3320	左京一条三坊十三坪	法華寺町1351（一条高校）	奈良市長	自転車置き場建設	学校用地	H21.1.7	ＧＬ -0.6～0.8 mまで掘削、ＧＬ -0.5 mで地山確認。
248	H20.3320	左京一条三坊十三坪	法華寺町1351	奈良市長	自転車置場建設	宅地	H21.1.7	ＧＬ -0.6～0.8 mまで掘削、地山確認。
249	H20.3254	左京八条四坊十二坪	東九条町684-2他	個人	賃貸・共同住宅新築	宅地	H21.1.7	ＧＬ -0.3 mまで掘削、盛土内。
250	H20.3342	右京一条二坊四坪	二条町二丁目72-19	個人	個人住宅新築	宅地	H21.1.8	ＧＬ -0.3 mまで掘削、盛土内。
251	H20.3208	左京四条一坊三坪	四条大路三丁目989-1他	オーエスハウジング㈱	宅地造成	水田	H21.1.8	ＧＬ -1.05 mまで掘削、ＧＬ -0.7 mで遺構面・地山確認。ＧＬ -0.6 mで奈良時代の遺物包含層確認。
252	H20.3319	赤田横穴墓群	西大寺赤田町一丁目6番1号	奈良市長	バンビーホーム改築	学校内用地	H21.1.9	ＧＬ -1.1 mまで掘削、盛土内。
253	H20.3237	西二坊二条条間路	西大寺国見町二丁目296番51	個人	個人住宅新築	宅地	H21.1.13	ＧＬ -0.3 mまで掘削、盛土内。
254	H20.3238	左京四条一坊八坪	四条大路三丁目933-2	個人	個人住宅新築	宅地	H21.1.13	ＧＬ -0.95 mまで掘削、ＧＬ -0.5 mで地山確認。

番号	届出・通知受理番号	遺　跡	届出地	届出・通知者	事業内容	現況	立会日	立会結果
255	H20.3329	四条西二坊坊間東小路	尼辻南町 24 他	個人	賃貸住宅新築	宅地	H21.1.13	ＧＬ –0.25 ～ 0.3 mまで掘削、盛土内。
256	H20.3236	左京四条三坊九坪	大宮町四丁目 250–1 ～三条添川町 5–27	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H21.1.14	ＧＬ –1.0 mまで掘削、盛土内。
257	H20.3265	左京五条五坊六坪	西木辻町 75–1	㈱西商店	賃貸住宅新築	宅地	H21.1.15	ＧＬ –0.4 mまで掘削、盛土内。
258	H20.3312	左京四条四坊十三坪・四条大路	大森西町～三条本町地内	奈良市水道事業管理者	水道工事道路	道路	H21.1.15	ＧＬ –1.5 mまで掘削、盛土内。
259	H20.3203	南紀寺遺跡	白毫寺 19–1 ～ 75	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H21.1.16	ＧＬ –1.5 mまで掘削、盛土内。
260	H20.3372	遺物散布地（奈良県遺跡地図 5A–41）	秋篠町 1667–3	オーエッチ工業㈱	分譲住宅新築	宅地	H21.1.17	ＧＬ –0.4 mまで掘削、盛土内。
261	H20.3351	右京五条四坊十一坪　五条条間路	平松四丁目 396–38	個人	個人住宅新築	宅地	H21.1.19	ＧＬ –0.3 mまで掘削、ＧＬ –0.15 mで地山確認。
262	H20.3348	左京五条五坊十六坪	西木辻町 150–2–306	個人	個人住宅新築	宅地	H21.1.19	ＧＬ –0.3 mまで掘削、盛土内。
263	H20.3341	左京二条五坊北郊	法蓮町 727–8 番	個人	個人住宅新築	宅地	H21.1.19	ＧＬ –0.3 mまで掘削、盛土内。
264	H20.3296	遺物散布地（奈良県遺跡地図 12B–9）	藺生町地内	奈良市長	ため池改修工事	ため池	H21.1.21	ＧＬ –1.0 mまで掘削、池内の堆積土内。
265	H20.3346	広大寺池遺跡	今市町 837–4	奈良市長	U 型水路設置	水路	H21.1.26	旧水路底より、0.55 m掘削、旧河川埋土確認。
266	H20.3333	左京三条二坊四坪	三条大路一丁目 584–39 他	個人	個人住宅新築	宅地	H21.1.27	ＧＬ –0.4 mまで掘削、盛土内。
267	H20.3331	五条東七坊大路奈良町遺跡	福智院町 45–2 ～紀寺町 785	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H21.1.28	ＧＬ –1.3 mまで掘削、盛土内。
268	H20.3368	左京二条六坊北郊	法蓮町 1276 番 6	個人	個人住宅新築	水路	H21.1.28	ＧＬ –0.2 ～ 0.8 mまで掘削、盛土内。
269	H20.3377	左京二条六坊十坪	法蓮町 1137 の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H21.2.2	掘削なし。
270	H20.3263	右京二条四坊十五坪	若葉台四丁目 242–10	個人	個人住宅新築	宅地	H21.2.3	ＧＬ –0.2 mまで掘削、盛土内。
271	H20.3279	左京二条四坊九・十六坪	法蓮町 632–2 ～ 408	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H21.2.3	ＧＬ –0.8 ～ 0.9 mまで掘削、一部ＧＬ –0.7 mで地山確認。
272	H20.3288	左京七条一坊三坪	柏木町 290–94	個人	個人住宅新築	宅地	H21.2.4	ＧＬ –0.25 mまで掘削、盛土内。
273	H20.3395	奈良山第 16 号窯（奈良県遺跡地図 5A–6）	中山町 1269–4 の一部	㈱ソニック	分譲住宅新築	宅地	H21.2.5	ＧＬ –0.35 mまで掘削、盛土内。
274	H20.3378	元興寺旧境内奈良町遺跡	花園町 22 番地	個人	個人住宅新築	宅地	H21.2.5	ＧＬ –0.2 mまで掘削、盛土内。
275	H20.3379	西大寺旧境内（西大寺寺地）	西大寺野神二丁目地内	奈良市長	下水道工事	道路	H21.2.6	ＧＬ –2.7 mまで掘削、ＧＬ –0.15 mで地山確認。
276	H20.3294	左京四条六坊十二坪　奈良町遺跡	小太郎町 4–1 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H21.2.6	ＧＬ –0.23 mまで掘削、盛土内。
277	H20.3382	二条条間路・右京二条二坊十一坪	西大寺国見町一丁目 10–21	大阪ガス㈱	ガス管移設	道路水路	H21.2.9	ＧＬ –1.1 mまで掘削、盛土内。
278	H20.3298	左京三条五坊十二坪　奈良町遺跡	油阪地方町 6–1	個人	店舗付住宅新築	宅地	H21.2.9	ＧＬ –0.8 mまで掘削、近現代の撹乱。
279	H20.3268	五条西一坊大路	五条町 297 番地 11	個人	個人住宅新築	宅地	H21.2.12	ＧＬ –0.6 mまで掘削、盛土内。
280	H19.3471	左京四条五坊二坪	三条本町 1097 番	㈱ゼファー	ホテル新築	宅地	H21.2.12	ＧＬ –2.2 mまで掘削、旧水田上面。
281	H20.3185	右京北辺四坊八坪	西大寺赤田町一丁目 4–8	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H21.2.13	ＧＬ –1.65 ～ 1.7 mまで掘削、水成堆積層内。
282	H20.3300	左京四条三坊八坪	三条栄町 149–6	個人	個人住宅付ビル新築	宅地	H21.2.17	ＧＬ –1.4 mまで掘削、盛土内。
283	H20.3495	左京四・五坊四条大路	大森西町～三条本町	奈良市長	下水道工事	道路	H21.2.18	矢板が打たれ、土層確認できず。
284	H20.3363	東四坊八条大路	東九条町 308–1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.2.20	ＧＬ –0.4 mまで掘削、盛土内。
285	H20.3301	左京五条一坊九坪集落跡（奈良県遺跡地図 5C–67）	柏木町地内	奈良市長	護岸工事	ため池	H21.2.23	ＧＬ –1.0m まで掘削、一部ＧＬ –0.8 mで地山確認。
286	H20.3370	左京二条七坊一坪奈良町遺跡　広上王宅跡	西笹鉾町 16 番 14	個人	個人住宅新築	宅地	H21.2.23	ＧＬ –0.3 mまで掘削、盛土内。
287	H20.3380	右京二条四坊十三坪　法世寺跡	菅原町 634–1	大阪ガス	ガス管移設	道路	H21.2.24	ＧＬ –1.1 mまで掘削、ＧＬ –1.1 mで地山確認。
288	H20.3315	右京二条四坊十三坪・三条四坊十六坪・二条大路	菅原町	奈良市長	下水道工事	道路	H21.2.24	ＧＬ –1.2 mまで掘削、旧水田土内。
							H21.3.4	ＧＬ –3.0 mまで掘削、ＧＬ –1.4 mで地山確認。
							H21.3.5	ＧＬ –2.3 mまで掘削、ＧＬ –1.2 mで地山確認。
							H21.3.9	ＧＬ –2.3 mまで掘削、ＧＬ –1.2 mで地山確認。
							H21.3.10	ＧＬ –1.7 mまで掘削、ＧＬ –1.2 mで地山確認
							H21.3.11	ＧＬ –1.7 mまで掘削、ＧＬ –1.5 mで地山確認。

番号	届出・通知受理番号	遺　跡	届出地	届出・通知者	事業内容	現況	立会日	立会結果
289	H20.3383	東四坊九条大路	北之庄町 677-1	南本電気㈱	駐車場 青空資材置き場	水田	H21.2.26	ＧＬ -0.3 mまで掘削、水田土・床土内。
290	H20.3387	左京七条二坊六坪	八条町 792-1、794-5	個人	個人住宅新築	宅地	H21.2.26	ＧＬ -0.4 mまで掘削、盛土内。
291	H20.3278	左京五条二坊十三坪	大安寺西一丁目 334-2 ～ 341-12	大阪ガス㈱	ガス管敷設	道路	H21.3.9	ＧＬ -0.8 mまで掘削、盛土内。
							H21.3.12	ＧＬ -0.7 mまで掘削、耕作土内。
292	H20.3292	窪之庄城跡	窪之庄町 505 番 1	㈱エヌ・ティ・ティ・ドコモ	携帯電話基地局新設	畑地	H21.3.12	ＧＬ -1.4 mまで掘削、ＧＬ -1.1 mで地山確認。
293	H20.3401	左京五条三坊六坪奈良町遺跡	井上町 3-5、5-9	個人	個人住宅新築	宅地	H21.2.26	ＧＬ -0.5 mまで掘削、盛土内。
294	H20.3283	左京四条一坊八坪	四条大路三丁目 928 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H21.3.2	ＧＬ -0.8 mまで掘削、掘削床が地山である可能性あり。
295	H20.3365	東四坊五条条間路	大森町地内	奈良市長	下水道工事	道路	H21.3.3	ＧＬ -1.45m ～ 0.6m まで掘削、盛土内。
296	H20.3420	左京一条四坊三坪遺物散布地（奈良県遺跡地図 5B-61）	法蓮町 469-1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.3.3	ＧＬ -0.2 ～ 0.5 mまで掘削、盛土内。
297	H20.3393	松林苑	歌姫町地内	奈良市長	河川工事	河川	H21.3.3	ＧＬ -1.8 mまで掘削、表土直下で地山確認。
298	H20.3404	左京四条一坊十六坪・四条条間北小路	四条大路二丁目 824 番 1 の一部	一建設㈱	分譲住宅新築	宅地	H21.3.4	ＧＬ -0.4 mまで掘削、盛土内。
299	H20.3405							
300	H20.3406							
301	H20.3376	右京六条四坊八坪	大安寺四丁目 14-21	個人	個人住宅新築	宅地	H21.3.9	ＧＬ -0.4 mまで掘削、淡茶褐色砂質土層、ＧＬ -0.4 mで江戸時代の遺構面・遺構確認。
302	H20.3399	右京六条三坊七坪	六条一丁目 644 番 1	個人	個人住宅新築	雑種地	H21.3.16	ＧＬ -1.1 mまで掘削、ＧＬ -1.1 mで地山確認。
303	H20.3397	右京五条三坊七坪・五条条間路	五条二丁目 601 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H21.3.16	ＧＬ -0.2 mまで掘削、盛土内。
304	H20.3419	左京三条六坊四坪奈良町遺跡	下三条町 42 番 1、2	個人	店舗付個人住宅新築	宅地	H21.3.16	ＧＬ -0.7 mまで掘削、盛土内。
305	H20.3358	右京五条四坊一坪	平松四丁目 462-3、462-24	個人	賃貸・共同住宅新築	宅地	H21.3.18	ＧＬ -0.5 mまで掘削、盛土内。
306	H20.3340	左京六条四坊一坪	大安寺四丁目 1031 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.3.18	ＧＬ -0.1 ～ 0.5 mまで掘削、ＧＬ -0.5 mで淡茶褐色粘質土層の時期不明の遺構面確認。
307	H20.3313	一条東四坊坊間小路	法蓮町 1951 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.3.19	ＧＬ -0.6 mまで掘削、ＧＬ -0.2 mで地山確認。
308	H20.3463	古市城跡	古市町 1830-3 他	丸忠住宅産峰	個人住宅新築	宅地	H21.3.26	ＧＬ -1.6 mまで掘削、ＧＬ -0.5 ～ 0.8m で地山確認。
309	H20.3277	右京二坊二条条間路	西大寺国見町一丁目～二丁目	奈良市長	河川改修	河川	H21.3.26	河川底から 0.6 mまで掘削、旧河川堆積土内。
310	H20.3443	右京二条四坊十四坪　法世寺跡	疋田町一丁目 20 番	個人	個人住宅新築	宅地	H21.3.26	ＧＬ -0.4 mまで掘削、盛土内。
311	H20.3454	右京七条三坊七坪	七条一丁目 426-7 他	㈱福岡屋住宅流通	分譲住宅新築	宅地	H21.3.27	ＧＬ -0.1 mまで掘削、盛土内。
312	H20.3273	右京三条大路・西三坊大路	宝来二丁目 793-1	個人	共同住宅新築	畑地	H21.3.27	ＧＬ -0.6 mまで掘削、ＧＬ -0.5 mで地山確認、15･16 世紀頃の瓦質土器の羽釜の下半部が出土。
313	H20.3442	左京二条七坊十四坪	押上町 34-1 の一部	個人	賃貸住宅新築	宅地	H21.3.30	ＧＬ -0.3 ～ 0.8 mまで掘削、盛土内。
314	H20.3433	二条東四坊大路	法蓮町 328-29	ファースト住建㈱	分譲住宅新築	宅地	H21.3.30	ＧＬ -0.4 mまで掘削、盛土内。
315	H20.3247	左京六条三坊十五坪	大安寺三丁目 82-2	個人	共同住宅新築	宅地	H21.3.31	ＧＬ -0.5 mまで掘削、盛土内。
316	H20.3418	右京二条四坊一坪	西大寺芝町二丁目 2031 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H21.3.31	ＧＬ -0.2 mまで掘削、盛土内。

（2）平成 20 年度文化財保護法第 125 条 1 の現状変更許可申請に伴う工事立会

番号	届出・通知受理番号	遺　跡	届出地	申請者	事業内容	現況	日付	立会結果
1	H19.1070	史跡東大寺旧境内名勝奈良公園	水門町98番地先～100番地先	奈良市長	護岸・川底修復	河川	H21.2.5	ＧＬ-0.45mまで掘削、灰色砂礫層内

第　2　章　　自然科学分析報告

奈良市教育委員会では、発掘調査の成果をより総合性の高い確実なものとするために、遺跡や遺物の肉眼観察では把握できない事象について、自然科学分析を活用している。

これまでに行ってきた主な自然科学分析は、下記の通りである。

１．環境の指標性が高く、生活資源となっている植物を主とした生物遺体の同定。

２．年代の手がかりとなる遺物が含まれない地層や遺構の年代を比定するために行う、試料の含有放射線量から年代値を求める年代測定（例:放射性炭素年代測定、ＴＬ年代測定）や、年代の指標性の高い広域火山灰（例:ＡＴ火山灰、ＡＨ火山灰）の同定。

３．遺物に付着したり、土壌に含まれる有機物や化学物質、あるいは土器の胎土や地質に含まれる鉱物の成分を同定する理化学分析（例：蛍光Ｘ線分析)。

平成 20 年度は、下記の自然科学分析を報告する。

① 平城京跡第 579 次調査　弥生時代の柱材の放射性炭素年代測定（ＡＭＳ）
縄文時代晩期の土坑埋土、奈良時代の溝埋土の花粉分析
縄文時代晩期の土坑から出土した種実の同定
弥生時代の柱穴から出土した柱材の樹種同定

② 平城京跡第 608 次調査　奈良時代の井戸枠内より出土した種実の同定

③ 帯解黄金塚古墳　墳丘周囲の石敷の石材同定

このうち①については、前年度に分析をしたが、発掘調査報告を本書に掲載するため、併せて報告する。

②の平城京跡第 608 次調査に関わる分析として、今年度報告する種実同定の他に、条坊側溝埋土の花粉分析、珪藻分析、条坊側溝を護岸する杭材の樹種同定があるが、対象となる発掘区のほとんどが平成 21 年度年報に掲載予定であるため、発掘成果の報告に併せて報告する。

今年度発掘成果が報告されているＡ発掘区ＳＤ 121 の花粉分析結果については、分析結果が他の発掘区と一括になっているため、詳細は平成 21 年度年報で報告する予定である。

1. 平城京跡第 579 次調査における自然科学分析

Ⅰ　放射性炭素年代測定

1　はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の ^{14}C濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により ^{14}C年代から暦年代に較正する必要がある。

ここでは、ＨＪ第 579 次調査において出土した柱材を対象として、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行い、遺構の年代について検討した。測定にあたっては、米国の Beta Analytic Inc. の協力を得た。

2　試料と方法

測定試料は、P-10 より出土した柱材１点である（表１）。放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理を行った。

１）蒸留水中で細かく粉砕後、超音波および煮沸により洗浄

２）塩酸（HCl）により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム（NaOH）により二次的に混入した有機酸を除去

３）再び塩酸（HCl）で洗浄後、アルカリによって中和

４）定温乾燥機内で 80℃で乾燥

前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、ｎ-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデトロン加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。測定試料と方法を表１にまとめた。

3　結果

年代測定の結果を表２に示す。

１）^{14}C年代測定値

試料の ^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（ＡＤ 1950 年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は国際的慣例により Libby の 5568 年を使用した（実際の半減期は 5730 年）。

２）δ^{13}C測定値

試料の測定 ^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

３）補正 ^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の δ^{13}C値を−25（‰）に標準化することによって得られる年代である。

４）暦年代 Calender Age

^{14}C年代測定値を実際の年代値（暦年代）に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中 ^{14}C濃度の変動および ^{14}Cの半減期の違いを較正する必要がある。暦年較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}Cの詳細な測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と ^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

表１　測定試料及び処理

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
№1	P-10	木材（カシ）	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※ AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法

表２　測定結果

試料名	測定№ (Beta-)	^{14}C年代[1] (年 BP)	δ^{13}C[2] (‰)	補正 ^{14}C年代[3] (年 BP)	暦年代（西暦）[4]	
№1	239811	2200±40	−27.6	2160±40	交点：cal	BC 200
					1σ：cal	BC 350～300,
					cal	BC 210～170
					2σ：cal	BC 360～90

最新の較正曲線であるIntCal04ではＢＣ24050年までの換算が可能である（樹木年輪データはＢＣ10450年まで）。

暦年代の交点とは、補正^{14}Ｃ年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（68％確率）と２σ（95％確率）は、補正^{14}Ｃ年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

４　所見

ＨＪ第579次調査で出土した柱材について、加速器質量分析法（ＡＭＳ）による放射性炭素年代測定を行った。その結果、2160±40年ＢＰ（２σの暦年代でＢＣ360～90年）の年代値が得られた。

Ⅱ　花粉分析

１　はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

２　試料

分析試料は、縄文時代晩期の土坑ＳＫ07から採取された試料№.１（明黄褐色粘土）、試料№.２（暗褐灰色粘土）、試料№.３（暗灰褐色砂質土）、試料№.４（淡灰色粘土）、試料№.５（暗灰褐色粘土）の５点、奈良時代の素掘り溝ＳＤ116から採取された試料№.１（黄灰色砂質土）、試料№.２（灰色砂質土）、試料№.３（茶褐色砂質土）の３点、奈良時代の素掘溝ＳＤ117から採取された試料№.１（黄褐色粘土）、試料№.２（灰色砂質土（Ｉブロック少量含む））、試料№.３（暗褐色土（Ｉブロック多く含む））の３点の計11点である。

３　方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）0.5％リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎

２）水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去

３）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

４）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す

５）再び氷酢酸を加えて水洗処理

６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

７）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（–）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。またこの処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。（表３・図４）

４　結果

（１）分類群

出現した分類群は、樹木花粉26、樹木花粉と草本花粉を含むもの３、草本花粉12、シダ植物胞子２形態の計41である。これらの学名と和名および粒数を表３に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図１に示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても同定した結果、１分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科–イヌガヤ科–ヒノキ科、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属–アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属–ケヤキ、エノキ属–ムクノキ、サンショウ属、キハダ属、カエデ属、トチノキ、ムクロジ属、ブドウ属、エゴノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科–イラクサ科、マメ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科–ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ノブドウ、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

回虫卵

表３　ＨＪ第579次調査　花粉分析結果

分類群		土坑ＳＫ07					素掘溝ＳＤ116			素掘溝ＳＤ117		
学名	和名	№1	№2	№3	№4	№5	№1	№2	№3	№1	№2	№3
Arboreal pollen	樹木花粉											
Podocarpus	マキ属				1	1						
Abies	モミ属		2		11			3				
Tsuga	ツガ属		2	1	2	4		5	1			
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属		2	1	1			2				
Cryptomeria japonica	スギ		9		8			8				
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ				1	1		1				
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科		4		4	4		6	2			
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ				1			1				
Alnus	ハンノキ属		2		2	2						
Betula	カバノキ属							6	1			
Corylus	ハシバミ属		1	1	1							
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属－アサダ		3		5	2		3	1			
Castanea crenata	クリ		1		4	2						
Castanopsis	シイ属		14	1	25	1		6	1			
Fagus	ブナ属		2									
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属		17	11	45	44		30	1			
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属		206	20	440	80	1	37	1			
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属－ケヤキ		2		2							
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属－ムクノキ		20	1	30	5						
Zanthoxylum	サンショウ属			1								
Phellodendron	キハダ属				1							
Acer	カエデ属		4		3							
Aesculus turbinata	トチノキ		9		15	4						
Sapindus	ムクロジ属		9	1	3							
Vitis	ブドウ属		1									
Styrax	エゴノキ属		1			1						
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉											
Moraceae-Urticaceae	クワ科－イラクサ科		3			1						
Leguminosae	マメ科		1									
Araliaceae	ウコギ科		1									
Nonarboreal pollen	草本花粉											
Gramineae	イネ科		9	1	16	13		70	19			
Cyperaceae	カヤツリグサ科				2			6	2			
Polygonum	タデ属				1	3						
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節							2				
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科		1		1			6	2			
Caryophyllaceae	ナデシコ科							1				
Cruciferae	アブラナ科				1			1				1
Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ		1									
Apioideae	セリ亜科		2	1	6	21		2				
Lactucoideae	タンポポ亜科							1	2			
Asteroideae	キク亜科							3				
Artemisia	ヨモギ属		5	1	4	6		25	7			
Fern spore	シダ植物胞子											
Monolate type spore	単条溝胞子		17	38	12	111		20	4			
Trilate type spore	三条溝胞子		3	6	2	17		4	2			
Arboreal pollen	樹木花粉	0	311	38	605	151	1	108	8	0	0	0
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	5	0	0	1	0	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	18	3	31	43	0	117	32	0	0	1
Total pollen	花粉総数	0	334	41	636	195	1	225	40	0	0	1
Pollen frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の花粉密度	0.0	2.8×10^3	3.7×10^2	1.7×10^5	3.4×10^3	1.2×10	1.2×10^3	2.8×10^2	0.0	0.0	0.6×10
Unknown pollen	未同定花粉	0	24	12	27	23	1	20	6	0	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	0	20	44	14	128	0	24	6	0	0	0
Helminth eggs	寄生虫卵											
Ascaris(lumbricoides)	回虫卵						1					
Total	計	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
Helminth eggs frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の寄生虫卵密度	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6×10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(++)	(+)	(-)	(+)

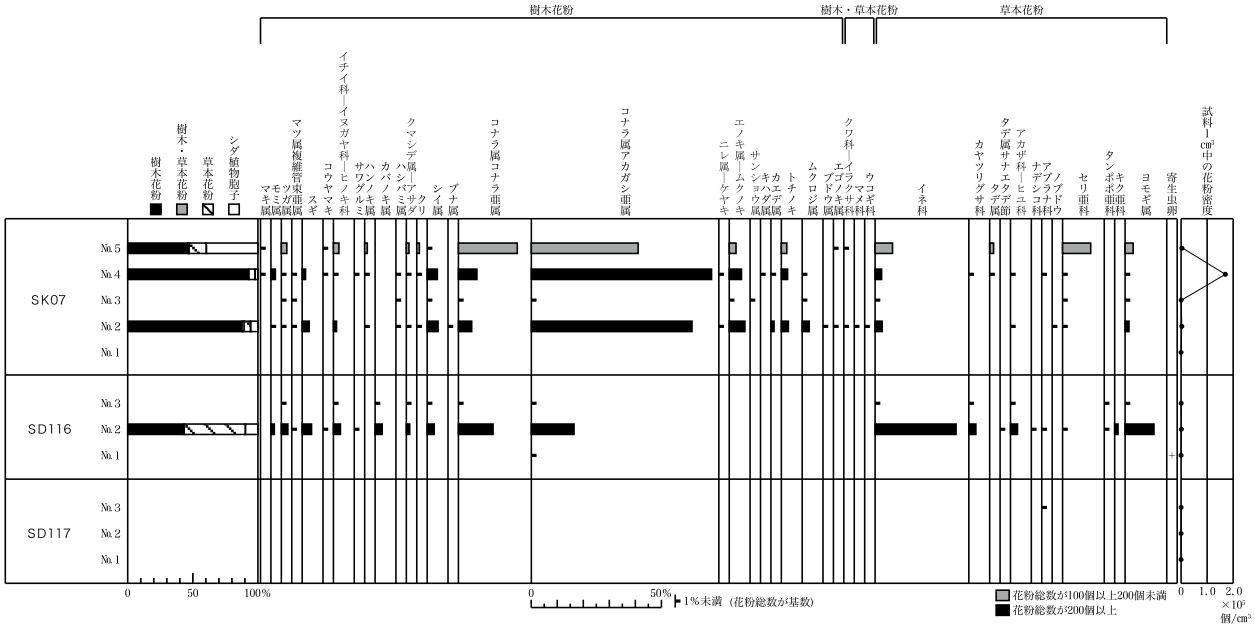


図１　ＨＪ第579次調査　花粉ダイヤグラム

（２）花粉群集の特徴

１）土坑ＳＫ07　縄文時代晩期（試料№.１～試料№.５）

下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。（図１）

試料№.１では花粉密度が極めて低く、検出されなかった。

試料№.２では樹木花粉の占める割合が極めて高い。コナラ属アカガシ亜属が卓越し、エノキ属－ムクノキ、コナラ属コナラ亜属、シイ属、スギ、トチノキ、ムクロジ属などが伴われる。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属などがわずかに出現する。

試料№.３では花粉密度が低く、ほとんど検出されなくなる。

試料№.４では花粉密度が極めて高くなり、構成、組成ともに試料№.２と類似した傾向を示す。樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属が卓越し、コナラ属コナラ亜属、エノキ属－ムクノキ、シイ属などが伴われる。草本花粉では、イネ科が主に出現する。

試料№.５では花粉密度が再び低くなり、樹木花粉の占める割合が半減し、シダ植物胞子の占める割合が約40％になる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が比較的多い。草本花粉では、セリ亜科、イネ科、ヨモギ属、タデ属が低率に出現する。

２）素掘溝ＳＤ116　奈良時代（試料№.１～試料№.３）

下位より花粉構成と花粉組成変化の特徴を記載する。

試料№.１では花粉密度が低く、樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属、回虫卵がわずかに出現する。

試料№.２では花粉密度がわずかに高くなり、樹木花粉より草本花粉の占める割合がほぼ同じで、草本花粉では、イネ科を主に、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属がやや多く、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、カバノキ属、シイ属、ツガ属、モミ属、クマシデ属－アサダなどが低率に出現する。

試料№.３では、花粉構成と花粉組成は下位と類似するが、花粉密度が低い。

３）素掘溝ＳＤ117　奈良時代（試料№.１～試料№.３）

いずれの試料も花粉密度が極めて低く、ほとんど検出されなかった。

５　花粉分析から推定される植生と環境

１）土坑ＳＫ07　縄文時代晩期（試料№.１～試料№.５）

試料№.１、試料№.３では花粉密度が極めて低く、堆積速度が速かった可能性が考えられるが、№.２と№.４では、コナラ属アカガシ亜属が卓越することから、土坑ＳＫ07周辺にはカシ林が分布し、エノキ属－ムクノキ、コナラ属コナラ亜属、シイ属、スギ、トチノキ、ムクロジ属などが森林の構成要素であった。林縁ないし土坑の周囲にイネ科、ヨモギ属などが生育していたと思われる。

№.５では、樹木が多く、コナラ属アカガシ亜属のカシ林が多いが、コナラ属コナラ亜属がやや多くなり、二次林性のコナラやクヌギが増加した。草本もやや増加し、シダ植物、セリ亜科、イネ科、ヨモギ属が生育していた。

２）素掘溝ＳＤ116　奈良時代（試料№.１～試料№.３）

いずれの試料も花粉密度が低く、花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥あるいは乾湿を繰り返すような堆積環境が考えられ、素掘り溝SD207は常時滞水する

ような溝ではなかったと考えられる。周辺には、イネ科やヨモギ属のような日当たりの良い乾燥した環境を好む草本が生育し、他にアカザ科－ヒユ科なども生育していた。またわずかではあるが回虫卵が検出され、近接して生活域が分布していたか、人糞施肥などによる汚染が考えられる。周辺および地域的に、コナラ属アカガシ亜属の照葉樹、コナラ属コナラ亜属の二次林性の落葉広葉樹を主にスギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ツガ属などの針葉樹が森林として生育していた。

３）素掘溝ＳＤ117　奈良時代（試料№.１～試料№.３）

いずれの試料も花粉密度が極めて低く、花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥あるいは乾湿を繰り返すような堆積環境であったか、堆積速度が速かった可能性が考えられる。

Ⅲ　種実同定

１　はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

２　試料

試料は、ＨＪ第579次調査より検出された土坑ＳＫ07底（縄文時代晩期）出土の２点、土坑ＳＫ04底面出土の１点の計３点である。すべて水洗選別済みであった。（図２）

３　方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

４　結果

（１）分類群

〔樹木〕

コナラ属　*Quercus*　堅果片　ブナ科

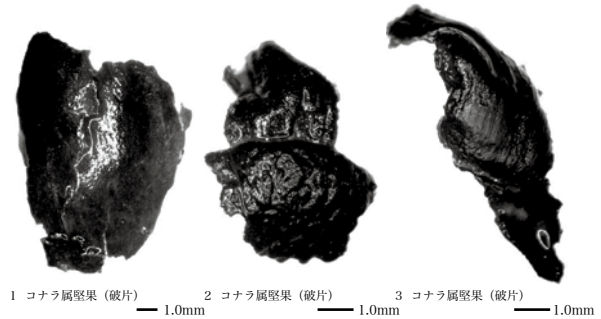


図２　ＨＪ第579次調査の種実

茶褐色で楕円形を呈し、表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し破片のため、属レベルの同定までである。

（２）種実群集の特徴

１）土坑ＳＫ07底（縄文時代晩期）

検出されなかった。

２）土坑ＳＫ07底出土（縄文時代晩期）

コナラ属堅果片５が検出された。

３）土坑ＳＫ04底面

コナラ属堅果片２が検出された。

Ⅳ　樹種同定

１　はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２　試料

試料は、ＨＪ第579次調査において検出された弥生時代の柱穴Ｐ10より出土した柱材１点である。

３　方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４　結果

柱材（弥生時代の柱穴、Ｐ10）は　コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　であった。以下に同定の根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す。（図３）

・コナラ属アカガシ亜属

Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科

横断面：中型から大型の道管が、１～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は

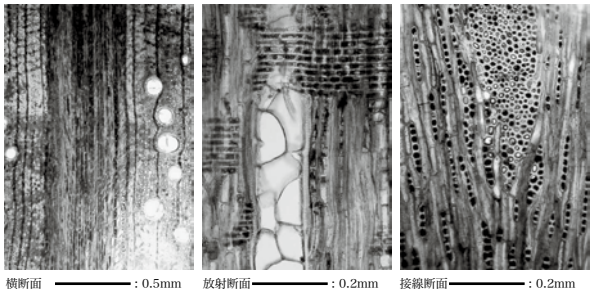


図３　ＨＪ第579次調査の木材樹種

単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ 30 m、径 1.5 m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性が強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

Ⅴ　まとめ

（1）縄文時代晩期・弥生時代前期

土坑ＳＫ 07 の花粉分析結果から、周辺にはカシ林が分布し、コナラ属コナラ亜属、シイ属、スギなども構成要素であり、エノキ属－ムクノキ、トチノキ、ムクロジ属は谷や河川沿いに生育していた。また、柱材（弥生時代の柱穴、Ｐ 10）は　コナラ属アカガシ亜属であった。土坑ＳＫ 07 や土坑ＳＫ 04 からは、破片で少量であるがコナラ属堅果片が検出され、近隣でのアカガシ亜属などのコナラ属の生育、あるいはこれら土坑が貯蔵穴である可能性が考えられる。

最上部（№.5）では、二次林性のコナラ属コナラ亜属（コナラやクヌギなど）が増加し、シダ植物、セリ亜科、イネ科、ヨモギ属の草本もやや増加する。

（2）奈良時代

素掘溝ＳＤ 116、素掘溝ＳＤ 117 は、花粉密度が低く、常時滞水するような溝ではなく、ある時期もしくは一時的に流れがあるないしは滞水する溝であったと考えられる。素掘溝ＳＤ 116 の分析結果からみて、周辺にはイネ科やヨモギ属を主にアカザ科 - ヒユ科の草本が生育し、日当たりの良い乾燥した環境であったと推定される。また、わずかに回虫卵が検出され、近接して生活域が分布していた。周辺および地域的にはコナラ属アカガシ亜属の照葉樹とコナラ属コナラ亜属の二次林性の落葉広葉樹を主にスギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ツガ属などの針葉樹の森林が分布していた。

参考文献

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.

尾嵜大真（2005）INTCAL98 から IntCal04 へ．学術創成研究費弥生農耕の起源と東アジア№.3－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－，p.14–15.

中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p.1–36.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248–262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82–110.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として . 第四紀研究 ,13,p.187–193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第 10 号，p.21–30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集，91p.

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.

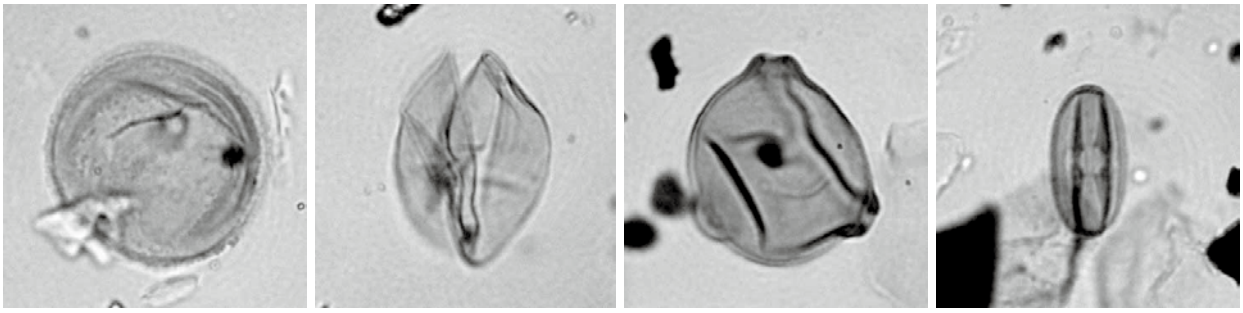
笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣　出版，p.131–139.

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20–48.

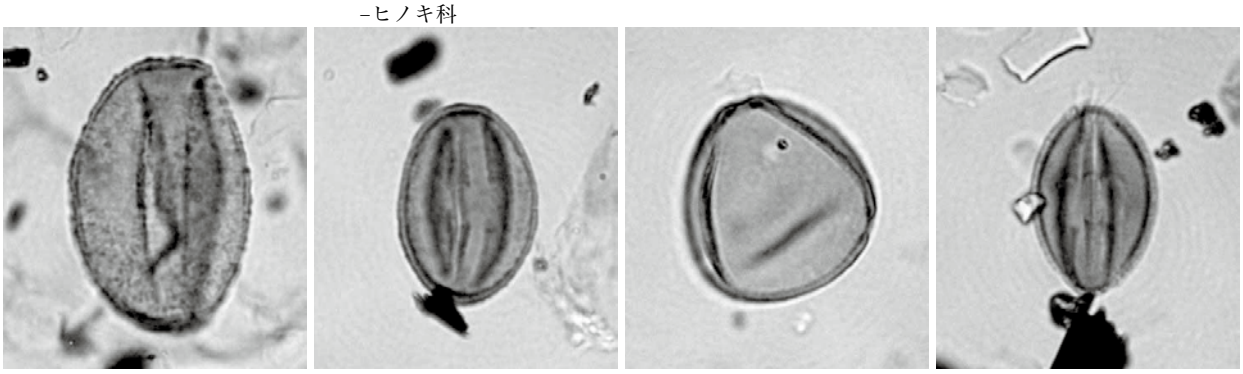
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49–100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，　p.296

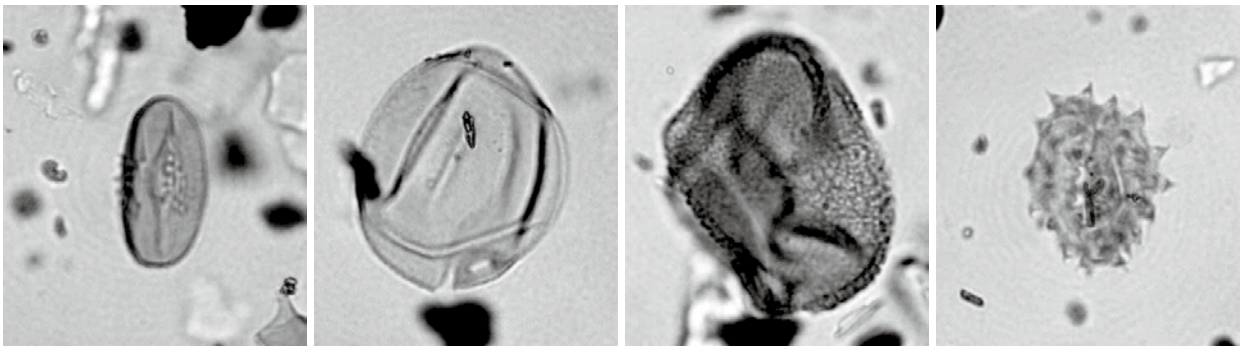
（株式会社　古環境研究所）



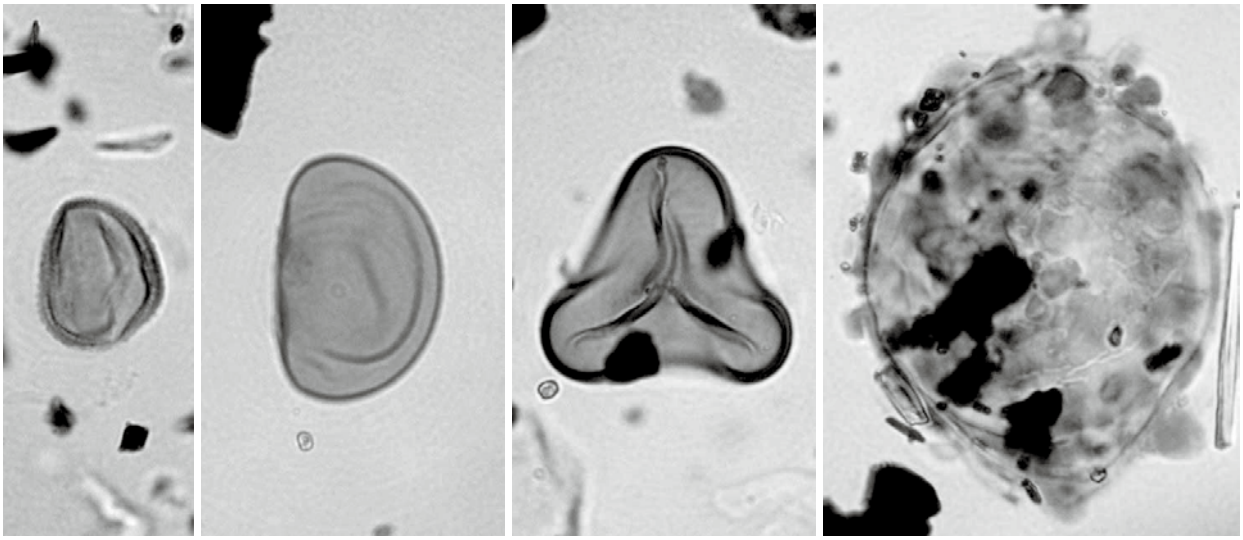
1　スギ　　2　イチイ科–イヌガヤ科–ヒノキ科　　3　カバノキ属　　4　シイ属



5　コナラ属コナラ亜属　　6　コナラ属アカガシ亜属　　7　エノキ属 - ムクノキ　　8　カエデ属



9　トチノキ　　10　イネ科　　11　タデ属　　12　キク亜科



13　ヨモギ属　　14　シダ植物単条溝胞子　　15　シダ植物三条溝胞子　　16　回虫卵

10 μm

図４　ＨＪ第 579 次調査の花粉・胞子・寄生虫卵顕微鏡写真

2. 平城京跡第 608 次調査における自然科学分析

Ⅰ　種実同定

1　はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組織を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また、出土下単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

2　試料

試料はＣ発掘区のＳＥ 503 枠内より出土した試料１点である。

3　方法

試料に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行った。

１）試料 25㎤に水を加え放置し、泥化を行う。

２）攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mm の篩で水洗選別を行う。

３）残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定係数を行う。

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

4　結果

（1）分類群

草本５分類群が同定される。学名、和名および粒数を表１に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記載する。（表１・図１）

〔草本〕

エノコログサ属　*Setaria* Beauv.　穎（破片）イネ科

穎は茶褐色で楕円形を呈す。表面には横方向の微細な隆起がある。

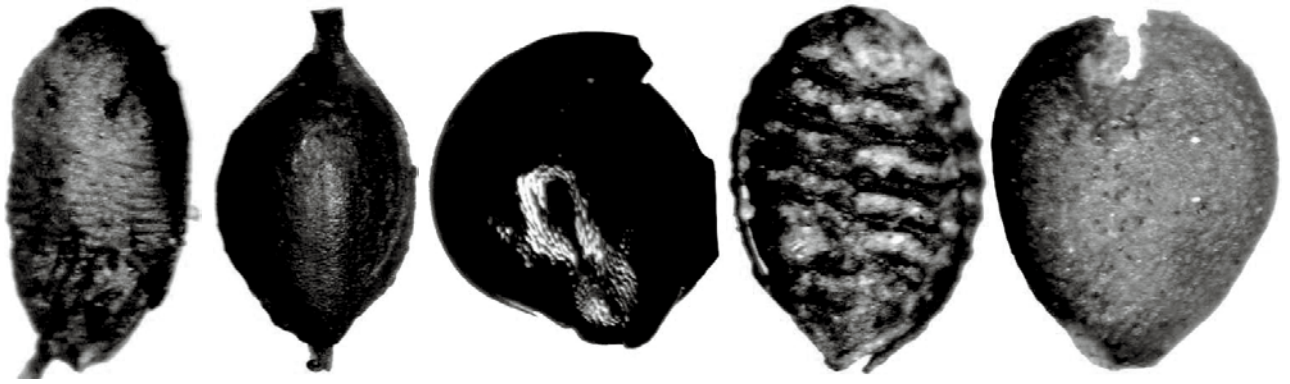
スゲ属　*Carex*　果実　カヤツリグサ科

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

ヒユ属　*Amaranthus*　種子　（破片）　ヒユ科

表１　ＨＪ第 608 次調査における種実同定結果

分類群		部位	ＳＥ 503 枠内
学名	和名		
Herb	草本		
Setaria Beauv.	エノコログサ属	穎（破片）	1
Carex	スゲ属	果実	2
Amaranthus	ヒユ属	種子（破片）	2
Oxalis	カタバミ属	種子	1
Solanum nigrum L.	イヌホウズキ	種子	1
Total	合計		7



1　エノコログサ属　穎　0.5mm
2　スゲ属　果実　0.5mm
3　ヒユ属　種子　0.5mm
4　カタバミ属　種子　0.5mm
5　イヌホウズキ　種子　0.5mm

図１　ＨＪ第 608 次調査　種実顕微鏡写真

黒色で光沢がある。円形を呈し、一カ所が切れ込みヘソがある。断面は両凸レンズ形である。

カタバミ属　*Oxalis*　種子　カタバミ科

茶褐色で楕円形を呈し、上端がとがる。両面には横方向に６～８本の隆起が走る。

イヌホウズキ　*Solanum nigrum* L.　種子　ナス科

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだヘソがある。表面には網目模様がある。

５. 考察

同定の結果、平城京跡第 608 次調査のＣ発掘区のＳＥ 503 枠内出土の種実はすべて草本であり、エノコログサ属、スゲ属、ヒユ属、カタバミ属、イヌホウズキが検出された。エノコログサ属は水生植物、水田雑草、畑作雑草、人里植物と多様に育成し、スゲ属は水生３植物ないし水田雑草を含む。ヒユ属、カタバミ属、イヌホウズキは乾燥した畑作雑草ないし路傍などの人里植物である。以上のことから、遺構周辺に人里植物や農耕雑草が生育し、集落や農耕地が分布していたと考えられる。

参考文献
笠原安夫（1985）日本雑草図説 , 養賢堂 ,494p.
笠原安夫（1985）作物及び田畑雑草種類 . 弥生文化の研究第２巻生業 , 雄山閣出版、p.131-139

（株式会社　古環境研究所）

3. 帯解黄金塚古墳の石材の石種

Ⅰ　はじめに

奈良市田中町にある帯解黄金塚古墳の調査により墳丘の周囲の石敷を検出した。観察地点は黄金塚古墳の第２次調査のＡ～Ｅ発掘区である。その石材の石種を裸眼で観察した。観察結果について以下に述べる。

Ⅱ　石種の特徴と石材の採石地

葺石と敷石に使用されている石材の石種は，柘榴石アプライト，ペグマタイト，中粒黒雲母花崗岩，斑状黒雲母花崗岩，片麻状細粒黒雲母花崗岩，中粒閃緑岩，斑糲岩，片麻状珪質岩，流紋岩，流紋岩質溶結凝灰岩，石英，チャートである。流紋岩質溶結凝灰岩は板状節理が顕著な割り石であるが，他の石種の石材は川原石様である。石種の特徴と推定される採石地について述べる。

柘榴石アプライト　色は淡赤色で，粒形が亜円～円である。石英・長石・黒雲母・柘榴石が噛み合っている。石英は無色透明で，粒径が１～1.5㎜，量が僅かである。長石は灰白色で，粒径が２～６㎜，量が非常に多い。黒雲母は黒色，板状で，粒径が１～1.5㎜，量がごく僅かである。柘榴石は赤茶色，粒状で，粒径が１～４㎜，量が中である。

このような岩相を示す石は中畑から高峰にかけての付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。菩提仙川の川原石にもみられることから，この川の石を採石されたと推定される。

ペグマタイト　色は灰白色で，粒形が亜角～亜円である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明で，粒径が３～４㎜，量が中である。長石は灰白色で，粒径が２～15㎜，量が非常に多い。黒雲母は黒色，板状で，粒径が１～1.5㎜，量がごくごく僅かである。

このような岩相を示す石は北椿尾から興隆寺にかけての付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。菩提仙川の川原石にもみられることから，この川の石を採石されたと推定される。

中粒黒雲母花崗岩　色は灰白色で，粒形が亜円～円である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明で，粒径が２～３㎜，量が中である。長石は灰白色で，粒径が２～４㎜，量が非常に多い。黒雲母は黒色，板状で，粒径が0.5～１㎜，量がごく僅かである。

このような岩相を示す石は中畑から天理市岩室にかけての付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。菩提仙川の川原石にもみられることから，この川の石を採石されたと推定される。

斑状黒雲母花崗岩　色は灰色で，粒形が亜円～円である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は灰色透明で，斑晶と基質をなすものがある。斑晶の石英は，粒径が８～30㎜，量が中である。基質の石英は，粒径が２～４㎜，量が中である。長石は茶灰色で，斑晶と基質をなすものとがある。斑晶の長石は，粒径が４～６㎜，量が中である。基質の長石は，粒径が１～３㎜，量が中である。黒雲母は黒色，板状で，粒径が１～２㎜，量がごく僅かである。

このような岩相を示す石は高樋から正暦寺北方にかけての流域に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部にみられる。菩提仙川の川原石にもみられることから，この川の石を採石されたと推定される。

片麻状細粒黒雲母花崗岩　色は暗茶灰色で，粒形が亜

表1　黄金塚古墳の葺石・敷石の石種と粒径

石種	C発掘区 (cm)					合計	A発掘区 (cm)							合計	B発掘区 (cm)							合計
	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29		5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39		5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	
柘榴石アプライト	1	1				2		1	3	1				5			5					5
ペグマタイト		5	4			9											2	1	1			4
中粒黒雲母花崗岩	3	3	3	1	2	12		9	24	12	3			48	6	23	36	13	4	2	1	85
斑状黒雲母花崗岩		2			1	3	4	8	12	5		1		30	1	8	14	1	2			26
片麻状細粒黒雲母花崗岩							2	4	6	3	1			16	4	10	17	3	2		1	37
中粒閃緑岩		1				1		1						1			1					1
斑糲岩	4	12	12	4	2	34	4	21	49	14			1	89	12	29	55	20	1	1		118
片麻状珪質岩	4	8	2	2		16	2	7	20	4				33	8	22	12	5	1			48
流紋岩																		1				1
流紋岩質溶結凝灰岩		1				1																
石　英		1				1	1	1						2			1					1
チャート	7		1			8	3	1			1			5	1	2	3	1				7
合　計	19	34	22	7	5	87	16	53	114	39	5	1	1	229	32	94	146	45	11	3	2	333

石種	D発掘区 (cm)											合計	E発掘区 (cm)								合計
	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	55~59		5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	
柘榴石アプライト		1										1									
ペグマタイト																					
中粒黒雲母花崗岩				1	1							2		1		4					5
斑状黒雲母花崗岩				1	3							4			1	2	1				4
片麻状細粒黒雲母花崗岩					1	1	1					3			2	2					4
中粒閃緑岩																					
斑糲岩		1		1							1	3		1	3	5	2	1	1	1	14
片麻状珪質岩					1							1	1	2	2	2					7
流紋岩		1										1									
流紋岩質溶結凝灰岩		1			2							3									
石　英																					
チャート	3											3	1		1						2
合　計	3	4		3	8	1	1				1	21	2	4	9	15	3	1	1	1	36

石種	調査した石材 (cm)											合計
	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	55~59	
柘榴石アプライト	1	3	8	1								13
ペグマタイト		5	6	1	1							13
中粒黒雲母花崗岩	9	36	63	31	10	2	1					152
斑状黒雲母花崗岩	5	18	27	9	7	1						67
片麻状細粒黒雲母花崗岩	6	14	29	8	4	1	2					64
中粒閃緑岩		2	1									3
斑糲岩	20	64	119	44	5	2	2	1			1	258
片麻状珪質岩	15	39	36	13	2							105
流紋岩		1		1								2
流紋岩質溶結凝灰岩		2			2							4
石　英	1	3										4
チャート	15	3	5	1	1							25
合　計	72	190	294	109	32	6	5	1			1	710

角～亜円である。細い縞状をなす。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は灰色透明で，粒径が0.5㎜，量が中である。長石は灰白色で，粒径が0.5㎜，量が非常に多い。黒雲母は黒色，板状で，粒径が0.5～1㎜，量が僅かである。

このような岩相を示す石は高槻から高円山にかけての付近に分布する片麻状黒雲母花崗岩の岩相の一部にみられる。菩提仙川の川原石にみられることから，この川の石を採石されたと推定される。

中粒閃緑岩　色は灰色で，粒形が亜円である。長石と角閃石が噛み合っている。長石は灰白色，粒径が2～4㎜，量が非常に多い。角閃石は黒色，粒状で，粒径が2～4㎜，量が中である。

このような岩相を示す石は奈良市の北椿尾から五ケ谷にかけての付近にレンズ状をなして分布する閃緑岩の岩相の一部に似ている。また，当古墳の南側にある菩提仙川の川原には同様の礫がみられる。

斑糲岩　色は暗灰緑色で，粒形が亜角～円である。長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色で，粒径が1～4㎜，量が中である。角閃石は黒色で，粒径が0.5～2㎜，量が多い。輝石は暗緑色，粒径が1～2㎜，量が中である。また，角閃石と輝石が集合して5～10㎜の球状の塊をなす場合が多い。

このような岩相を示す石は椿尾から中畑にかけての付近に分布する斑糲岩の岩相の一部に似ている。菩提仙川の川原石にもみられることから，この川の石を採石されたと推定される。

片麻状珪質岩　色は暗灰色，暗茶灰色などを呈し，ガラス質で，片麻状を示す。片麻状構造が顕著な場合，やや粒状の場合，ガラス質の場合などがある。変質したチャートと識別されている場合がある。

このような岩相を示す石は高槻から正暦寺北方にかけ

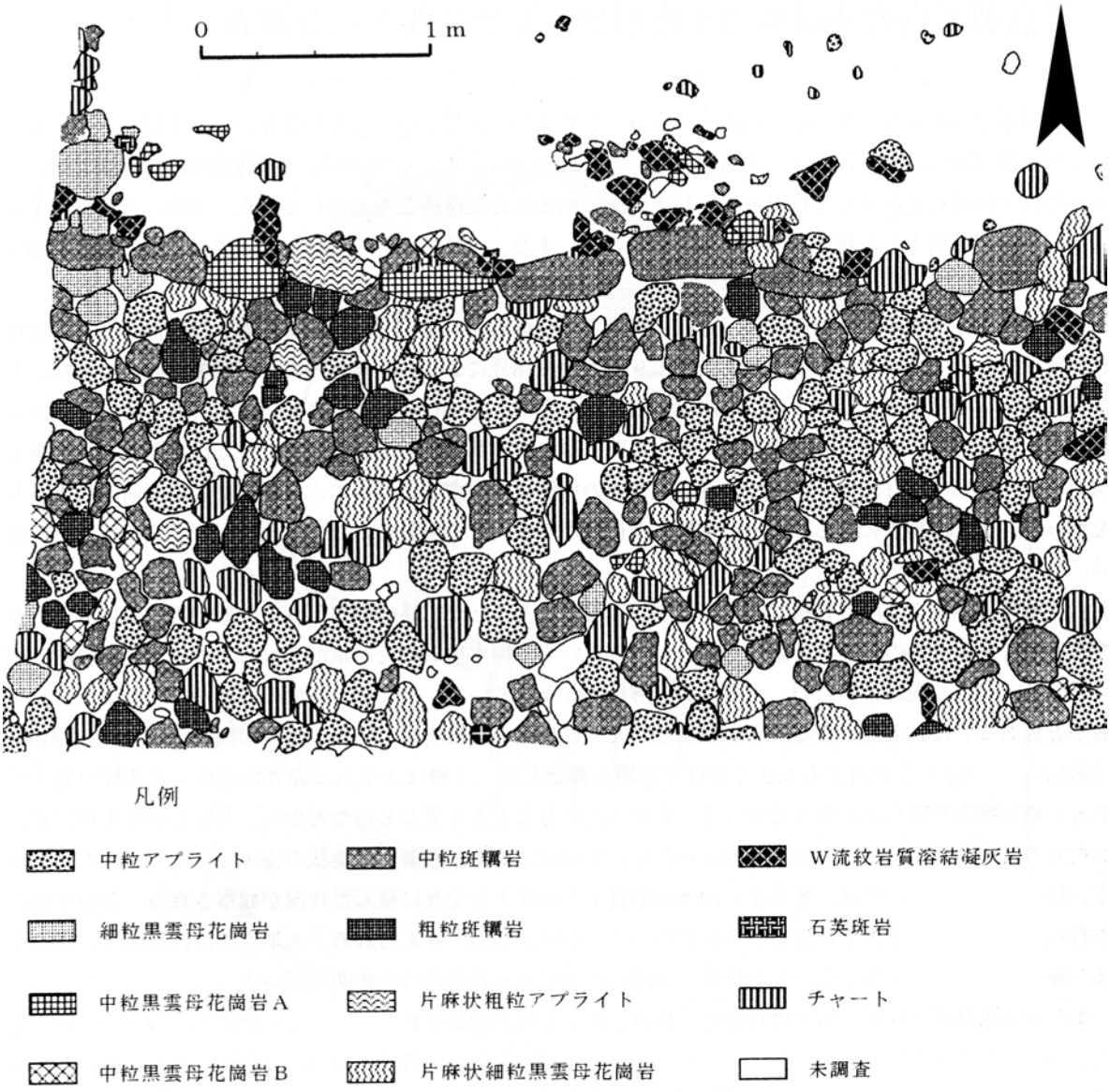


図1　黄金塚陵墓参考地　石列・石敷石種図　(1/30『書陵部紀要　第57号』を一部加筆)

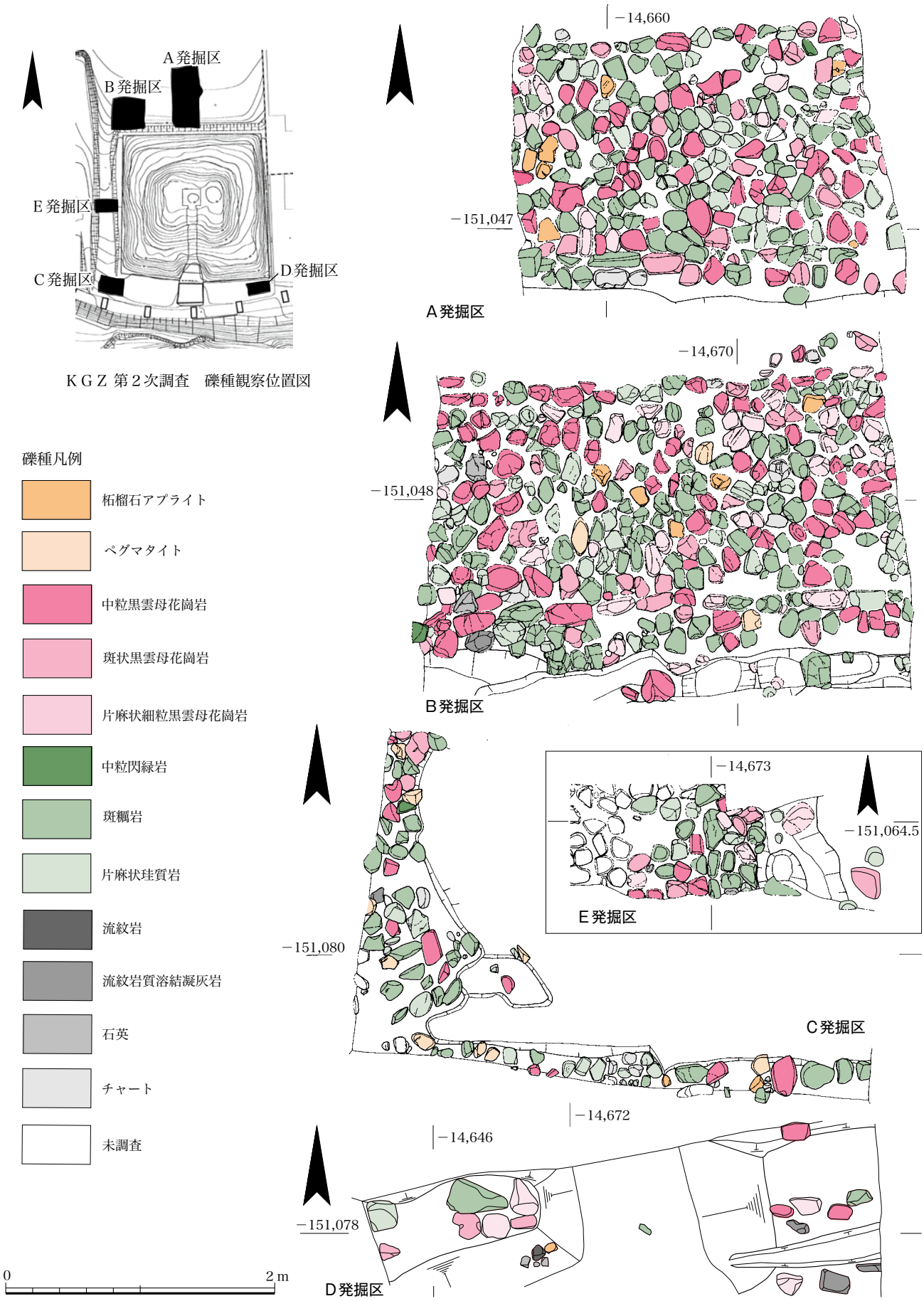


図２　帯解黄金塚古墳　石敷礫種分布図（1/40）

ての付近に分布する片麻状黒雲母花崗岩の岩相の一部にみられる。菩提仙川の川原石にもみられることから，この川の石を採石されたと推定される。

流紋岩　色は茶色で，粒形が円である。暗灰色でレンズ状をなす部分が縞状に入る。石基はガラス質，やや粒状である。

このような岩相を示す石は奈良県には分布しない。しかし，奈良付近の大阪層群の礫層の礫には稀にみられる。円礫であることから，当古墳の基盤をなす第四紀層や河川の礫に稀にみられる。菩提仙川か礫層から採石されたと推定される。

流紋岩質溶結凝灰岩　色は赤茶色で，板状節理が顕著である。割り石である。顕著な溶結を示す。構成粒は石英，長石，黒雲母である。石英は無色透明，粒径が２～４㎜，量が中である。複六角錐あるいはその一部が認められるものがある。長石は灰白色透明，短柱状で，粒径が２～４㎜，量が中である。黒雲母は黒色，板状で，六角形をなすものが多く，粒径が１～２㎜，量が僅かである。基質はガラス質である。

このような岩相を示す石は宇陀市付近に広く分布する室生火山岩の岩相の一部に似ている。採石地としては室生ダム北方付近が推定される。

石英　色は灰白色で，粒形が亜角である。ペグマタイトに伴う石英のようである。

このような岩相を示す石は椿尾から中畑にかけての付近にレンズ状に分布するペグマタイトの岩相の一部に似ている。菩提仙川の川原石にもみられることから，この川の石を採石されたと推定される。

チャート　色は青灰色，灰色，赤茶色と様々である。粒形が亜円～円である。

このような石は当古墳の付近の礫層の礫や菩提仙川の川原石にみられる。

以上のように，流紋岩質溶結凝灰岩以外の葺石や敷石の石材は，この古墳の近くを流れている菩提仙川の川原で採石することができる。流紋岩質溶結凝灰岩は室生ダムの北方付近が採石地と推定される。

Ⅲ　石材の使用傾向

観察された石材は前述のように流紋岩質溶結凝灰岩のような割り石と斑糲岩などのような川原石様のものとがある。調査個数710個における石材の長径，石種構成について述べる。また，南方部中央の調査結果と石材の使用傾向についての比較を行う。(表１・図２)

石材の長径は，５～９㎝が約10％，10～14㎝が約27％，15～19㎝が約41％，20～24㎝が約15％，25～29㎝が約５％，30㎝以上のものが13個である。長径が10～20㎝のものが約７割を占め，10～24㎝のものでは約８割５分を占めるようになる。石材の長径が15～19㎝のものを中心として意図的に採石されていると言える。

石種構成は，斑糲岩が約36％，中粒黒雲母花崗岩が約21％，片麻状珪質岩が約14％，斑状黒雲母花崗岩が約９％，片麻状細粒黒雲母花崗岩が約９％，チャートが約４％，柘榴石アプライトが約２％，ペグマタイトが約２％，中粒閃緑岩・流紋岩・流紋岩質溶結凝灰岩・石英が僅か13個である。現在，石材の採石地と推定される菩提仙川の川原石に３割を超すような斑糲岩がみられない。しかし，この菩提仙川から運ばれたと推定される斑糲岩が，飛鳥京跡の調査で出土している溝や建物の周囲に敷かれている石材，苑池遺構の池の石材，蘇我入鹿の館跡と新聞紙上で騒がれた調査地の石垣の石材，酒船石遺跡の上層の敷石などに使われていることからすれば，古墳の造営当時には菩提仙川に斑糲岩が多く産していたのかも知れない。

宮内庁が調査をした当古墳の入口付近にあたる部分の石敷の石材（図１　奥田2005）と比較する。宮内庁の調査では流紋岩質溶結凝灰岩の割り石と斑糲岩等の川原石が出土している。また，石室の石材には榛原石が使用されているとされている。この榛原石は今回出土している流紋岩質溶結凝灰岩に相当する石材である。今回の調査ではＡ・Ｂ発掘区やＥ発掘区では流紋岩質溶結凝灰岩が使用されておらず，Ｃ・Ｄ発掘区で確認される。

石材の長径は，調査個数が401個において，４～９㎝が約４％，粒径は10～19㎝が約67％，20～29㎝が約29％，30～39㎝が約１％である。また，石種構成は，斑糲岩が約38％，アプライトが約28％，片麻状細粒黒雲母花崗岩が約16％，チャートが約10％，細粒黒雲母花崗岩が約３％，中粒黒雲母花崗岩が約３％，片麻状アプライト・流紋岩質溶結凝灰岩・石英が僅かである。

石材の粒径からみれば，10～19㎝の粒形を示すものは約67％で，ほぼ同じ率を示すが，20～29㎝のものが約29％と正面中央では多く使用されている。石種構成では暗緑色を示す斑糲岩が約38％で，ほぼ同じ率を示すが，白色を示すアプライトが約28％と多く，今回の調査結果と石種構成が異なる。　（奥田　尚）

参考文献
奥田　尚（2005）黄金塚陵墓参考地の石材の石種とその採石地．書陵部紀要　第57号，pp. 68～71．宮内庁書陵部．

ＫＧＺ第２次調査　Ａ発掘区　石敷（南から）

ＫＧＺ第２次調査　Ｂ発掘区　石敷（南から）

ＫＧＺ第２次調査　Ｃ発掘区　石敷（南から）

ＫＧＺ第２次調査　Ｅ発掘区　石敷（北から）

第　3　章　　平成 20 年度保存活用事業報告

平成 20（2008）年度埋蔵文化財保存活用事業報告

1．展示

A　常設展示

対　　象：一般

会　　期：平成 20 年 4 月 1 日（火）～6 月 24 日（火）(58 日間)

場　　所：埋蔵文化財調査センター展示室

趣　　旨：奈良市の歴史を埋蔵文化財の展示を通じて知ってもらう。

内　　容：旧石器時代～江戸時代の各時代の埋蔵文化財を遺跡ごとに展示。

観覧者数：203 名

B　第 26 回秋季特別展・世界遺産登録 10 周年記念特別展「寧楽地寶－奈良市発掘資料選－」の開催

対　　象：一般

会　　期：平成 20 年 10 月 27 日（月）～平成 21 年 3 月 31 日（火）(105 日間)

場　　所：埋蔵文化財調査センター展示室・ロビー

趣　　旨：奈良市教育委員会が行った 30 年間の調査で出土した数多くの考古遺物の中から代表的な資料を選んで展示、奈良市の考古遺物の特質を概観できるようにした。

観覧者数：1,282 名

そ の 他：・案内を「しみんだより」10 月号・奈良市役所のホームページに掲載。
・宣伝用のポスター・チラシの作成・配布。
・展示解説用パンフレットの作成。
・事前に報道機関に資料を配布。
・埋蔵文化財講演会を実施。
11 月 29 日（土）13：00 ～ 16：30
参加者 46 名
会　場：埋蔵文化財調査センター講座室
巽淳一郎「平城京の焼物－施釉陶器を中心にして」
森下浩行「古墳時代の遺物」
原田憲二郎「奈良市内出土瓦あれこれ」

C　発掘調査速報展示（2回）の開催

対　　象：一般

場　　所：埋蔵文化財調査センター展示室前ロビー

趣　　旨：ゼニヤクボ遺跡の調査成果初公開（夏季）・平成 20 年度（春季）に行った発掘調査とその成果を展示。

①夏季速報展示

会　　期：平成 20 年 7 月 7 日（月）～8 月 29 日（金）(39 日間)

内　　容：新たに奈良市の遺跡となった旧都祁村のゼニヤクボ遺跡の発掘調査成果を展示。
主な展示遺物–縄文時代土器・石器、弥生時代土器、古墳時代土師器

観覧者数：436 名

そ の 他：・案内を「しみんだより」7 月号・奈良市役所のホームページに掲載。
・宣伝用ポスター・チラシの作成・配布。
・展示リーフレットの作成。
・事前に報道機関に資料を配布。

②春季速報展示

会　　期：平成 21 年 3 月 2 日（月）～3 月 31 日（火）(22 日間)

内　　容：平城京跡（左京五条四坊九・十坪）の発掘調査速報展示。主な展示遺物–奈良時代の埋納遺構の土器、播磨産の軒瓦、宝珠硯

観覧者数：315 名

そ の 他：・案内を「しみんだより」3 月号・奈良市役所のホームページに掲載。
・宣伝用ポスター・チラシの作成・配布。
・展示リーフレットの作成。
・事前に報道機関に資料を配布。

D　年間観覧者数

2,370 名（247 日間）。累計 15,654 名。月平均 197 名。月、男女、居住地、年齢別は表 1 のとおり。

表 1

月　　別：

4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
48	115	51	183	269	308	309	403	119	120	174	271

住居地別：

奈良市内	奈良県内	近畿圏内	近畿圏外
143	51	38	13

男 女 別：

男	女
1,638	732

年 齢 別：

～9 歳	10 ～ 19 歳	20 ～ 29 歳	30 ～ 39 歳	40 ～ 49 歳	50 ～ 59 歳	60 ～ 69 歳	70 歳～	学生
2	24	7	11	13	37	87	55	46

2．発掘調査現地見学会の開催
施設見学の受け入れ

A　発掘調査現地見学会の開催

帯解黄金塚古墳の調査（奈良市田中町）

対　　象：地元住民及び一般

期　　日：平成 21 年 2 月 27 日（金）、28 日（土）

会　　場：調査地現地

参加者数：700 名

そ の 他：・奈良市役所のホームページに掲載。

B　埋蔵文化財調査センター施設見学

（1）

対　　象：大安寺西小学校 6 年生　100 名

期　　日：平成 20 年 5 月 9 日（金）

（2）

対　　象：愛知県岡崎市立福岡小学校 6 年生　36 名

期　　日：平成 20 年 10 月 30 日（木）

（3）

対　　象：大安寺西小学校生徒 3 年生　14 名

期　　日：平成 20 年 10 月 31 日（金）

（4）

対　　象：京西中学特別支援学級　8 名

期　　日：平成 21 年 1 月 8 日（木）

（5）

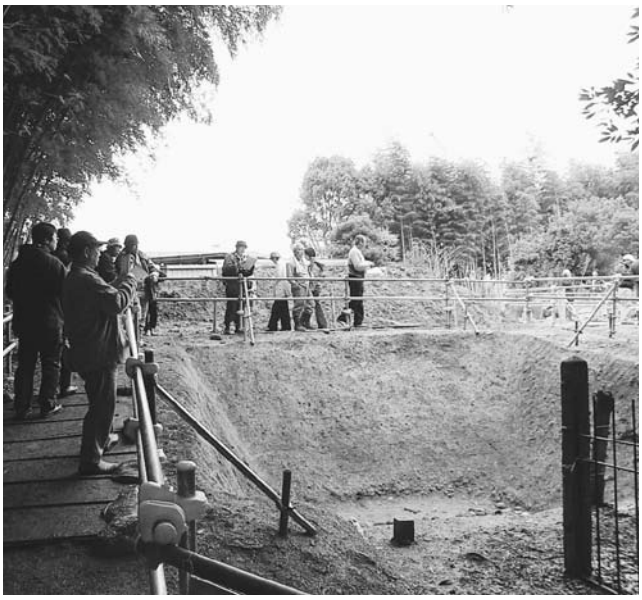
対　　象：奈良日本語センター留学生　6 名

期　　日：平成 21 年 1 月 23 日（金）

（6）

対　　象：奈良市総合福祉センター　20 名

期　　日：平成 21 年 3 月 6 日



帯解黄金塚古墳　発掘調査現地見学会

3．講演会・教室の開催

A 「埋蔵文化財発掘調査報告会」の開催

対　　象：一般

期　　日：平成 21 年 3 月 14 日（土）

内　　容：平成 20 年度に埋蔵文化財調査センターが行った主な発掘調査の報告を行う。

・大木　要「平城京跡（左京五条四坊十坪）の発掘調査」

・中島和彦「平城京跡（左京二条七坊十五坪）の発掘調査」

会　　場：埋蔵文化財調査センター講座室

趣　　旨：平成 20 年度に実施した調査の内容を職員が図や写真などを使用して説明し、どのような成果があったかを知ってもらう。

参加者数：47 名

そ の 他：・募集案内を「しみんだより」2 月号・奈良市役所のホームページに掲載。

・事前に報道機関に資料を配布。

埋蔵文化財発掘調査報告会

B 「夏休み親子考古学体験」の開催

対　　象：小学 4 年生以上の児童とその保護者

期　　日：平成 20 年 8 月 19 日（火）

内　　容：埋蔵文化財調査センターの施設見学後、土器の分類・観察と瓦の拓本を体験する。

会　　場：埋蔵文化財調査センター講座室

趣　　旨：土器の観察や瓦の拓本を遺跡から出土した実物を使って体験してもらい、考古学に親しんでもらう。

参加者数：16 名

そ の 他：・募集案内を「しみんだより」8 月号・奈良市役所のホームページに掲載

夏休み親子考古学体験

4．市民考古サポーター養成講座 Stage 1

対　　象：一般

期　　日：平成20年7月9日（水）～平成21年3月11日（水）　毎月1～2回､全13回（表2）

内　　容：埋蔵文化財調査センターがおこなう発掘調査、出土遺物の整理、展示会などの活動支援ボランティアの養成講座。職員が講師をつとめる講座・実習のプログラムにより、将来の活動に必要な基本的知識・技術を身につける。講座終了後、希望者を「市民考古サポーター」として登録し、奈良市の埋蔵文化財保護を支援していただくとともに楽しみながら学ぶ場を提供する。

募集人員：25名

そ の 他：・案内を「しみんだより」2月号と奈良市役所のホームページに掲載。
・事前に報道機関に資料を配布。
・募集用のチラシを作成・配布。

表2

	日　時	講　座　名
第 1 回	7月　9日	開講式・オリエンテーション 考古学とは何か
第 2 回	7月 16日	石器のはなし・縄文人のくらし
第 3 回	8月 13日	弥生の社会・古墳のはなし
第 4 回	9月　3日	佐紀古墳群を訪ねる（実習）
第 5 回	9月 10日	奈良の都平城京
第 6 回	10月　8日	奈良時代の土器・古代の瓦
第 7 回	10月 15日	平城宮跡を見る（実習）
第 8 回	11月 12日	発掘作業の流れ
第 9 回	11月 26日	発掘現場をみる（実習）
第 10 回	12月 10日	舞台裏をみる（出土品整理作業）
第 11 回	1月 14日	拓本のとり方（実習）
第 12 回	2月 10日	奈良町と中近世の土器・陶磁
第 13 回	3月 11日	土器の分類整理（実習） 閉講式

市民考古サポーター養成講座

5．体験学習・実習の受け入れ

A　博物館実習の受け入れ

対　　象：追手門学院大学学生　2名

期　　日：平成20年10月20日（月）～24日（金）の5日間

内　　容：第26回秋季特別展の展示設営

B　高校体験学習の受け入れ

（1）

対　　象：一条高校人文科学科1年生　40名

期　　日：平成20年9月16日（火）

場　　所：埋蔵文化財調査センター

内　　容：出土遺物の整理実習（洗浄・注記・拓本）

（2）

対　　象：一条高校人文科学科２年生　40 名

期　　日：平成 20 年８月 25 日（月）～ 29 日（金）

場　　所：平城京跡発掘調査現場（奈良市大森町）

内　　容：発掘調査の体験実習

博物館実習

高校体験学習・出土遺物の整理

高校体験学習・発掘現場実習

C　中学校職場体験の受け入れ

（1）

対　　象：青少年指導課（奈良市不登校児童生徒交流事業）３年生　男子２名・女子１名

期　　日：平成 20 年７月 14 日（月）～ 16 日（水）

場　　所：埋蔵文化財調査センター・平城京跡発掘調査現場

内　　容：遺物洗浄・注記・発掘調査体験・拓本

（2）

対　　象：伏見中学校２年生　男子４名・女子１名

期　　日：平成 20 年７月 28 日（月）～ 30 日（水）

場　　所：埋蔵文化財調査センター・平城京跡発掘調査現場

内　　容：遺物洗浄・資料整理・注記・発掘調査体験

（3）

対　　象：春日中学校２年生　男子３名

期　　日：平成 20 年９月９日（火）～ 11 日（木）

場　　所：埋蔵文化財調査センター

内　　容：遺物洗浄・注記・資料整理

（4）

対　　象：都跡中学校２年生　男子３名

期　　日：平成 20 年 11 月 12 日（水）～ 14 日（金）

場　　所：埋蔵文化財調査センター

内　　容：遺物洗浄・資料整理・講座準備

（5）

対　　象：三笠中学校２年生　男子３名

期　　日：平成 20 年 11 月 19 日（水）～ 21 日（金）

場　　所：埋蔵文化財調査センター

内　　容：遺物洗浄・注記・資料整理・古文書整理

（6）

対　　象：京西中学校２年生　男子２名・女子１名

期　　日：平成 21 年１月 20 日（火）

場　　所：埋蔵文化財調査センター

内　　容：遺物洗浄・注記

（7）

対　　象：青少年指導課（奈良市不登校児童生徒交流事業）３年生　女子１名

期　　日：平成 21 年１月 26 日（月）～ 28 日（水）

場　　所：埋蔵文化財調査センター

内　　容：遺物洗浄・注記・資料整理

中学校職場体験

6．文化財学習用キット（ドキ土器キット）の貸出

対　　象：奈良市内の小中学校

趣　　旨：市内の発掘調査で出土した石器・土器・瓦などの実物資料を教員用の解説書を付けて小中学校へ貸し出し、社会科学習、郷土を知る学習の補助教材として利用してもらう。また、埋蔵文化財調査センターを見学する小中学生・自主活動グループに「触れることのできる文化財」として使用した。

資料の内容

①縄文土器と弥生土器

②縄文時代の石鏃と弥生時代の石鏃・石包丁

③古墳時代の埴輪と須恵器

④−１土器Ａ・④−２土器Ｂ　奈良時代の土器

⑤奈良時代の瓦　軒丸瓦・軒平瓦

⑥奈良時代の硯と墨書土器・和同開珎

（1）

場　　所：佐保小学校

期　　日：平成 20 年４月 11 日（金）～ 18 日（金）

資　　料：①・②

（2）

場　　所：右京小学校

期　　日：平成 20 年４月 21 日（月）～ 25 日（金）

資　　料：③

（3）

場　　所：大宮小学校

期　　日：平成 20 年４月 21 日（月）～ 25 日（金）

資　　料：①

（4）

場　　所：平城西小学校

期　　日：平成 20 年５月 12 日（月）～ 19 日（月）

資　　料：⑤

7．職員の講師など派遣

A　佐保台小学校６年生授業

期　　日：平成 20 年５月２日（金）

場　　所：佐保台小学校

派遣人数：１名

内　　容：土器について

B　一条高校人文科学科「総合文化研究」授業

期　　日：①平成 20 年７月９日（水）

②平成 20 年９月９日（火）

場　　所：一条高校（奈良市法華寺町）

派遣人数：①②各１名

内　　容：①発掘調査について　②考古学概論

C　平成 20 年度奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会「発掘調査報告会」

期　　日：平成 21 年３月７日（土）

場　　所：橿原市千塚資料館　講義室

派遣人数：１名

内　　容：奈良山 52 号窯の調査

D　㈶奈良市生涯学習財団平城東公民館主催講座

「平城山の遺跡と考古学“瓦窯編”」

期　　日：①平成 20 年 12 月 17 日（水）

②平成 21 年２月 18 日（水）

場　　所：平城東公民館

派遣人数：①②各１名

内　　容：①発掘調査と考古学

②平城山の瓦窯跡について

ドキ土器キットによる学習

8．埋蔵文化財調査センター保管遺物・写真等の貸出ほか

埋蔵文化財調査センターで保存・管理している遺物・写真等の貸出・提供・掲載許可を行った。また、学術研究に関わって、資料の閲覧を受け入れた。

A　遺物などの貸出　11 件（表３の通り）
B　写真等の貸出・提供・掲載許可 19 件（表４の通り）
C　学術研究に関わる資料閲覧　12 件（表５の通り）

表３

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸　出　内　容
1	東京国立博物館	平成館考古展示室に常設展示	H 20.4.1 ～ H 21.3.31	平城京跡出土木簡（模造品）10 点（礫進上木簡 1 点、月借銭進上木簡 1 点、豹皮分銭付札 1 点、渋皮御田侍奴画指木簡 1 点、北宮封緘木簡 1 点、衛府進塩付札 1 点、禄布付札 1 点、槐花進上木簡 1 点、造酒司符 1 点、瓦進上木簡 1 点）、分銅（模造品） 1 点（平城京跡第 167 次調査出土）
2	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	春季特別展「はにわ人と動物たち」に展示	H 20.4.3 ～ H 20.6.27	甲冑形埴輪 1 点（平城京跡第 346 次調査出土）、人物埴輪 2 点・馬形埴輪 1 点（平城京跡第 437 次調査出土）、家形埴輪 1 点（杉山古墳出土）、人物埴輪 1 点（大安寺旧境内第 107 次調査出土）、人物埴輪 3 点・馬形埴輪 6 点・靫形埴輪 1 点（平城京跡第 200 次調査出土）
3	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	速報展「大和を掘る 26–2007 年度発掘調査速報展に展示	H 20.7.8 ～ H 20.9.19	唐三彩三足炉 1 点（平城京第 578 次調査出土）、縄文土器 4 点（平城京跡第 568 次調査出土 1 点、平城京跡第 557 次調査出土 3 点）、鬼瓦 1 点（大安寺旧境内第 105 次調査出土）、西塔所用軒丸瓦・軒平瓦各 1 点（大安寺旧境内第 100 次調査出土）、風鐸片 4 点（大安寺旧境内第 100・105 次調査出土）、風鐸 1 点、舌 1 点（大安寺旧境内第 102 次調査出土）、風鐸 1 点、風招 1 点、舌 1 点（大安寺旧境内第 100 次調査出土）、水煙 2 点（大安寺旧境内第 100 次・102 次調査出土）、風鐸・水煙出土状況パネル 1 点、東塔西階段パネル 1 点
4	大津市歴史博物館	企画展「石山寺と湖南の仏像 – 近江と南都を結ぶ仏の道 –」に展示	H 20.7.10 ～ H 20.9.19	塑像断片 2 点、半球状土製品 9 点（大安寺旧境内第 92 次調査出土）
5	大分県立博物館	平成 20 年度特別展「大相撲展 – 相撲の歴史と名横綱双葉山伝説 –」に展示	H 20.9.9 ～ H 20.11.11	墨書土器 4 点（平城京跡第 28 次調査出土）
6	かみつけの里博物館	第 17 回特別展「力士の考古学」に展示	H 20.9.1 ～ H 20.12.6	施釉平瓦 6 点、複弁蓮華紋軒丸瓦 1 点、土師器 2 点、須恵器 2 点、墨書土器 1 点（平城京跡第 28 次調査出土）、墨書土器 7 点（平城京跡第 73 次調査出土）
7	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所　飛鳥資料館	平成 20 年度秋季特別展「まぼろしの唐代精華 – 黄冶唐三彩窯の考古新発見」に展示	H 20.9.30 ～ H 20.11.11	唐三彩三足炉 1 点（平城京跡第 578 次調査出土）

奈良市管内

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸　出　内　容
8	なら奈良館	常設展示	H 20.4.1 ～ H 21.3.31	土師器 9 点（東市跡第 4 次・6 次調査出土、平城京跡第 52 次・314 次調査出土）、須恵器 14 点（東市跡第 4 次調査出土、平城京跡第 52 次・157 次調査出土）、木製品 2 点（平城京跡第 174 次調査出土曲物 1 点、第 257–3 次調査出土へら 1 点）、パネル 1 点（貴族の食卓風景）
9	奈良市水道局	常設展示	H 20.4.1 ～ H 21.3.31	軒丸瓦 2 点、軒平瓦 1 点（平城京跡第 28 次調査出土）

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸　出　内　容
10	辰市人権文化センター	常設展示	H 20.4.1 ～ H 21.3.31	塼１点（平城京跡第 14 次調査出土）
11	富雄公民館	常設展示	H 20.4.1 ～ H 21.3.31	弥生土器２点（杏遺跡出土）、古墳時代の須恵器２点、土師器２点（杏遺跡出土、平城京跡第 162 次調査出土）、奈良時代の土師器１点・須恵器５点（平城京跡第 52 次･第 92 次･第 133 次･第 157 次･第 222 次調査出土）、瓦器１点（奈良町遺跡、元興寺旧境内第４次・第 13 次調査出土）、江戸時代の土師器・陶磁器（奈良町遺跡、元興寺旧境内第 15 次調査出土、菅原東遺跡出土）、パネル 12 点

表４

	申請日	申請機関	目　的	内　　容	その他
1	H 20.4.18	株式会社　洋泉社	「図解　日本人なら知っておきたい古事記」に掲載	宝来山古墳航空写真２点	貸出・掲載許可
2	H 20.4.28	奈良新聞社	連載記事「地下に眠るやまとの遺跡」に掲載	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成６年度「南紀寺遺跡第４次調査　図版 86–11 掲載写真１点、ベンショ塚古墳第２埋葬施設出土甲冑写真１点	掲載許可
3	H 20.5.2	奈良大学大学院文学研究科個人	韓式土器研究会「韓式土器研究Ｘ」に掲載	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成４年度「南紀寺遺跡の調査　第３次」報告・未報告資料 『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成 17 年度「古市桜谷遺跡・古市城跡の調査　第４・５次」報告資料	掲載許可
4	H 20.5.16	大津市歴史博物館	企画展「石山寺と湖南の仏像－近江と南都を結ぶ仏の道」展示図録に掲載	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 12 年度口絵７掲載　大安寺旧境内第 92 次調査出土塑像写真１点	貸出・掲載許可
5	H 20.5.24	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	速報展「大和を掘る 26」–2007 年度調査速報展展示図録に掲載	大安寺旧境内西塔基壇全景１点	貸出・掲載許可
6	H 20.5.29	大分県立博物館	平成 20 年度特別展「大相撲展－相撲の歴史と名横綱双葉山伝説」展示図録に掲載	平城京跡第 28 次調査出土　「相撲所」ほか墨書土器写真４点	貸出・掲載許可
7	H 20.7.4	株式会社　新人物往来社	五味文彦・小野正敏編「開発と災害－中世都市研究 14」に掲載	奈良市埋蔵文化財調査センター速報展示資料№ 36 掲載　西大寺旧境内第 23 次調査　輸入青磁を副葬した中世墓１点	貸出・掲載許可
8	H 20.7.16	かみつけの里博物館	第 17 回特別展「力士の考古学」展示図録に掲載	『平城京左京二条二坊十二坪　奈良市水道局庁舎建設地発掘調査概要報告』昭和 59 年度巻首図版１掲載発掘区と平城京遠景１点	貸出・掲載許可
9	H 20.7.28	独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所　飛鳥資料館	平成 20 年度秋季特別展「まぼろしの唐代精華－黄冶唐三彩窯の考古新発見－」展示図録に掲載	平城京跡第 578 次調査出土　唐三彩三足炉写真１点	貸出・掲載許可
10	H 20.8.19	株式会社　学習研究社	恵美嘉樹「図説　最新日本古代史」に掲載	佐紀古墳群（西群）航空写真１点	貸出・掲載許可
11	H 20.9.10 H 20.9.11	株式会社　至文堂	日本の美術　第 512 号「出土銭貨」に掲載	平城京跡第 378–2 次調査出土　無文銀銭写真１点 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 10 年度巻首図版掲載　平城京跡第 405 次調査出土井戸ＳＥ 14 出土　鋳造関連遺物写真１点、井戸ＳＥ 14 出土鋳放し銭及び鋳型写真１点 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成元年度図版 18–40 掲載　建物ＳＢ 42 柱穴出土銅銭１点	貸出・掲載許可

	申請日	申請機関	目　的	内　　容	その他
12	H 20.9.17	株式会社　新人物往来社	「月刊歴史読本」2008 年 12 月号に掲載	ヒシャゲ古墳航空写真 1 点	貸出・掲載許可
13	H 20.10.17	株式会社　ジャパン通信情報センター	「文化財発掘出土情報」に掲載	「黄金塚古墳　第 1 次調査」現地説明会資料	掲載許可
14	H 20.11.2	大阪府立近つ飛鳥博物館	平成 20 年度冬季特別展図録に掲載	菅原東遺跡　円筒埴輪細部写真 1 点	掲載許可
15	H 21.1.20	株式会社　コミュニカ	奈良県文化観光局ならの魅力創造課「国宝･古墳ウォーキングパンフレット」に掲載	佐紀石塚山古墳航空写真 1 点、佐紀陵山古墳航空写真 1 点、ヒシャゲ古墳航空写真 1 点、市庭古墳航空写真 1 点、五社神古墳航空写真 1 点、ウワナベ古墳航空写真 1 点、コナベ古墳航空写真 1 点	貸出・掲載許可
16	H 21.3.6	群馬県立歴史博物館	第 86 回企画展・開館 30 周年記念展「国宝武人ハニワ、群馬へ帰る！」展示図録に掲載	杉山古墳出土　家形埴輪	貸出・掲載許可
17	H 21.3.9	奈良市観光企画課	"楽しみながらものしり博士"『そうなんだ！奈良』(「奈良ものしり博士認定システム」）に使用	杣ノ川イモタ遺跡 2 次調査出土縄文土器写真 1 点、平城京跡第 608 次調査出土　須恵器壷・奈良三彩火舎写真 1 点	貸出・掲載許可
18	H 21.3.2	光村図書出版株式会社	平成 23 年度小学校用社会科教科書　社会 6 年に掲載	「なら平城京展 '98」図録掲載　猿投（尾張国）産の須恵器	掲載許可（平成 17 年度小学校用社会科教科書に掲載したものの転載）
19	H 21.3.2	島根県立古代出雲歴史博物館	平成 21 年度特別展「どすこい！－出雲と相撲－」の展示図録に掲載	平城京跡第 28 次調査出土 「相撲所」ほか墨書土器 2 点	貸出・掲載許可

表 5

	閲覧日	申請者	目　的	閲覧資料名
1	H 20.4.15	元興寺文化財研究所職員	個人研究	平城京跡第 67 次・332 次・424 次調査出土土器
2	H 20.4.30	奈良大学大学院学生	個人研究	南紀寺遺跡第 3 次調査出土土器
3	H 20.7.3	大阪府文化財センター職員	個人研究	平城京跡第 28 次・73 次調査出土軒瓦・「相撲」関連墨書土器
4	H 20.7.15	かみつけの里博物館職員	特別展資料調査	平城京跡第 28 次・73 次調査出土軒瓦・三彩施釉瓦・墨書土器・土器
5	H 20.7.25	京都大学大学院学生	個人研究	ベンショ塚古墳出土馬具
6	H 20.8.12	奈良大学大学院学生	個人研究	南紀寺遺跡第 3 次調査出土土器
7	H 20.9.22	奈良大学大学院学生	個人研究	平城京跡第 285 次調査出土土器
8	H 20.10.17	高槻市教育委員会職員	個人研究	平城京跡第 11 次・89 次、大安寺旧境内第 57 次、薬師寺旧境内第 6 次、ヲシヨジ 1 号墳調査出土土器
9	H 20.10.28	奈良大学大学院学生	個人研究	杣ノ川イモタ遺跡、杣ノ川キトラ遺跡、水間遺跡第 7 次・9 次、別所下ノ前遺跡、別所辻堂遺跡、別所大谷口遺跡、高塚遺跡調査出土土器
10	H 20.12.22	大手前大学大学院学生	個人研究	平城京跡第 424 次、元興寺旧境内第 48 次、正暦寺旧境内第 1 次・2 次調査出土土器
11	H 21.1.30	橿原考古学研究所職員	個人研究	東紀寺遺跡第 6 次調査出土製塩土器
12	H 21.2.2	京都大学大学院学生	個人研究	横井窯跡群調査出土瓦

第 4 章　紀　要

「大安寺式」軒瓦の成立

原田　憲二郎

Ⅰ　はじめに

平城京大安寺から出土する軒瓦には、「大安寺式」と呼ばれる軒瓦がある。今迄に公刊された報告や論文[1]に依拠すると、奈良時代の「大安寺式」軒瓦とは以下のように定義できる。

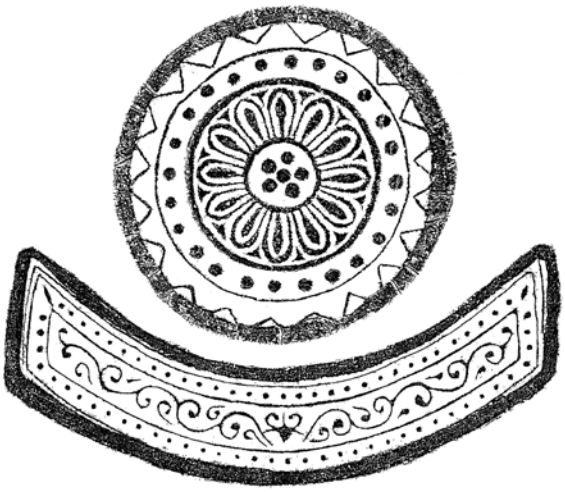
①大安寺建立のために製作された軒瓦の一群。

②軒丸瓦は、藤原宮期から続く平城宮・京の蓮華紋の流れの中では異質な単弁蓮華紋を飾る。型式差を越えて瓦当裏面の内面接合線を蒲鉾形に成形する[2]。

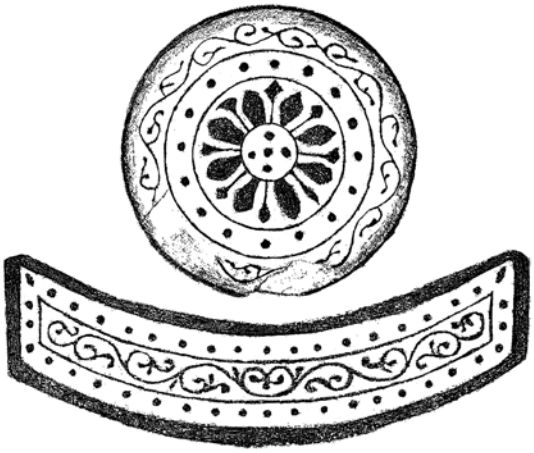
③軒平瓦は、唐草の各単位が独立せず、蔓が連続してのびて、数箇所で支葉が派生する均整唐草紋を飾る。型式差を越えて段顎を有する。

この定義から奈良時代の「大安寺式」軒丸瓦には6091 A[3]、6137 A、6138 C a・Eが、「大安寺式」軒平瓦には6712 A・C、6716 C・D・F、6717 A等を挙げることができる。(図1)

これらのうち、大安寺での出土量（表1）などから軒丸瓦6138 C a－軒平瓦6712 Aや軒丸瓦6137 A－軒平

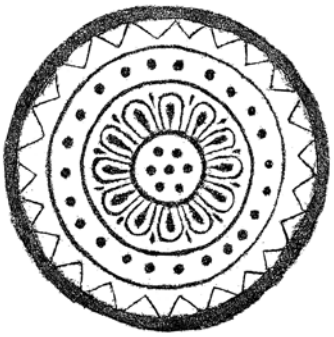


軒丸瓦6138 C a－軒平瓦6712 A



軒丸瓦6091 A－軒平瓦6717 A

軒丸瓦6137 A－軒平瓦6716 C



軒丸瓦6138 E

軒平瓦6712 C

軒平瓦6716 F

図1　奈良時代の「大安寺式」軒瓦（1/4）

表１　大安寺出土瓦主要軒瓦分類表

軒丸瓦

分　類	型式・種	点数
大官大寺式	6231 A	30
平城宮系	6304 D	184
大安寺式	6091 A	14
	6137 A	127
	6138 C a	143
	6138 C b	99
	6138 C	35
	6138 E	81
平城京系・その他	6138 J	48
	6235 I	11
	6308 I	14
合　計		786

軒平瓦

分　類	型式・種	点数
大官大寺式	6661 A	11
	6661 B	113
平城宮系	6664 A	165
大安寺式	6712 A	592
	6712 B	242
	6712 C	10
	6716 C	118
	6716 D	29
	6717 A	124
平城京系・その他	重弧紋	32
	6682 B	15
	6690 A	41
	6699 A	11
合　計		1503

凡例
1．奈良市教育委員会が平成16年までに実施した調査で出土し、型式・種が確認できた奈良時代の軒瓦についてのみ統計した。ただし、一部整理途上の分や、型式が特定できないものは含んでいない。
2．型式・種が確認できた軒瓦でも、点数が10点未満の場合は除外した。
3．「分類」覧の区別は本文注1－Cの文献に拠った。

瓦6716 Cの組み合わせが考えられている。また数量的には不均衡であるが、共通の刻印を有することなどから、軒丸瓦6091 A－軒平瓦6717 Aも組み合うとみてよい[4]。

小稿では、②・③で挙げた「大安寺式」軒瓦に特徴的な瓦当紋様の意匠が、どのようにして成立したのか検討し、ひいては「大安寺式」軒瓦のなかで、最も古いものはどれか、特定してみたい。

Ⅱ　「大安寺式」軒瓦の成立に関する従来の研究

従来「大安寺式」軒丸瓦の瓦当紋様については、唐の長安城から出土する軒丸瓦に類似するものがあることから、「道慈が唐で見慣れた意匠が反映したのではないか」[5]、「6138 Cは平城宮・京の軒丸瓦のなかでは最も時期の古い単弁蓮華紋であり、しかも唐代の軒丸瓦に類似する。道慈の唐風好みが軒瓦にも反映されたのかもしれない。」[6]といった意見があった。

道慈は養老２（718）年に唐から帰朝し、天平元（729）年頃から、大安寺造営に参画したことが知られる僧である[7]。『続日本紀』天平16（744）年10月２日の道慈卒時の記事には、道慈が造った大安寺を見て、感歎しない工匠は無かったと記されていることから、大安寺造営に関して重要な役割を果たしていたことが察せられる。このような道慈に関する史料や、東西両塔を金堂院の南に置くという大安寺独特な伽藍配置、大安寺境内から出土する唐三彩陶枕は道慈が唐より請来したのではないかといった指摘[8]から、「大安寺式」軒瓦の紋様デザイン決定にも、道慈が関わったと想定されてきた。そして「大安寺式」軒平瓦にみられる段顎が、『平城宮・京出土軒瓦編年』では第Ⅲ期（天平17（745）年～天平勝宝年間（749～757））には残らないとの見通しから、第Ⅱ期（養老５（721）年～天平17年）の製作と考え、道慈が主導した天平年間に製作されたと考えられた[9]。

こうした考えに対して、中井公氏は「唐の長安城から出土する軒丸瓦の中に、大安寺の6138 Cと何となく紋様の雰囲気が似通ったもののあることが、時折指摘されてきた。「大安寺式」は道慈が唐風の意匠を採用したものではないか、などといった憶測さえある。道慈との関わりが想定できるから、「大安寺式」が天平年間のものとみなし得るという考え方と、「大安寺式」が天平年間の瓦だということになると、道慈の関わりが想定できるという考え方が、背後でもたれ合っている。」[10]と指摘した。そして「大安寺式」軒瓦のなかでも特に出土量の多い組み合わせである軒丸瓦6138 C a－軒平瓦6712 Aは僧房で主体的に使用されたものであり、僧房は『大安寺伽藍縁并流記資財帳』（以下『資財帳』とする）が勘録された天平19（747）年の時点では桧皮葺きであったので、瓦が葺かれるようになったのは、これ以降であると考え、具体的な生産時期の推定にあたっては、東大寺大仏殿周囲から出土した同笵瓦を手懸かりとして、道慈没後の天平19年から天平勝宝年間が主体的生産の期間とした。

ただし『平城宮・京出土軒瓦編年』では、基本的にⅢ期には段顎が残らないとしており、この「大安寺式」軒瓦の年代観は、「平城宮・京出土軒瓦編年」[11]とは齟齬をきたしている。この理由については、平城宮・京造営瓦屋と大安寺造営瓦屋との組織内の事情の差異によるものとした。つまり大安寺造営瓦屋が堅持した保守的な性格によるもので、大安寺瓦屋の特質の一端を示す事例であるとの見解である。

筆者もこの意見に同意するが、「大安寺式」軒瓦を道慈の唐風好みの反映と解することができないのであれば、どのようにして軒丸瓦6138 C a－軒平瓦6712 Aで代表される、「大安寺式」の意匠が、出現したのであろうか。

この問題について中井氏は「確かに「大安寺式」に表される単弁蓮華紋の意匠は、藤原宮期から続く平城宮・京の蓮華紋瓦の紋様の流れの中では異質で、手本をどこかに求めなければならないのかも知れない。しかし唐代の軒瓦の詳しい年代観がはっきりと示されていない現在、道慈をこの問題に介在させることには禁欲的であるべきと考える。」[12]と述べるに留まる。

筆者は大安寺瓦屋の特質の一端として、瓦製作技法の保守的な性格を挙げられていることに注目する。「大安寺

式」軒瓦の紋様意匠についても、この保守的な性格からみて、前代に製作されていた軒瓦を模倣して生まれたのではないかと考えた。次章で私見を述べてみたい。

Ⅲ 「大安寺式」軒丸瓦の成立

まず軒丸瓦について検討する。「大安寺式」軒瓦の意匠が前代の軒瓦を模倣して生まれたと考えるならば、大安寺出土品の中に手本となるものを見出さねばなるまい。

「大安寺式」軒瓦に先行するのは、軒丸瓦6304 D－軒平瓦6664 Aの組み合わせ（図２）で、「平城宮系」[13]と呼ばれる大安寺創建瓦である。これらは『資財帳』にある「棚倉瓦屋」に比定される京都府綴喜郡井手町の石橋瓦窯で生産されたことが明らかにされている[14]。

図２　軒丸瓦6304 D－軒平瓦6664 A（1/4）

軒丸瓦6304 Dは複弁８弁蓮華紋で、単弁蓮華紋の「大安寺式」軒丸瓦とはまったく印象が異なる。

しかし、資料調査の過程で、軒丸瓦6304 Dを彫り直し、単弁風になった資料があることが判った。ここでは、まず軒丸瓦6304 Dの笵傷進行と彫り直し、製作技法の変化について報告する。

軒丸瓦6304 Dは笵型の彫り直しにより、大きく以下の２つに大別できる[15]。（図３）

Ⅰ類　笵型を彫り直す前のもの（図３－１～３・写真１）。図３－１は弁区の複弁と、その外側を巡り連続する間弁との区分が明瞭である。中房は突出し、中房圏線はその全周を巡るのが明瞭に確認できるものと、断続的に残るもの又は中房圏線が無いものがある。ただし、無いものが圧倒的に多い[16]。その後、瓦当笵全面の摩耗が進行し、蓮弁と間弁の区別が不明瞭になるもの（図３－２）が現れる。さらに摩耗が進むと、蓮弁・間弁だけでなく、中房蓮子が不明瞭なもの（図３－３）も現れる。

Ⅱ類　笵型を彫り直した後のもの（図３－４・５、写真２）。明瞭に確認できる彫り直し箇所は中房圏線、蓮弁の輪郭と子葉で、特にⅠ類ではほとんど確認されない中房圏線が明瞭である。間弁も彫り直しているが、蓮弁のまわりを巡る部分は彫り直しておらず、摩耗したままで、それぞれ独立した間弁にみえる。また部分的に水滴状に

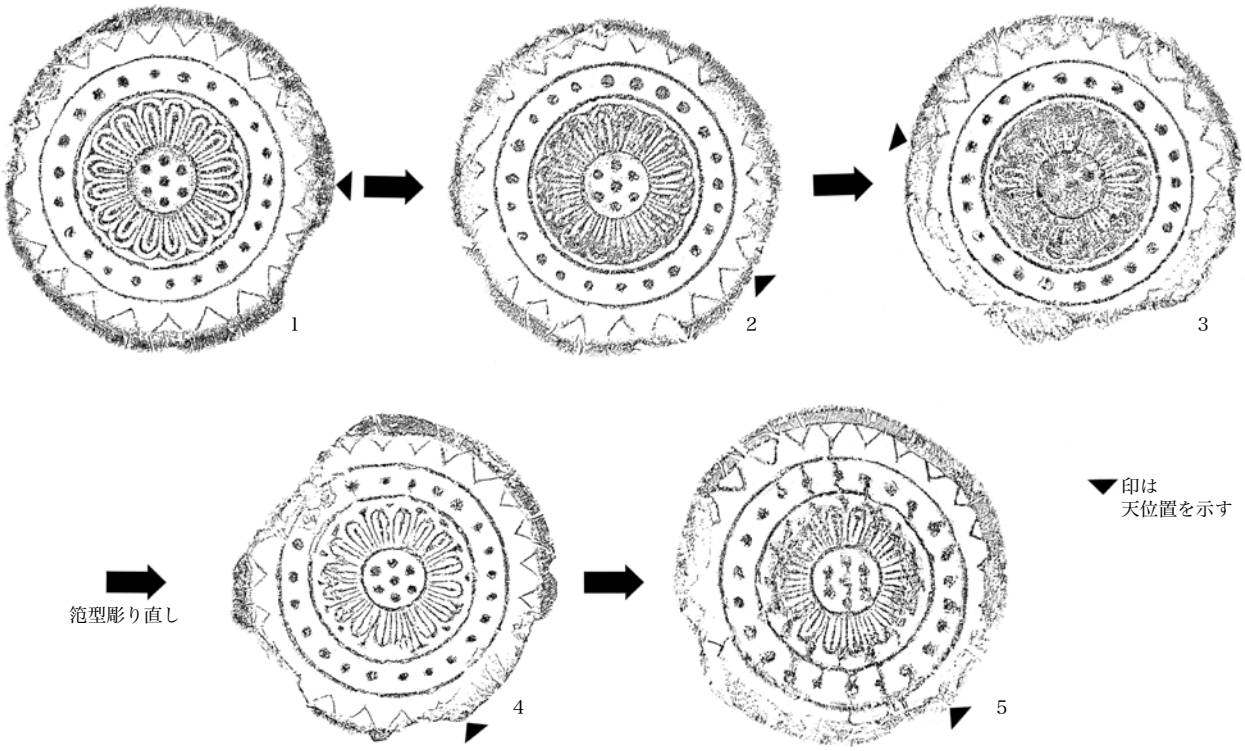


図３　軒丸瓦6304 Dの笵傷進行と笵型彫り直し（1/4）

写真１　軒丸瓦 6304 ＤⅠ類（左）と紋様細部（右）

写真２　軒丸瓦 6304 ＤⅡ類（左）と紋様細部（右）

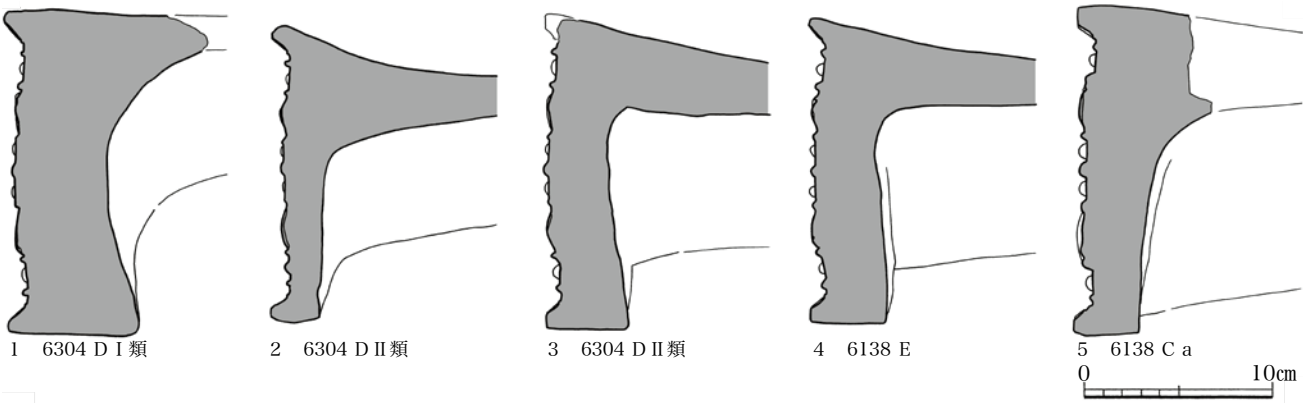


図４　軒丸瓦 6304 D・6138 E・6138 C a の断面（1/4）

表２　6304 Dの段階・瓦当厚別の点数内訳

	瓦当厚			
	厚手	中	薄手	不明
	(5～7cm)	(4～4.5cm)	(2～3cm)	
Ⅰ類 (彫り直し前)	80	0	0	7
Ⅱ類 (彫り直し後)	0	2	38	12
不明	7	0	7	25

凡例
1．本表は奈良市教育委員会が平成 16 年までに実施した調査で出土した 6304 Dのうち、実見した 178 点を対象とした。

表３　軒丸瓦 6304 ＤⅡ類・6138 E・6138 C a の計測値表

	直径	内区		外区	
		中房 蓮子数	弁区径	内縁 珠文数	外縁 鋸歯紋数
6304 D Ⅱ類	160	1＋6	88	23	23
6138 E	160	1＋6	88	23	23
6138 C a	168	1＋5	98	24	20

凡例
1.「直径」・「弁区径」の単位は mm。
2. 6304 ＤⅡ類の計測値は図４－２の資料を計測した。
3. 6138 E・6138 C a の計測値は註２の文献に拠った。

残っている箇所がある。彫り直し後も笵型の傷みが進み、外区珠紋に笵傷が確認できるもの（図３－５）もある。

軒丸瓦6304ＤＩ類・Ⅱ類は、製作技法にも特徴があり区別できる。すでに軒丸瓦6304Ｄは、瓦当の厚みの違いから、５～７㎝程の厚い資料（図４－１）と瓦当厚２～３㎝ほどの薄い資料（図４－２）の２種類に大別できるという知見が出されていた[17]が、さらに瓦当厚４～4.5cmに分類できる資料（図４－３）もあるとわかった。

これら笵型の進行段階と、瓦当厚の違いを表にし、それぞれの点数を集計したものが表２である。この表から彫り直し前であるＩ類は瓦当厚が厚く、彫り直し後のⅡ類は瓦当厚が薄手のものが多いことがわかる。しかも新たに確認した瓦当厚４～4.5cmに分類したものはⅡ類でも、さらに笵の傷みが進行しているもの（図３－５）に限られていることから、瓦当厚の違いは、先後関係をあらわすとみてよい。他に丸瓦の接合位置についてＩ類は高く、Ⅱ類は低い点、いまひとつⅡ類のみ、脱笵後に外縁頂部を削り平坦面をつくっている点が技法上の違いとして挙げることもできる（図４－２・３）。

さて、ここで注目されるのは笵型彫り直し後の軒丸瓦6304ＤⅡ類（図３－４・写真２）が一寸見、単弁16弁蓮華紋にみえることである。また、軒丸瓦6304ＤⅡ類にみえる水滴状間弁という特徴は、「大安寺式」軒丸瓦の代表と見られてきた軒丸瓦6138Ｃａよりも、むしろ軒丸瓦6138Ｅが似ることに気付く。

紋様を詳細に検討するため、軒丸瓦6304ＤⅡ類・6138Ｃａ・6138Ｅの計測値を比べてみた（表３）。

表で比較した要素に関しては、軒丸瓦6304ＤⅡ類と軒丸瓦6138Ｅは同様であるが、軒丸瓦6138Ｃａはこの両者と異なるとわかる。また外縁の形態についても、三者とも傾斜縁ではあるが、軒丸瓦6304ＤⅡ類・6138Ｅは、内面がわずかに匙面をなす傾斜縁であることに対し、軒丸瓦6138Ｃａは内面が直線的な傾斜縁という違いもある。

以上の検討から軒丸瓦6304ＤⅡ類を手本に、製作されたものは最初の「大安寺式」軒丸瓦6138Ｅであったと考える。軒丸瓦6138Ｃａは軒丸瓦6138Ｅの後に製作されたとみるのが妥当であろう。軒丸瓦6138Ｃａ・Ｅの瓦当紋様の比較から、中房蓮子数・外縁鋸歯紋数が減少し、弁の長さが長くなるといった事象が、軒丸瓦6138型式の後出要素として挙げることができよう。

ところで、笵型を一定期間使用した後、長期にわたり保管し、その後再び使用された「笵型の長期保管例」の報告がある[18]。この観点から軒丸瓦6304ＤＩ類は軒丸

写真３　軒丸瓦6304ＤⅡ類（左）・6231Ａ（中）・6304ＤＩ類（右）の瓦当裏面周縁に沿って半周するユビナデ

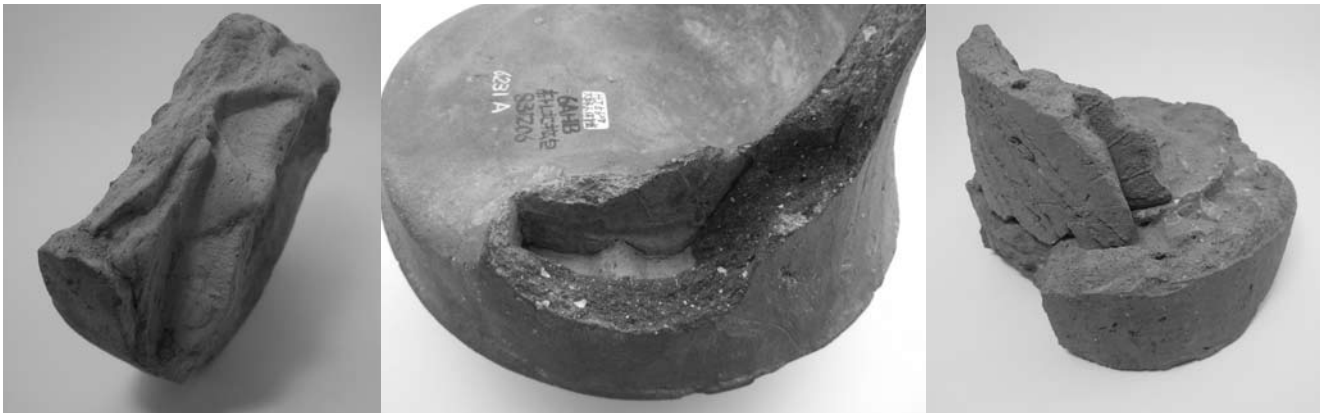


写真４　軒丸瓦6304ＤⅡ類（左）・6231Ａ（中）・6304ＤＩ類（右）の「歯車接合」

瓦6138 Ｃａ・Ｅより先行するが、軒丸瓦6304 ＤⅡ類については軒丸瓦6138 Ｃａ・Ｅよりも、ずっと後の製作時期と考えられないかとの指摘もできよう。

そこで、まず軒丸瓦6304 ＤⅡ段階の瓦当裏面に注目する。軒丸瓦6304 ＤⅡ類の一部には、瓦当裏面の周縁に沿って、半周するユビナデが巡る資料（写真３）がある。この技法は大安寺出土軒丸瓦では、藤原京大官大寺から運ばれた「大官大寺式」軒丸瓦6231 Ａ・Ｂ・Ｃと軒丸瓦6304 ＤⅠ類にみられるが、軒丸瓦6138 Ｃａ・Ｅには見つかっていない。さらに丸瓦の接合技法をみてみよう。軒丸瓦6304 ＤⅡ類の中には、わずか１点であるが、丸瓦の先端を歯車状に切り欠き、瓦当部に差し込む接合技法（「歯車接合」）をおこなうものがある[19]（写真４）。この技法も大安寺出土軒丸瓦では、軒丸瓦6231 型式や、軒丸瓦6304 ＤⅠ類にみられるが、軒丸瓦6138 Ｃａ・Ｅには見つかっていない。

いまひとつ、瓦当厚も検討する。軒丸瓦6304 ＤⅡ類でも、笵の傷みが進行しているものに限り瓦当厚４～4.5cm のものがあることは前述した。この厚さは軒丸瓦6138 Ｅの瓦当厚と同程度であることから、軒丸瓦6304 ＤⅡ類の生産終了頃に軒丸瓦6138 Ｅが生産されたと考える。

以上の観察から、軒丸瓦6304 ＤⅡ類はⅠ類と、さほど時期を隔てず製作されたもので、軒丸瓦6304 ＤⅡ類

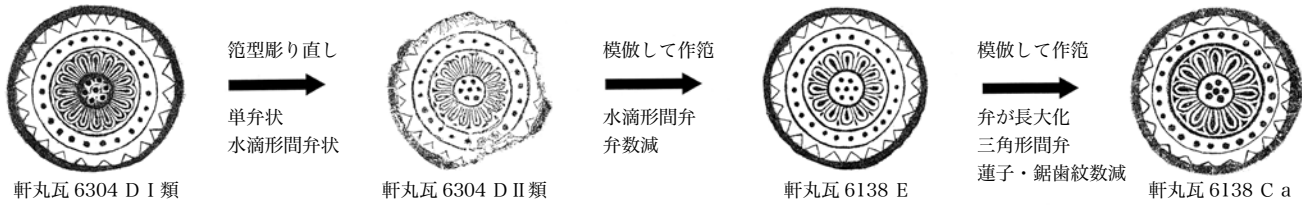


図５　軒丸瓦6304 Ｄから6138 Ｃａに至る流れ（1/8）

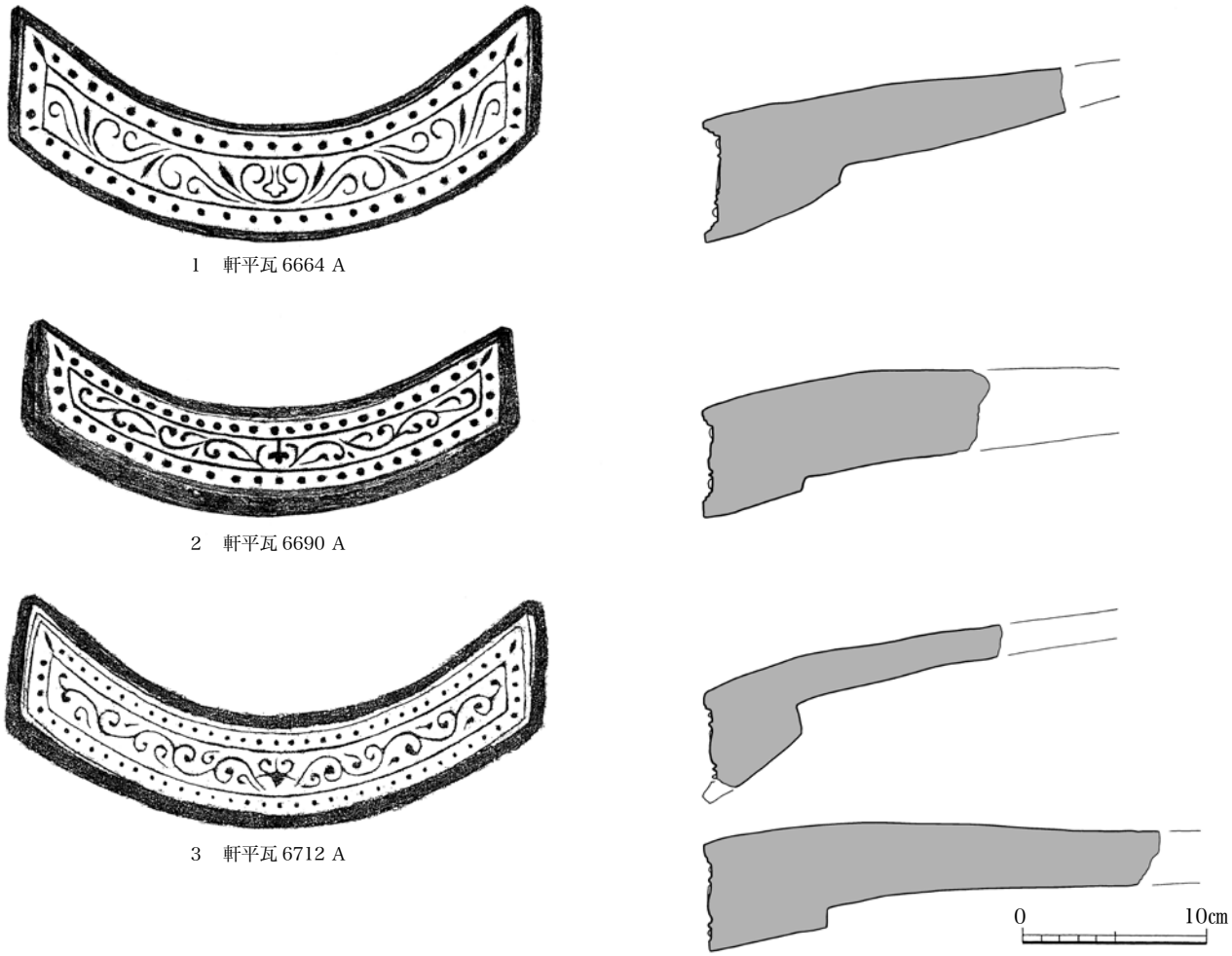


図６　大安寺式軒平瓦6664 Ａ・6690 Ａ・6712 Ａ（1/4）

の製作終了頃に軒丸瓦6138 Eの生産が始まったとみてよい。ここまでの私見をまとめると図5のようになる。

Ⅳ 「大安寺式」軒平瓦の成立

次に「大安寺式」軒平瓦について検討を加えたい。

大安寺創建時の軒平瓦は、軒丸瓦6304 Dと組み合う軒平瓦6664 Aであるが、「大安寺式」軒平瓦を代表する軒平瓦6712 Aとは紋様構成がまったく異なる。軒平瓦6664 Aと軒平瓦6712 Aの紋様構成の変遷過程を繋ぐような軒平瓦を探すべきであろう。それは軒平瓦6690 A（図6－2）とみる。4回反転均整唐草紋で、右第1・第2単位間と左第2・第3単位間以外では、唐草の主葉は連続する。中心飾りの垂飾りは十字形。顎の形状は段顎である。瓦部凹面に模骨痕跡を残す桶巻作りである。

軒平瓦6690 Aについては第Ⅳ－1期と、軒平瓦6712 Aよりもさらに新しいとする見方がある[20]。したがって軒平瓦6690 Aが軒平瓦6712 Aの手本であったと考える為に、軒平瓦6690 Aの製作時期が軒平瓦6664 Aに次ぎ、軒平瓦6712 Aに先行する理由を示さねばなるまい。

まず、この件についてはすでに製作技法の検討による知見がある。これは大安寺出土軒平瓦6664 A・6690 A・6712 Aの平瓦部の厚さと顎の長さを比較・検討したもので、①軒平瓦6664 A・6690 Aの平瓦部は平瓦2枚分程度と厚いのに対し軒平瓦6712 Aは薄く仕上げていること。②顎の長さについては、軒平瓦6664 Aは5.5～8.0cm、軒平瓦6690 Aが5.5～6.0cmと長めであるのに対し、軒平瓦6712 Aは5.5cm前後と短めのものが多いことが挙げられる。「平城宮・京出土軒瓦編年」では顎の長さは長いものから、短いものへと変化するとの考えが示されていることから、軒平瓦6664 A→軒平瓦6690 A→軒平瓦6712 Aの順に製作されたという見解[21]である。

筆者もこの見解に同意する。加えて紋様構成の上からも、軒平瓦6664 A・6690 Aは中心飾りに垂飾りがあるのに対し、軒平瓦6712 Aには無いこと、軒平瓦6664 A・6690 Aの両者は下外区珠紋数が21、脇区珠紋数が3と、同じであるのに対し、軒平瓦6712 Aは下外区珠紋数30、脇区珠紋数4で、小さな珠紋を密に巡らしていることなどの違いから、軒平瓦6664 A→軒平瓦6690 A→軒平瓦6712 Aの順は妥当であり、軒平瓦6664 Aを模倣したのが軒平瓦6690 Aであったと考える。

では、軒平瓦6690 Aが「大安寺式」軒平瓦6712 Aの手本か、内区の唐草紋を比較してみよう。軒平瓦6690 Aは4回反転、軒平瓦6712 Aは5回反転と、反転数が異なり、また中心飾りの形状はまったく違う。ところが、

軒平瓦6690 Aの紋様（正位）

軒平瓦6712 Aの紋様（左右反転）

図7　軒平瓦6690 Aと6712 Aの紋様比較（1/4）

両者は基本的に各単位主葉と支葉との巻き込みが逆方向で、対向する点が同じである。

さらには軒平瓦6690 Aの左右第2単位を除くと、軒平瓦6690 A・6712 Aともに唐草1単位が主葉1・支葉1で構成されることがわかる。

さらに唐草細部に注目してみよう。軒平瓦6690 A・6712 Aの唐草は、基本的に各単位主葉と支葉が逆方向であるが、主葉・支葉が同じ方向に巻き込む箇所がある。軒平瓦6690 Aの場合、右第1単位であるが、軒平瓦6712 Aの場合は左第1単位である。作笵時の彫り間違いだろう。いまひとつ、軒平瓦6690 Aの左第3単位支葉は先端が球状になっているが、軒平瓦6712 Aの場合同様の箇所が右第3単位で確認できる。

そこで軒平瓦6690 Aの拓本と軒平瓦6712 Aの左右反転させた拓本とを比較してみた（図7）。図7から上記した彫り間違いとみられる支葉箇所等が一致することがわかる。

こうみてくると軒平瓦6712 Aの唐草は、左右反転しているが、軒平瓦6690 Aの誤った紋様構成まで忠実に写し取っているとみてよい。従って、「大安寺式」軒平瓦6712 Aは、軒平瓦6690 Aを手本として、製作された紋様であったと考える。

ところで、軒平瓦6690 Aは従来「大安寺式」ではなく、「平城宮系」あるいは、「平城京系」と呼ばれる一群に属していた[22]。しかし大安寺以外で軒平瓦6690 Aが出土した場所は2箇所しかなく、しかも1点ずつ出土しているだけ[23]である。このことから大安寺建立のために製作された軒平瓦とみてよい。

紋様構成をみると軒平瓦6690 Aは2箇所で唐草主葉

が途切れる箇所があるものの、基本的には蔓が連続してのびており、段顎資料しか確認されていないことから、「大安寺式」軒平瓦と評価するのが適切だろう。したがって軒平瓦 6690 A こそ、最初の「大安寺式」軒平瓦と評価できる。

V　最初の「大安寺式」軒瓦の組み合わせ

ここまで軒丸瓦 6304 D を手本に軒丸瓦 6138 E が、軒平瓦 6664 A を手本に軒平瓦 6690 A が成立したと述べてきた。では大安寺創建瓦の軒丸瓦 6304 D – 軒平瓦 6664 A の組み合わせを継ぐものとして、最初の「大安寺式」軒瓦の組み合わせ、軒丸瓦 6138 E – 軒平瓦 6690 A が成立したか考えてみたい。

出土点数の比較では、平成 16 年度までに奈良市教育委員会の調査により大安寺で出土した軒丸瓦 6138 E は 81 点であるのに対し、軒平瓦 6690 A が 41 点と半数であり、数量的には不均衡である。

しかし、数量的には不均衡ながら、組み合わせを指摘できた事例には、同じく大安寺式の軒丸瓦 6091 A – 軒

写真 5　記号のある軒平瓦 6690 A とその記号

写真 6　記号のある軒丸瓦 6138 E とその記号

平瓦6717 Aのケースがある。組み合わせの論拠は軒丸瓦・軒平瓦双方に同じ刻印が押捺されていたこと[24]である。

さて、軒平瓦6690 Aについては、顎面にヘラ記号「×」をつけるものがあると報告されていた[25]（写真５）。ヘラ記号がある軒平瓦6690 Aは41点中６点あり、すべて顎面右端にある。

軒平瓦6690 Aのヘラ記号「×」と同じ記号が、軒丸瓦6138 Eに無いものかと、資料観察を進めていると、２点出土していたことが判った（写真６）。２点ともに記号「×」をつけた箇所は瓦当裏面である。これまで出土した軒丸瓦6138 E 81点の中のわずか２点であるが、大安寺出土軒瓦のうち、ヘラ記号「×」は、紹介したように軒丸瓦では6138 Eのみ、軒平瓦では6690 Aのみの各１種にしか見つかっていないものであることから、軒丸瓦6138 E－軒平瓦6690 Aの組み合わせで葺かれるべく、同時期に生産されたとみてよかろう。

軒丸瓦6138 Eと軒平瓦6690 Aの数量的に不均衡な点については、どのように考えれば良いであろうか。軒丸瓦6091 A－軒平瓦6717 Aの場合には、軒丸瓦6091 Aの笵型が、他の造瓦所へ持っていかれ、京内用に生産された為、大安寺旧境内での出土数量の不均衡となったと考えている[26]。軒平瓦6690 Aもこのケースと同じく、笵型が他の造瓦所へ持っていかれたとも考えられるが、大安寺以外での出土はほとんど確認されていない為、むしろ早々に笵型が壊れてしまったことにより、出土数量的な不均衡が生じた可能性が高いと考える。

なお、軒丸瓦6138 Eについては製作技法の共通性から、軒丸瓦6138 Ｃａと同じく軒平瓦6712 Aと組み合う可能性も指摘されていた[27]。軒丸瓦6138 Eは、軒平瓦6690 Aの笵型が大安寺造瓦所から無くなった後も、その生産は続けられ、軒平瓦6712 Aと組み合わされることになったという見方も可能であろう。

ところで、従来軒丸瓦6138 Ｃａ－軒平瓦6712 Aと軒丸瓦6137 A－軒平瓦6716 C（図１）は出土量の多さから大安寺における軒瓦大小の組み合わせであると考えられてきた。筆者も異論は無い。ただし、軒丸瓦6138 Ｃａが弁間に三角形の間弁を置くことに対し、軒丸瓦6137 Aは弁間に水滴状間弁を配する。これは軒丸瓦6138 Eと同じである。さらに軒丸瓦6137 Aは中房蓮子数が１＋６であることも軒丸瓦6138 Eと同じである。これらのことから、軒丸瓦6138 Eと6137 Aこそ、大安寺における軒丸瓦大小のセットとしてデザインされた可能性が考えられる。

ただし、それぞれ組み合う軒平瓦6690 Aと軒平瓦6716 Cの紋様に注目すると、一瞥しただけで、紋様意匠に時期差が見受けられる。しかも平瓦部に注目すると、軒平瓦6690 Aは桶巻き作りと判断できるが、軒平瓦6716 Cには、桶巻き作りと断定できる資料は見つかっておらず、このことも生産時期が離れているとみる証拠となる。

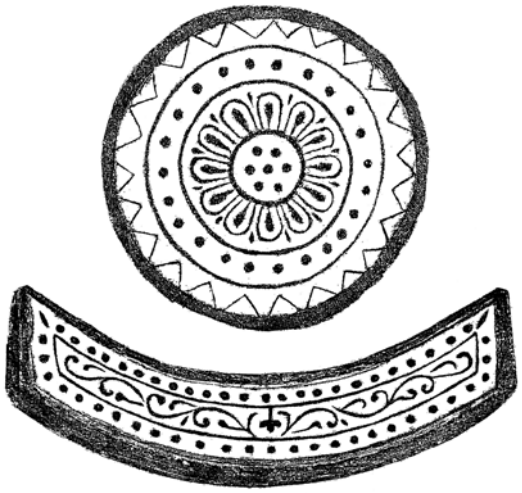


図８　軒丸瓦6138 E－軒平瓦6690 A（1/4）

以上のことから、軒丸瓦6137 Aのデザイン完成は軒丸瓦6138 Eと同じ頃であったとみられるが、軒平瓦6716 Cのデザインと生産、あるいは軒丸瓦6137 A－軒平瓦6716 Cの組み合わせ自体の生産も、軒丸瓦6138 E－軒平瓦6690 Aより、かなり遅れていたのだろう。軒丸瓦6137 A－軒平瓦6716 Cが、軒丸瓦6138 Ｃａ－軒平瓦6712 Aと同様に、僧房地区での出土量が多いことを勘案すると、軒丸瓦6137 A－軒平瓦6716 Cの生産は、軒丸瓦6138 E－軒平瓦6690 Aの次世代の軒丸瓦6138 Ｃａ－軒平瓦6712 Aと同じ頃まで遅れたのが実情であったと考えるのが妥当であろう。

Ⅵ　おわりに

以上、最初の「大安寺式」軒瓦の組み合わせは軒丸瓦6138 E－軒平瓦6690 A（図８）であり、この「大安寺式」軒瓦に特徴的な瓦当紋様の意匠は、大安寺創建瓦である軒丸瓦6304 D－軒平瓦6664 Aを模倣して成立したと論じた。

奈良時代を通じて大安寺の軒平瓦が段顎を採用していることは、大安寺造営瓦屋が堅持した製作技法に関しての保守的な性格のためとの指摘があるが、紋様構成についても、前代の紋様を手本にするという保守的な性格をあらわす証左と評価することが可能なのではないだろうか。

今後は軒丸瓦6138 E－軒平瓦6690 Aとして成立した

「大安寺式」軒瓦の紋様構成が、どのように変化していったのか[28]をさらに深く検討していきたい。この場合、大安寺出土品だけでなく、「大安寺式」軒瓦とよく似た紋様の法華寺出土軒瓦も含めた検討が必要と考える。

なお本稿で論述した内容は、「大安寺式」軒丸瓦の紋様構成は道慈が唐で見慣れた意匠を反映したものではないという、やや夢のない話となっている。ただし、軒丸瓦6138 E－軒平瓦6690 Aの生産年代については霊亀２(716) 年の大安寺創建用軒瓦である軒丸瓦6304 D－軒平瓦6664 Aの後で、天平勝宝年間（749～757）以降に僧房所用として製作された軒丸瓦6138 C a－軒平瓦6712 Aより前と理解できる程度で、詳細な生産年代については明らかにできなかった。この問題については稿を改めて検討を行いたいが、現段階では、「大安寺式」軒瓦の初現、軒丸瓦6138 E－軒平瓦6690 Aの生産が道慈健在時であった可能性は否定できない。しかし、「大安寺式」軒瓦の紋様は、道慈が唐で見慣れた意匠であったとは言えないことは論じてきたとおりである。

本稿を執筆するにあたっては、中井公氏の御教示・御鞭撻を得た。お礼を申しあげます。

1）「大安寺式」の定義については、以下の４つの文献に拠る。
A．山本忠尚「大安寺の屋瓦」『大安寺史・史料』大安寺　1984
B．毛利光俊彦・花谷浩「平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」『平城宮発掘調査報告XⅢ』奈良国立文化財研究所　1991
C．中井公「「大安寺式」軒瓦の年代」『堅田直先生古稀記念論文集』堅田直先生古稀記念論文集刊行会　真陽社　1997
D．中井公「軒瓦からみた大安寺西塔の創建をめぐって」『考古学論究－小笠原好彦先生退任記念論集－』2007
2）注１Dの文献では、「大安寺式」軒丸瓦としての定義に瓦当裏面接合線が蒲鉾形であることを挙げており、軒丸瓦6138 C bは製作技法の違いから、同笵で紋様は同じでも、「大安寺式」軒丸瓦とするには適切でないとする。
3）本稿で使用した型式番号は奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』1996に拠る。
4）原田憲二郎「刻印「う」が押捺された「大安寺式軒瓦」」『瓦衣千年－森郁夫先生還暦記念論文集－』森郁夫先生還暦記念論文集1999
5）森郁夫『続・瓦と古代寺院』六興出版1991
6）注１Bの文献。
7）『続日本紀』天平16年10月２日条と『扶桑略記』天平元年己巳条。
8）森郁夫「わが国古代における造営技術僧」『学叢』11号京都国立博物館　1984
9）注１Bの文献と同じ。
10）注１Cの文献と同じ。
11）注１Bの文献と同じ。
12）注１Cの文献と同じ。
13）注１Aと注１Cの文献では、「平城宮系」とは大安寺で出土する平城宮所用瓦の同笵瓦もしくは同型式別種であると定義付けされている。
14）内田真雄『京都府井手町文化財報告書　第４集　石橋瓦窯跡発掘調査概報－平成14年度－』井手町教育委員会　2003
15）本稿作成中、軒丸瓦6304 Dの笵傷進行からの新旧関係と製作技法の変化について詳細に分析した論文が出た（中井公「「棚倉瓦屋」で焼かれた瓦をめぐって」『南山城の古代寺院』同志社大学歴史資料館　2010)。本稿の軒丸瓦6304 DのⅠ類・Ⅱ類の分類の根拠は同じであるが、これが彫り直しに拠ることを、本文中に示した。
16）全周する中房圏線を確認できるものは、観察した178点中２点だけである。笵の痛み具合をみると、必ずしも笵の痛みの少ない段階のものに、全周する中房圏線が確認できるわけではない。このことから、当初あったものが、早い段階で摩滅したのではなく、圏線幅1mm程度と細いため、笵の目詰まりが原因で表現できなかったものが多くなったのではないかと推察する。
17）宮崎正裕「第２節　瓦・塼類」『史跡大安寺旧境内Ⅰ』奈良市教育委員会　1997その後、瓦当厚の違い・丸瓦接合位置が、先後関係をあらわす要素となることが注15の文献で明らかにされている。
18）山崎信二「中世瓦の年代細分と古代瓦・近世瓦との相違」『シンポジウム　中世瓦の研究』帝塚山大学考古学研究所　2002
19）軒丸瓦6304 DⅡ類に、「歯車状接合」の資料があることは、中井公氏から御教示を受けた。のち注15の文献図９－３で報告されている。
20）注１Bの文献で、第Ⅳ－１期の軒瓦とされている。
21）宮崎正裕「第４節　杉山瓦窯出土の軒瓦」『史跡大安寺旧境内Ⅰ』奈良市教育委員会　1997
22）6690 Aは注１Aの文献では「平城宮系」に、注１Cの文献では、平城京の諸所あるいは他の京内寺院所用瓦と同笵である「平城京系その他」に分類されていた。従って表１では「平城京系その他」としたが、「大安寺式」とすべきなのは以下の本文のとおりである。
23）左京四条五坊五坪で１点、左京六条三坊十三坪で１点出土している。左京六条三坊十三坪は大安寺の西隣であり、他の出土軒瓦の大部分が大安寺で出土する軒瓦と同じであることから、大安寺のものとみることができる。左京四条五坊五坪例に関しては大安寺旧境内と離れすぎており、なぜここで出土するかは不明である。この南東、左京五条六坊十四坪には大安寺井薗があったことが、考定されているが、この関連であろうか。「平城京左京六条三坊十三坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和58年度　奈良市教育委員会　1984および「平城京左京四条五坊五坪の調査　第373次調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書（第１分冊)』平成９年度　1998、大安寺井薗については角田文衛『佐伯今毛人』吉川弘文館　1963。
24）注４の文献と同じ。
25）注21の文献と同じ。
26）注４の文献と同じ。
27）注１Cの文献と同じ。
28）6712型式・6714型式・6716型式については、すでに紋様構成の細部を検討し、各々の先後関係を考定した知見がある。(山路直充「常陸国分寺と下野国分寺創建の暦年代」『律令制国家と古代社会』吉村武彦編　2005）中心飾りの形状からみた6712型式の先後関係については、筆者も同意する。ただし6712 Eについて、主に平城京大安寺で出土すると文中にあるのは、事実誤認である。6712 Eは「大安寺式」軒平瓦の特徴をもつが、現在までのところ、大安寺では出土していない。その出土地は、大安寺からはかなり北方の、左京二条四坊十六坪であり、同地と大安寺との関係性は現段階では不明である。

印刷・製本仕様データ

表　　紙：アートポストカード220kg・マットpp加工
見 返 し：白色上質紙110kg
巻頭図版：特アート紙135kg
本　　文：白色マットコート紙90kg
本文ﾌｫﾝﾄ：ヒラギノ明朝体
製　　本：左開き・糸かがり綴じ

© 2011 by the Nara Municipal Board of Education
No part of this publication may be copied or reproduced in any form without written permission from the copyright owner. Printed in Japan.

奈良市埋蔵文化財調査年報
平成20（2008）年度

ISSN 1882-9775

印　刷　平成23（2011）年３月17日

発　行　平成23（2011）年３月28日

編　集　奈良市埋蔵文化財調査センター
630-8135　奈良市大安寺西二丁目 281 番地
ＴＥＬ　0742 － 33 － 1821
ＦＡＸ　0742 － 33 － 1822
ＵＲＬ　http://www.city.nara.nara.jp/
E-mail　maizoubunka@city.nara.lg.jp

発　行　奈良市教育委員会
630-8580　奈良市二条大路南一丁目１－１
ＴＥＬ　0742 － 34 － 1111（代）

印　刷　関西美術印刷株式会社
630-8325　奈良市西木辻町 153 －１

この冊子は、300部作成し、１部当たりの印刷経費は2,614.5円です。

ISSN 1882-9775

ANNUAL RESERCH REPORT
OF
Archaeology in Nara City Area
2008

CONTENTS

I Preliminary Reports of Archaeological Excavations in NARA CITY Area in 2008.

II Reports of Archaeological Science .

III Reports of Conservation and Management for Archaeological Sites and Materials in 2008.

IV Bulletin of the Archaeological Researchcenter of NARA CITY.

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION,
2011

ANNUAL RESEARCH REPORT

OF

ARCHEOLOGY IN NARA CITY AREA

2008

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION , 2011